

女の記録／入選作発表

新女大学研究 エリザベス・マウア

わたくしが見たアメリカ 水田珠枝

アリスはなぜ失敗したか 河野貴代美

隣りがこわい 佐多稲子

視

● 婦人問題企画推進会議で語られていること

点

● 育休法は婦人労働者の特効薬か

あごら



〈あごら〉は、女性解放——人間解放をめざすグループです。

雑誌〈あごら〉は、その方法のための情報、——中でも女に関する情報を集め、お届けすることを目的に、1972年誕生しました。

特定の、管理された情報はあふれていますが、私たちがほしい情報、とくに女が求めている情報の入手は困難です。

皆さまの生きた情報、あふれる知恵を、どしどしお寄せください。分断されている仲間たちと、考え、行動する、ヒントを送り合いたいと思います。

既 刊

1号〈女が働くこと〉 ￥200 千200

- 意見 女が働くこと 松谷みよ子ほか
- 資料 働く女は過保護か
- 面接調査 共働きを調査して

2号〈女性と能力〉 ￥200 千200

- 調査 働く女性の地位向上をめぐる
- ティーチイン 女性と能力
- 研究 女性なぜ管理職になれないか

3号〈主婦の解放〉 ￥200 千200

- 調査 団地の主婦の解放意識
- ティーチイン 主婦の解放をめぐる
- 解説 二分二乗法 伊東すみ子

4/5号〈壁を破ろう〉 ￥300 千200

- 記録 何かしたい主婦のためのセミナー
- インタビュー 壁を破った人々
- 資料 2つの差別裁判を考える

6/7号〈運動をすすめよう〉 ￥300 千200

- 報告 解放への道—海外の婦人たち
- 資料 各国の母性保護
- ティーチイン 婦人運動をすすめるために

8号〈子殺しを考える〉 ￥300 千200

- 論文 既婚の母の子殺し考 武田京子
- 資料 世界各国の妊娠中絶立法例
- ティーチイン 性の二重性をめぐって

9号〈働く女と主婦の接点〉 ￥430 千200

- 意見 働く女から主婦へ 主婦から働く女へ
- 調査 相手の立場をどう思っているか
- ティーチイン 人口抑制と産む性

10号〈女と法〉 ￥700 千300

- 記録 名古屋放送女子若年定年制
- 資料 法律の中の女性
- ティーチイン 産む性と法律

11号〈女と教育〉 ￥750 千300

- 論文 主婦が学ぶということ
- 調査 教科書の中の女性差別
- ティーチイン 〈女と教育〉を考える

12号〈国際婦人年世界会議〉 ￥750 千300

- 記録 世界会議とトリビュン
- 感想 メキシコ、キューバ—私たちの旅
- 資料 世界行動計画、メキシコ集会、ILO活動計画ほか

13号〈国際婦人年を考える〉 ￥750 千300

- 記録 国際婦人年国内集会
- 調査 ちまたから見た国際婦人年
- ティーチイン 国際婦人年とメキシコ集会

14号〈女の記録入選発表〉 ￥750 千300

15号〈女と生涯教育〉 (予定)

16号〈女と仕事〉 (予定)

17号〈女と結婚〉 (予定)



<あごら> 14号

国際婦人年記念懸賞募集<女の記録>入選作発表

昨夏、第七十五国会で成立した育児休業法が、四月からいよいよ実施段階にはいる。

実施という現実の問題に当面して、育児法が必ずしも万能薬ではなかったことが明らかになってきた。働き続けようとする女、とくに教師に対しては父兄からの反発が予想されるし、長子を保育所に預けて育児をとる人には、長子を引取るよう、すでに勧告が来ている。十二年のたたかいを通して獲得した法律でさえ、大きな問題をはらんでいるというこの事實は、さまざまなことを私たちに問いかける。基本的には「保護と平等」という課題が存在するわけだが、新しい法律が女性全般に及ぼす影響について十分な情報があり、その十分な情報に基づく十分な討論が、広くひらかれた場で請願に先立って行なわれたかどうかということも考えずにはいられない。

日本の女性の今後十年の行動の基礎となる行動計画も婦人問題企画推進本部と企画推進会議を中心に策定されようとしている。すすんで情報を知ることが、私たちの権利であるという以上に義務といわなければならないまい。

目次

インタビュー●隣りがこわい	佐多 稲子	6
---------------	-------	---

入選 女性の視点から書く女の歴史	高橋三枝子	24
------------------	-------	----

記録 離れ島の老女たち・屯田兵村の妻		32
--------------------	--	----

佳作 女男平等への実践	阪野 甲子	49
-------------	-------	----

私は炊事婦	石川 令子	58
-------	-------	----

私の新しい恋人たち	片岡 陽子	72
-----------	-------	----

髪結系譜略	富永千代子	80
-------	-------	----

わたくしが見たアメリカ	水田 珠枝	14
-------------	-------	----

新女大学研究	エリザベス・マウア	90
--------	-----------	----

「アリスたち」はなぜ失敗したか	河野貴代美	102
-----------------	-------	-----

♀ヴィーナスの鏡	神川 秀彦	111
----------	-------	-----

窓

- 育児休業法は婦人労働者の特効薬か？ 108
- 婦人問題企画推進会議を見つめよう！ 109

資料

- 第七十五国会参議院における婦人問題の討議 157
- 婦人問題企画推進会議議事録抄 163
- 育児休業法全文および提出法案 197

ルポ 仮設実験教室を見て 112

グループ紹介

- サバト 114
- 青空テント 76 116
- 愛知女性史研究会 118
- 深沢歴史サークル 120

- 立見席 122
- あごら読書室 124
- 新聞切抜帖 〈資料〉 128
- あごらのあごら・・・読者のひろば 150

隣りがこわい

●日の丸の思想がこわいんですよ、町内の。



先生の作品と生涯を考えますと、一人の女が人間として目覚め、成長するプロセスが非常に象徴的に示されているのに心を打たれます。何となく、「個体発生は系統発生を繰返す」という生物学のおきてを想起するほどです。そのどの時期にも鮮烈な印象がありましたと思いますが、ご自身ではどの時期をいちばん大切に考えてでしょうか。

……そうですね。自分の考え方について教えられたとき、生きていくための自分の目が新しくされた時期が、私にとってやっぱり一番決定的でもあるし、一番しあわせな時期でもあったと思います。

それは年代でいうと二十二才、大正十五年です。一度もう、大変な経験をしたあとです。その前は何か求めているながらもただ五里霧中、そして毎日働かなければならないという暮らしでしたから。

私の境遇は非常に変わってますでしょ。決して富裕ではなかったけれども普通の生活をしていたのが、急に激変しましたねえ、小学校も卒業できなかったわけでしょう。それは大変特殊ですわね。だから子どもながら意識の中には大変没落したんだという気があって、自分の生

活をもっと他に求めるものがあるわけですね。あるんだけれども、実際にはもう貧乏のどん底を経験して、五年生のときから学校に行かなくなつて、働かなければならなかつた。そういう娘に對し、世間の目は非常にきびしいですからね。それに対応していくためには、「世間の求める娘像」に應えようつて気があつたわけね。娘は身を固くしているものだから。それで自分を大變しはつて、自分を律していくのが一つの對抗なんですね。私の、世の中に対する對抗。……そういうふうにしてずっと来て、ふつうの仲人の縁談にのつちやつた。のつたのは、生活に自分が疲れてきて、厭世的になつていて、死んでしまおうかと思つて、いるような暗い時期ばかり通つてきて、つまり希望というものがなかつたんですね。

身を固くして働いていて……その職場は今の働いている職場では想像もできないのよ。仕事のことではか男の子と話ができない。会社の門を一步出たら口きいちゃいけないんですから。そうするとね、女の子つて、やっぱり男の子と口き

きたいつて気があるわけよね。何も恋愛したいということじゃなくて……。それから、当時の自分の精神的なものも……。女の子と話が合わなくても男の子となら話が合うんじゃないかみたいなのがあるのよね。それが全部閉ざされているでしょ。そうするともうほんとに厭世的になるしかない。一方、からだはくたびれてるけどお勤めを休むと日給月給ですから一日分減る、月末に困る、……。そういうことのがんじがらめで、ちつとも先の見通しなんかないわけね。しかも割合に小説を読んだものだから、何だか世の中みんな知つてゐるような生意氣な氣持になつて、夢みたいなきこが思えないのね。そんな状態のときに、たまたま仲人から話があつて、経済的に条件がよさうなの。そんならのつかつてやろうかみたいだね。……そこが私の本来ごうまんなところでして（笑）。……たちまちしつべ返しを受ける。だから余計に絶望しちゃつて……。その絶望というのは、自身自身に對してなのです。人生に對してごうまんであつた、ということ自分で絶望して……。

それでどうやら生き返つて、子どもを産んで……。子どもを産むと強くなりますよね、女は。子どもを一人かかえてこれから生きねばならない。もう世間の目にしられるのはやめよう……。もういいや、自分の考え方で生きるんだみたいだね。子どもを産んだ直後の女は、実はつらつとしますからね。そういうエネルギーがあるんですね。自殺未遂というところで新聞にのつたり、いっぱい恥をかいてきた。その反作用で、いわば居なおつたんでしょか。精神的にも肉体的にも、大變エネルギーに満ちてたんですね。

——そのエネルギーの充滿の中でカフエーにお勤めになつた。そこで蓬川氏はじめ「驢馬」の同人との交友が始まつたというところ、とても貴重なことだったような氣がしますが。

それはほんとうにありがたかつたと思つてます。がむしやらに運動に飛込んで、今まで考えていたもの、見たり聞いたりしたものが、ペールがはがれたような氣になりましたもの。エンゲルスの、「家族・私有財産・國家の起源」を

読んだときの感動は忘れられません。私は自分の境遇は運命だと思ってたわけですね。しかしそうではなくて社会の構造なんであって、その社会の構造は変えられるもの、今後変わっていくものである。今後の歴史の担い手は働く階級である。社会というものが初めて見えてきた。そうすると、運命でしようがないと思つたことがそうでないんだということになる。そこに行動に参加していく主体的条件みたいなものがあつたということですね。

——しかも、その見ひらいた目の周囲に、中野重治、堀辰雄、西沢隆二といった、ビカビカの方々がいらしたわけですね。

それはずいぶん大きかったと思います。「驢馬」の同人たちは、カフェーに来るお客さんとしては貧乏なんです。そういう人たちの持つている雑誌「驢馬」を見て、大変いい雑誌だと思つた。それは私が文字好きだったということがあるんです。だから、その時分のこと、偶然であり、必然だつたと言つてゐるのよ。必然と偶然の結びつき。——その「驢馬」

の人たちに会つたのは偶然なんですけれども、結びつかなくてもいいわけよね。離れてゆくことだつてある。それにこつちが結びついていったのは、私の必然でもあつたわけね。

——もしも、街角の小さな、そのカフェーにお勤めにならなかつたら、先生の今日はなかつたかもしれない……。世間の概念で言えば人生の破局のようなものがあり、だからこそ新生があつたというところに、深い感銘を受けます。その時分のカフェーというのは、どういうところだつたのでしょうか。

今の喫茶店も兼ねています。コーヒーを出すし、食べ物も出す、お酒も出す……というところ。そうそう、スナックみたいなものですよ。そこで働いて、内助の功で、窪川さんに作家になつてもらふと思つてたわけですから。彼は勤めをやめて、書くことに専念して、私が生活のこと……ということになつたわけですが、あのころはそういう人、ほかにもいたんじゃないでしょうか。

——そういう生活に疑問はお感じになり

ませんでしたか？

いいえ、何も疑問は感じませんでしたね。ただ、そういう暮らしになつたところは、カフェーも、最初「驢馬」の同人たちと会つたカフェーよりもうちょっと高級の、今でいうバーみたいな感じのカフェーに移つてしまつたから、エンゲルスなんか読んで、そういうのがいやになりましてね。そんなところに働いているのが……。それでやめて、アルバイトしながら暮らすことになり、そういう中で「キャラメル工場にて」を書くことになつたのです。

——二十四才のときの処女作ということですが、工場に向かう少女の、室内の情景、朝の町など、いま、今朝のことを書いていけるような描写の正確さ、新鮮さに打たれます。それまで文章にはなさなかつたけれど、小さい時分に、心の中で書いていらしたのでしょうか。

書くという気持ではないのですけれども……。その前に丸善に勤めていて、つまらなくていたときに、詩を書くことは覚えたんですね。詩というのは、一行のうちに非常に大切なことを含めることだ

から、表現というもののむずかしさ、楽しさみたいなものは、それで覚えたところがありましたね。生田春月さんの「詩と人生」に活字にして頂いて、春月さんから、新進女流詩人として紹介するというお手紙を頂いたこともあるんですけども、私、とてもびっくりしちゃって、おそろしくて、それはもう、ご辞退したんです(笑)。

——それで小説のほうに転進なさった……。
いえいえ、小説書こうなんて思いませんでした。小説書くなんで大変なもので私なんかに書けるもんじゃないと思ってましたから。子どものときなんかにも、家庭にいわれる総合雑誌もあったし、叔父に文学青年がおりまして、割合に文学というものを、高度に、私なりに把握してまして、だからとても自分なんかに書けるもんじゃなと思ってたんです。

そこヘンゲルスなんかの新しい思想——文化というものも、働いている人間が自分たちの文化をつくっていくんだという理論を知って、それに励まされて書いたんです。それでなかったら、とても

書くもんじゃない……。

——中野重治さんが、自分が佐多稲子に書くことをすすめたんだ、発見者だ、と言っておられますが、

そうなんです。中野さんにすすめられたわけですから。

——「キャラメル工場にて」のすばらしい文章をごらんになって、中野さんはさぞお喜びになりましたでしょう。

別に……。あのね、その時分のことを申し上げると皆さんびっくりなさるだろうと思うんですけどね、中野さんは私に直接言ったわけじゃないの。「驢馬」の同人は、よく私の家に来て、ごはん食べたりしていたんですけども、直接話すということはあまりないの。これは「驢馬」の人たちの気質でもあるんだけれども、女の、一種の尊重でもあるんだけれども、はにかみもあって、何となく双方が遠慮して……。最初、随筆書けと言われて、随筆書いたら、この題材なら小説に直してくれ……と。それを私に直接言ったわけじゃないの。ちょうど窪川さ

んがるすで、ちょっと仕事させてくれて、二間あった部屋の一部屋で仕事して、帰りに窪川さんにそのことを置手紙をしていったんです。私に直接言わないで。そんなこと考えられますか、今の男と女のこと。変わってるでしょう。直接言わないの……。

——でも、なんだかいいお話ですねえ。

ほんとうに「驢馬」の人たちは、私を尊重してくれたと思いますね。それは感じますね。直接にはものを言わないようなところがあるんだけれども、いろいろは、私が働いた経験があるし、いろいろな人生経験があるということがね、小説を書く「驢馬」の人たちにとっては、ちょっと大きいね。その重みで……(笑)。生活ということに重きを置いて作家になる人たちでしたからね。まあ「驢馬」自身は、大変に芸術至上主義的なところもあったんですけども、すでに中野さんは帝大の新人会に関係してらしたと思いますし、生活者というものを尊重して見る気持が、中野さんの詩にもあり、「驢馬」の人たち自身の中にもあり

ましてね。

——生活者としての女の人をたいせつにするっていうの、ほんとにすてきなことですな。そういうすてきな方々の中だけでも印象的だったのは、どなたでしょう。

みんなそうですけども、中野さん、堀さん……ねえ。堀さんは、その後の活動の中でプロレタリア的にはならなかったんですけども、友情そのものは非常に続いていて、私なんかにも、ずいぶん援助して下さった。あの時分から体が弱いから、あんまり大きな声も出さないような人でしたな。やさしい……、大きな声を出さない、その中に自分のものはちゃんと持っているような、つよさを持っているような、ね。

あの人たち、お互いを実に尊重しあってましたよ。西沢隆二さんは、堀さんとは反対にそれは大きな声を出す人でしただけど。

——先生は男友だちと共に、女友だちにも大変恵まれていらっしゃるんですね。宮本百合子、湯浅芳子、壺井栄など……。

それはプロレタリア文学運動の中で

ことですね。いっしょに仕事をしましたからね。生活全部ひくるめて。あの当時の、非合法の共産党が合法化しなきゃならんという、つまり合法的には認めまいとする体制の中で、何とか合法性を確保していかなきゃならぬという、そういう方針のときでしたからね。それが文化活動なんかに表われていくのだけれども、そういう文化活動そのものが、非常にイデオロギー的に激しくなっていくときでしたからね。そういう活動を百合子さんとはいっしょにしたわけですからね。その活動を共にしたということで、大変緊密なものがありましたね。

——私どもの時代に比べて、ほんとうに大変な時代を生きてました……。

いつの時代も、大変は大変。条件として言えば大変は大変でしたが、若かったからがむしやに……。自分の個人生活なんか苦慮しないで、ひっさげて、子どもをおぶいながらですものね。亭主は監獄にいる。老人と幼い子、赤ん坊とかかえていて、生活の経済は全部自分でまかなわなければならない。だけど仕事する

ひまはない。それで非合法活動ばかりしてるんですからね。ずいぶん図々しいような……。

——ひたむきで、いちずで、百合子の「風知草」流にいえば「後家のがんばり」みたいで。

後家のがんばりって、いつもあったんでしょう。意識があらうとなかろうと。生活していく後家さんは、みんながんばってたわけですよ。がんばってないければ馬鹿にされるし、スキをねらわれるし、経済の問題でもがんばらなければならなかったわけでしょう、必要以上に。自分の本性殺すくらいに。

——それが宮本百合子のイメージだと、とても緊張感をもって感じられるわけですよけれど、先生の場合は、後家の……といっても、とてもみずみずしい、女っぽい印象がふしぎにします。

百合子さんもおね、とても女っぽく、みずみずしい人でしたよ。百合子さんの小説の中に、何かの時に化粧して口紅つけて、「さあ美人になった」ということばがありますけれども、そんな人でね、きれいな人でした。いわゆる育ちのよい



階層の美人型でしたけれどもね。色が白くて、ぼっちゃりして、非常に女っぽくて……。美人でしたけれども、あの人は論が立ちますからね。男とも論争するし、評論も書くし。それなんです。自分のことを後家のがんばんりと言ったのは、作家としてのがんばんりなんです。世間の後家のがんばんりとはちがうんです。

——女が一生懸命生きようすると、「がんばんる」とか、夫をしのぐような仕事をすると「男を食いつぶす」とか、そういういやな目、いやなことばを一つ一つなくしていくのも私たちの仕事でしょうね。

男が仕事をして女をみんな食いつぶしてきたくせに言わないのだから、そういうのはきらい。ほんとうに腹が立つ。

昔から女が働くことに對し男は女房を働かしているという、そういう世間の目を氣にしたわけですから。……世間の目って大変なことですね。夫婦仲にまで浸透してきてね。

今は家事なども協力的にしてらっしゃる男の人もあって、それはもうだいぶ昔とはちがってききましたよね。でもその感

じ方はちがうわけね。女の場合はしなけりゃならんのを人に代わってしてもらってる氣がするでしょう。そう思わなくてもいいんだと思いがち。男の方は、世の中の男がしてないのに、なぜしなけりゃならんみたいなものがどっかにある。理念ではわかってても。

でもねえ、感情ってものは実に率直で正直なものですからね。世の中が変わってなければね、自然で率直な氣持がどこかで傷ついたりして。むりに理屈づけて何か抑えてやっていく限り、どっかに摩さつが爆発する。私に「くれない」という作品があって、夫婦の問題を書いてるんですが、いわば私はこのことでは敗北しててね。しかし敗北と認めながらも口惜しんではない、と、負け惜しみではなく、そうおもうものはあるのです。

——ほんとうに、世の中が変わらなければ、まことの愛も、まことの性も成立ちにくいと思います。最近では夫婦で仕事も家事も協力する例がふえ、中には妻の仕事を夫が助ける例さえあるようです。そう

いう新しい男女のかかり方が、世の中
を変える一つの力になるのかという気も
します。

むかしでも高群逸枝さんのようなケー
スも稀にはありましたね。

共同の仕事を共に協力できるのであ
ればいいけどもね。自分の仕事のため
に夫が協力するという、内助の功の逆も
今までの裏返しにすぎないでしょう。そ
れは不自然だと思うわ。男も思いきり
したい仕事をしたほうがいいんだから
男も女も精神の高揚があり、はつらつと
して、お互いが吸収しあい、お互いがそ
の中でまた新たなものを生み出す、それ
が理想でしょうね。けれどもね、そうい
うはつらつとした精神生活をしていれ
ば、それですべてが保障されるというこ
とでもなくて、愛情の問題というのはむ
ずかしいけれど、お互いが誠実に、とい
うしかないんでしょうね。いつの時代にも
言えることかもしれないけれど、こと
に今日の体制の中ではね。

——八月十五日には、どんなことをお思
いになりましたか。

敗戦の日にはね……。私はその前に戦
争協力という問題がありますが……。キ
ュリー夫人の伝記を読んだと、ポーラ
ンドの、自分のことばもしゃべれないよ
うな時期があったでしょう。ああいうふ
うに把握して、大変なことになったと。
日本は、アメリカが支配者になる形態で
したからね。やらなくちゃ大変だと……
。解放だと思わなかった。共産党の、
つかまっていた人なんかは、自分が解放
されたものだから、その実感で来たんだ
と思うんだけど、われわれは外にい
たせいかそう思わなかった。占領下にな
って大変だと。中学生の息子にも、これ
から大変だぞ、と言いました。でも電気
はつけられるという解放感があったわね
え(笑)。

——女の解放については。

私たちはプロレタリア運動の理論で、
女性の解放は労働者の解放と結びつか
なければだめだということをやってしま
したから。それも、その前から、女は働
いて、自分の自主性をつけなければ、とい
うことは、ずーっと今までの生活の中で

考えていた理論でしたからね。今まで女
に権利は何もなかったんだけど、こ
れからは権利を持つことになるし、その
場合には、女が自主的にそれを生かさね
ば困る、だから女自身が育たなければ、
という気持があったのです。それが婦人
民主クラブの創立に私が参加したときの
気持だったので。

——第一回大会のときは、大変な人が集
まったということ。

そうだったんですよね。戦争中はだま
っていなければならなかった。しかしだ
まっていたけれども、そういうものもつ
てた人がたくさんいたんだ、それが一堂
に会しような感じでしたね。

——その大勢の女たちがやがて分裂した
というのは、とても残念な気がしますが。

それを言うと話が長くなるけれども、
政党が自分の氣に入った婦人団体にした
くて自分の方針ばかり押しつけてくるよ
うなところがありましたね。しかしこれ
は共産党の下請けの団体じゃないんだ、
女の自主的な団体なんだ、一応尊重して

もらわなければ困る、その戦いだつたんですよ。それはもう何度もあつたんです。そこで、それをどうしても押しつけようとする人との分裂があつたんですね。分裂ということは正確ではないけれど……。

——原水禁にしても、母親大会にしても、強大な政党の介入が小さな市民運動を変えていくところがあるのは残念ですね。

そういうものを汲上げていくような指導をすればいいのに、上から押しつけよう、この方針でやれみたいなことばかりやってきた。あれはどういうんですかね。私たちは共産党がなるべく強くなつてほしいと思つてきたわけですからね。

庶民の感覚を受けとめて、その時その時に起こつたものをつかんでね、自主性で行動を起こすというふうに指導してほしいですね。今度のロッキードの問題なんか考えますと、あの敗戦から三十年の間に、戦犯だった人間が権力の座に居座つていたということでしょう。革新勢力はそれを自分の責任としても考えねばならないと言えますね、今後のために。そ

れは、この事件をちゃんとたたかわねばということでしょうけど。

私は、自分が戦争協力という過去のまぢががありますから、だからいろいろな反省した上で考えるんですけれど、今、ほんとうに市民の中に浸透していくことをしてくれないと、市民と結びついてない、こわいですよ。よく私は、戦争中のことで、弾圧で大変だつたでしようと言われるのよ。実際、しょっちゅう警察は来るし。しかしそれに対応して戦っている時には、弾圧そのものが苦しいとかこわいという感情とちがうの。こわいとかつらいという問題じゃないんです。情勢を客観的にいえば大変つらい、恐怖政治の時だつたといえるんだけど、こっちは受け身でだけいるんじゃないくて、こっちも押ししてるから、たたかつてるからね、こわいといったものじゃないんです。私、こわいと思つたのは、戦争がだんだん激しくなつたときね、近所は皆、夫が戦争にとられていたりするでしょ、そうするとみんなつらいですよ。つらいですけれども戦争に夫なり息子が引出されているというのは、あの戦争

を、気持の中では否定してるのだけれど、日本は駄目だという理論は通らない、やはりこの戦争は勝たなきゃならぬみたいなものがあるわけね。そしてもう強力に、国家的に押しつけてくるわけでしょ。隣り組というものがある。そうすると、日の丸の思想も町内の中にあるわけですね。そういうものがこわいのよ。その中で「あれは赤だ」といわれることはどういふことか……。隣りはこわいですよ。

今後のために、体制に対するたたかいは、働く階級の中になんとうに浸透してゆくように、ということでしょうね。私なんか言うのはおこがましいけれど、そんなたたかいを求めたいと思います。



わたくしの見たアメリカ

水田 珠枝

わたくしがアメリカをおとずれたのは、昨年七月十日から約一か月間であった。短期間だったのでもアメリカについて語る資格などないように思ったのだが、「あごろ東海」からご依頼があったので、例会で報告をした。これは、その時の報告に若干の手をくわえたものである。

一 スケジュール

これまでにアメリカにいく機会がありながら、出かける決心がつかなかった原因を考えてみますと、ひとつには、わたくしのアメリカにたいする先入観にあるように思います。昭和のはじめにうまれて軍国主義時代に育ったわたくしにとって、アメリカは一面では自由で豊かなうらやましい国でありましたが、もう一面では、戦時・戦後を通じて、巨大な物質文明を背景に、弱小国に国家利益をおしつける威圧的な国でもありました。強い好意をもつと同時に強い嫌悪ももつというのが、アメリカという国にたいしていだいた感情だったようです。そして、ほかの国にはあまり感じないこうしたややもやとした気分が、わたくしがアメリカ旅行にそれほど積極的になれなかった原因ではないかと思うのです。

もうひとつ、学問的感心からみて、アメリカがそれほど魅力的だとは思えなかったことがあります。政治的思想史を学んできたわたくしにとって、二百年というアメリカの歴史は、ヨーロッパの歴史ほどの奥行きを感じさせないのです。またアメリカの学者の研究書をみますと、膨大な資料を駆使してはいるもの

の、理論的な整理、検討という点ではヨーロッパの研究書にはおよばないように思えるのです。部厚い洋書を苦学して読んでも、最後まで歯ごたえのない綿菓子をつたべているような思いを幾度もしました。アメリカにいつてどれだけ学ぶことができるのか、というのがこれらの本を読むたびに感じた感想でした。

このようなわたくしが渡米を思い立ったのは、「国際啓蒙思想学会」がエール大学で開かれることになったからです。四年前、同じ学会がフランスのナンシーで開かれた時に参加したので、もう一度いつてみようかという気持ちになりました。それに娘が中学の二年になり、今年ならば出かけても学業にそれほど影響しないだろうと考えたからです。（男にくらべて女の生活が子供の存在におおきく制約されることは、子供がうまれてこのかたわたくしが痛感しつづけてきたことです。大きなおなかをかかえて、子供がうまれたら楽になるだろうと思ひ、保育所にはいれば手が抜けるだろうと思ひ、小学校へはいれば、中学校へはいれば……、と思ひながら、その度に期待はずれの目にあわされてきました。日本の社会は、母親を子供にしばりつけてしまつて、はなそうとはしません。これまでの外国旅行も、わたくしのばあいはいつも子供づれでした。行動の制約、余分な荷物、余分な経費はやはり負担です。それでも、学校を休ませてまで子供づれで母親が外国にいくなんていい度胸だ、という声が周囲からきかれました。）

旅行はつぎのようなスケジュールでおこなわれました。夫と娘とわたくしの三人で羽田を出発し、ニューヨークに二、三日滞在したのちエール大学に行き、学会に出席しました。約一週間の学会の日程を終わつてハーヴァード大学に行き、『赤毛のアン』の舞台となったプリンス・エドワード島がみたいという娘の希望をいれ、夫と娘とをカナダに送りだし、わたくしひとりハーヴァード大学の女子学生寮に泊つて、図書館がよいを十日ばかり続けました。アメリカ大陸を横断し、ロスアンゼルスで夫と娘と落ちあい、サンフランシスコからまたふたりを日本に送り、わたくしはカリフォルニア大学（バークリー）に八日ばかり滞在し、灼熱の日本に帰ってきました。ほとんど大学で生活し図書館で勉強していましたので、アメリカのわずかな部分しか見なかったわけですが、それでも、アメリカにたいするわたくしの先入観はかなりゆさぶられたように思います。

二 学会

エール大学でおこなわれた「国際啓蒙思想学会」は、文字通り各国から参加者があつまり、内容も豊富でした。アメリカ各地はもちろん、カナダ、イギリス、ポーランド、とくに啓蒙思想の本場フランスから大勢参加し、数百人はいたように思います。女性の参加もおおく、ほぼ半数を占めていました。日本の学会では会員のほとんどが男性で、わたくしたち女性はどぶねずみ色の背広の群集の中で圧迫感を感じますが、ここではそうした異和感がなく、あかるさに満ちあふれていました。

でも人種をみてみますと、白人がほとんどで、アジア人は日本人が六、七人、韓国人はフランス文学をやっているという女性がひとり、東南アジア、インド、アフリカ系の人たちはゼロでした。日本では、明治以来ヨーロッパ思想を吸収することが重要な課題でしたし、現在でも、十八世紀につくられた近代精神は研究者の注目をあつめています。日本のような近代化のおくれた国では、啓蒙思想に学ぶことがおおいのですが、アジア・アフリカ諸国からの参加がないのは、これらの国ではヨーロッパ的近代精神は当面の課題ではないということなのでしょう。それとも白人中心の学会を敬遠したのでしょうか。いずれにしろこの地域からの参加がなかったのは特徴的でした。それにアメリカ国内にはたくさん黒人が生活していますし、大学にも進学しているのですが、こういう人たちの出席もありませんでした。アメリカの黒人は啓蒙思想に関心が薄いのか、ほかに事情があるのか、今度行った時には学会のだれかに聞いてみたいと思います。

学会の報告は、いくつかの建物にわかれ、午前・午後通して並行しておこなわれましたので、あちこちに出ようと思うとかなりのハード・スケジュールでした。啓蒙思想をひと口にいても、十八世紀のさまざまな問題がさまざまな角度からとりあげられるという感じで、政治・経済・文学・芸術はもちろん、医学・化学の分野からの報告、女性の自我の問題、(報告者が欠席したので聞けないのが残念でしたが)、女性著述家がみた政権の問題などがテーマとなっていました。女性の報告者も発言者も堂々としていて、男性にくらべてすこしも見おとりはしませんでした。日本でもようやく学際的な研究が注目されるようにな

りましたが、これまでの学問的な壁はまだまだ厚く、壁のあいだにおちこんだ研究は冷遇されています。婦人問題などはそのもっともいい例でしょう。婦人問題を研究しようとしても、今の日本ではそれをささえるだけの体制はほとんどの研究機関にありません。

学会がはじまってしばらくして、女子寮に「女性は集合せよ」というビラがはってありました。何事がおきるのかと興味半分に遠くからながめていきますと、こんなに女性の参加者がおおいのに女性の役員がないのはけしからんというはなしでした。ラディカルな方法をとれという意見も出ましたが、結局は手続をふんでみようということに落着いたようでした。あとでフランスの学会の時に知り合いになったカナダの女性に結果をきいてみますと、成功して女性も役員に選出されたとのことでした。「おめでとう、よかったですね」とわたくしがいうと、かの女は、「おめでたくなありませんよ。参加者の半分は女性なんだから役員の半分も女性でなければね」という返事でした。男性が独占してきたさまざまな組織に、女性も同じ資格ではいり、それが当然なのだという意識は、国籍はちがっても女性に共通のものになってきたようです。この点では、日本はとてつもない後進国だと思いました。

エール大学の学会は、大学だけでなく町をあげてのお祭りでした。正規のスケジュールのほかに、十八世紀の音楽、十八世紀の演劇が学生などのおこなわれました。合衆国建国二百年をひかえて、十八世紀が注目されたということもありましたが、目や耳で知る啓蒙思想はめったに味わえないものでした。

三 白井夫婦のことなど

この学会には、ゴドウィン著『メアリ・ウルストンクラフトの思い出』の訳者、白井厚・堯子ご夫妻が、小学一年のお嬢さんと一緒に参加されました。ヴァージニア大学に滞在中で車できたというおはなしでした。白井堯子さんの今のお仕事は、ウルストンクラフトの名著『女性の権利の擁護』の翻訳で、ほばでき上ったのだが、ウルストンクラフトが出典をしめさず引用した箇所を註をつけるのがこつているとのことでした。ウルストンクラフトの厄介な英語をたて文字にするだけでもため息が出そうなのに、誰の

書いた何という作品かもはっきりせず、引用が正確かどうかわからない文章の、典拠をつきとめようとエール大学では図書館で夜おそくまでしらべていらっしやるかの女の執念には、敬服しました。

わが娘の方はもう一人前なのだ(運賃も)といいきかせて、学生寮の個室にほうりこみ、食事だけ一緒にしてあとは自由にさせておきましたが、白井さんのお嬢さんのばあいは(女の子ふたりで遊ぶこともありませんが)年齢も小さいので、かの女が学会の報告をききにいく時も図書館にしらべにいく時も、つれていらっしやいました。子持ちの女が勉強しようとする、何となくさんの障害があることかと、わたくしたちは話し合いました。女性研究者の数が少なく、成果がそれほど上がらないのもふしぎではありません。日本の学会では「子供連れ禁止」という規定はないのでしょうか、そういう例を見たことはありません。

もちろん託児施設を準備したという話を聞いたこともありません。エール大学のこの学会では、子供が一緒に特についたということはありませんでした。では、欧米の大学が一般に子供にたいして開放的かというと、そうはいえないので、以前、オランダのある大学を訪問した時、教授は遠慮なくどうぞといって大学中を案内してくれましたが、守衛の中には非難するような目つきをしていた人がありました。

ウルストンクラフトの復刻版が出ているという白井さんのおはなしで、本屋をのぞいてみますと、ウィマンズ・スタデーズというコーナーには、婦人問題の古典がいくつかならんでいました。ペリカン・クラシックスで Wollstonecraft, M., *Vindication of the rights of woman*, ed. by Miriam Krannich, 1975. があるほか、かの女の未完の作品 Wollstonecraft, M., *Maria or the wrongs of woman*, with an introduction by Moira Ferguson, 1975. があり(一七九八年にゴドウィンが出版したウルストンクラフトの『遺稿集』は、写真版が一九七二年に出た)、初期の『小説メアリ』、『女子教育論』も『イギリスにおける女権論争、一七八八年—一八一〇年』(八九巻)という叢書のひとつとして(現物は見ませんでした)復刻されることでした。この叢書には、まえにわたくしが苦勞してフィルムをとった、ウルストンクラフトの同時代人、メアリ・ヘイズの Hays, M., *Appeal to the men of Great Britain in behalf of women*, ed. by Gina Luria, 1974. もありました。この数年に出たウルストンクラフトの研究書を、イギ

リス人のもふくめてひろってみますと、つぎのようなものがあります。Nixon, E., *Mary Wollstonecraft, her life and times*, 1971. Flexner, E., *Mary Wollstonecraft*, 1972. Tomalin, C., *The life and death of Mary Wollstonecraft*, 1974. Sunstein, E., *A different face, the life of Mary Wollstonecraft*, 1975. (帰国後、在米中の白井さんから、Detre, J., *A most extraordinary pair, Godwin and Wollstonecraft*, 1975. が出たという連絡をいただきました。) ウルストンクラフトの死後、現代ほかの女が語られる時代はなく、ウルストンクラフト復活といった感じです。

そのほか、ひとつひとつあげるのをさしひかえますが、十九世紀の小説家ブロンテ姉妹、ヴァージニア・ウルフの研究書がおおいのが目につきましたし、八百ページもあるジョルジュ・サンドの伝記もならんでいました。エンゲルスやベーベルの翻訳もありましたけれども、日本ほど比重はおおきくはないようでした。そのかわり、中国への関心は、婦人問題についてだけでもかなり高いように思いました。爆発的な人気を集めた『女のからだ』の本とならんで、『女の権利』(女性の一生にわたる法律上の諸問題)の本がかなりの場所を占めていました。

四 図書館

アメリカにいった目的のひとつが、図書館をみてくることでしたので、図書館ですごした時間が一番長かったように思います。エール、ハーヴァード、カリフォルニアという三つの大学の図書館をみた感想は、予想以上に開放的で、豊富で、それに整理がゆきとどいていたということでした。イギリス、フランスの古いところをしばらくというのですから、お門違いというところですが、それでも短期滞在者にとっては、イギリス、フランスよりもアメリカの方が利用しやすいように思いました。

数年前にロンドンのブリティッシュ・ミュージアムを利用した時には、図書閲覧カードを出してから本が手もとにとどくまで二時間ぐらひはかかりましたので、朝甲し込みをしてから一度外に出てコピーを飲んでくるとちょうどよい、といった調子でした。(今年イギリスから帰国した友人のはなしでは、甲し

込んでから本が出るまで半日かかるようになったので前の晩にカードを出して翌日利用するという方法をとったことでした。また、イギリスでもフランスでも、利用者の資格を制限する方向にむいているようです。ところがアメリカでは、十五分で書庫から本が出てきます。能率を尊重する国とはいえ、よほど整理が徹底しているのでしょう。図書館にはどこもコピーの機械が備えてありますので、自分でコピーすることができまし、割高にはなりますが図書館に依頼することもできます。カリフォルニア大学では、名刺を出して頼むと、書庫出入り自由、一か月までの館外持ち出し自由の証明書をくれました。日本の大学やよその国ではちょっと考えられないことでした。日本と決定的にちがうのは、図書館は本を退蔵しておくところではなく利用するところだ、という考え方のように思いました。

わたしがハーヴァード大学のワイドナー図書館で、イギリス空想的社会主義者ロバート・オーウエンの『ニュー・モラル・ワールドの結婚制度』を借り出した時、係の女の職員が、婦人問題をやるなら『ファースト・セックス』をぜひ読みなさいといいました。それはもう日本語に翻訳されていて読んだと答えると、ポーボワールの『第二の性』とまちがえているのではないかというのです。そこでたしかにデーヴィスのものだと説明すると、日本の翻訳の早さにおどろいていたようですが、あれには嘘と本当がまじっているから気をつけなさいという忠告もしてくれました。

どの図書館でも女の人はたくさん働いていましたし、仕事の知識にも精通しているようでした。エル大学の学会の時にアメリカの女性から聞いたはなしですが、婦人運動が高まった結果、アメリカでは大学のスタッフのうち女性の最低の割合をきめ、その目標を達成できなかった大学には補助金を打切るといった措置がとられることになったそうです。若い時に大学にいけなかった女性が、結婚して子供から手はなれるようになって再入学するという話は、たびたび聞かれました。日本の実状とくらべて、物が豊かだというだけでは説明できない感じが感じられました。

ハーヴァードでわたくしが宿泊をしていたクロンカイト・センターという学生寮のむかいに、アメリカ女性史最大のコレクションをはこぶシュレジンジャー図書館がありました。このコレクションは、一九四

三年、アメリカ合衆国婦人有権者同盟の会長だったモード・ウッド・パークさんの寄贈した書籍、手稿、写真などを中心に、だんだんおおきくなったもので、コレクションの維持、拡大に貢献したアーサー、エリザベス・シュレジンジャーを記念し、一九六五年にはその名前をとった図書館になったそうです。蔵書は、一八〇〇年以後の女性のさまざまな活動分野を網羅し、スーザン・アンソニー、ビーチャー・ストウ家、ブラックウェル家のコレクションもこれにふくまれています。（なお、シュレジンジャー図書館から、「女性史資料の文庫」というパンフレットをもらってきました。ここでは内容の詳細を述べるのはさげますが、アメリカ婦人問題のコレクションの所在など、お知りになりたい方はお問合わせ下さい）。

かなり暑いワイドナー図書館にくらべて、清潔で冷房のきいたシュレジンジャー図書館は居ごちがいのので、一日の半分ぐらいをここですごしました。子供連れの女の人たち、男の人たちも勉強していました。日本では、社会人はもちろん学生でも、本格的に婦人問題を研究しようと思うとどこに調べにいったらいいのかわからないという状態です。卒論に女性史を書きたいという相談をこれまでいくつかうけたことがありますが、そのたびに、資料も指導体制もとのっていないことを痛感させられました。アメリカの研究には資料の羅列のようなものがおおいとはじめにいいましたけれども、研究のすべては資料の整理からはじまるという原則はかわらないのです。

世界の婦人運動のなかで、アメリカの婦人運動はかなりの比重をもっているのですが、日本ではアメリカ女性史の研究は数すくなく、わたくし自身も通り一べんの知識しかもっていません。この図書館を使いこなすには知識不足、能力不足といったところです。聞いたことのない人名がつぎつぎとあらわれて、圧倒されてしまいました。あるアメリカの女性にそんなはなしをしたら、「今度は奨学金をもらって長期にここにいらっしゃい」といいました。「日暮れて道遠し」といった思いでした。

五 雑感

出発のまえにアメリカ旅行の注意事項を何人もからきかされました。ニューヨークでは地下鉄にのって

はいけませんよ、一流ホテルでも油断はできませんよ、ハンドバックはきちんと持って、さっさと歩きなさいよ、といった調子でした。これは誇張だろうと半分ききながしてはいたものの、旅行をしているあいだずっと、気になりました。イギリスやフランスでは、ホテルの部屋から出る時、本や化粧品など出したままにしておいたのですが、アメリカではその都度全部トランクにいれて鍵をかけました。パスポート、現金、チェック、飛行機の切符をいつも持って歩くというのも大変でした。

さいわい、わたくしは裕福そうにみえなかったらしく、無事に旅行を終わることができました。でもエール大学では、学会の間中警戒体制にはいり、学生が要所々々につめているのをみました。白井さんのおはなしでは、夜おそくまで女の人が図書館で勉強する時は、たいていボーイフレンドと一緒にのだそうです。ボーイフレンドの効用とはこういうものかと感心しました。柔道とか空手とかいったものは、どうせやっても上達の見込みはないと思って、わたしは敬遠していたのですが、これからは女が生きていくためには必要な技術になるかもしれません。

アメリカは犯罪の国であるとか、ウーマン・リブが叫ばれるようになり女が権利を主張するようになってきたら犯罪がふえてきた、などという言葉がきかれます。女性の解放と犯罪の増加とが果たしてどんな関係があるのかは、おおきな問題ですが、いまはつつこんでおはなしをする余裕がありません。ただ、アメリカの犯罪一般についていえば、犯罪がおおいから退廃した国だとか、この国はだんだん墮落していくだろうといった見方は、一面的にすぎるように思いました。アメリカの国土の広さ、人種の多様性、階層分化は、日本人の尺度ではなかなかはかりきれません。一方で極端な犯罪があるかと思うと、他方でストイックな生活があり、想像を絶するような富の蓄積があるかと思うと、日本の乞食もあえてあそこまではおちぶれないと思えるような生活もあります。日本では、イギリスでは、という調子で、アメリカでは、と一般化して語ることはできないわけで、わたくしがアメリカに対する先入観を修正しなければならぬと感じたのも、この点です。

凶悪な犯罪はたしかに社会の疾病ではありますが、そういう犯罪があるからアメリカはくずれた社会だ

といいきれないのは、犯罪現象をもふくめて、アメリカには若さと生命力とがみちあふれているからです。「国際婦人年あいちの会」で、年輩の女の人が、ジープンをはいてあぐらをかき、背中をだしている若い女がいるのでおどろいた、という感想をのべていましたけれども、アメリカでは、これ以上短くはできないぼろぼろのジーンズのショーツをはき、背中どころかおへそを出して闊歩する若い女に、何人も出合いました。はちぎれるような若さは、美しいものでした。時には粗野ともみえるこの若さと生命力は、アメリカ社会をささえる力だと思いました。それにくらべるとわたくしたち日本人は、学校でも家庭でも、生命力をすいとられキバをぬかれる生活を、あまりにもしいられてきたのではないでしょうか。海外に出て日本の女性が勝手がちがうのは、言葉の障害もありますが、外国の女性の自信にみちた態度とわたくしたちの生活態度との差もあります。

婦人運動についてもみたいというのは、わたくしの希望ではありましたが、夏休みで電話をかけても連絡がとれなかったり、こちらが短時日で移動したりして、それほど収穫はありませんでした。ニューヨークでは、ゲイ・リベレーションのグループがリブのグループと一緒にあって、同性愛の人たちの差別撤廃を、ケネディ大統領の葬儀のおこなわれたパトリック・チャーチに抗議をしていました。教会の圧力によって、同性愛の人たちは、不当解雇も住居の立ちのきも裁判所にうったえる権利をうばわれている、というのがかれらの主張でした。リブの運動は曲り角にきていると伝えられ、今後はこうした運動がどう発展するのか気になるところです。けれどもたしかなことは、リブのこれまでの主張は社会の広い層に定着し、一応の成果をあげていることです。

旅行者の印象は、その時のお天気具合や、偶然に出会った人たちとの接触といったちょっとしたことで左右されがちです。この報告も、どこまでアメリカの真実をつたえられているのか気がかりです。しかしとにかく、わたくしは、出発前よりアメリカに魅力を感じるようになりましたし、ぜひもう一度いつてみたいという思いにかられています。

(市邨学園短大教授)

女性の視点から書く女の歴史

高橋 三枝子

北方の開拓と、国防を担った屯田兵（とんでんへい）制度によって開発された北海道も、先年、百年の歴史を数えた。すでに、ほとんどの市町村に、市町村史が刊行されている。しかし、どのページも、その大半が、支配する性としての男性の手によって書かれただけに、男性の立場に固執し、当然のことながら女の姿が全く見られない。

開拓を成功させる条件、それは女がついてゆくことであり、同時に百姓がまじってゆくことだといわれている。北海道も、また、その例外ではなかったのである。しかし、それなのに、どのページにも女の姿が見当たらないということは、女には書き残すべき歴史の足跡もなかったのだらうか。

ちなみに、去年亡くなった、北海道地方史研究の一方の旗がしらでもあった奥山亮先生の著になる「新考

北海道史年表」には、永享四壬子、西歴一四三二年から書きおこし、それから、嘉吉・享徳・康正・長祿とつづいて、文久・元治・慶応・明治に至っている。そして明治の代になって、明治五年にはじめて「七月一日薄野遊廓開業」「御用女郎部屋」と記され、ここに至ってはじめて女が登場する。その間、実に四百四十年の間、女の姿が全くかき消されたかのように女の氣配さえ無いのである。

戦後、女性史の研究が盛んになり、幾冊かのすぐれた成果が出版された。これらの本から私たちは、多くの啓発を受けて来たが、いつも物足りなさを感じ続けてきた。それは、その、すぐれたと一般に評価されている「女性史」のほとんどが、公刊された中央の資料に基づいて書かれていることであつた。

現在、社会のなかで、矛盾や差別や偏見にぶつかる

ごとに、思わず振り返って見る女の生活、そのなかにある母や祖母たちの素朴な生の軌跡にこそ、ほんものの「女の歴史」の原点があると、私はながい間思いつづけてきた。だれもが知りたいと思い、知ろうとしている母や祖母たちの足跡である「女の歴史」が、一部の専門家の学問であってはならないと思い、それならば、女が女の視点で「女の歴史」を書いてはどうだろうか、と考えて、書きはじめたのが「北海道女性史研究」である。

四年前の昭和四十七年の三月、旭川に住む五人の女性、春一番の吹き荒れるなかを、息せき切って集まった。個人の能力を超えた新しい連帯によって、ひとり、ひとりの、孤立し、散在しているエネルギーを集すれば、貴重なデーターをより豊富に集めることもできるし、何よりも大衆女性の声なき声の広がりと、重さをも理解してゆくことができるのだと、ひとつの会を発足させた。

「北海道女性史研究会」と、いかにも、ものものしい名称をかかげての出発ではあるが、会員はたったの五人で、歴史を専攻したわけでもないし、地方史の研究の経験も全くない、ずぶの素人ばかりである。

この研究会の発足と前後して、こうした女性史の範

ちゅうに入らるべき二冊の本が、たまたま出版された。日本では数少ない女流史家として著名な「もろさわようこ」の「信濃のおんな」と、いま一冊は、これまた底辺女性史序章というサブタイトルのついた山崎朋子の「サンダカン八番娼館」である。私たちにとっては、この二冊の出版は、まったくの偶然にすぎないのだが、大方からは、少なくとも何らかの形で影響を受けての発足であらうとよく言われた。

北海道の女の歴史の序章を彩ったのが、そのハダのぬくもりで男たちを温めた女たちの足跡であったということは、一世紀をこえた今日の北海道の女性の地位や立場に全くかわりがないとは決していえないのである。

会員のひとりひとりは、文学活動にも、婦人運動にも、そしてそのどちらとも、それぞれ深いかかわりを持つていたとはいえ、こと「女性史」の「史」の部分を格調高く、学術的にたかめてゆくには、心細いばかりの集団であった。めくらへびにおじずのたぐいよろしく、手さぐりの荒修行がはじまった。とにかく、既成の文献や資料をつなぎ合わせたのでは、せっかく意を新たにしている取組みの意義もなくなると、まず、老女たちのきき書きによる証言のパターンを踏むことに

した。会員は、農村・漁村・炭鉱・教育・しょう婦と、それぞれ身近かな問題をテーマに選んだが、私は、ためらわず農漁村をテーマにした。私にとってはこのテーマは、十年來ひそかに温めていたものだった。

ペーリング海峡から押し流された寒流が、オホーツク海で渦巻き狂うため、宗谷でも、もっとも気温のひくい、全く不毛に近い原野に入植した開拓部落を訪れたことがある。昭和三十七年、婦人運動の中で、冷害見舞の救援物資をとどけるためだった。

それをきっかけに、一年に何度かそこを訪れる機会を持つことになったが、そこで垣間見たものは、まことに不条理きわまりない農政のなかで、苦悩する農民たちの姿であった。そのほとんどが東北出身の、まだ二十代の若い夫婦ばかりの集団であったが、新潟県の寒地農業研究所を卒えた、前途有為な若ものたちの集団もあった。

東北地方の、二、三男対策として計画されそして移住してきた彼ら彼女らを迎えたのは、全く牧草すら満足に育たない、不毛の土地の払下げである。

志を立てて、一たん郷里を出て来たからにはおいそれと引揚げてゆくことも出来ない。当然のことのよう

にはじまったのが、男たちの出稼ぎである。

失意のうちの出稼ぎである。お定まりのように、出稼ぎ、蒸発、そして罹病と、不慣れな都会での不如意の生活は、この北海道の最北端に腰を据えた若ものの集団をいや応なしに揺さぶりつづけた。

こうした男たちの生活の荒み振りは、即、女たちへの照り返しとなって、そのしぶきをいやというほどに浴びせられた。

まだ二十代の若さだというのに、その東北出身者特有の色白の肌、斑点のようなしみが真くろに出来、髪はほとんど例外のないほどに白くなっていた。そのうえに中腰になって搾乳をするために、これまた例外のないほどに腰が曲がっている。それにもまして私を驚かせたのは、彼女たちの手の指が、皆「く」の字に曲がっているのである。時おり訪れて、彼女らの親身の相談相手になっているたった一人の保健婦さんの話では、こうした現象は、過労ももちろんあるけれども、栄養の偏りからくるので、放置しておけない問題だと、彼女自身思案にくれているありさまである。一年中の副食物が、サンマの塩づけがせいぜい一箱か二箱で、しょうゆ一升あれば、盆も正月もたっぷり過ごせるとは、一世経経て歴史をさかしまにしてもまだあ

まりあるほどの苛酷さである。

生活改善や保健衛生の指導に一月に一度は巡回する保健婦や栄養士は、改善するにも手段はなく、避妊を指導するにも、その避妊の相手のいないところでは、笑い話にもならないのである。戦後入植のずさんな例は、この北海道でも枚挙にいとまない程の数多くに達しているときが、この地の入植も全くずさんの一言に尽きるのである。

道庁では、夏休み中の大学生のアルバイトを使って、北海道の原野を測量させ、そこに何の研究も、手だてもせずに、入植というよりは全くのほうりこむかたちで入れたのが実状である。離農資金をもらって土地を離れることのできる人は、そのなかでも恵まれた人たちで、牛を飼うこともできず、これはといって畑の作物も穫れないという土地でも、ほかに行き場がなければ行きようがないのである。

婦人運動のなかでの、それも一年に何度か限られた回数の救援物資の送りとどけなど、彼女たちの、生涯を賭けての営農の、いくらのたしにもなるわけがないのである。何とかして、この有りえない実状を、何らかの形で訴えたい、告発したいと、私はおもいつづけていたのである。

かりにも民主主義が、草の根までしみ込んだとおもわれている現代にして、農民はかくの如きである。まして百年も前の農民や、漁民の生活はどのような型で移住し、そしてどのような女の生活があったのか、当時の数少ない生存者の証言を得ようとおもいたった私は、さっそく行動にうつした。

この老女たちの証言を得ることによって、北海道史にも、市町村史も、その影すら写っていない開拓当時の女の生きざまを掘りおこし、書き残そうとおもったのである。

四月になり、おそい北ぐにの春を待ちかねて、私は、小型のテープレコードと、カメラをシヨルダーバッグに入れて農村に出かけた。各地の開拓記念館や、屯田記念館をたずねて、生存者の住所や名前をたずね、紹介してもらって、待つたなしで出かけて行った。

開拓当時の生存者ともなれば、そのほとんどが明治生まれで九十才から八十才代である。文字通りとしよりに明日がないのである。訪れたなかでは、口々に、十年は遅かった、あの人も、この人も先年亡くなったばかりだとくやしがられた。

せめて、はじめた以上は、数少ない老女を落ちこぼしなしに採訪したいと私はおもった。実にこの四年間

は「女性史」に追いかけられ、「女性史」を追いかけた四年間であった。

北海道での代表的な移民である、屯田兵、つまり官製の移民は、数多い北海道の移民のなかでも、恵まれた存在としてのちまで喧伝されている。

しかし、メスを入れて見ておどろいた。男たちのそのほとんど、まず七割方は北方の守りのための兵隊としての訓練が強制され、開拓は三割弱が普通であったのであった。

五年間という短かい期限に、五町歩という広大な土地を拓くためには、こうした苛酷ともおもえる処置がなければ、とても初期の目標どおりのめざましい開拓はなされなかったとおもわれるが、ほんとうの開拓の、そのほとんどの重責を果たしたのが、女たちであった。

兵村という名前の示す通り、いわば、家族ぐるみ、兵営に起居しているとおもえば間違いなく、そうしたきびしい軍隊生活のなかで、女たちは、開こんの仕事の他に、茶わんや、鍋、釜に至るまで、菊の御紋章のついた、陛下から下賜された食器や、器具の管理もまかされていたのである。一週間に一度ずつ、抜き打ち的に「庭検査」と称する連隊長の巡視がある。その

時、万一にも、農具に泥がついていたり、鉄びんや釜にすがついていたりとさあ大変である。教練に行った戸主が大ぜいの兵隊の前に呼び出されて、叱責され、そして、罰として重い仕置きが何倍にもなって課される仕組みになっている。

腰まで泥につかっただけの開こんよりも、この仕事を終わっての農具の後始末の方が、よほど神経をすり減らしたという老女たち。狭い兵屋のなかで、しうと、しうとめ夫婦と子供たちが折り重なるようになって夜は眠るので、知らないうちに嬰兒を押しつぶしている。

こうしたことは、当時の開拓地では全くの日常茶飯事で、ある老女などは、二年つづけて、一人は生れて十八日目に、二人目は二十日目に、朝おきてみると、真くろいかたまりがころっところがっていて、しうとめからは「もとの姿にして返せ」と怒られるし、そのつらさで子供を失った悲しみはなかったが、屯田墓地に参る都度、人ごろしの責苦に後世苦しんだと述懐する。

百年の歴史しか持たない内陸よりも、四百年も前に開けたという歴史のある離れ島をと、北海道のそれこそ文字通りの最北端の利尻・礼文の両島の漁村にも、私は一度は十日間、二度目は一週間と滞在して、二十

人に近い老女たちを採訪した。

生まれてから八十余年、一度も島を出たことのないという老女は、汽車はテレビで見ただけで、実物は見たことも、もちろん乗ったこともない。

海の色を変えた程に群来^{ぐんき}って来たにしが、神かくしにでもあったように、その影すらこの沖に見せなくなって久しい。しかし、この海に、来る日も、来る日も、竹^{たけ}んで「おーい、にしが群来^{ぐんき}って来たど」と大声を張りあげている小柄な老女には、狂女というよりは童女のおもむきさえあって、私はあわれでしばらくはその場を離れることができなかった。

三つの年に、その出稼ぎ先の利尻島から帰って来ない父親を捜して、母親に連れられて来たまま、九十年間、この島にいついた老女は、いま息子夫婦の出稼ぎの足手まといになり、出稼ぎの時期になると、親せきに半身不随の身をあずけられる。

この老女にはつれあいがいる。

戸籍の上では九十六才ということだが、父親にかたって全国を歩いていたので、役場にとどけたときは、もうかなり年だったというから、とくに百才はこえたべ、ということである。

「痴呆のようになったつれあいを残して死ねないが、

この爺さまが死んだら、三日待たずに、三人の仲間とからだをくくり合って海さ入るのだ」という老女からは、ふしぎと暗さがなくない。

「板ご一板下は地ごくの社」と、その日その日を明るく精いっぱい生きた海の女たちは、どちらかというところ、農村の女たちと比べてあかるくて、屈託がない。

そのほとんどが肉親を海で喪っている。たった今出て行っただけの海で、目の前で船が沈んでしまい、息子も、夫も、一瞬のうちに海にのまれてゆくのを目のあたりに見ていたという老女も一人や二人ではない。それでも、海の男たちが海の生活を離れることができないように、彼女たちのほとんどが、これまた海の生活を捨てられないのである。

漁もなく、観光地として、辛うじて生きのびているこの二つの離島には、石を投げればとしよりに当たるというほどに、としよが多い。足りないのは都会では保育所といわれているが、この島では養老院と、老人保養所である。

四代のしうと・しうとめ夫婦に仕えたという、青森県出身の網元の内儀は、二度までも自殺を図った経験がある。白い浴衣を着たまま海に浮かんでいるのを、某伯爵の歓迎会から帰る島の人たちに救われて、それ

以来、白地の浴衣をみると、当時がおもいだされて、ぞっとするという。

この人のくびに、くさび型にくびれた傷あとがある。大工の棟梁の使う大きなノミで、のどを突きさした、二度目の自殺の傷あとである。

この老女の、父方の祖母は、かつて徳川家に奉公に上った。そのとき殿さまの手がつきみこもったのが彼女の父親である。十六才になった父親が、青森県の一廓を貫い領主となった。しかし、間もなく廃藩置県となり、彼女の父は青森県庁につとめた。二頭立ての馬車で県庁につとめた父親が、いつかひとのすすめで選挙に出て、拝領の領地を失ってしまった。

医師の娘だった彼女の母は、単身この利尻の島に乗りこんで来て建網をたてた。建網一統といえは一里四方の海をしきること、少なくともヤン衆の五、六十人は使う。それを四統の網元になった気丈な女だった。もちろん学者肌の父親はかわりなく、県庁につとめていたので、母親は数少ない女網元である。彼女は多分にこの母親の血を多く受けつぎ、気性はかなりきつい。

同じ津軽出身で、北海道の立志伝中に書き残されるほどの大網元に嫁いだ。勝気な気性と封建的な網元の大家族、このなかでの彼女の生涯は、書きつくせない

ほどの波乱に満ちている。

終戦のおり、カラフトであずかった幼い子供を二人まで目の前で殺してしまい、その親たちのいるところにはとうてい帰れないということで、母子でひっそりとこの島で生涯を終える覚悟をきめているひとにも出会った。

敗戦後間もない昭和二十三年、東京に働きに出た十九才の末娘が、アメリカ兵と結婚渡米したまま、三十年近い歳月音信不通になり、この末の娘の安否がわかるまで、死んでも死に切れないと、同じ年格好の私を目の前にしてひと晩泣きあかした老女。

今まで、農村・漁村を含めて、私は七十名近い老女のきき書きを集めている。

昨年、北海道の農民運動史に輝かしい一ページを書き添えている、華族農場主とたたかった農民運動の女たちの、その足跡を記録した「蜂須賀の女たち」を北海道女性史研究会叢書第一巻として出版した。一年に二度以上出版する会誌も今年は八号を数えて、困難ではあるが順調にのびている。来年は、この七十名の老女たちのきき書きを何とか型をととのえて一冊にまとめたいとおもっている。

女の視点から「女の歴史」を書くということは、言

うほどにたやすい仕事ではない。したたかな精神力と、体力が要求され、それにもまして、歴史を見つめ直す、たしかな目、「視点」がもつとも大切なのである。

四年目を迎えた現在、三十五名の会員が北海道の各地に散在しているが、発足当時の仲間で、現在まで残っているのは私ひとり。この一事をもつてしても「女性史」の掘りおこしのむずかしさ、困難さを如実に物語っているというもので、会員のひとり、ひとり、まさに「女性史」以後の問題をかかえて苦しんでいるというのがいつわりのない現状である。

なかには、子どもを育て終えて、ひまが出来たら、つとめを一応終わったらはじめたいという向きも多い

が、私はそうした安易な、セッされた場ができて学ぶことにはほんとうの意義がないとおもっている。

困難な条件のなかでも「女性史」を学ぼう、書き残しておこう、とするならば、まず何よりもその条件づくりからはじめることが大切で、自らの手をよこして、そして血を流してこそ、はじめて、ほんものとの出会いがあるのだと私はおもっている。

十年おそかったといわれても、はじめなかったよりはましだとおもうし、手さぐりだが、誰も歩かなかった道だからはじめた意義があるので、皆が歩きはじめてこそ道が出来るのだと信じている。この道は私の選んだ道である。困難でも私は死ぬまで歩きつづけたいとおもっている。

—人選者のことば—

十一号に載った、伊藤雅子さんの論文「主婦が学ぶということ」を読んだとき、こんなに同じおもしろい人もいたのかとおもうと、私はおもわず双手をあげて快哉を叫んでいた。

私は少女期に発病した胸部疾患を軸に、心臓病、肝臓病、腹膜炎、甲状腺腫の手術二度という、目下休火山のような病巣を

たくさんかかえている。だまっていると二十四時間ベッドに縛りつけられそうな不安で、あした何ができるという展望がない。今日のうちに何かをしておかないと、という焦りがこの二十一年間、私をかりたて通した。文学にもそして婦人運動にも、い

ま少しあきたらず、いらいらしていたとき出会ったのが女性史である。確実にいのちを縮める仕事であるが、私は好きで好きでたまらない。平凡が非凡に挑戦できるのは好き以外にないとかで読んだ。まさしくその通りである。「思うに希望とは、もともとあるともしえぬし、ないものだと

のようなものである。もともと、地上には道がない。歩く人が多ければ、それが道になる。」という魯迅のことばのように、好きだからやれるし、やるのであって、それが少しづつ積み重ねられたとき「女性史」のかたちが少しずつでも出来上るのだと私はあかるい展望をもつのである。

高橋 三枝子 女の視点から書く女の歴史1

屯田兵村の妻——田丸チヨノさん

女性史を書きはじめて間もないころ、私は雨竜郡納内町にひとりの老女を訪ねた。

ぜひ訪ねるようにと、いくたりもの人たちに言われての採訪である。

田丸チヨノさん九十四才。ほとんど一世紀に近い歳月を生きてきたこの人からは、物語りのなかのおうな然としたところなどみじくも見られない。それどころか、引きしまった小柄なからだのどこから、生活者としての強靱な意志の強さが、その驚くほどの記憶力のたしかさで、これまでの生涯を包んだ、長い歳月を呼びおこしてよどみ少なく私の問いかけに答えてくれる。

ずっしりと手応えのあった採訪であった。しかし、私はこのひとをながい間書きそびれていた。ためらいがあったので

ある。いまペンをとりはじめたのは、そのためらいが全く無くなったからでは決してない。「事実の重さ」とそれを書く「恐ろしさ」にペンを折った仲間も何人かいる。

同じ仲間というよりは、私たちの大先達の国忠スギエさんは、その「私の八十年のあしあと」を書いてゆくなかで、「私の八十年の長い生涯のうちで、泥まみれの十三年があります。私自身も思ひだしたくない年月ですし、むしろ意識的に忘れようとしている十三年間です。そんなわけでこの十三年間は、私のあしあとのなかでは空白になっています」とおっしゃったことがある。

全く無理な注文と知ってもなお私は、「泥にまみれながらなおかつ、ほんとうにまみれなかったのはなぜか、その悲惨

なまでの葛藤のなかを矜持高く生き抜いてきたところの支えは何であったのか、いまを、そしてこれからを、生きてゆくもののために是非つらい思いを乗り越えて書いて欲しい」と、無いものねだりをする子供のように強引にねだったものである。

人それぞれ、その境遇には大小の波乱をたたみこんでいるとはいえ、チヨノさんの場合はいささかその振幅が大きかった。

「この叔母の一生は、女性史でなくて、女性哀史ですよ」とは、納内まで私を案内して下さったチヨノさんの姪にあたる三好さんのことばである。

「七つ八つで支那戦争、十七、八で日露戦争、嫁になって子育て中は今次の大きな戦争だ。私の一生は戦争ばかりしていたようなものだ。これからは戦争のない日をすごしたいよ」とは、利尻島に住む笠井イクさん。

これは、明治、大正、昭和と生き抜いてきた大かたの老女たちの偽りのないことばでもある。

このチヨノさんも、戦争のいたみを曳

きずりつづけて生きてきたひとりである。というよりは、戦争が、そして農村の封建性が、チョノさんをして生涯十字架を背負った母親にしまったというべきだろう。

チョノさんは四国の香川県阿部郡畑田村三二五番地で、三好千五郎、フデさんの二女として生まれている。

明治十六年一月十日生まれの今年は九十四才。明治二十八年、チョノさんは数え年十三才で両親とともに、この納内村に屯田兵として入植し、爾来八十年、この地で北海道の風雪に耐えて生きてきた。数少ない屯田兵村の生きた証人である。生まれ故郷の畑田村で小学校三年まで通ったが、文字はほとんど読むことも書くこともできない文盲である。両親が屯田兵に応募、そして渡道するまでの経緯は、チョノさんはあまりというよりはほとんど知っていない。

当時の屯田兵は、武装移民団として、札幌を中心に石狩平野の開拓と守備とに対して予想以上の成果を挙げていたとはいっても、防備を主として、開拓を従とした屯田自体の機構は、兵農兼備という

点において、多くの矛盾や困難があった。

しかし、強力な統制に服する開拓作業は、当時において最も効率なものとして、一般にはことのほか重視されていたので、その募集が、土族屯田から一般に切換えられた後も、その応募者はいつも募集人員の四、五倍に達したといわれる。

廃藩置県のと、刀を鋏に持ち替えた俄か百姓の土族よりも、無言のうちにただ鋏を振りあげる「沈黙と忍耐」の根っからの百姓根性がなければ、この未開地の開墾という荒仕事には耐えられなかったのである。

チョノさんの両親、三好千五郎、フデさん夫婦は、この人間の限度をこえる苦難にも、荒仕事にも耐え抜き、屯田兵としては数少ない成功者だったときく。

その頃のことばで、もっぱら「異人船」といわれた大きな船体の土佐丸は、当時の高松港には入港できず、チョノさんたちは多度津から乗船、この土佐丸は多度津で三番目の碇泊地で、先に四日市、神戸と二か所に立ち寄り、そこでも

多くの乗客を乗せ、今治、博多、境、敦賀、伏木等に寄港し、五百人の屯田兵士とその家族を乗せ、一路北海道に向かったのである。

大正二年十二月二十日に発行された「雨竜屯田兵村史」の第二章(二十八年兵の移住、「御用船土佐丸の輸送」の項に、その渡航の有様を、「巨体を以つて其名高かりし郵船株式会社汽船土佐丸は、屯田兵輸送の御用を蒙り時恰かも日清の役の講話談判の真最中に各乗船地を経過して、五百の兵員と、其家族と、其荷物を搭載しぬ。之より先き各府県よりの移住者は、指定の日限に祖先の墳墓の地たる住み馴れし故郷を去り、親戚故旧と袂を別ち、明治以前の蝦夷が島、徒刑流刑囚の幾千と移せる未開の地、熊とアイヌと鮭と鯨、昆布より外は想像の得て能はざる、十一洲の其石狩国いざさらばと離別に際しては老幼婦女、互に一滴の暗涙に袖を被ひける、或いは里余或いは其港まで、数多縁故に見送られ、故郷の空を振り返へしては打ち眺め、我が行くべき北海道の空想をのみ描きつつ、各乗船地に着きぬれば、郡吏より人員を検す

ため屯田兵受領官にと引渡され、予定の日時に悉く、土佐丸船中の人とはなりぬ。

頃は明治二十八年乙未の年、東の空は、桜花咲き乱れて香にも酔はなん卯月の中旬、東風暖く波静かなり、御用船土佐丸は乗船地たる四日市、神戸、多度津、今治、博多、境、敦賀、伏木に寄港し五百の人夫と、其家族を乗せ、雄姿堂々日本海の波濤を蹴破り、丘陵地たる小樽港へ羅針を定めて快走す。

乗船旬余、妊婦は産むあり、或いは病むあり、不幸にも船中不帰の客となるさへあり、壮者と雖大に疲れき、五月七日未明、船は恙もなく小樽港へと着しぬ」とするされてある。

渡航者の多くは、親きょうだいと遠く離れて全く見たこともない北辺の未開地に渡るということで、水盃をして別れを惜しむ光景が船のどこでも見られたが、チョノさんは、祖父母や両親と一緒にだったので、そうした光景すら珍しく、それにもまして生まれて初めて乗った船の中がめずらしくて、妹たちと船中をはしゃぎ回って遊んでいた。

それでももう十三才になっていたチョノさんは、船の中で炊事の手伝いなどをさせられた。手伝いといってもせいぜいものの皮をむいたり、米をとぐぐらいのものだった。

土佐丸が港に寄港するのを待って、商人たちが小舟で四方から寄ってくる。

商人といっても大方が食べものを売る小商人である。細引の先に竹かごをつるして、その中に紙につんだお金を入れて船の上からこの小舟に下してやると、駄菓子やくだものをお金のあたいだけ入れてくれる。それを船の中の人たちは皆で分けて食べる。目的地に着くまでのほんの短かい、つかの間の平穩を、大人も子供も楽しんだのである。また、この土佐丸の中で赤ん坊が生まれた。文字通り玉のような男の子だったので、船の名にちなんで「土佐太郎」と船長が命名、乗客みんなでこの思いがけない出来事を祝福した。

それにひきかえ、長途の船旅の疲れで、ひとりの老人がひっそりと息を引取っていった。朝、目をさまして見ると、眠るように息を引取っていたそう

で、まだ見ぬ新天地への第一歩を踏むこともなく、ローソクの火が燃えつきるやうに果てた老人は、もよりの港でだびに付され、小樽の港に着いた時は、白木の箱に納まっていた。

まさに、「乗船旬余、妊婦は産むあり、或いは病むあり、不幸にも船中不帰の客となるさへあり」と記されている通りである。

「大きなかごの中に、二十銭も入れてやると、商人たちは心得たもので、駄菓子の類を十銭あたいと、あと十銭はくだ物をちゃんと入れてよこしてくれたものだ。二十銭を出し合った人たちで、皆で分けて食べて、今どきの人たちがみたい、汽車に乗っても船に乗っても、皆そっぽ向いて知らん顔しとらん。昔の人は情が厚かったよ。塩あんのキビだんごでもね、何里も先の人のところまで持って行ったり、もらったりしたもんだ。いままどきの人間は薄情になりおるよ」と、當時を懐しむチョノさんは、現代の世情をもちよびり批判する。

郷里を出てから小樽の港に着くまでは、正確には何日位かかっているのか、

チヨノさんはよくわからないというけれど、船旅だけでも、「雨竜屯田兵村史」によると土佐丸の出航が卯月の中旬、小樽の港に着いたのが五月の七日と記されているところをみても、おおよそ二十日はかかっている。

ともかく、人間ひとりの生命が、この船旅のなかで誕生し、それと入れ替わるかのように、年老いたひとりのいのちが、消え入るように消滅を遂げているのを見ても、決して短かい日数ではなかったのである。

小樽の港に着いたチヨノさんたちは、小はしけに乗り移り、岩の上を飛び伝いに歩いて、文字通り新天地、北海道の土に第一歩をしるすのである。小樽の港には、幅が七、八寸、長さが一丈余りもある化け物のような大きな昆布が波の間にただよっている。

屯田兵百人に一人の割り合いでついている案内人が、「とるな」「とるな」と制止するのをきかばこそ、移住民の一行は、われ先にとそれぞれ風呂敷を持って採りにゆく。昆布一本で大きな風呂敷が一杯になり、「さすがに北海道は大きい、

大したところだ」と、狭い内地でひしめくように、あえぎ、あえぎ生きて来たこの人たちは、腹の底から驚嘆し、かつ嘆息した。

「いま採らなんたら、すぐにも無うなると、内地におった時のくせで、う、皆急いで採りよったもんぞ。案内人に少しぐらい怒られても採ったものの勝ぞとおもったんよな、皆内地では、せつないおもいで暮らしてきよるからな」と、チヨノさんはやさしい四国なまりで當時を語る。

小樽で一泊した一行は、翌日汽車に乗って滝川に向かう。当時、滝川は（空知太）といていた。一般の乗客は客車だが、チヨノさんたち移住民は、無蓋車で、柱を立てただけの貨車に割り板をとりつけ、人間や荷物が落ちないようにしただけの箱に、ここでも船と同じく、人間も馬も荷物も同じ取扱いである。

「汽車の輸送は開始されぬ。先づ老幼相援けて停車場に至れば、我が乗るべき列車は而かも無蓋の貨車に、ズツクもて雨覆をなし、薄縁を敷き、異様の車の連結を見たり。指揮のままにこれに分乗、汽車は緩徐として鉄路を軌しるなり」と、

その異様さを、雨竜村屯田兵村史「鉄道輸送」の項のなかでこう記されている。当時の移住民たちの北海道における位置づけが自ずと証明されようというもので、チヨノさんたちの明日からの生活をもまた暗示されてあまりあるといえよう。

ともかく、荷物のようにして取扱われながらも、一行は無事に空知太に着く。ここで、思いがけなく一週間の足止めを食ってしまう。その前日まで降り続いていた雨でこの地方一帯が水浸しになってしまい、とても歩けるものではなかったのである。ひと足先に移住していた民家や、お寺に一行は泊めて貰ったものの、何分にも五百人に及ぶ屯田兵とその家族という大人数である。どこもかしこも狭くて、体を横にして眠る場所が無い。皆座ったままで眠るのである。眠ったまもうっかりして隣りの人に寄りかかろうものなら、「重たい」ととなられる。

お互いにひどい疲れの上に、尋常でない先ゆきへの不安が、人々を必要以上にいらだたせていたのであろう。

原野には、よもぎの葉が三寸ほどにも

伸びていて、寒いといつても、さすがに五月、北海道らしい初夏の頃だったという。一週間というものが、来る日も、来る日も薄皮につつんだ梅干一つを入れただけのおにぎりが一人一個ずつ配られるだけで、お汁も、お茶も、一週間の間に一度も貰えなかった。フキの葉にたまった水たまりを見つけると、皆我れ先にと寄って行ってすすりのんで、のどの渇きをいやした。

それでも、この空知太には、夫を日清戦争に送りだし家族だけが残されているという家もあって、こんな家の人たちは皆よるこんで門に出て送ってくれた。といつても、この新しい移住者をもてなすお茶の一服もあらうはずがないのである。

一週間後によりやく徒歩に耐えるまでに道が乾き、いよいよ出立つとなると、空知太の人たちは門に出て、百年の知己でも送るように泣いて別れを惜しんだ。皆一様に淋しかったのだろう。乏しいそのなかから、豆の種や、イモの種をはんのひと握りずつ紙につつんで手渡してくれた。

官側の冷たい処遇にいいようのない不安を持った移住民たちは、こうしたあたたい思いやりに皆涙を流して喜び合ったものだ、チヨノさんはきのうのことのようになつかしむ。当時、屯田兵や其の他の移住民の成功、不成功は一つには、本人やその家族たちの努力の如何にも、大きなかわりはあるというものの、何といつてもその土地の良否が運命を真二つに分けたといつても、決して過言ではなかった。

ちなみに同じ頃、根室の和田、厚岸の太田、室蘭の輪西等では、先にも述べたように北の防備を主とし、開拓を従とした屯田兵制度の矛盾があったとはいえず、現役時代がすぎて、保護から離れると、移住民たちは、たちまち生活が困窮、数年後には離散のうき目をみている。こうした移住民の運命を決定づける土地の選択は、渡航中の船のなかで行なわれる抽選である。宝くじを引くようなたった一回の抽選で生涯の落ちつき先が決定するのである。「運を天にまかす」などということばがあるが、まさしくそ

れである。

チヨノさんたちは五か中隊いっしょで、秩父別、一巳、納内と別れた。秩父別、一巳屯田に入植した人たちとはスママナイで別れ、チヨノさんたち納内組は、音江法華でその夜をすごす。一夜を音江法華ですごしたチヨノさんたちは国見峠をこえず、すぐ近くの渡船で対岸に渡った。

その頃の石狩川は現在の三分の一ほどの狭さで、十人乗りの丸木舟の船頭は皆アイヌで、船頭は二人、一人は上の針金を握り、一人は棹をもって漕ぎ、乗客は皆体を寄せ合って、ひとこともしゃべる人もいなかった。話だけは聞いていても、誰もが生まれてはじめて見るアイヌの男たちのたくましさと、真黒いひげづらに皆一様におびえたのである。

当時アイヌの住家が川のほとりにずらっとあったというから、先住民としてのアイヌも、当然のことながら大ぜいいたのだらう。丸木舟を降りて堤防の草の中を歩きながら、アイヌが追って来ないかとおもうと、生きた心地がしなくて、ものをいうものもおらず、お通夜の行列み

たいなもんだったという。道は辛うじて歩くところだけは笹が刈ってあったが、でこぼこで身体の悪い人のために馬車が用意してあっても、揺れがひどいので、とても乗ってなどいられなかった。こうして何とか納内村に着き、前の年に建ててあった兵屋に落ちつく。兵屋のなかには、一尺もあるフキが、土間にも、むしろを敷いた部屋にも無数に生えていて、野原に屋根があるというだけの粗末なものだった。ここでは一週間は中隊から食事が支給されたので受取りに行った。いちばん先に大きなごはんのおひつが各戸に三つずつ配られたので、ごはんをもらいにゆくのも、お汁を受取りにゆくのに、もこのおひつを持って行き、とにかく道が悪いので、ごはんはともかくお汁は、こぼしたり、転んだりして、一滴のお汁もなくしてしまうこともあって、泥だらけのごはんを洗って食べたことも何度かあった。お汁の中身は、スルメを細く切ったのが入っていたり、身がきにしんが入っていたり、内地のそれとおよそ違っていて、味は塩辛いほんとうに北海道的なみそ汁であった。ときには一人に一個ず

つ缶詰が支給され、一週間をすぎると、大小二つのなべが支給になった。

また当時一尺位だったフキが、毎日とって食べているうちに、たちまち二尺になり、三尺になって、それでも他に食べるものがないのでフキばかり食べていた。フキ以外に食べるものが全く見つからなかったのである。

滝川で小灯を買った人はよかったが、買わなかった人は十日ほどたき火のあかりで夜をすごしたのでけむたくて、けむたくて、誰の目も泣きはらしたように赤くはれて、ウサギの目よりまだ赤い目をしていた、とチヨノさんはいう。

二か月ほど後で据ランプが支給になったが、油がなくて、一年に四合の油で間に合わせたので、それからあともしよせんたき火のあかりが唯一の照明になったのである。

一般に屯田兵村の土地の配分は、給与地が一町五反、追給地あるいは共有地が三町五反が普通なのだが、納内は騎兵が入る予定だったために、給与地が三町三反、共有地が一町六反と、他の兵村とその配分が異なっていた。給与地が多いと

いうことは、労力その他の点がかなり有利だったといえよう。

その頃、一已、納内の川ぶちにアイヌの家があつて、アイヌが住んでいたのだったが、チヨノさんたちは一向に気がつかなかった。たしかにアイヌ民族が生活していた証拠に、アイヌ穴と皆が呼んだ穴が、石狩川の川沿いにたくさんあつて、そこにカボチャを植えると、魚を埋めてあつたせいか、こやしを少しもやらないのに大きなのがたくさんできた。

先住民のアイヌのひとたちは、こうした和人の移住民のために、いや応なく土地をおわたしたのだろうか。

北海道の諸事については全く無知にひとしかった移住民たちのあずかり知らぬことだったとはいえ、一世紀に近い年月を経たいまも、その傷あととは決して少なくない。

音江の渡船場には、船頭をしてアイヌが二、三人残っていて、時々魚を持って来て、麦やそばと取替えて行ったが、それほんの数年のうちで、そのうちいつの間にか姿が見えなくなっていた。

大きな木を伐ったあとは、筏に組んで

流したり、川には丸木舟がよく通っていたが、帆かけ船は見かけなかった。丸木舟だけが、水の上の唯一の交通機関であったのである。一方、陸地の輸送はもっぱら放し飼いにされていた馬が使われ、しっぽをつなぎ合わせて、十頭も一列に並べて、一番先頭の馬に馬方が一人駄鞍にまたがって荷物を運搬、駄鞍を乗せた馬の両端に米なら一俵ずつ積んでいた。そんな馬の列が時々堤防を通って行ききしていた。荷物といえば、チョノさんの荷物が着かず、「北海道は寒いのにひとえもんばかり着て来たもんで、そのひとえもんを破れるまで着て、代わりがなくて、荷物が着いたのはやっと冬になってからじゃ、それまで船から一枚のひとえもんですごしたもんじゃ、寒いなのってなかった」と。開墾に必要な道具が優先で、家族の荷物は同じに出していてもおくれて着くので、首が長くなるほど毎日、荷物の着くのを待った。

村には鍛冶屋と荒物屋が一軒ずつあった。間もなく鋸屋も一軒できた。開墾に必要な農機具の修理や鋸の目立ては、現在ではもう斜陽の産業と化してしまった

が、村のなかの鍛冶屋や鋸の目立て屋は、こうした時代にはなくてはならない商店だったのだらう。そのうち、屯田兵の仲間でも、もと木びきをしてた溝口という人が鋸の目立てを習いに行き、組の人たちの鋸の目立てをしてくれた。内地でのそれぞれの手職や技術が思いがけなく役に立つ例が多く、大工気のある人は風呂の作り方を遠くまで習いに行ったり、屋根をふく瓦屋は、その頃で一軒七円で請負い、近くに住む竹下の爺さんなんか、のちには七師団の屋根ふきにゆくほどの腕前になったものだ。とチョノさんの話はつづく。

「この竹下の爺さんのむすこは今は妹背牛にいろよ。私より一年あとの二十九年入植の小松さんは、一軒おいて隣りに入った人で、愛媛県のひとじゃった。高橋貞光さんの親はいっしょの船で来たが、秩父別に入った。たしかこの人は四つか、五つ目の港で乗りなさんな人じゃ。六丁目の坪田長太郎さんは、わしよりひとつ先の港から乗った人で、あのころたしか四つか、五つだったはずじゃから、

わたしよりたしか八つほどに若いんじゃない」と、チョノさんの記憶力はまさに抜群である。チョノさんにとってこの頃のことがいちばんつかしくもあり、そして誰にも心のかげりをかくさずに話せる事柄だからでもあらう。

この時代の結婚は男女ともかなり早く、男は徴兵検査を境にして、女はそのころもっぱら女の厄年は十八才といわれていたので、それを避けて、たいてい十六、七才がほとんどであった。しかしチョノさんの結婚は二十一才である。当時の結婚としてはかなりおそい。ふしぎに思った私は、そのことをたずねると、給与地で作ったアズキ百俵を仲買人にだまされて、ただ取りされたので、結婚の仕度ができず、一年待ったからだという。一年待ってどんな嫁入り仕度をして嫁になったのかとの、私の重ねての問いに、チョノさんは、「何も持って行かなかった。風呂敷づつみ一つにいいきもん一枚、ひとえもん一枚、はたご一枚、きもんの五枚も六枚も持ってくる人いなかったから、こんなもんだな皆」と。一年待ってみてもしょせんはこんな程度の嫁入

り仕度である。

*

渡航から入植時のおもいでを、ひとこととよみもなく語ってきたチョノさんの表情が、ひとたび自分のこと、特に結婚の話になると、妙な屈託のいろを見せて唇をふるわせてふしぎと気色ばむ。ことの深い事情を知らなかった私は、何時もの長い話合いでチョノさんが疲れてしまったのだらうと思ひ、私の心なさをしきりにわびた。

チョノさんは、少しも疲れていないのだと言いながらもどうしても屈託のいろがかくせない。と、案内して下さった三好さんが、「おばあちゃん話しなさいよ、皆知っていることなんだから」と、しきりにチョノさんにおっしゃるのだが、チョノさんは口をかたく閉ざしたまま、何かに向かつて必死になつて耐えているようである。ひとは誰でも、そこだけは触れられたくないという心にかげるものを持つてゐる。それこそ生きているあかしでもあるうと、私はいつも、そうしたひとの心に深く立ち入ってはならないと自戒している。チョノさんを間にして、

姪の三好さん、チョノさんの一人娘で現在田丸家を継いでいるひとと、そして私と、たじろぐばかりの重苦しいひとときがすぎた。

私はつとめてさりげなく、「その時おムコさんいくつでしたの」と、チョノさんの思ひがけない明るい声が返ってきた。「ちょうど現役で入隊していたけど、結婚式には帰して貰つて来たよ」それじゃおムコさんのいないところにお嫁に来たんですかときくと、「その頃は皆そうだった。現役から待つとるひとものいたけど、嫁とってから現役にいったひともあるし、働き手がなくなると困るので、その手だてだったんだ」

結婚、それは男と女の愛情の結びつきなどでは決してない。要は労働力の補充にはかならなかつたのである。チョノさんの夫は、もう三十年も前に六十五才で亡くなつてゐる。

しあわせでしたか、という私の愚問に、チョノさんは「若い亭主はようなかつた。旦那は年のいった人の方がいいよ。隣の種田さんも姉さん女房だつたので悪かつた」「おめかけさんでも持つ

たの」「いやおめかけさんを持つたんで、そんなことはなかつたけど、お前はおれより年上だからといって、生活の責任を全部持たされた。今のように街に遊びにゆくところもなかつたし、土地も拓かにならなかつたからね。働くことは働いた人だけ、神社やお寺の寄付とりに村の役の人がかかる、取りにくる人たちは戸主の亭主にいうし、亭主は、お前がやれという。年がひとつ上だったばかりに、何でもお前が考えてやれ、お前がすればいいといつて、ひとつも頼りにならなかつた。女は亭主を持つときはずっと年かさのたよりがいのある人を持たないと一生苦労するよ」「開拓の仕事ひとつにしても皆わたしがひとりで責任を持たされた。屯田兵の家族だつた人だつたが、分け前は何もない、土地と家は親は作ってくれたが、土地は拓かにやならなし、畑なんてものじゃなかつた。木の株だらけで、三頭の馬をならべてプラオでおこしたものだ。大きな木の株ばかりで手でなんかとてもおこせなかつたからね」

はじめは馬を使った人がいなくて皆お

じけづいていたが、そんなことばかりも
いっておられないので、三戸共同の開墾
作業が始まった。

各戸に一頭ずつの馬がいたので、仲間
同士での共同作業である。このチョノさ
んのいう三頭立ての開墾のことを、旭川
市の隣村永山町の生んだ、屯田作家、板
東三百の「兵村」の一章節のなかで、
「村としても二年目からの開拓事業は
着々順調に進んだ。ことにこの年には仙
太は小隊で買った「ソリキ」の使用を命
ぜられ、三頭の馬に引かせては仕事の遅
れた家々に手伝いに行った。「ソリキ」
というのは前方に円い薄いハガネが回っ
ていて、草の根を伐り、後部には大きな
鉄のヘラが両側に開いていて、大々的に
荒地を掘りおこす農具である。仙太にこ
の命令が来たのは無論前年の開墾成績が
優秀な結果で、之に依て得る一段あたり
幾らという賃金は、一部を小隊の農具維
持費とし、一部は仙太自身の所得となっ
た」この中に出てくる「ソリキ」がそ
のまま、チョノさんのいう三頭立てのプ
ラオに当てはまるかどうかわからない
が、当時の開墾の状況が幾分理解できそ

うである。

どこの家の馬も去勢前の元気のよい雄
馬ばかりだったので、開墾の途中に雌馬
を見つけると大変で、プラオをつけたま
ま他人の菜種畑のなかを突走って、よく
できていた菜種畑を何段も荒らしてしま
うことも度々あって、そのつど、チョノ
さんは反物等を持って一軒一軒詫びて歩
く。そんな仕事も一切チョノさんの受持
ちで夫は一切知らん顔をしている。桑の
木がたくさんあったので、蚕を飼ってマ
ユを旭川に持って売るのも、開墾から家
事の一切をチョノさんの責任に負わされ
ていた。この責任の重たさを「大変だっ
たよ」とチョノさんは繰り返す。気丈そ
うに見えてもチョノさんも女、時には世
間なみの夫婦のそのように、夫に頼り
切る妻になりたいと思ったことも再三だ
った。しかし、チョノさんには、この重
荷に耐えなければならぬ負い目があっ
た。実はチョノさんが数え二十一才でと
ついで来たのは田丸の家ではないのであ
る。

明治三十七年、ちょうど日露戦争の始
まった年に現在の田丸家の隣家に嫁ぎ、

そこで男子ひとりをもうけている。みこ
もったチョノさんを残してこの夫は間も
なく出征、転戦中にこの夫の戦死の公報
が届いた時はチョノさんは身二つになっ
ていた。家継ぎ息子を失った婚家では、
このままでは財産の全部が嫁とその長男
のものになるのを恐れチョノさんだけを
離別、その時すでに他家にとついでいた
妹夫婦を連れ戻して来て家督を相続させ
た。悲劇の発端は意外なところに潜在。
戦死したはずの夫が、日露戦争の終結と
同時に無事に帰還して来たのである。

戦死の公報は実は誤報だったのであ
る。乳離れもしないえい児を無理に引き
はがすように離別させられたチョノさん
は、この時すでに婚家のすぐ隣りの田丸
家に再婚していた。前の婚家の隣りにと
ついで来たチョノさんの心の内奥に、み
どり児のまま置いて来た子供を垣間見る
ことができたという思いが、或いはあ
ったのではなからうかと思うのは、私の
思いすごしであらうか。再婚したばかり
の夫は現役に入隊中の出来事である。
「子供のためにすべてを白紙に戻して、
いま一度帰って来てくれ」と、先夫が毎

晩のように来てチヨノさんに頼む。

去就を決めかねたチヨノさんのそのころの胸中はどんなだったろうと、時間の経過をこえて、チヨノさんの悲しみが今にも伝わって来そうである。その後、十年に余る歳月を、この人はついに独身で通している。

複雑な家庭の事情がからんでいたとはいえ、このことは再婚したばかりの夫田丸さんにとっても、決して心穏やかなことではなかったのである。十年以上も男手ひとつで育てられた男の子が、ぐれて家を出たのはこの人が再婚して間もなくである。爾来半世紀に近い月日をこのチヨノさんの残して来た子供は流浪の身なのである。

九十四才、外見には体一つ不自由のない楽隠居の身のチヨノさんから、いまだに生活者としての気迫が漂っているのは、この息子の先ゆきを見届けられないという、うっかり死ぬこともできないという、ひたすらな母のおもいを全身に秘し持っているゆえなのだろうか。

農村の封建性もたらした悲劇というには、あまりにも陰湿に過ぎ、また戦争

のゆえと単純に片づけてしまえない人間の業の深さを、私はおもい知らされたのである。

いとまを告げる私に、「家の者のいい農繁期を見はからつていまいちど是非訪ねて来てくれ」とチヨノさんは懇願する。

高橋 三枝子

女の視点から書く女の歴史2

離島の老女たち——松谷ツヤさん

つまりさうな暗さである。あかり採りの小さな窓が一つあるにはあるのだが、これがまた破れた硝子の代わりにベニヤ板や厚紙が張ってあるので、硝子窓の役目を一向に果していない。

おりから五月の練雲りの空の按配である。日のあるうちでも電気の光りが欲しいほどの暗さと陰気臭さである。

この洞窟のようなガランとした部屋のなかにツヤさんはひとりぼつねんと座っている。

しかし、私は再びチヨノさんを訪ねることをしなかった。会うことがとてもできなかったのである。

参考文献

雨竜屯田兵村史

「兵村」板東三百著

〔北海道女性史研究〕第八号より〕

部屋の中には家具らしい家具の一つも見当たらない。それでも少しずつこの暗さに目が慣れてくると、部屋の片隅に破れたソファが一つある。

板の間に座布団なしで座っている私にツヤさんは、このソファに腰をかけるようにしきりにすすめる。がソファとは型ばかりで真中に大きな穴があいていて、板の間とさして変わらないしろものである。

部屋のやや中央に大きな炉が切つてあ

つて、かつて漁の盛んだった頃潮水で濡れた身体をこの炉端で暖めながら食事をした名残りであろう。いまはその炉のなかに薪ストーブが据えつけてある。

このストーブにツヤさんは外から大きな薪を一本ずつ持って来て放り込む。決して二本も三本も持って来ない。火の気がなくなりそうになると一本ずつ持って来る。伐り口から樹液が流れだしている、まだすっかり乾ききっていない薪は、そのつど「ジュッ」とけたたましい音をたてて灰かぐらを舞い上がらせる。火の粉を含んだ煙がストーブの破れ目から一斉に吹きこぼれると、うす暗い部屋中が煙でどくろが渦を巻いたようによんでしまふ。

利尻島に着いて五日目の五月十一日、私は鷺泊港から約四、五ばかり奥に入った大曲という小さな部落にこの松谷ツヤさんを訪ねた。

「よく働いた人で、この島の人間がまだ百人にもならないうちに内地から嫁に来て、一度も内地にも帰らない性根のある婆さんですよ」とは案内してくださった漁組の理事黒川さんのことである。

沿道の大曲郵便局の前で車を降りて、磯づたいに三十分ぐらい、もつと歩いただろうか。土台がすっかり土のなかにのめり込んでしまった古い木造の平屋建の一軒が訪ねるツヤさんの家である。全くといってよいほどに陽の入らないこの部屋は暗いだけではなく、五月といってもとても寒くて火の気なしにすますわけにゆかない。

綿入れの着物にモンペをはいて、頭には黒い三角布をがっちり被って、まんまるくなって座っているツヤさんはともかく、コートを脱ぐと、セーターとスカートという軽装の私はこの寒さがヤケにこたえる。うっかりすると風邪を引きかねない寒さがある。うずを巻く煙に喉の痛みをかばいながら、身体の方はもう寒くて小さきみに震えながらの採訪である。

かぶっている黒い三角布のせいか、ツヤさんの表情は穏やかな老女のそれではない。温和とはほど遠い意地の悪い魔法使いの老婆を連想させて容易に心を解きそうにもない。

案のじよう、私が来意を告げて「それがどうした」「俺がどうかしたってか、

死んでゆくばあに何が用あって来た」とまるでけんかでもしかけて来そうな剣幕である。

しかし、口で強がるほどに性悪でも強情でもない証拠に、このひとはふつといまにも泣きだしそうなさびしい表情を一瞬見せる。私はこの一瞬表情をよぎるさびしさを見逃さない。こうした頑くなさを見せる老女ほどひと倍のさびしがり屋で、それだけに手ひどい孤独地獄に陥っているのが常である。

私は手土産のかわりに持って行ったお茶と飴をすすめながら、少しずつツヤさんの気持のほぐれてくるのを待った。

思うように火が燃えなくて、私が寒がっているのとわかると、魚の匂いがしみついた袖なしを持って来て、着なければ風邪を引いてしまふとしきりにすすめる。

「娘なのかひとの嫁になつてゐるのか」と目が薄くなったのでよく顔が見えないといひながらもようやくツヤさんはこころを解いてくれた。

「苦勞するもんな生まれながらにすて苦勞する。案な後生を送るもんな生まれながらにすて樂する。苦勞すたもんなや

がて楽するが当たり前ながら、苦勞するもんな生まれ落つるとより苦勞すて、死ぬまで苦勞する。この世さかさまになつとる。今さらこんな世の中に何いうてみてもだつあかん」

背負い切れないほどの苦しみの多い生涯の終わり近くに来て、まだ不如意な生き方を余儀なくせられることへの憤りをツヤさんはたたきつけるようにいう。

黒川さんの話では「松谷の婆ちゃんは今昔から働いた人で有名ですよ。昔は金もずいぶんとあった家でしたが、漁がなくなつたところに長男の正蔵さんが船で遭難したりして、見ているうちに困るようになりまして。それでも浜に地所があるって、何ぼかずつでも地代が入っているはずですよ。もつとも都会の土地と違つてこんな捨ててあるようなところの土地ですからたかだか知れたもんですが」

あとでこの地代のことをツヤさんに聞いてみると「五千元」だとのこと、うかつな私は月額「五千元」だとばかり思っていたのだが何とよくきいてみると年額にして「五千元」である。

月一万なにがしの老齡年金と、この年

額五千元の地代はツヤさんにとって大事な財源で、「これだけあれば誰の世話にならないうで楽に暮らしていける」といい「米とみそとしょうゆさえ買えば、あとは野菜は畑で作るし、魚は浜に行つて誰からでももらつて来るので間に合うし不自由はしない」と重ねて強調する。

「おれはだまされて北海道に来たがだ。だますたが他人でないわが父親だから。うっかり父親の話を真にうけて来たおらが馬鹿だったがだ」

ツヤさんの父親は、ツヤさんの生まれる前年の明治二十五年に北海道に渡り、松前から利尻方面で働いた。父親が二十五歳の年である。

その頃の松前や利尻は、鯨が群来たつてくると海の色が変わつたというほどに獲れ、コンブもわかめも面白いほどに獲れた時代である。まさに一獲千金の夢のような話がまことしやかに内地の至るところに流布されもし、また稼ぎまくった人たちも事実いたのである。

ツヤさんの叔父が松前にいたのでその人を頼つての渡道だったが、どうしたわけか、ツヤさんの父親は北海道にはいつ

かなかつた。しかし、北海道に見残していった夢がよみがえつたのだらう。ツヤさんが物心つく頃になるとよく父親が北海道の話をしてくかされた。「女は外に出て働かなくてもいいし、子供を育てたり、裁縫したり、食事の仕度をしていればいいんで北海道は女の極楽だ」と。

ツヤさんは明治二十六年に石川県の能登の在に生まれた。親もまたその親も代々つづいた塩づくりである。物心つく七つ八つの頃から、大人たちにまじつて塩づくりをさせられたツヤさんは、この父親の話をきくたびに、女にとっては極楽だという北海道に憧れた。

ツヤさんが十八歳になった年、偶然にも町の商人が北海道ゆきの縁談を持ち込んで来た。ツヤさんに異存のありそうはずもないし、北海道に多分に未練を残して来た父親もまた反対するわけがない。ツヤさんにとっては夢にまで見たであらうバラ色の人生が待っているはずである。

「楽な後生送るたいばかりに、内地での稼ぎ人との縁談を皆ことわつて、まるで玉の輿にでも乗つた氣で来たんだ」

「来てみたら、何の何の、見るときくとの大違い、仕事はつらいもんの、しゅうとさんは隣近所でも有名なきつい人だもんの、いっぺんに石だらけの地獄に真さかさまに落ちたがみたいだった」

塩づくりのつらさ、そして貧しさから逃れたいばかりに、当時鳥も通わぬとうたわれた北海道のそれも遠く離れた島に嫁いで来たツヤさん。

「いちばん鶏の鳴かんうつに、家中のもんみんな起きて浜に出るんだ。そして塩水を汲んで干すんだ。天気がいいと固いかたまりになる。それを大きな釜に入れて砂でこす。その汁を煮つめて塩にするがだ」。こうして家中で朝早くから働いても塩はいくらもできない。

塩づくりという仕事は口でいうほどやさしい仕事ではない。とにかく年中無休で降っても照っても休みなしの仕事である。

何といってもツヤさんが一番骨身にこたえたのは塩を煮るための薪取りである。

ツヤさんたちがこの薪を取りにゆくのは主に七曲りという奥地の山で、七曲り

という呼び名の通り曲りくねった高い山である。その山に松の下枝や、下草の枯れたのをかき集めて背負籠に入れて、山を下りて来るのである。

山に登る住きの道は、木の枝につかまったり、両手をついて這って登るけれど、薪を籠にいっぱい入れての帰り道が正念場なのである。霜の解けはじめた山道はすべりやすい。すべらないようにと両足を踏ん張って用心していても、ついにずるとすべって木の根に足が引っかかったり、着物の裾が引っかかって転倒する。

何よりもツヤさんがつらいと思ったのは素足で踏む霜の冷たさである。足の指がちぎれてしまうのではないかとおもうほどに冷たさを通り越して痛くなる。足の指先がこれほどに冷たいのに、顔は汗が滝のように流れて目に入る。そのため目が見えなくなるし、籠を背負った背中は背中中、川が流れるように汗が流れるように汗がしみている。

塩づくりの仕事のなかでも、薪取りは女の仕事になっている。ぞろぞろと、仲

間同士が道にはぐれないように連らなって歩くので、少しでも油断をすると仲間たちに遅れてしまう。

「汗も脂も出るだけ出ると自然に乾くもんで、涙やら汗やら話にもならん苦勞すて塩づくりすたもんだ」

このつらさからのがれることができるのなら、北海道でも、唐天竺でも行ってもいいとツヤさんは思った。明治も終わりの四十四年の三月、佐渡や伏木から乗り合わせたヤン衆たちと一緒に帆前船で利尻島の鴛泊に着く。能登の七尾から鴛泊までの船賃が三円五十銭、米一俵の相場が五円の頃である。

鴛泊まで迎えに来ていたしゅうとに連れられて知人の家に一泊させてもらい、次の日素足にわらじを履いて一里の雪道を歩いて婚家の松谷さんに到着。夫の金さんはその時ツヤさんと同年の十八才、しゅうとは三十六才、しゅうとめは三十三才の働き盛りの若さである。

婚家にはこのしゅうとのほか小姑たちが三人いた。当時の漁師の家族としては少なかったが、しゅうとは並の人ではなかった。小さな船で魚を獲る漁師の家

だったが、しゅうともしゅうとめも働くことではこの近隣で真似のする人がいないといわれた。何よりも夜二、三時間しか眠らない。

極楽や唐天竺かと思つてはるばる来た北海道でツヤさんを待っていたのは相変わらずの重労働だった。着いた翌日からしゅうとは「お前は背負い子だから荷物を背負うが上手だろう」といって、大曲から鶴泊の港までかますに入れたニシン粕を背負わされた。往き道はニシン粕を背負い、帰りは一俵十六貫の米を背負つて帰つて来るのである。この米を大曲の在の漁師たちにしゅうとが高く売るのである。

「一度は通つて来た道とはいつても、道はようわからんし、熊が出るか、アイヌが襲つて来るかわからんし、来る道々に立っている地藏さんに手を合わせて、私の身を守つて下さいと祈りながら帰つて来たもんだ」

住みなれてからの鶴泊までの一里の道は、さして遠いと思わなくなつたが、西も東もまったくわからない北海道の土を踏んだ翌日からの鶴泊通いである。「苦

勞するもんな生まれながらにすて苦勞するようにできておるんだ」と愚痴も出るはずである。

十八歳で北海道に来るまでツヤさんはたびも、満足な下駄もはいたことはなかった。娘らしい着物の一枚も着たことがなく、子供からとしよりまで、朝の早くから起きて働いても塩づくりは仕事のしんどい割りにもうからない仕事で、もうけるどころか、どうかすると一年に五円から多い年になると二十円も借金のできる年がある。一銭の金も無駄にするどころか、割つて使うようにみな辛抱したくらしをしている。

村中の誰もがみな貧乏しているので、みなこの貧しさを当たり前のことに思つていた。そんななかで親たちのあまりの貧しさに真底こりてしまい、何とかして抜けだしたいとおもいつづけていた。

「熊が出たつて、アイヌがおつたつて、この世に塩づくりほどえらい仕事はなからう。塩づくりさえなければ、北海道だって、樺太だって、親の顔も兄妹の顔も見られなくなったつて平氣だと思つて来たんだ」

こうしたツヤさんは長い間の念願がなつて島の嫁になり、その翌年長男の金藏さんを生む。つづけて二男の銀藏さんが生まれて間もなく、夫の金さんは東京の近衛聯隊に騎兵として現役入隊する。夫の金さんもツヤさんも数え二十一歳の春である。

この年若い夫の金さんは、酒もたばこも口にすることもない実直そのものの人だったので、ツヤさんはしゅうとのきびしさにも、仕事のつらさにも耐えることができて、能登の実家には一度も帰りたいたいと思ひもしなかつたし、事実このツヤさんは六十余年のながい間に一度も里帰りをしていない。

「十八歳まで育ててもらつた親の恩なんかおもつてみたこともない。父親も母親も土方の棒頭みたいに子供ら使ひもんにならんうつから使うて」と貧しかった子供の頃をおもいだして、親へのうらみつらみをツヤさんはいつのる。

それでも「親が楽しようと思つて子供ら使うたがでないこと、人の子の親になつてようやくと少しづつわかつた。わたしも十二人の子供放つて育てたもん。手を

かけたって、子供なんかに手かける暇も金もなかったもんだ」

「昔の人間はみなおぞい一生をかついで生きとったがだ。衆な御生送った人たつもなかにはあつたけど、そういう人たつとはおうたつ生きとる娑婆が違うとるんだもともと」。

ツヤさんは女四人、男八人の十二人の子持ちである。

「半産する流するすが数えると二十人もとどきとるかもしれん、止めることすらんもんじゃから、やや子ばかり毎年生んどうた」

「自分の腹にやや子かかえたが、仕事がいそがしゅうて夢中でおつてようわからんでおるとしゅうとのおとつあんが目ざとに見つけて、うつのあねま、またやや子かかえてしもうた、隣りのうつのふけ猫よりもまだ悪い」とおこられるので一生懸命に流すために、腰まで海に沈めてコンブ採りやウニ採りをした。

こうした例はツヤさんだけに限らない。そのせいかどうかわからないが、とにかくこの島の老女たちは例外なく目性が悪い。赤くただれていて、そのほとん

どが視力を喪っている。八十才を過ぎても針のめどを通すのに少しも不自由をしないという屯田兵村の老女たちとはどこか違っている。

私ははじめ、この島の老女たちの目性の悪さを、偏った食べ物に起因しているのではないかと早合点していたが、そうしたこととはしかにその原因のひとつになつていえると思えるが、こうした産後の不養生に大きなかわりがあるのではないかとおもふようになった。

どの老婆もお腹の子供を流すために、意識的に、まだ水の出で行かない寒中の海に入ったり、産後七日間は休めとは一体誰が誰のために決めたことか、とうそぶく老婆たちを前にして私はただただ、たじろぐばかりである。どの老女たちも「やや子生んだといつて一週間も寝ていれや、コンブもわかめも去んでもうが、親もわらすも干しあがつてしまふ」と一笑に付してしまふ。

たくましいといえこれ以上のたくましさはないが、無知とはいえあまりにも無惨な体の酷使である。

「ややっこ抱えるたびにしゅうとの嫌味

をきかんにゃならんだら、針のむしろに座つとったようなもんだ」

十二人の子供をほとんどツヤさんは手をかけて育てていない。文字通り生み放してである。「犬の子や猫の子よりもっと悪かったさ、それでも放つておいたのによく育つたもんだ」というツヤさんの言葉尻を引きとつて、たまたま来合わせた長女のハツさんは、「私はいちばん上だったので弟や妹の世話ばかりさせられた。学校もほとんど行っていない。小学校の二年か三年ぐらゐまで行つたけど、連れて行つた子供が泣くとうるさいとみなに叱られるのでせつかく学校に行つても教室に入れてもらえない。そのうちにだんだん学校に行かなくなつたんだ。長女に生まれて損ばかりしていた。おかげで字一字読めなくて、五十すぎても涙で稼がねばならぬんだ」とほとんど視力を失つた八十歳をすぎた老母を前にしてさかんにぐちをこぼす。と、ツヤさんも負けていない。「何をいうか、子供は子供だ。親は親だ」といい返している。

六十余年間一度も郷里に帰っていないツヤさんの情の強さが、そっくりそのま

ま子供たちにもいろいろな形で受け継がれているのだろうか。

十二人の子供たちのうち八人は亡くなっていて、残っているのは四人だけ。その四人もこの長女のハッさんが釧路にいて何年に一度か帰って来るが、あとの三人はまったく消息がない。去年まで一緒に暮らしていた孫からは手紙や写真が送られてくるが、ツヤさんの子供たちからは手紙一通来ない。ひとりには教員、ひとりには公務員になっているはずだとツヤさんは知っているが、家を出たきりで逢いたいとも思わないというツヤさん。あながち強がりともおもえないのは、諦め心がある。もうすっかりツヤさんの身についていたのだろうか。

先年、ツヤさんは同居していた長男の金蔵さんを冬の海で失っている。金蔵さんだけではない。八人の男の子のうち四人までも、ツヤさんの手の届きそうなオホーツクの海でいのちを落しているのだから。

いずれも漁船の遭難である。ぜひ見て行ってくれとツヤさんが手さぐりで案内してくれた奥のひと部屋に、ひときわ目

立つほど立派な仏壇が置いてある。その上にずらりと海で死んだ若ものたちの遺影がならんでいる。

海で四人、そして今度の大戦で二人の息子たちが戦死「しゅうとに気がねしながら生んで育てた子供たちだったが、ひとりもおらの手に残ってくれなんだ情けないもんだ」とこの時はじめてツヤさんはしみじみとうったえる。

子供というものは小さい時は、母親の着物の裾を踏みつけて大きくなり、大きくなると今度は母親の気持を踏みつけて出てゆくものだ、私は何かで読んだ記憶がある。この世でさびしいもの、悲しいものを見たければ母親の姿を見れともいった人がいたけれども、まさしくその通りだとおもう。

このツヤさんのほんとうのさびしさを知ったのは、帰りがけた私に「ぜひたのみたいことがあるからきいて欲しい」といわれたときである。

ツヤさんは去年の十月から今年の三月まで同じ島の親せきにあずけられた。金蔵さんの亡くなった後、五人の子供とツヤさんの面倒を見て来た金蔵さんの妻女

が、子供たちがそれぞれ中学校を卒業して家を離れると遊んでいるわけにゆかない。子供たちの小さいうちには受けていた保護も大きくなると受けづらくなった。さればといつて島には働く場所がない。夏の間はそれでも一日、二日と拾い出面的ような仕事にありつけても、冬になるとそれすらばったりと途絶えてしまう。遠い土地に出稼ぎにゆかなければならぬ。いきおい足手まといになる年よりを親せきにあずかって貰うより仕方がないのである。

「米とみそとしょうゆさえあれば、ひとりでも暮らしていけるから、親せきにだけはあずけないでくれと、前の畑さいるかあさんにたのんでくれ」というのである。そこには、情の強さも、意固地ともおもえる気性の激しさもみじんも見られない。零にも等しいひとりのさびしい老女そのものの姿があるだけである。

それはそれなりに、よんどころない事情があつてのこと、私のようになまったく行きずりの人間が深くかわるべきことではあるまいと思つたが、両手をすり合わせて拝がむようにして頼むツヤさんの

真剣さは、どうしてもただごととはおもえず、私は金蔵さんの妻女にこのことのしさを話した。

今にも降りだしそうな空模様の下で、黒い男ものの合羽を着た体格のよい人を私ははじめ男の人と見間違えていた。見るからに働き者らしいこの妻女、畑を耕す手を止めて、黙って私の話をきいてくれた。きき終わると、人の良さそうなこの人は、八十歳を越すとしよりを一人残してはともいえないこと、そして五人の子供のうち四人は手つかずというほど、まだ中学校をそれぞれおわったばかりで、ひとり立ちするまで何とか面倒を見てやらなければならないことなど、少しも悪びれたところもなく、実に静かに話して下さる。

昨年親せきにあずけられたツヤさんは何日も食事を拒否して親せきの人たちを手こずらせ、そのつど、稚内の仕事場から呼び戻されたのだという。

「お婆ちゃんの気持もよくわかるんですが、どうしようもないんです。お婆ちゃんに我慢して下さいってよくあなたからもたのんでみて下さい。お願いします」

と私はこの妻女に逆にたのまれる破目になってしまった。

玄関で待ちうけているツヤさんに、このことをどう伝えようかと思ひあぐねていると、その私の胸中を見すかすようにツヤさんは「だめだったらいんだ。そのうちに死ぬんだから、死ぬまでの辛抱だ」

吐き捨てるようにいい放ったツヤさんのひとことが、いつまでも私を追いかけてきた。

（「北方文芸」七十六年一月号より）

以上二編は女の記録入選者高橋三枝子さんが、「北海道女性史研究」「北方文芸」に発表されたものを転載した。

☆ ☆ ☆

女から女たちへ自らの性＝生＝リブを問う

女・エロス No.6 特集 主婦的状况をえぐる

編集「女・エロス」編集委員会・発行 社会評論社 (812)-1066

特集●主婦的状况をえぐる——「今、この場で生ききろう」風見郁子 「鎖は我が手で断て」名無川砂利 「差別されてこそ見えるものが」坂元良江 「紅の寒椿」溝口明代 「未来へ」高良留美子
連載●女の労働(4) 主婦労働 河野信子 裁かれる女・夫のものは妻のものか 中島通子 ……………

●定価 780円

女男平等への実践

阪野 甲子

竹美「先生、先生、理科の先生がねえ、テストを返してくれるとき、女子が先だったよ。あの先生、気に入っちゃう」

美枝「先生、この間ねえ、男の子とケンカしたんだよ。委員が女二人、男二人いてさあ、学級会の時いつも男の子が司会で女の子が黒板に字を書くんだね。だからさあ、司会を順番に交代でしなきゃいかんて言っちゃったの」

道典「図工の時間、僕が花の模様を描いていたら、皆が女の子みたいだってひやかしたけど、いいよね先生、男が花描いたって。どうしてすぐ区別するんだらう」

近頃、私の回りにいる子どもたちは、このようなことを勢い込んで私に報告する。私は彼らと学習をしなから、いつも一つのことには注意し、機会をとらえては

念入りに指導しているのだ。それは何かと言えば、女子と男子を差別した物の考え方、発言の仕方、行動の仕方等を、見落とすことのないようにとらえて、それを題材にして、女男の差別をすることはお互いの自由を束縛することになるのだと悟すことなのである。

以下その具体例を少しあげてみよう。

会話の中で、ある上級生が下級生に「男のくせに泣くな」となにげなく言ったりする。その時、私は泣く原因となったものにはかまわず、「女だったら、すぐにしくしくと泣いてもいいとかね？男はどんなに悲しい時でも、痛い時でも、決して泣いてはいけないのだからか？どうして女に生まれただけで泣いてもよくて、男に生まれただけで泣いてはいけないんだらう。人間はねえ、感情というのがあって、他の動物とは大変違うんだけど、そうやって、男のくせに泣

くなど言われて育つもんだから、男は感情をうまく表わすことができず、大人になると酒をやたらに飲んで、無茶をしたり、大声で泣いたりすることが多くなるんだよ。だいたい精神病にかかるのは男がずっと多いんだからねえ。女のくせにとか男のくせになどと言わず、正直に感情を表わして、悲しい時、泣きたかったら泣けばいいのだよ」と話してやる。泣きそうであった子も、私の話に耳を傾け、泣くことを忘れていく。

また、「どうして女の子はドッチが下手なんだろう」と真剣に聞く子がいる。運動能力の男女差が、女性を劣等視させる根本になっていることを熟知している私は、心臓がびっくりして、思わず肋骨を打つのを覚える。それは痛みとはならず、息苦しさに変わる。やはり、女は劣等とみられるのはやむを得ないのかと絶望色の顔になる。そして即答できず「そうだねえ」とあいまいな返事をして、その場を過ぎてしまう。それから一週間ほど、納得のできる答案が私を解放するまで、苦しい日々を過ごす。こう理解すれば、ああ説明すればと反芻する。そして、次のようにゆっくりと、その子に語り聞かせる。「大人になるまでに、女はあまり活発に動かないようにさせられて、運動が下手に

なることが多いけど、あんたたちみたいに小学校三年生の頃からそんなに差があるということは……と、ずっと考えていたんだけどね。女と男というふうに分けなくても、一クラスを適当に二つに分けてドッチボールをやったら、どっちかが必ず勝つでしょ？それと同じで女と男と分けたら、たまたま女が弱かったということだけだと思うね。女が弱かったからといって、女というものは皆弱いと考えるようにしてね。女の子の中にもドッチが上手な子、力のある子はいらる。男の子の中にも下手な子、弱い子はいらる。それぞれの人間には、皆特徴があつて、女の子は字が上手だとか運針が上手だとかいろいろあるけれど、これも全部の女の子がそうであるということではないんだね。男の子の中に、家庭科が大好きで、上手な子もたくさんいるでしょ。……先生の言いたいことはねえ、結局、二つのグループに分ければそれぞれのグループの特徴が必ず出てくる。だけど、そのグループの特徴は、そのグループ全員に当てはまると考えてはいけないということ」

つい先日、勉強の合い間に、中学一年生の女子と、小学校二年生の男子が隣り合わせて何やら話していたが、突然その男子が「先生、この人ねえ、女のく

せに男より強いんだって」といかにもふしぎそうに言う。回りで勉強していた生徒たちが一斉に私に注目する。そういう時は、私の長い話が始まることを知っているからだ

「強いってどういうことだろう」

予想に反して、その優秀児は考え込んでしまった。しばらく私は黙っていて、ゆっくりと

「ケンカに強かったり、重い荷物を持ち上げたりできることが強いことだろうか？」と投げかける。

また余裕を与える。

真顔で考えつつ答える。

「違うねえ、強いってことは、根気よく何でも最後までできちんとできることかなあ」

「うーん。なかなかいいことを言うねえ。本当に強いということは、ただ力があるということではないんだね。じゃあ、どうして女の子が男の子より強いというふしぎなんだろうか。女の子にも強い子がいるし、弱い子がいる。男の子にもそれぞれいる。きめつけて考えることはよくないね」

深く納得した感であった。

こうして慣れて来ると、「この子、男の子みたいな字を書く」とか、「女のくせにどぶに落ちた子の上

に乗ったり、けったりするんだよ」と驚いて口をすべらす時、私とその子らの目が自然と合う。そして、自らそのことを訂正して話し続けるようになる。

心の底の思考段階にまで影響させ得ないことを残念に思うが、千里の道を進む心がまえで、一步、または一步と進んでいくのだ。蜂のようにブンブンと言いつつ勉強するうちに、このような会話を挟むことができることを、無上の喜びとしている。人間の根本になる思想の形成は、知的に理解する青年期にはすでに完成している。やはり、これは幼児期から児童期の間に成されるようである。根幹となる思想の形成に寄与しないならば、その間に刺激を与えねばならない。小学児童は落ち着きがなく、世話が面倒で、細かな生活指導を必要とするから肌に合わぬと忌避していることは許されない。目的を達成するためには、あえて、彼らに挑まなくてはならないのだ。

会話においてはばかりでなく、教科書に書いてある文章・題材など、差別につながると思われるものは逐一取り上げて、生徒の注意を喚起し、考えさせる。

六年生国語上（学校図書）に「たくましく男性的な阿蘇と、やさしく女性的な雲仙……」と出てくると、「女性的・男性的という言葉はどんな様子を示してい

ますか。自分の頭に浮かぶことをいろいろ書きなさい」

「女や男は生まれつき右のような特徴を持っているのでしょうか」と問題を作つて考えさせる。この同じ單元で「女こどもという言い方は、どのような考えから出てくるのでしょうか。また、女はそういう言い方をされるような生き方しかできないのでしょうか。」とも問うてみる。生徒たちはおおむね

「女性的とは、やさしい、しんせつ。男性的はたくましい、あらあらしい」

「生まれつきではなく、そうなるように育てられた」「男に比べて、女や子どもは何もしない、身分が低いと考えている。男と同じように働けばよい。女も男も平等にやればよい」

同教科書に載っている作文で、父の指導を受けてしか手伝えない母の仕事ぶりを非難するものがある。

「この作文の意見について、あなたはどう思いますか」と問う。

「女の人も責任を持って、しっかり仕事ができるようにすべきです。私も大きくなったら、りっぱな仕事ができるようにしたいと思います」

「女の人は家事もやらなければいけないから両方しっ

かりやるのはむずかしい」

それに対して「女の人だけが家事をやることに決まっていますか」と赤字を入れる。すると「そんなことはない。男の人も女の人ほどやらなくてもいいが、手伝つてやるようにすれば、女の人も仕事ができるようになる」と答える。

一つの方角へ思想形式をしていく。かつての軍国主義教育と変わらないのではないかという不安はある。それは時として、私の猛進を阻止する力となりそうになる。だが、今の学校教育を含めたすべての教育活動が、無垢な子供たちに有無を言わせず、資本主義社会の存続を意図した消費文明人に行っている状況を見れば、私の教育は悪どころか、善となる。私の教育をのみ施せば、完全なる思想統制となり得るが、伝統的な常識による女男差別を当然視する社会、資本を肥やすための消費衝動をけんめいに育成する社会の中にあるは、非常に重要な教育なのである。社会の中にあるは、非常に重要な教育なのである。社会の常識とは異なる、より正しい見解を模索させる必要があるのだ。

公教育の場においては、往々にして、この模案が偏向と見なされてしまう。公教育とは、常に社会の常識

を植え付けることであり、社会の中に順応していける受動的な子供を生産することになってしまっている。私は、勇気と才能の不足から、この場を退き、一つの簡易私塾で、この教育、偏向と言われる教育を実践しているわけである。

生徒には、私の教育を受けるか否かを選択する自由がある。この生徒のもつ自由がまた、私に、私が正しいと信ずるところの教育を実践する自由を与えてくれる。今の私には束縛感がない。こうして、私の猛進は継続する。

三年国語上（学校図書）「女の子はだれでも花がすきです」と始まる文章がある。男が花を好むとおかしいなどとは何も書いてない。しかし、この文は、子どもたちにそれを思わせるに十分である。そこで「女の子はだれでも花がすきです」と書いてありますが、女の子だって花がきらいな人もありますね。それに、男の人でも花のすきな人はいっぱいいますよね。直人君はどう思いますか」と問題にしてみる。

「ほくも花は大きいです。くべつしてはいけないと思います」

六年算数上（啓林館）の統計のところに出てくる資料の多くが、走り幅跳びの能力の男女差、オリンピック

ク記録の男女差、体重の男女差……と、男女差をことさらに意識させるものである。六年生の算数にかぎらず、中学一年三年の統計につかわれる資料も男女差を意識させるものが極めて多い。男女別に分けた統計のとり方が常識化し、そのようなものしかないから、やむを得ず用いられるふしもあるが、案外採用者は無頓着に用いている。ところが、これは危険な資料なのだ。脳の重さの違いが、一時期、男の優越性の根拠になっていたほどである。運動能力、身長、体重のいずれにおいても女子が劣ることを度重ねて見せつけることは、明らかに女性の劣等を確定してしまう。私は不安で、全身が緊張し、自己の体積が減少するのを感じる。かといって、手頃な別の資料を用意して学習させることは容易ではない。したがって今後もういった男女差を見せつけ、誤った人間感を持たせられる機会が多いことを前提にして、まず、教科書に載っている資料で学習させたのち、次のような赤字を入れる。

「運動能力・身長・体重などの平均は確かに女の方が劣ります。しかし、すべての女子が男子に劣るとは考えないで下さい。たとえばターラルという女子水泳選手には、日本の男子一流選手は誰も及びません。学習面においては、平均は、女子の方がはるかにすぐれて

います。運動能力等が劣るからといって、女子はあらゆる点で劣るとは考えないで下さい」やや嘆願調ではあるが。

授業中、算数などの時間、男子の活発な態度を見慣れている生徒は、それを読み終えた瞬間に「先生、ほんと？」と問う。「本当だよ。私の経験から、それははっきり言える。担当の数学においてすら、平均点でいくと十点ぐらいの差がある。国語などはさらに大きな差が出るんだよ。普通、算数や数学や理科は男の方がすぐれていると思われているけど、それは大きな間違いでね。すば抜けてよくできる子の数は女男あまり変わらないけど、男子は低い子の数が多くて、平均がひどく下がるんだね。私は注意深く観察したり、調べてきたりしたから、それは絶対に正しいと思うよ」と説明してやる。だが、まだ信じられない様子である。常識は深く深く根を下ろしていた。それで、二、三日後の新聞記事に、大学教授が「私の大学の学生は、男女半々、平均点は女の方がいい」と語っているのを見つけて見せてやったりした。このようなことは、しばしば語られるところのものである。見せてやると、さもなつとくしたように、「よしやるぞ」という顔つきをみせる。

女の子は決して劣らない。肉体的な面以外ではむしろかなりすぐれているのだと、繰返し述べ聞かせることによって、女子にそう思い込ませ、心の底からのやる気を起こさせたいと願っているが、何といつても在塾時間が少なすぎ、学校、家庭、マスコミによる教育の強さに歯が立たない。今まで、多くの女性は、男に劣ると暗示をかけられ、ある程度までしか才能を伸ばせなかったと言える。逆に多くの男性は、女にまさると暗示をかけられ、能力の劣等を覆い隠すような活動を可能にしてきた。子どもははめて育てよと言われるが、この教育法も、このような傾向を利用したものである。

その他、感想文の中に、「女なのに宇宙飛行士になるなんて……」とあれば、「女なのにといい方の中には、女には男のように活発なことがあまりできないのだという考えがあるように思います。それは、今まで、そういう活発な仕事やらせてもらえなかったからでしょう。これからは、いろいろな面で活躍しなければなりません。あなたもがんばりましょう」などと書き添える。作らせた短文の中に「……さんは美人だ……」とあれば、「美人ということとは、女の人をその能力や性格などで見ようとせず、見かけの感じだ

けで判断しようという態度ではありませんか。どの人間も、見かけだけで判断せず、それは一部として、全人格から見ましよう」と、うっとうしい評をつけて返したりする。

男女別を問う問題では、必ず女子を先にする。おはじきを男の子が扱う問題をつくり、りぼん、人形、せんたく、買い物にもどしどし男子を採用した問題を作成する。身長・運動能力において、女の方がすぐれた数値の問題をつくる。英語において、教科書とは逆に she, he, mother, father, aunt, uncle, Jane, Mike と唱えさせる。彼女にボールを、彼にドールを、母にドクターを組みあわせる。ああ、実に愉快だ！このように些細なことが、私を浮き浮きさせる。心臓はゴムマリになって、コロロと体中を転が回る。

今から一年半ほどまえまで、私は公立中学校の数学教師であった。三年間の教員時代に、実にさまざまな抵抗を試みた。大別すると三種類に分類できる。一つは受験用の教育に対するもの、二つは教員どうしの人間関係のあり方、三つは、女男差別の一つ一つを改めること。

第三の内容は実に種々あるのだが、私が教員をやめる最大の原因となった事件についてのみ詳細に記すこ

とにする。

私は中学校の頃から、なぜ出席番号は女があとなのだらうかと不思議に思うようになった。出席番号があとだということとは、何かにつけ女があとま回しだということになる。それが不愉快でならなかった。異常なほど、女があと回しにされる状態に敏感になっていた。教員一年目は誰も担任にはなれない仕組みであった。二年目には叛逆児の私にも三年生の担任をまかせられた。最もやりたかったこと、出席番号を女子から先にすることを実行した。以前からこれを主張していたし、学年主任のあいまいな承諾も得ての実行であり。学校じゅうで私のクラスだけが女子が一番から始まり、男子が三十一番から始まった。教科担任制で、毎時間他の教師が我がクラスを訪れる。怠け者の教師は名前を覚え、出席番号で生徒を指名する。「はい、十二番の人、答えなさい」などとやると、さっと女子が立つ。先生は驚く。生徒も何だかきまりが悪い。だが、私はそういう場面は目撃していない。生徒に聞かされて知っただけである。この場合はまだいい。女子だけ、男子だけの家庭科や体育の時間は実に不便である。女子のクラスで三十六番と言っても誰も立たない。先生の方が困ってしまうのだ。他の先生に全部連

絡してから実行すればよいものと思われるだろうが、それまでに他の反抗をしれば試みて、ぶ厚い壁をひしと感じていた私は、主張するより実践した方がよいという結論に達してしまったのだ。

一学期の終わり頃、男生徒からの発案で、出席番号はこのままでいいかどうかについて話し合いを持った。さまざまな不平を聞かされた。その中に、「男子が後であると男子が下であるような気がする」というのがあった。私はこのことは聞きたいために実行したと言っても過言ではない。私の主張に対して、誰もが、男が先であるのは何の意味もなく、単なる便宜上のものだから、こだわるのがおかしいと言った。そうではないという確信がはしかつた。女があとであることは、女に劣等感と従順を無意識のうちに強いているのだという事を明らかにしたかった。

長いやりとりののち、もう慣れたから、今までの通りでよいとするものが多数を占め、一年間実行されることになったのである。不便なのは女子・男子同じであるはずだが、不平は男子ばかりから出、そのまま変える必要がないと女子は大部分支持したのは実に印象的であった。あの採決の場面は今もまぶたに鮮明に浮かぶ。

そして、卒業式間近、卒業証書台帳に私のクラスだけ女子から先に書いた。それと合わせながら卒業証書を毛筆で書いてきた学年主任は、ほとんど全部書いた時にそれに気づいたのだった。書き直すにも証書がもう残り少ない。困り果てた主任は、私からそのことを校長に言えと言った。私は直接校長に話した。校長は、怒髪天を衝かんばかりに激怒した。

「どこまであんたはやる気だね。あんたのクラスだけ女子から名を呼んでいくのかね。卒業式は最大の行事だ。それは許さん。父兄来賓全部が揃う中で、一クラスだけ違うようにはできん。前例を作ってはいかん。証書を注文しなおして書き直すだな」

うむを言わせぬ状態を過ぎてから、私は静かに、なつとくできないと迫った。しかし「もうあんたには担任はまかせられん。公教育の場でそんな勝手なことをしてもらっては困る。阪野学校でも作ってやったらどうかね」と、つつけんどんに言われた。

私は、卒業式の時、台帳、証書を無視して、堂々と女子から呼びたかった。だがあまりにも厚い壁を痛感し、屈してしまった。これをやってしまえば何か起こったろう。もともと小心な私が気を張ってやっていただけに、崩れ方はもろい。重なる混乱、弾圧を恐れた

ため、私の血みどろの担任一年間の教育は全壊してしまった。どうせ退職するなら、あの時、女子から呼ばよかったとつくづく悔やまれる。

次年度担任希望を出す時、私は、自分のやりたいこともできない担任、生徒の不始末のみを始末する担任、学級事務ばかりの担任など辞退したいと出した。むろん、あの日の校長の言葉を受けての希望である。新学期は当然のように担任をはずされていた。昇り盛りの三年目にしての不名誉な地位の恥と虚無感には、無気力な態度で耐えた。そして三年過ぎて空気のように静かに去った。

ひどく無意味で、火花のような教員の道になぜ進んだのか。高校三年の時、進路相談で担任から「先生になるか。先生は男と女と給料がいっしょで、安定しているから」と言われた一言によるといい。それまで教員の男女同一賃金を知らなかったのである。女男差別に人一倍関心の深かった私には、また進路を迷っていた私には、進路を照らす明るい太い直線の、灯台の光を得たようなものであった。もう、ふしぎなほどに迷わなかった。同一賃金は私を教員にし、差別賃金は、市川房枝氏を退職させた。

退職してしばらくは、故意に私は静止した。どちら

の方向へも進む意思は全くなかった。だが、自分の生命を存続させるためには収入を得る必要がある。安易な気持ちで生徒を集め、学習指導を始めはしたもの、教育活動の重みは、学校における以上のものがあつた。一人一人に適した、行き届いた教育、自然な形で女男差別の是正、自主的に学習しようとしている彼らの美しい目線。実にいい。



私は炊事婦

石川 令子

若さが顔にも体にもビチビチと溢れている田中さん。どう見ても独身としか思えないのに三十二才、四つの坊やの母親と知ってビックリ。

神経痛で二か月休んでいたという中村さん。孫が八人、六十七才と聞いてまた驚く。

竹井さんはきれいすぎで顔も厚化粧。骨身惜しまずにまめに働く。農家で幼時から家のお手伝いをさせられて、体の習慣になっているらしい。

お次は息子さんと二人暮らし。「淋しくていや」とやさしい未亡人林田さん。私より年上のイヌ年生まれ。

川井さんはとても勉強家。昼寝の時間にも週刊誌を読む。いつも私たちをおもしろい話題で笑わせたり、いろいろ教育したりしてくれる。頭が良くて親切でお話上手。皆が好いてる美人。

職場の「皇后」は、十五年勤続、最古参のおばあさ

ん。このお方が「これでよいのよ」と言えば、洗い方は泥がついていても早い方が良く、少しおかしなにおいがするし、業者に返そうかなどと皆が思っても「ダイジョブヨ」と言われればそのままそれを使わなければならぬ。けれどもちろんとっても良いところも多い人。

夫に死なれ二十代で大会社の炊事婦になり、五十才で希望退職し、ここへ。病院の寮に住んでいる掛川さん。一日中病院食なので、お金の出道なし。何冊かの貯金通帳を大ハンドバッグに入れいつも持ち歩いているブルジョア。老後は老人ホームに行くといっている。

藤井さんのご主人は中華料理屋に勤めている。「たまには気がむいてお料理を作ってくれるから助かるわ。二人の女兒を保育園に朝連れてってくれるし。昨日は生まれて初めて彼からブレゼントもらった。かけごとでもうけたとかで、すてきなハンドバッグなの。嬉しくて寝ら

れなかった」と三十代のはりきりさん。

あとの二人はお姑さん。子育ての時代は終わり、息子夫婦と同居。一人は昔のお産婆さんをしたとか。「でもこういう仕事の方がきれいで好き。私は死んでもよい。のんきな身分なの」——やせて小柄な吉田さん。もう一人は六十二才とは思えない大食漢で、それだけにとても良い体格の高野さん。

この九人の女性と二人の男性をまとめているのは五十四才のチーフ。船に乗っていたこともあり、通算三十年の調理士キャリアを誇りにしている。

ほかに若い栄養士さん二人。以上に私を足して合計十五人。この職場はどこでしょう。

わが家から歩いて五分、ある大病院の調理室である。勤務時間は朝九時から夕五時まで（ただし四時半には皆終わっておしゃべり、お化粧）。仕事は患者さん・看護学院生徒・職員合計四百人分のお食事作りである。

＊

この職場に入って最初の一週間は、左手の親指、人差し指をかわりばんこに庖丁で切ってしまい、サビオを二重に巻いて、やっと血を止めるありさまだった。

「トントントン」——これが家庭での私の庖丁さばきだとすれば、職場のリズムは「トトトトトトトト」。パケ

ッ一杯のキャベツが、ジャガイモが、あつという間に刻まれていく。「今度の新入りさん、仕事が遅いね」などと言われないように「トトトントントト」と息もつかずに庖丁を使った結果、名譽の負傷をしたわけだ。親思いの次女が、「ママ、そのうちに指がなくなるよ。気をつけてね」と真剣な顔で心から忠告してくれた。

コールスローや大根おろし、にんじん、大根、ごぼうの千切りは機械にやってもらう。けれどその機械を取扱う時は、それこそほかのことはいっさい考えず雑念を払って一心不乱にならなければ大けがをするという。手首から先がなくなったりしたら大変だから、全くひやひやする。

お米をとき洗うのも機械だが、この操作も簡単ではない。忘れないうちにノートに書きついたりして覚えるだけでもひと仕事だった。

しかも四百人分の調理は一種類ではない。おなかをこわしている人、腎臓の悪い人などと特別食もある。軟菜といって歯がない老人のためにはおかずをすべて細かく切る。煮たり焼いたりした魚の骨を一本も残らないように注意しながらとり、でんぶよりちよつとまじなほぐし魚を作る。カボチャの天ぷらなども原形を全くとどめないみじん切り。これを食べるお年寄りには色と味でカボチ

ヤとわかるのだろうかと考えてみると気の毒になる。

調理が終わると配膳である。一人一人のからだに合った食事をそれぞれ間違ひなく届けなければならぬ。員数が一つでも足りないとなちまち大さわぎになる。この間のお握り作りの時は大変だった。一人に三個ずつで千二百個を作るのに女が六人か七人で午前中一時間午後一時間かかった。おばあさんたちは肩がはるとかいって逃げて他の仕事をし、若い人はこれまで家であまりやったことがないとみえ下手くそで、大小さまざまなのができた。私はお握り作りだけは上手で鼻が高かったけれど、やはり肩がはってしまった。

それでも私はこの職場を良いと思っている。なぜなら今までのどこよりもおもしろい毎日なのだ。ここは私が十一番目に得た働き口である。不況の風が吹きまわっている現在、四十五才を過ぎ、何の資格、特技もない中高年主婦の私には、ここ以上に条件の良い働き場所はないと思う。ふり返ると今日まで長い道程であった。パートでなくて常勤の職員に。家からあまり遠くない所で……。ここは失業保険・健康保険とちゃんと備わっていて年金もつく。労働組合もあり、土曜日の半どん、一時間半の昼休みもつい最近に勝ちとった貴重なものだそう

だ。はじめての給料日に八万以上も頂いてびっくりした。五年七年十年以上の友は十二、三万だそうで、病院に來る靴屋、洋服屋、呉服屋に月賦のお金を一万二万と払っていた。

＊

私の十度目の職場のとなかつ屋では、時給二百五十円で一日四時間だったので、三万円足らずだった。そのかわり仕事は百人足らずの客の応待、食器洗い、キャベツ切り、つけものをにつけたり、赤出し味噌汁、御飯の盛りつけなど簡単なことばかりだった。時々フォークリブスや、藤村俊二、宍戸錠など、テレビで見ることの多い俳優が現われ、子供にうらやましがられた。あまり客が来ない時はお店のママと客席に座って世間話をしたり本をみたり。でもいくら給料が安くても、勤務時間に休んでいるのも心苦しくて、窓ガラスふきや庭の草とりや、いろいろ用事をみつけて働いた。

となかつ屋ではいつまでも私に働いて貰いたいからだった。だが家族の者が「安月給で馬鹿らしい。まるで奉仕に行ってるみたいだから早くやめて」とうるさく言うので思い切ってやめた。でもやめる前に次の仕事をみつけておこうと思い、注意深く看板を見ていたら、駅のホームに「病院の看護助手募集」と書いてあった。看護助

手とはどんな仕事をするのかしら。まあ聞くだけ聞いてみよう、どうせ家から五分の病院だ、と出かけて行ったら婦長さんが「洗ってあるおむつをたたんだり、病人の洗顔をしてあげたり歯をみがいてあげたり。でも立ちどおしでなく、自分で食事できない人に食べさせてあげたりするなど、座っての仕事もまざっているのですよ」と説明して下さった。時給は五百二十円、今までのどこよりも高いことも魅力の一つで、明日総婦長さんにお会いなさいと教えられるまま、次の日総婦長さんにお会いした。彼女のたまわく「私はざくばらんに言ってしまうすけれど、お仕事は時には大便の始末などもあるのですよ、できますね」

私はびっくり仰天した。私にはとてもそんなことはできないだろう。「ええっ、そうですか。それではとても私には無理です。できません」と即座にお断わりしたら、「でも皆さんやって下さっているのですよ。患者さんに対する愛情があればできないはずはありません。何事も慣れですよ。はじめのうちは本当にいやで仕方がなくって、慣れれば平気になりますから大丈夫、やってごらんさい、やってできないことはありません」と言われた。

私はしょぼんとして家に帰った。考えただけでいやな

仕事だ。あーあー。夕食の支度をしながらもユウウツになって、いつもの歌声も出さずに作っていたら、子供が「どうかしたの! ママ」と聞く。私は正直に一部始終を話した。そこへご主人様のご帰宅。ついでに聞いてもらったら、「やめろ、ママはそんな方面には向いてない性質だから、とてもできないよ」と一蹴された。私は内心ホッとひと安心。おかげで食事もおいしく頂けた。翌日総婦長さんにお断わり申し上げたら、「それは残念です。では栄養課の方のお仕事ならよろしいでしょうか」とおっしゃった。とんかつ屋の前は商社会社の寮に勤め朝食作りなどしていたので「大丈夫できると思いますが」とお返事した。時給が五百円なのも心が動いた。それから今度は事務長さんにお目にかかり、家が近いので一週一度の早番も引き受けることを条件とし採用されることになった。

*

九番目の職場、商社会社の寮勤務の時は、朝六時半までに行き、寮生の朝食作りを二人でした。ここは病院よりも狭く、清潔な台所で、おなべもおかまもピカピカ、戸だなの中も毎日ふき、トースタなども使ったあとはパンの粉をはらい落し、からぶきするといった具合。清潔、整理整頓の習慣をたたき込まれた。ある日保健所か

ら検査員が見え、消毒液の注意やその他をメモしたり、お菓子を出したりしたので、朝の食器を十一時までにごき終われなかった。寮長が「いつもの時間までに食器ふきが終わらないとは何ごとですか」と怒るので、ちゃんと理由を説明したけれど納得してもらえなかった。あまり腹を立てたことのない私だけれど、この寮長に仕える気もなくなり辞表を出した。

この寮には約二か月通った。その間いろいろなことがあったの思い出す。朝、出かけようとすると、子供が盲腸炎みたいにおなかが痛むという。「お医者さんに行けるなら行くし、さもないければ家で寝てなさい」と言っていて出て来たが、寮に電話がかかってきた。「痛くて痛くて死にそう」と電話の向こうで泣いてる声。上司にお願いして、二時間ほど勤務をぬけさせて頂いて病院に連れて行ったこともあった。またある朝は、夫が「腰が痛くてどうしようもない、もんでくれ」と言うので、どうしても代りの人がいないから、と、振り切るようにして出て勤務につかなければならないこともあった。うしろ髪をひかれる思いの時が何回あったか知れない。低血圧の夫は、朝コーヒーを飲むと調子がいい。そのコーヒーは働く私に代って子供が作ってくれたが、夫はぎりぎりの時間まで寝ていて、食卓の上に用意してある心づくしの

朝食に手もつけないで出かけることもあり、私が少しぐらいお金をかせいでも、夫が病氣になったら、それこそ家計はマイナスになるわ、などと思ってしまった。それで寝床でも食べられる「おにぎり」を作っておいたり、朝食にいろいろ苦心したことであった。

*

四月十一日。就職して一か月。今はこの栄養課の仕事の全部を早く覚えるのに一生懸命の毎日である。朝五時勤務の早番は一週間に一度。今日はIさんと二人で責任者。昨夜中にお米を洗ってちゃんと水加減しておかまに入れておいたし、みそ汁の実も切っておいた。大なべに八分目水も入れておいた。だから今朝は五時にごはんのおかま、湯沸かし器、おかゆのおなべ、みそ汁の大なべの順にどんどん点火して行く。寮のごはんときはブザーがついていて、それが鳴り出すと火を弱めたり止めたりすれば良かったけれど、ここのおかまはブザーなし。一度点火したら絶対に遠くへ離れないようにしないと、うっかり忘れてお焦げを作ってしまう」とのチーフの注意に、おかまのそばを離れずに十五分か二十分で火を止める。その間にみそ汁の実を入れて煮たり、みそをといておいたり。何しろ四百人分なので、道路工事の時に使うような大シャベルでなべの中をかき回すのにすごく力

を必要とする。

玉ネギは、一つ二つむいても涙が出るが、私たちは二十キロ、三十キロをあみの袋から、ザッッと大きな流しにあげて、四人ぐらいで向かい合って皮むきをする。水をジャージャー玉ネギにかけて予防しても、涙が次から次へと溢れてくる。それでもゆっくり手を止めてはいられないので肩からかけたタオルで目をこすりながら皮むきを続ける。涙が出る頂点、最高の時を通りすぎれば何ということもなくなるが、「今日もまた玉ネギで目が赤くなってしまおう」と、出勤の道を歩きつつ、ふと思ふ。

*

六月十日。いよいよ初めて私一人が、四百人分朝食の責任者となる早番の日が来た。前夜から病院に泊り込み、四時半に起きて身仕度。白い上下の作業服、その上に胸当てつきのゴムのエプロン。そしてゴムの長靴をはく。五時少し前、調理場に入る。リハーサルの時習ったように火力の弱いおかまから順番に八つのおかまに点火。時計を見ながら十五分たったらおかまのふたをあげてお米の凹凸を鉄じゃくしでならす。水分がじわじわと引き加減だったらフタをして、一呼吸待つて火を消し、空気穴をボタンと閉める。

次のみそ汁とおかゆのなべのところにいき、煮え具合を見ながら下からかきまぜる。おかゆも焦がすと大変なので火を弱くするそのタイミングを逃さないようにするのがコツで、ぼんやりとしてはいられない。

五時半、アシスタントの人々が揃う。レギュラーは大男の山川さん、入院患者だったそうだけれど、すっかりなおっていて、もう退院したらよさそうなのにと思われるのに、ここで働いている人。ほかに当番として開放病棟の女患者さん三人、男患者さん一人。

アシスタントの人たちは、各病棟別の食器の数を数えたり、夜勤の人が夜おそく食事した食堂からいろいろ下げたり、たくあんを機械で千切りにしたりする。

私はその間におかゆさん（おかゆ患者を私たちはこう呼んでいる）の梅干しを数だけ出したり、みそ汁の火を弱火にしたりする。それから特別食作りをする。肝臓、腎臓、高蛋白食患者等、十人ぐらい、それぞれ焼き海苔をつけたり玉子焼きを作ったり、もやしをごまあえにしたり……。腎臓患者のみそ汁は二倍に薄めてあげなければならぬ。病名によつてそれぞれ違うのだから、間違えないように、お盆の上に病名入りの名札とおかずを置いて、それを病棟別の台の上にのせる。今度は流動食患者の分を作る。おもゆ、みそ汁の上ずみ、ミルク、ジュ

ースを並べる。

そうこうしているうちに、三人の助手が、ごはんをおひつに分け入れてくれる。みそ汁も配分してくれる。そしておかゆも……。そのあとは、おかま、なべを洗ったり、流しや床を水で流したりあと片づけ。六時五十分の配膳時間までに間がある時はお茶を入れて皆でひと休みする。今日は手順がよかったのか十五分余裕があった。あめ類、くだものを「お疲れさま、ご苦労さま」と言いながら出したら、精神病棟の女患者さんの一人が、一オクターブ高い声で「ゴクローサマダッテ——」と私をせせら笑うように見たのでびっくりした。ああやっぱりここは病院だ。患者さんと一緒なのだと改めて認識した。

食べながら「お国はどちら？ お休みにはいつも帰るの？」とかいろいろお話した。歯も胃腸も悪くてとてもやせている飯田さんは、「私はいつも病棟食堂の後片づけ当番でしょ。歯が悪いからゆっくりかみながら食事をとりたくても、どうしても急いで食べなければならぬの」とこぼす。「それなら看護婦さんにお話してあと片づけ当番を交替にしてもらったりしないと体に悪いわ」と話し合ったが、飯田さんは気弱な微笑を浮べるだけだ。

五病棟の橋本さんは「私ったら、ゆうべ十一時半にとび起きて、もう朝だと思って身支度を始めたら、ユミち

やんに『何してるのよオッ』って、どなられちゃった」とケラケラ笑いながら報告してくれた。

＊

「あ、もう配膳の時間だ」——山川さんの声に立上がりお茶碗などを片づけて配膳台へ。リフトを上げ終わりホッとする。助手さんたちの勤務表に印をおしてあげて、「どうもありがとう」。

「ごちそうさまでした」——彼、彼女たちは病室へ。私はそれから昼のお米とぎにかかる。三十キロ入りの袋二つから、機械に一度に入る分二十キロずつを三回とり出し、六十キロをとき終わると、「やれやれやっとなんだわい」と思う。さてと自分を取戻し朝ごはんを頂こうとする。と、リリンと電話。

「二病棟ですけれど、おかゆが二人前足りません」「本館ですけれどおかずが足りません」

この電話には悩まされる。おかゆ入れには、ちゃんと人数の分量を入れてあげたのに、きっとまた慣れないアルバイト学生が多くよそいすぎて配ってしまったらしい。幸いに他の病棟からはかかって来なかったで、そっちへ走って行って、少しづつ大さじでへずって井に入れてもらい、二人前やっとな出し、二病棟へ届ける。おかずはたくあんをたるから出して庖丁で千切りにし、の

りのつくだ煮も出してきてつけて届ける。

また電話が鳴る。

「特食の山田二郎さんのがありません」とかん高い看護婦さんの声。

「ちゃんとリフトで上げましたけれど」

「だって、いくら探しても、ないんです」

との答に「おかしいわね」と大男の山川さんに相談したら、

「山田さんって二人いるんだよ、二郎さんと和子さんと。そして二郎さんの名札は行方不明なんだ」

山川さんは悠々と答える。私は驚いて「ええっ」大急ぎで目玉焼きを作り、味つけのりもつけてリフトで上に。

「今送りましたから」と電話して腰をおろした。やれやれ助かった。やっぱり大男さんは頼りがいのある人だと感謝した。

やっと私は朝食をとる。と間もなくリフトで患者さんが食べ終わった食器やおひつなどが下がってくる。それを高温の消毒機に入れたり、おひつ置場に運んだり、休むひまもない。続いてすぐ昼のごはんたきの準備だ。とぎさがって水切りしてあるお米の目方を調べつつ、八つのおかまに分け入れ、水も計量器で計って入れる。これ

で早番の朝の仕事が大体終わった。九時には皆が出勤なので文句を言わないように、あちこち全部見回ってきれいに整頓しておく。十人いる炊事婦のうち、早番を交替でしているのは三人だけ。残りの七人はしたことがない。採用される時に早番をするという条件つきで入っても、何とかかとか理屈をつけたり、できない理由を仰々しく並べたりしてやらないそうだ。だからごはんたきの苦勞も知らないくせに、朝のものが何かちよつとでも置き忘れてあったりすると、「こんなとこに、こんなものが置いてあって全くッ——」と怒りちらす。私は、「あら、ごめんなさいね、忘れちゃっていて」と、すぐにあやまることにしている。

九時になってチーフはか全員揃う。いっせいにお昼や晩のおかずの野菜洗いやきざみもの、「トトトトトトトト」庖丁のシンフォニー。魚のフライなどのメリケン粉・パン粉つけを四百個続けると、あきあきしてしまう。

十一時に配膳。十一時半に私たちの昼食。それが終わると皆は昼寝。早番は朝と同じくリフトで下がって来た患者の食器などを片づけ、十二時半になるとおかまに点火、焦がさないようにまた時計を見ながら最大の注意を払いつつ炊き上げる。閉めた空気穴をそのままにしておくとはんはバリバリになってしまいうので、二十分たっ

たら空気穴を開く。皆が昼寝をしている間じゅう一人で働くのだ。最後におかゆのおなべに火をつけ早番の仕事完了。おかゆ炊き上げは午後の人に託す。一時半、皆が「眠いわ」など言いながら目をこすりこすり起上るころ、「お先に失礼します」といつて早番は帰る。家に帰ると、やっと終わったという安心感と疲れて、眠りこけてしまう。

*

八月二十日。もうすっかり慣れた。職場の友の家庭の事情も手にとるように頭の中にやきつけられた。吉田さん、高野さんのそれぞれ違ったおしゅうとめさんぶり。中村さんの六十七年間の生々流転など。

二月に入った田中さんは、まだなぜ離婚したかを皆に発表していないので、「早く話さないよ」といつも催促されている。みんな、ほんとうに一番苦しかったことは田中さんのようにまだ口に出していないのかもしれない。「私は何でも話しちゃうの、おなかの中までもう空っぽよ」なんて言って笑ってる掛川さん。主人が安月給だから働いているそうだが、ほんとうに空っぽかどうかはわからない。私にしても、私がなぜ働くのか、本当の理由は話したことがない。話しても多分わかってもらえないだろう。

昨日は小学校のクラス会だった。年に一度、みんなが一年間のことを話し合う会。私は「まかないのおばさんで働いてます」と言ったら、みんながドッと笑った。それはきつと私が主婦業のことを茶化して言ったのだと合点したらいいのだ。週に一度は泊り込み、朝四時半から働いているなんて誰も信じない。小学校時代は私は「知事さんのお嬢さん」ということだった。苦労知らずに親のいうとおりに育ち、親のいいなりの結婚をした。三人の娘を恵まれた。夫は一部上場会社の部長クラス。妻も働かなければ困るというわけではないと、世間の人は思うだろう。

*

先日、私は長い間入っていた「友の会」をやめてしまった。羽仁もと子先生の「女性と使命的生活」などを読んで、家の中から社会に出て行かない女性はおかしいと思ひ、ある程度子供が大きくなったら母親は社会のために直接に仕事をするのが当たり前で、自分の家庭のことにばかりしているのはどうかしてるとも思った。そして「友の会」のことでもずいぶん働いた。しかし何か毎日がなまぬるく思われてきて、自分で大決心をしてやめた。キリスト教的な生活は好きだし、「婦人の友」はいつでも続けて読みたいと思うが。

現在の女の生活は、家で我が家のことだけしているのではなく、また外に出てもただお金を得るためばかりが目的で働いてはだめなのだ。働きながら、社会全体のために何らかの貢献をしよう、みんなの幸福のためにつくそう、という気持が大切だ。どんな小さな力でも、人々が少しでも幸せな気持を増すことができるようにと常に思って、その力がますます強く大きくなるようにとの努力が必要だと思う。死ぬまで努力、努力の連続だ。十一種類の仕事を転々とするうちに、私は前にはできなかったことが一つずつできるようになった。四百人分の食事づくりができるようになった今は、半年前と違って病人の大便の世話もできそうな気がしてきた。

それにつけても、資格、特技を若いうちに身につけておくことは、ほんとうに大切だと思う。大学に通いながら皮細工の学校にも通い、趣味と実益を共に満足させている人もいるし、英語のタイプを習って、好きな英語の勉強をますます面白く励み、語学力を増進させて行く人もある。

私は優れた特技もなく、また資格も取ってなかったの
で、自分に適したところの職場選びに相当の日時を費やしてしまつた。

最初のころは区役所でアルバイトをしていた。はじめ

は農務係で、農産物品評会のお知らせの封筒書きや発送まで。それに会員の名簿の整備など座ってばかりの事務で、私にはおあつらえ向きだった。そこが終わり今度は国民保険係。これはほとんど区民全部が台帳にのっているの、膨大な数だった。でも有名人の所得を見たりアルバイトの友達同士朗らかに楽しくお仕事をした。

家が引越しのためそこをやめ、今度は中学校の給食のお手伝い。子供が昨年中學を卒業したので、今までの中學と大体同じ状態かと思つていたらその学校は大違いで、自主的に生徒にさせるべきこと、例えば給食車の掃除などを私たちがやったり、反対に残つてしまつた牛乳などは、運動クラブでお腹のすいた子にあげ、自由に飲ませてあげれば良いのにそんな思いやりがなかったり、上に立つ主任さんの気持が理解できなかった。ちょうど夏休み近かつたので、代りの人を探して頂いてからやめた。

次は駅前のおそば屋さんの店員となつた。「いらつしやいませ」「何にいたしまししょう」「天どんいっちょょう。かけうどん三ちょう」などと言つていた。お客の中にはせっかちな人も多く、店のご主人はとてものんびり屋で、私は間に入りやきもきすることもあつた。「あわてないでいい」「順番にやっていくのだから」と板前さん

に言われたりした。とても忙しくて目が回りそうな時もあった。大入り袋を頂いてもちっとも嬉しくないし、私の性に合わないのだと、お暇を願ひ出た。

次は新聞広告を見て、就職する学生の身元調査の会社に入った。就職先の会社の調書に、自分が確認したことを書いていく仕事だった。最終学歴の学校に行つて、その人を知っている先生に、その人のことを思い出してもらつて書き込むのは割合楽だったけれど、その人の家の近くでの聞き込みには、慣れるまで大変だった。はじめは近所のお店で聞いたりするけれど、声がふるえて自分ながらおかしくなつてしまつた。学校でその人の友達の電話番号を教えて貰い、夕方家に帰つてからその友達の所へ電話をし、その人の性質や家族のことなどいろいろ教えてもらつて書き込むのも仕事だった。また役所に行つて戸籍抄本をもらつて来たり、住所確認のため地図と首っ引きで歩き回り、家をつきとめるのも、暑い真夏の最中ひと苦勞だった。

でもいろいろなところを歩いてみて、世界旅行をしたような氣持になつたこともあつた。三か月以上このお仕事は続けた。けれども会社がとても遠いし、「もっと近くで仕事ができればよいな」と思つていた矢先に、駅の横の中華料理店でごはんたきと皿洗いを募集していたの

で、そこで雇つて頂くことにした。この本店は兵隊が多く、したがつて料理の値段も高かつたけれど、本式の中華料理店なので味はおいしく、客も多かつた。一月半たつた時、近くのレジャー施設に支店を併設。そつちに人が足りないので少しの間手伝つてやつてくれと言われ転任。支店まではバスで家から三十分以上かかる。ちやうど行楽シーズンで、ものすごく忙しく、狭い調理場で卒倒しそうになつたこともあつた。アルバイト学生は女も男もいた。女の子が優勝手仕事をするのは当然だけれど、男の子が前かけをかけて調理場で私と同じように働き、上手に仕事をするのにはびっくりした。

本店の時は十時から三時までだったけれど、支店では五時まで。それに往復の時間も多くなかり、何か体がとても疲れるので、皆さんとおなごり惜しかつたけれど退職させて頂くことになつた。体の調子が良くなつてからは、貸し雑巾のレンタル係をした事もあるし、保険の勧誘員をしたこともある。

以上いろいろな種類のお勤めをし、私は家にとじこもつてばかりいたら得られなかつた多くの知識を得、また人生勉強をさせて頂いた。

*

親のいいなり、親に言われるとおりの道を歩いて来た

昔。親に将来をまかせきって、自分では自分の先行きを考えなかったばかりに、私は現在の生活を余儀なくされている。けれども私は少しも親を恨んではない。人にはちよつと想像もできないような人生、「これもまた楽しからずや」だと思っている。

でも娘たちには私と違う人生を歩んでもらいたい。神をあがめながら、自分で自分の将来を見通す力のある女になつてもらいたい。

今、上の子は大学生、英語の先生になるという。下の子はエレクトーンの先生目指して精進中。中の子は根っからの料理好き、栄養士の免状をまず取ってから、力を社会に捧げたいといっている。

その栄養士を目指す次女に、突然、夫からストップがかかった。「こんな不況の時代に高い月謝を出して大学に行つたりなどしないで、高校を出たらすぐに就職するのだ。そのほうが利口な生き方だ」と言い出したのだ。お姉ちゃんのように大学に進むのだと、寸暇を惜しんで勉学に励んで来た次女にとって、何と残酷な言葉である。「大会社にはいれば企業内教育が盛んに行なわれているし、そこで花嫁修業をすればよい。もしどうしても栄養学が勉強したいのなら夜学にでも行くんだな」と言い出す夫に、私と三人の娘は「どうしてそんなふうに言

うのですか」と問いただした。「お金がないからではない」との答。私ももちろん家計のことは知っていて、進学のお金ぐらいいは困らないことは百も承知だから、「なぜ就職させねばならないのか理由を教えてほしい」と女四人でひざづめ談判に及んだ。「栄養士の免状を持つた人などは巷に溢れているからだ」と夫は言い放つ。次女はとうとうこらえていた涙をこぼし始めた。

勉強がきらいできらいで仕方がないなら進学させなくてもいいが、勉強したいという意欲に燃えているのに、若い二度と来ない時代に、いいえ就職しなさい、どうしても勉強したいなら夜学に行けとは、あまりに残酷ではないか。子供のしたいよいことをさせない親がどこにあるうか。父親として考えがきつすぎるのでは……、と受持の先生はわざわざ家までお訪ね下さって私にお話しになった。先生に言われなくても、母親として私は当然そう思っていた。夫は在宅であつたのに、受持の先生がお訪ね下さつても会おうとはせずに、「人の家の問題に、おせっかいな」などと口走った。

就職課の先生からも、「お父さんのご意見をぜひ聞きたいのでお電話を下さい」と連絡があつたが、電話もかけない。「これで父親と言えるのかね」と娘もあきれる。「熱が出て体の調子がおかしいからでしょう」と、学校

にはとりなしながら、私はこの家にも、夫にも何の未練もない、離婚してしまおうか、と次女に相談をした。心やさしい次女は、「私のことが発端で、離婚などという大きな問題を簡単に決めてもらっては困るから」としきりに止めるので、のどまで出なかった別れの言葉を、誠に残念ながら、引込めざるを得なかった。

*

怒り出したらとめどがない。誰も自分にさからうことを許さない。だからといって、夫はやさしい点がないわけではない。私がこの暴君と共にだまって二十年以上暮らして来たのも、彼をかばってあげよう、と自分で決めてしまったからだった。

彼は大変自信がありすぎる。技術者で、立派な施設を次々に造って来た。陽の当たるエリートコースだけを歩いて来た。仕事がよくできたただけ、自信はますます増大して来た。彼には自信のない人間の心の傷がわからない。自信を持つと、持ちたい、と努力する人間のあがきや苦しみは、ましてわからない。自分の考えること、言うことは正しいのだ、間違いないのだと心底思っている。私たちにとつてあつけにとられること、はらわたの煮えくりかえることも、彼にとっては全く悪意ではないのだ。彼をこのようにさせているもの、それは生産

的な能力だけを評価する日本の社会のありかただと、私は夫個人よりも、社会の問題に目を向けたいと考えるようになって来た。

*

八月二十八日。栄養課で——ことに下っぱの、洗いのが多い私たちの——最大の悩みは洗剤の中毒である。両方の手のひらがもたもたして動かしにくい日もあったので友にきくと、「私もそうなのよ」との返事。「やっぱりだわ」と思ってしまう。極力、薄めて使うことにする。給料の中に「危険手当」というのが毎月千円ぐらいついていて、ガス中毒、洗剤中毒、大機械取扱いと多くの危険にさらされているので、ほんとうに細心の注意をしていかねばならない。炊き上がったごはんを入れたおひつは十五キロある。これを持ち運びするのだから重労働者だ。六十七才の中村さんが神経痛になったのも無理はない。お汁類、おかず類も相当な重さである。昼食が終わって一時間半の昼寝の時間があるのもむべなるかなで、遠距離通勤の年配者などは、死んだようになって眠りこけ、一時半の起床時間も知らずに寝るので起こしてあげることが多い。待遇がよいとはいっても、大変な仕事であることに間違いない。

時給は八月から五百三十円に上がった。早番をすると

一回で二千円加算される。しかしいくら手当てが高くて
も早番はとても疲れる。早番なしなら、まあまあ誰でも
やっとなせるかも知れない。特技、資格持合わせな
し、健康な体のみ持つてますという中高年主婦の仕事と
しては、きつと五指以内に数えられる高収入だと思う。
保険外務員のようにノルマになやまされることもない
し、長く勤め続ければ有給休暇はほとんどたまって行く
し、年金も頂けるし……。

*

九月一日。この病院の創立十五周年記念日。院長の信
仰している金光教のお祭りを兼ねたみたいな会が看護学
院の講堂で行なわれた。席上で永年勤続者が表彰され
た。私が一番最初に面接した婦長、総婦長の名前も呼ば
れ、壇上の院長から記念品と賞状を受けた。私にはでき
そうもない病人相手の仕事を、永い間やり続け、えらい
もんだと心から感心した。世の中にはえらい人々が多い
わいと、この小さな社会からも今さらのように感じと
り、いろいろと考えさせられた。

九月十日。「昨日は大事件があったのよ」昨夕の当番
の掛川さんが、朝の仕事前のお茶を飲みながら皆に話し
かけた。「え、どんなこと、私たちのミスか何かだった
の」「いいや、違うのよ、患者さんが自殺しようとした

の」とのこと。「リフトが四階に上がっていてその時な
ぜか三階のとびらが開いていたらしいの。そこから地下
に向かって飛び下り自殺。でも死にきれなくて底のコン
クリートは血だらけ。看護婦さんたちが運んでくれたけ
ど、気持悪くてコワカッター」と話す。かわいそうな患
者さん。みんなシーンとなる。精神科のあるこの病院は
こんなことが時々あるようである。

一度精神科に入れられた患者さんは病院の財産みたい
になる。薬攻め、毛髪は白っ茶けるか、とても少なくな
るかどっちかだ。気力のないボケーッとした顔つきで鉄
格子の中から外を見ている。接する医者や看護婦が心か
らの愛情をそそいであげれば喜びもわいて来るだろうけ
れど、ほんとうに患者のために良かれとつくしてあげる
良心的な医師は、左遷されるかクビになる。また看護婦
さんの中には、私たちが心をこめて作ったおかずを配る
時など、お皿にボンボンと投げ入れたりする人もいると
いう。そんなことが絶対に行なわれないように最高の人
が良い管理をしてほしいと祈らずにはいられない。

炊事婦という、ほんの小さな窓から社会をのぞいただ
けでも、思いもかけないことを数々知った。働き始める
のに少し遅すぎたようではあるが、私は今後とも働き続
けたい。そして多くのことを学びたいと思う。

私の新しい恋人たち

片岡陽子

「こういう風に体制が常に性を切った女として生きるのか、性だけの女として生きるのか、と二者択一で迫ってくるのに対し、男もほしい、子どももほしい、自己実現もしたいと叫び続けてがんばるしか、わたしたちはないのだと思います。いろいろな要素をかかえもったトータルな存在として生きることをあきらめないこと」(淵脇

静―未来九月号)

*

これはまさしく、私のグループのSさんやYさんの生き方だと思います。私がこういう生き方に接したのは、割合最近で、その時本当にびっくりしました。Sさんが「子供をもつことがなぜ喜びであったか」を書くとつもりだといわれました。それならなぜ私はそうでなかったかを書こうと思いました。

私は子供をほしいと思わなかったのです。いいかえ

れば、体制によって、性を切った女として生きろと迫られている実感はなく、むしろ子供をもたないことを自分で選びたかったのです。むしろ、性だけの女として生きよと迫る体制の重圧は身に染めついて、それをはねかえそうとしていました。性を切り捨てよと迫れる前に自らそれを選びとることによって。

*

私の子供をもとうと思わなかったのは、一つには女が子を生む状況が不当だと感じたからだし、一つは夫を信頼できなかったからです。それではこの二つの条件が変われば子供をもちたいと思ったのでしょうか。そうは思えないのです。もしやり直せるなら、私はやはり子供をもたないことを選びます。私が選ぶ相手は、自分でも子供をもたないことを選ぶ人でなければなりません。

といって、子供とかかわりなく生きようというのはありません。でも自分の子供でなければとは思えないのです。自分の子供をもたないと、子供とかかわれないことこそ不当ではないでしょうか。むしろ自分の子供をもたずに、子供とかかわる道を探りたいのです。

当然、性交は生殖と分離します。でも避妊は一〇〇％確実ではありません。Ｙさんが主張される「つぐらない自由」ですめば、それに越したことはありません。しかし往々にして「生む、生まない」の選択を迫られる場合があることをどう考えたらいいのでしょうか。やはり「生まない自由」も残しておくべきだと思います。状況のいかんを問わず、「生む、生まない」を決めるのは女だということもあります。最終的な決定権を女が握らぬ限り、結局つきつめれば「女の腹は借り物」ということになってしまおうと思います。

私は性交が必ず生殖を伴うべきというなら、性交を断念します。「女はそうできて、男はそうはいかない」という声がかきこえてきそうです。でも「本来は女によって触発されてこそ、男の欲望は目覚めるのだ」と高群逸枝はいっています。男の欲望が抑えられないというのは、一夫一婦制と公娼制の中で、男の欲望が

野放しにされた歴史的結果かもしれないのです。

私は性を媒介としない男女の結びつきを採りたいと思います。性交と生殖は分離して当然、万一妊娠してしまった時は中絶する、という風には割りきれません。胎児の生命を考えるし、性交（生殖）と高群逸枝が書いているのを忘れることができないからです。

＊

私には、子供をもちたくないという思いが、早くからありました。すでに中学が高校の時、子供をもつ人が少なくなっている、子供の数が減ってきている、ときいて、本気で心配したものです。自分が生まなければ、生む人がいないといった状況になったらどうしようかと。友達が、夫はいなくてもいいが、子供はほしいというのをきいて、呆然としました。

私は誰かと愛しあうことを夢みてはいませんでした。しかし、自分の関心をひとりの男に集中できないことも感じていました。まして性的関心が、一つの対象にしばられることは全く実感しませんでした。そうなるまでに、長い時間かかって不思議ではないと思うのです。でもその日がこないうちに、相手を選ぶことを強いられて、自分で選ぶという以外の抵抗はできませんでした。愛を知らずに妻になったのであり、夫は愛

の対象ではなかったのです。私が性を受け入れられたのは、経験してみたいという好奇心だったと思います。あるいは、「少なくとも愛してくれる人」、という確信によりかかったともいえましょう。しかし、愛されるだけでは何にもならないと、すぐわかったし、そもそも、愛の中味が問題でした。

「子供をもつ、もたない」の争いを通じて、私は愛されてもいない、対等な人間とみなされてもいないことがはっきりわかったのです。「子供はもたない」と宣言してしか、結婚に踏みきれなかった私、それを軽く聞き流したという彼。夫はすぐ「子供が欲しい」といい出し、私は日々「なぜ欲しくないのか」問われ続けました。まず彼がなぜ欲しがるかきいてみました。「自然だから」ということと、「二人の結びつきを強めるから」ということだけでした。

私には子供をもつことが自然だとは少しも思えませんでした。出産という危険に身を投げ出すには、生命を賭けてもよいと思えるほどの決意が必要だと思っていました。でもそれを促すものは何もなかったのです。

彼の「自然だ」というイメージには、女が育て、男は扶養の義務だけを負う、いわば既成の秩序しかない

ことはわかっていました。それでは私のしたいことができないといっても、私にしたいことがあるというのが彼の理解の外なのでした。あるいは、いくらしたいことがあっても、子供ができてしまえば子供に没頭できるというわけです。私がおおがん張ると、子供をもってもしたいことはできるはずだ、というのです。そのために、私を助けるという具体的な約束は何一つしないで。

「二人の結びつきを強める」ということについていうなら、それこそ私の最も恐れるところでした。むしろ、初めからやり直したい、離婚したいと思っていたのですから。それが自分に誠実であることはよく知っていました。でも自分のイニシアチブでそれを貫こうとして、やり遂げられませんでした。夫がイニシアチブをとっても、「それみたことか」となるわけですが、私がイニシアチブをとれば、「とんでもない。夫から嫌われたというなら仕方がないが」ということになるのです。もともと、コンプレックスに骨の髄までひだされ、諦めに負けて結婚したのです。結婚して自分の強さ、諦めのなさ、持続力を思い知らされましたが、それだけでは具体的自立に結びつきませんでした。

そこで、次には、離婚せず、しかし子供をもたないことを彼に認めさせようとなりました。子供に代わるものを二人の間に生み出せないかと手探りしました。

しかし、「子供を生まない女には触れる気がしない」「触れないで結婚を続けるなんて考えられない」と彼はいいました。それなら別れましょうというのと、彼は、「生む気になるまで待つ」、というので、私は振りきれなかったのです。このくり返しが五年続きました。

性はこの状況を鮮明に反映しました。彼が主体としてたち、私はモノにされているとしか思えませんでした。遊廓を苦界と表現する意味が実感できたし、従軍慰安婦のイメージにつきまとわれました。女たちがかつてもそうだったし、今も、このように扱われているかと思うと、エロスもしぼんでしまうのです。

そのような性といえども、妊娠の可能性があると思うと、恐怖だけしか感じませんでした。避妊といっても、何より男とかかわっているし、男が子供をほしがっている時の避妊ほど危っかしいものはありません。

私がこのことではじめに苦しんだか、というより、いかに闘ったかはすでに書いています。そして、今度もやっぱり不徹底にしか、自分を貫けず、三度目の妊娠

のとき、敗北感にまみれつつ、出産に踏み切ったのでした。

*

私が高群逸枝に出会って、目からうろこの落ちる思いがしたのは、それ以前から、結婚と家庭そのものを問うていたからです。夫に扶養されることを当然と思ったことはなく、それほど恐ろしい状況はないと知っていました。少なくとも結婚する時、自分も働かなければ、生計はなりたたないという見通しをもっていました。でもこれがかえって落とし穴だったかもしれない。結婚にありがちな周囲の配慮によって、彼だけの稼ぎでどうにか食べられるとわかった時、働くのはしばらくしてからと油断してしまったのです。

さて、いざ働こうとすると、おいそれと仕事はない、夫は体が弱いから共働きには耐えられないという。そういう状況で、私は子供を拒むことだけに闘いを限定し、子供を生んでも働く、働きながら子供を生む、子供を生むから働きたい、働けるなら子供を生むといったふうには少しも考えられなかったのです。

夫が子供を欲しがったという事実があっても、家事、育児の分担はできませんでした。今思えば、私が働いていないで、いくら家事、育児は女だけがするも

のではないといい続けても、夫を納得させるのは無理だったのです。結果として、夫は既成の秩序を疑わず、それにすっぽりはまりこんだままでした。

だから、子供をもった後の状況はあまりにも私の予測した通りでした。私は何度となく子供をもったことを後悔し、離婚を考えました。性は相変わらず耐えがたく、母子心中こそ思いませんでしたが、死に誘われました。「生んでよかったと思うでしょ。子供のことで一生懸命なもの」などと母にいわれると、胸をかきむしられ、涙をおさえられませんでした。子供たちは厳然として存在するのですから一生懸命なのは当然でした。投げやりにできるものなら、むしろ拒否などしなかったでしょう。それでも子供のために自分を犠牲にできると思ったことは一瞬もありませんでした。

もう死のうなどと考えることはなくなりましたが、まだ闘いは終わっていません。いつか終わるというところもないでしょう。私の抵抗によって、彼にもいくらか他者がみえてきたようです。私もまた人間なのだということに、ようやく気づいたところです。

それに彼がああまで鈍感だったのは、多くの男がそうであるからです。「釣った魚に餌をやらない」というほどの悪意があるわけではなく、いわば無邪気な、

子供のような自己中心だったので、それだけに闘いにくい面もありました。でも気づいたから、もう彼も後もどりすることはないでしょう。私の両親が抑圧的だったのも、彼らが抑圧されて生きてきたからだと思えるようになりました。

そこで、私は未来に期待する気持と、でも本当はもう一度やり直したいなあという気持の間でゆれ動いています。この一文を書くのが非常につらかったのも、そのせいだと思っています。

*

夫とのたえまない闘いで、自分を知った私は、勉強を続けるという一点では、はじめて不徹底にとどまりませんでした。朝早く起きてもやっただし、眠る時間を縮めてもやっだし、五分といえども私には貴重でした。朝の勉強が済んでから、子供の寝る時間までをどんなに長く感じたかわかりません。子供たちは昼寝しないたちだったし、夫の勤務は不規則だったので、昼間はひとりにはなれなかったのです。そうしてひたすら待った夜も、子供の眠りが浅いことや、夫からは「早く寝ろ」といわれて、消えてしまいました。

一方、夫はしばしばありあまる時間をぜいたくに使って、しかもそれを少しも認めようとしませんでし

た。自分のことを自分でしないことによって、私の時・間を奪うこともわかってくれませんでしたから、恨みをつのらせるはかなかったのです。

長女が生後一才のころ出会った高群逸枝を読むこと、私の青春を照らしてくれたボーヴォワールの自伝を原書で読み直すこと、この二つが勉強の柱でした。こういう対象があったから、どうにか勉強が続けられたのだと思います。

高群逸枝を読み続けたことは、数年後、「れ・ふあむ」でレポーターとして高群逸枝を紹介することになった時、「持続は力なり」という中学のときの校長先生のモットーを思い出させました。その時ボーヴォワールを読み続けることも少しは空しくなくなつたといえます。それまでは、「フランス語を忘れたくない」の一念で読んでいたけれど、何年読み続けても少しも読みやすくならず、こんなことをして役に立つのだろうかといつも自問していました。自伝の膨大さがむしろ持続を支えたのです。少々あがいても、急いでも、どうにもならぬ部厚さだから、腰をすえてのろのろやるはかなかったのです。

高群逸枝は、私の思いが私ひとりのものではないこと、父系制二千年の歴史を背負っていることを私に教

えてくれました。そして、本当にゆっくりとしたが、いっしょに読み合う仲間もみつけることができた。

これに反し、フランス語はひとりでやるしかなかったのです。ただし、夫がフランス語教師であるという環境が、仲間のあること以上に有利な条件だったかもしれせん。夫は学校で教えるのにうんざりしていて、家でまでフランス語の話はしたくないといい、二人で勉強するといったことは決してありませんでした。しかし、山と積まれた答案の採点を手伝わせることがありました。いつもの自己中心からであることは明らかでしたが、自分の勉強になると思って時々引き受けました。すべて夫あてでしたし、ほとんど利用できませんでしたが、フランス語についての情報は届いていて、それに接することはできました。

*

主婦が勉強を続けるのがむずかしい理由のひとつは外とのつながりがなく、孤立しているからだと思います。「持続は力なり」といっても、その持続を支えるものがなにもない、むしろ足をひっぱり、水をさし、冷笑するものこそ多いわけです。「今からじゃおそい」とか「どんな成果があるのか」とか「欲張りだ」とか

「やることをやってからしろ」とか「いったい何をやりたいんだ」とか。

私は勉強だけでもしていなければおかしくなってしまうとがん張りしました。實際体の調子も悪く、全然ひとりの時間がもてない、勉強ができない日が数日続くとなにかの形で爆発しました。

子供たちが入園という時、その幼稚園が子供によいかどうかなど考える余裕はありませんでした。いいえ、よくないことは重々承知の上で、その結果については引き受ける覚悟でほうりこんだといって過言ではありません。

入学した時もただ解放感にみたされ、勇躍自分の机を購入したものです（もちろん働き口も求めたのですが、どれも拒否されました）。といって、教育の荒廃に目をつぶるわけにはいきませんでしたから、「娘たちが落ちこぼれるとすれば、そんな子は大勢いるはずだ。そういう子供を集めて学校を作ろう。少くとも、学校の基準に子供をあてはめるようなことはすまい」と心をしずめていました。

同じような気持から、家庭文庫をしたいと思い、きっかけをつかむため、「おやこ劇場運動」にとびこみました。そしてすぐに、それが子供のためといわれな

がら、私にとって、他の多くのお母さんにとって、自己解放、自己主張にはかならないと気づいたのです。ここから、さまざまな市民運動——婦人学級、図書館運動などに目を開きました。

それから、保育園も知らず、父は外、母は内のイメージを完成しようとしている二人の娘たちに、学童保育だけでも経験させたいと思い、「れ・ふあむ」参加の積み上げの上に得られた働き口を夫に示しました。

勉強を続けるうちに夫の秘書的な役割を果たすようになってきていたので、私がいなくなってしまうと困ると感じた夫は、フランス語の非常勤講師という職を探してきました。それに飛びつけたわけではありませんが、さまざまな事情と経過を経て、今春からフランス語を教える身になりました。結婚以来十五年目、その間ただの二度も予測しなかったことが起こったのです。

十年振りに会った友達から、「やっぱり夫のおかげで得た仕事じゃないの」といわれましたが、たちまちしよげる私をみて、「でもあなたが勉強を続けていなければ、できないことなのだから」と彼女は慰めてくれました。非常勤という矛盾のかたまりみたいな仕事だし、不安定だし、その上経済的自立にもほど遠く、

一生フランス語教師でいると決めたわけでもありません。でも今はじめて、夫に、子供たちに、一個の人間としての存在を示し得たと思います。娘たちの固定観念を打ち破るのは容易ではありませんが、「ママ、教えにいくから」とか、「学校へ行く日よ」ということだけではなく、「ママ、勉強しているんだから邪魔しないで」と迫力をこめていえるのです。

あるとき、一人の生徒のはほえみが、私をはっとさせました。「彼らは恋人なんだ。私には二十四人^{フタタチ}七人の恋人がいるんだわ」と気づきました。なぜなら彼らはまぎれもなく他者なのです。市民運動で出会った多くのお母さんとも共感を分けあったけれど、彼女らの「他性」は、生徒たちほど明らかではありませんでした。

他者とのかわりこそ、求めながら、あまりに長く、その思いを閉ざされてきた私は、これから、どれほど片思いであろうと、恋人たちを持ち続けるつもりです。少なくとも、夫からも、子供からおかされない他者とのかわりを失わないつもりです。

「婦人問題入門講座」 開催のお知らせ

あごらでは、本年度の研究テーマを次のように決定し、プロジェクト・チームを結成して調査・研究を進めることになりました。つきましてはそのオリエンテーションをかねて、公開の「婦人問題入門講座」を開きます。

講師はいずれも婦人問題に関するベテランぞろい。やさしく、わかりやすくテーマを展開します。関心をおもちのテーマについてあなたのとり組み方を決める参考にするのもし、全テーマについて一通りふれて、あらたに参加チームを決定されるのもよいかもしれません。充実した講師陣とリラックスした雰囲気この機会をぜひご活用ください。

▼テーマと日程

▼第一回「女と生涯教育」

4月23日(金) 18:20時

講師 国立公民館主事

伊藤 雅子

▼第二回「女と仕事」

4月28日(水) 18:20時

講師 婦人問題研究家

駒野 陽子

▼第三回「女と結婚」

5月10日(月) 18:20時

講師 国立民族学博物館

教授 祖父江 孝男

▼第四回「女と老後」

5月13日(木) 18:20時

講師 お茶の水女子大学

助教授・家族社会学

柚井 孝子

会場はいずれも「あごら読書室」(地下鉄丸の内線新宿御苑下車一分)です。

●参加費一回五百円

四回通し/会員千円

非会員千五百円

連絡先「あごら読書室」

TEL 35419014

髪結系譜略

富 永 千代子

ふっと、空に開けているのは、ヘアドライヤーが三台寄せてある窓側の窓の面積、一・五×一間の十分の一ぐらいで、室の三方に窓はあっても建物が隣接し立て込み、暗く塞がれている。

室のコンクリートの壁は荒く、黒ずみ、暗褐色の椅子が三脚、空のある窓に向かって壁につき、室のはば中央に鏡台が一台、六十度角に三面三席に開き、室には照明、採光が考えられてもなく、まるで飾りけがない。けれども市井の日本家屋の部屋の使用方そのままが、鉄筋の室に持越され使いこなされている感があって、コンクリートの室のわびしさがない。

室の片側に空のある窓に向かって横に延びて洗髪台、その頭部にガス湯沸器、洗髪台の奥にこれと平行して右から冷蔵庫、流し台、ガス台——ここに時たま、鍔ヒラが乗る——が並び、これら器具調度類は、すべてまた黒ずみ

使いふるされたものに見える。

この美容室には75の様相感がまるでないということが、時代のこと、明治大正の時代のことを忘れ、実感として遠のいている私には、現代に常に近代が残存すると知ってはいても驚き、錯綜し、この美容室には、近來の店とは違う何か、明治の情緒か何かがある……と、大正時代をふっと飛び越え、明治と結びつけてしまうほど。大正、昭和初期の時代感にも希薄になってしまっていたが、それだけ75との時代差も大きい実在を認めたのである。

室内にある美容小器具類はほかに普通に備わっているもの、洗髪台の頭部脇にこれも古いガラスの小ケースが立ち、何本ものブラッシ、鋏、櫛が油じみて納まり、ところ狭く小型の移動テーブルが二脚位置し、下段に髻カサモ、網等、上段にパーマメント用のロール、棒、ペーパー、

ヘアピン類、そして室の角一隅に観音開きになる丈高い古い型のキャビネット、その上に液の瓶類が立並んでいる。

キャビネットの片側にかかるついたての下からちょうど縁の下につつまんだもののようにダンボールの箱が、床にはみ出て見え、中に日本髪結用の小道具類が半ば紙にかくれゴサゴサ納まっている。大きな荒櫛、中櫛、毛すじ櫛、すじ立て櫛、鬢出し、荒齒等の主として櫛類その他である。

これら室内の器具調度の中で鏡台が主位を占め、鏡台さえあれば美容室が成立った時代への懐古感が濃く、その他はだんだんに加えられて来たのであろう。

ここでは、現在ある女の髪の色が何でも一通りすらすら作れそうである。いわゆる日本髪、元結をして、鬢、髻をさささと作り結う高島田、丸髻、桃割れ、夜会等。いわゆる洋髪、髻を入れ、ふわりと結う、七三、耳かくし、丸く高いハイカラ型等。さらにモダンのパーマネントセット、カットによる変化の多い型。そしていかにも使いふるされた器具調度類が、この店の仕事に対する構え方、即時代の推移を体験したあかしとして安心感を誘うのである。

文明開花の明治に残った近代の髪型から現代の髪型の

すべてを一瞬に一室に想定し、納めている。けれどもこの美容室にもあつてすぐ目につく価格表が壁にもどこにも掲げられていない。この店の施行料は美容師組合で協定している施行価格の三分の一ぐらいで破格に安く、大幅に値上げせずに行っているのは、後になって気づいたのであるが、四十五年ぐらいいも前からのなじみの客、紹介による客といった客層、この店の性質、背景のせいである。

この店には、現代の営利営業的性格がなく、家内手仕事であり、人件費諸経費が極限に少ない。そして日本の *ambiguity*、ともいうべきものが、今ではちょっと奇異に受取られやすいけれどもここではごく自然な *nature* としてあり、本質としてではなく、受ける側としての義理人情の世界が残っている。現代のいわゆる経営コンサルタントなど寄せつけない、この豊かさ、厳しさは、仕事を体で会得してしまった人だけのものであらうか。

*

この美容師さんはどんな人なのか、その背景、人となりやそれとなく仕事施行の合間に、ほんの秒間ずつ幾度も聞いたけれども、その話し方はむしろ詳細を欠き、ことばも途切れてしまう。口先で仕込まれた仕事ではな

く、口先で仕込まれた人ではないからで、自ら職業婦人だといって、この職業で生き抜いて来たことを、ことばでなく、からだで語るだけである。この仕事は体がきついと強調するほかに、断片的に話されたことをつなぎ合わせてそのままいくらかの歴史資料によってたどりまとめた。

出生

彼女の姓は仙田、名はカツエという。カツエの母は、松前旗本老中の娘と江戸詰阿波藩蜂須賀家家臣仙田氏との間の長女で万延元年江戸に生まれた。美しかった祖母は母の次の一子出産の際、母子共に死亡し、祖父は後添い、格としては落ちる家の子女と再婚した。その間の一女、母の異母妹が、カツエが「後に神田の叔母、村田」と呼び、カツエの生涯に大きくかわって来る人である。

祖父、仙田家は阿州徳島藩家中録（文政年間のものとは推定のもの）には収録されてなく、徳島大学蔵の家臣成立書並系図目録にもない。これら文献に全家臣が収録されたともいえない。（徳島県立図書館・藤九昭）

カツエの母が江戸に生まれた年、万延元年は、大老井

伊直弼が桜田門外に尊攘派浪士に襲撃された年であり、世情騒然たる幕末、母九才の折、江戸より百六十六里の道程（安政四年己五月刈成、京都書林地図）四国助任まで駕籠に揺られ阿波藩に入国する。祖父が助任（現在の徳島市旧助任小学校の所在地）に家屋敷を賜ったのである。母はここで成長して阿波藩元家家長谷川氏の長男と結婚、一子をもうけるが夫は死亡、仙田家に里帰りをする。

阿波藩家老家としては稲田家一万四千五百石、賀島家一万石、池田家五千石、蜂須賀信濃家四千石、蜂須賀駿河家四千石が家老職にあったと推定され、藩初から藩末まで稲田、賀島、池田は家老職であったが、藩初十一人、忠英公以後五家ないし六家ぐらいで変動があり、廃藩置県後家老家はすべて東京に移った。長谷川氏は家老家としては存在したが、幕末までは続かなかった。（藤九昭）

母は仙田家に里帰りしてはどなく、仙田家助任の家屋敷を売却し、その家作に移住する。

阿波藩蜂須賀家は旧豊臣の家臣蜂須賀小六代々の蜂須賀家であり、幕末、二十五万七千九百石、外様大名としては石高を優に越える実力があつた。

十三代斉裕は十二代將軍家斉の第二十二子、文政四年

九月江戸城に生まれ、同十年六月世継ぎの絶えた蜂須賀家の世子となり鍛冶橋の藩邸に入り（安政六己未年新刻、江戸日本橋通一丁目須厚屋茂兵衛蔵版図に、アハ松平藩邸とある）、天保六年十二月家斉の一字を賜り、斉裕となり、同十四年十月二十三才で封を継ぎ正四位上参議阿波守、弘化六年五月初めて入国、文久二年（一八六二）十二月幕府の陸海軍総裁に任ぜられている。皇妹和宮、十三代將軍家茂に御降嫁、公武合体の年に当たる。

斉裕は藩重臣の消極的事大主義、進言によって翌年正月右総裁を辞し、明治元年（一八六八）正月六日徳島城に病死、年四十八才、在職二十六年、佐幕派であった。

十四代藩主茂韶は、弘化三年八月八日斉裕の第二子として江戸大名小路邸に生まれ、安政二年世子となり、万延元年三月將軍家茂の一字を賜り茂韶となり、九月初めて入国、慶応三年六月藩の国政を委ねられ翌四年（明治元年）正月七日封を継ぎ藩主となったが、在職四年、明治四年七月、廃藩置県により職を去り東京に移って、各種の官職を歴任、従一位勲一等侯爵、大正七年二月十日、七十三才で病没、勤王派であった。

幕末の阿波藩は幕府の信任も厚く、斉裕は幕政顧問に、また朝廷では茂韶および筆頭家老稲田氏を起用されようとした。稲田家は代々淡路の仕置を勤め、洲本城に

住み、稲田植誠は勤王と海防に努力したが佐幕派にはばまれ、二十二才で病死している。

阿波藩は薩長土佐藩のように雄飛せず、廃藩置県後、稲田家騒動として知られる淡路も失い、弱県になってしまったのである（杉並区立図書館蔵書）。稲田家のみでなく、この時代高禄重臣の家には、今ではこれらをすべて明確にたどることはむずかしいが、それぞれ「お家騒動」が起きたのであろう。仙田家も家屋敷を手放し、その家作に移り住んだのである。

生い立ち

この仙田家に、南から来たという大工、たんすなど作っていた指し物師が入婿して、母との間に六子をもうけ、末娘カツエは明治三十七年八月十四日、この家作で生まれる。父、指し物師は病弱者だったという。

カツエが長じて美容師となる母胎が、幕末維新、阿波藩史、少なくとも万延元年より明治三十七年までの約四十五年間にあった。母の運命、祖父のそれ、カツエの継いだ血筋の中にすでにうかがえる。

母の運命は、幕末維新を背景に江戸―助任―長谷川氏―助任―家作と生活が急転変しているにもかかわらず、

その子弟、カツエの兄たちは幼少より秀才で、あるいは官吏に、あるいは当時大学を出て大毎新聞に勤めるようになった。病弱な夫、六人の子弟を抱えて、母は女としても十分生きた人であったと認められる。

カツエは徳島市内の家に家族と共にきつい窮乏下に育ち、父、指し物師は七年病床にあって死亡、カツエ、十九才のころには新聞社に勤める兄のところ、尼崎にいた。

大正十年代の当時のこと、いわゆる大正デモクラシーがようやく地につき、政党政治が樹立し、新聞界は各界を制覇する勢にあり、ラジオが普及し、関西では神戸を中心に船舶会社はじめ企業の資本蓄積が進み、大正九年のバニックは貧富の差を増大した。

カツエは尼崎の兄のところから、日本電線会社勤務試験係、技師某氏と結婚、式を簡易なレストランで挙げ、一女をもうけるが、生後間もなく一女は横浜へやってしまわれたという。

カツエの夫、某氏には、これ以前より鎌倉に知る女性があつて文通も続いていた。「海がきれいです……お花が咲きました……」というようなその令嬢の文面をカツエも読んだ。今はもう七十才を越えているカツエが、このことを話す時、「あかん……そんなもん……」と某氏

をなじつて頬が紅潮する。

そうこうしてカツエは某氏と離婚、横浜にやつてしまわれた娘に会いたさに上京する。大正十三年、震災の翌年、二十一才のときである。女は、若いときには、四周から安住させないようなことが複雑にからまると、何か突破口を見出すと、突進するのであらう。

ここで女としてのカツエの容姿にふれる。彼女は美貌という以上に天性そなわつた美の持ち主で、眼は涼しく大きく、しっかりした瓜実顔、背は当時としてはやや高く、中肉中背、容姿ほのぼのとし、男の人がほれ惚れするほど美しかったに違いない。資性もいい、すなおな人なのである。

カツエは娘に会いたさから上京するが、娘は乳児のうちに死亡し、カツエは「神田の叔母」のところに身を寄せる。母の異母妹である「神田の叔母」は、カツエより約二十年ぐらい年上で、このときからカツエに具体的に最も強力にかかわりを持つて来た人であらうと思う。叔母は当時「夫は私のところに帰つて来る」と、泣いて夫の帰宅を待つていたことがあつたとか。そして結局離婚し、富裕な呉服商家に再嫁したものの、いわゆる実子となる子弟もなかった。現在は江古田の隠居所と称するところにいる。病床にあり九十一才。カツエは借地

であるが、この敷地に別棟六畳間を建てて住み、叔母の面倒をも見ている。

叔母は、上京したカツエを渋谷のお屋敷へ連れて行った。渋谷邸がかつての阿波藩関係のどれかの屋敷であったか、また別の方の邸宅であったか、そこへ寄住させるためだったのか、単に上京したあいさつだったか語られていないが、このころ、すでに美容師を志していたカツエの人生が、こうして大正末期より東京でスタートする。

当時の東京の社会情勢に、カツエに美容師の職を選ばせる温床があったであろうか。女性の側を概観する。教育機関として日本女子大、英学塾、女子医専、女高師、東京女子大があり、平塚らいてうによる女性解放運動、与謝野昌子らの女流文学、雑誌「婦人公論」があった。三越、高島屋、白木屋、松坂屋などのデパートが呉服屋より転身、丸の内界隈にタイピストほかの事務員が働き、他方花柳界がなお呉服物の売れ行きを左右するほどであった。帝劇より浅草へ興行も延び、新派の劇が一般にも好評を得、カフェ喫茶店が街に見える。

美容界は盛んな花柳界を支えていたのであろう。髪結師川端そよ氏が、銀座八丁目の現在資生堂のある場所から折れた並木通りに店を持っていた。髪結師は客先に出

向するほかに店を構え、客を迎えるようにもなって来ていた。

新橋より尾張町寄り、現在の銀座松坂屋の並びに高級化粧品、小間物店「白牡丹」があり、現在の全国美容師コンクールに当たる機関を設けていた。歟島千代が一等賞を得た評判を聞き、川端そよ氏は若いころ信州より上京、千代の内弟子となり、当時独立していた。カツエはそよ氏を「お師匠さん」と呼ぶ内弟子になるのであるが、そよ氏は、日本髪結師で次代の洋髪の結い方を知らず、昭和五十年八月八日、八十六才で青山に逝去された。

出会い

カツエは渋谷邸に連れて行かれたとき以来、その屋敷の子息、早大生と知るようになったが、そのことを「湯島の白梅のようなことをして……美容師になりますといっちゃってね……」と語る。「湯島の白梅」とは、湯島神社を舞台にした泉鏡花作の「婦系図」のことである。主人公芸者お葛は、早瀬主税との恋をさかれ、知り合いの髪結いの弟子になる。カツエは職業婦人として自立する道を選び、一方、小説「婦系図」を地味いく心境でも

あったのであろうか、かつての離婚の経験がまだ心にま
つわり消えないままだったのであろうか。

カツエが川端そよ氏の内弟子となり働くようになった
二十二才のころは、青年との仲が深まる前だったようであ
る。カツエには、父、指し物師を継ぐ器用さと感覚が
そなわっていたであらうし、美容師となる時代の雰囲気
も確かにあった。このことは、カツエが美容師であるほ
かなかったという限界を意味するものではなく、美容師
になりえたという意味である。

内弟子年期奉公は期間五年ぐらい。一年目は無給であ
り、休日は盆暮れに二日、里帰りの日が与えられてい
た。けれども客より心づけ、プレゼントとして浴衣下駄
などがいっぱいあって、衣食住は足りていた。むろん、
施行技術は教えられず、すべて見て習うのである。そよ
氏の店では客先に outgoing することもあり、すべて弟子が
先方へ先にまわり、仕上げまでを準備し、師匠が結い上
げてまわるという能率的な仕方であった。

そよ氏の店の客は過半数が新橋・赤坂・柳橋の芸者衆
で、彼女らはお座敷を終えてのち、五、六人と車に相乗
りやって来る。その施行が夜半から続き、四六時中休め
ず、交代で暫時小休、働くという凄惨なまでにきつい無
休の仕事だった。このころの客の一人が今も「センダ美

容室」の四十五年来の客となっているという。

カツエはこの間に自ら講習を受けて、師匠の知らない
洋髪の結い方を修得した。けれども、このころの芸者衆
は、許可なしに洋髪にしてお座敷へ出られなかったそう
である。

今のカツエからは、この人が年期奉公をしたというよ
うなことが想像しにくい。じみな着物を簡単なワンピース
を着るように普通に着ている。それは昔のままの姿な
のであろうが、いかにもさりとて、「辛苦」といっ
た印象からはほど遠い。もっとも今では年期奉公を見る
ことも経験することもできないからでもあるが、きつか
ったはずの奉公生活をこの人は案外そうではなく過ごし
たのではなからうか。それとも遠い過去となつてしまっ
た今では、きつかった思い出より他の想いの方が優先し
ているのか、あるいは現状の方がこの人にはきついので
はなからうか。

昭和初期、そよ氏の店に五、六人はいたという同じ内
弟子、姉妹弟子のことは語らないが、「お師匠さんのと
きからの四十五年来の客」を挙げ、息子は四十二才にな
るという。

カツエは三十才ぐらいになって、叔母より融資を得て
銀座西六丁目にかなり広い家を借り、店を開き独立す

る。現在はビルが、建ち場所がわからなくなっているとか。内弟子も五、六人おいて、生涯の全盛期を迎える。そして渋谷邸の子息との間に一男一女をもうける。この一男が、いま四十二才というわけである。

けれどもカツエは青年とのこのアフエアーに結婚を目的とせず、経済的援助も受けてはいない。より強力な母性を秘めつつ、女が女への仕事をする時に注ぐエネルギーを持つようになっていた。

正月には、一日に百人も高島田を結い上げたという。洗髪、髻つけ（油を髪になじませる）、癖直し（湯または鑊こを使って髪のかせを直す）などを弟子が準備する。師匠であるカツエが元結（白い水引をばらして一本ずつにしたものよりやや細い紐ひもを使ってまず髪を結んだ。この紐は今手に入りにくい）をした。元結をすると、あと、五分位ずつで髻、髻をささささと作り結い上げられたからである。髻の裏には黒紙をつけた。

客は大半が芸者衆で、彼女らは次々に人を紹介し、「この人を結ってあげて……」と連れて来る。彼女らには「宵越しの金は持たず」という気風があり、気前もよく、また義理がたいところがあった。カツエの子供たちが学校へ——現在の銀座五丁目にある泰明小学校であるが——入学すると必ず祝儀を包み、時々の進物も欠かさ

なかった。彼女らが美容室に来てはっとしてしゃべり合う話は、カツエの耳にもそれとなくはいった。お座敷で出会った客が誰だったか知らないままだったのに、ふつと街頭の車の中にその人を見かけ、ああ、あの人と気づくと、向こうから「失敬」と手を挙げ、あの人が朝香宮だったかと名を知るといったふうなこともあったとか。

カツエは芸者衆の実体をよく知っているように思えない。だれかが結婚したとか病気になったとかの風聞のほかには、けれども芸者衆を遊ばせるといえば通人だそうであるが、そのような何かが人柄にあって、仕事を通じて、彼女らとごく自然に give and take の関係ができていたようである。

カツエの記憶ではなぜか、洋髪の流行期と昭和十一年の二・二六事件が結びついている。内大臣斎藤実、大蔵大臣高橋是清が青年将校に狙撃され、軍部と財閥とが結束し、ファシズムの傾向が濃くなって来るころ、洋髪も盛りであった。

カツエは渋谷邸の青年とは結婚せず、彼は別の結婚をする。が、内弟子たちが家事も手伝い、カツエは子供たちを大切に立派に育てあげる。カツエは母と比べて、女として十分に生き、男女同権の具体的な実行者でもあった。母は他の子女のところよりはカツエのところに長く

滞在するようになった。カツエは母の死もみとり、現在まで叔母の面倒も見ているつもりでいる。カツエの母は決して怒ったことのない、怒りを知らなかった人であり、気品においても叔母より一層そなわった人だったとか。

戦争・そして疎開

昭和十五年前後、洋髪と並行してパーマネットセット、カットによる髪型が急速に流行しはじめ、この係りとして姪が加わる。そして時代は軍部と日本資本主義が満州へ北支へと侵入し、やがて昭和十六年太平洋戦争に突入、同十九年には東京で空爆が本格的になる。カツエの店の隣家に不発弾が落ち、掘起こしのためにカツエは家を貸し、子供たちと徳島の兄のところに疎開する。

カツエは金三万円という当時の大金を持っていた。百円で一か月十二分に暮せたところである。徳島でしばらく過ごすうちに、徳島も空襲されるというビラがまかれ、疎開先を岡山市より乗物約一時間ぐらいの山間部に移し、東京より美容器具を送らせて店を開き、子供たちはこの地方の学校に通うようになる。

客層はこの地方の山間部農家の主婦、娘などであつ

た。ここで終戦を迎える。新円切換えて現金は封鎖されてしまったが生活には困らなかつたようである。山のお宮の祭どきには多くの客が髪を結い、パーマネットをかけた。弟子入り志望者が大根、松たけなど時々の幸を持込んで来て、その五、六人には免状を出した。そうこうして疎開の期間が長引き帰京が遅れたようである。

戦後

昭和二十五年帰京してすぐ、築地の現在の店を姪と二人で開き、以来弟子を取らず働き続けている。戦前の銀座の家は、戦中戦後、罹災者が大勢入り込んだりしてどうにかなってしまったとか。

築地三丁目の角に近い、勝どき橋方面行のバス停の歩道に面した一廊、早朝からリヤカーや荷箱がはみ出してぶつかる歩道に、小さい二つ折りの立看板を見かける。階段を線で示し、女の子が昇っていく、ひと昔前の中学生の図案のような赤黒ベンキのポスターによって、私はふっとこの「センダ美容室」に紛れ入った。紹介というバスポートもなく、私は偶然に、そして無意味に、この店にたたずむようになった。

婚礼のときの姉の高島田を見た記憶。不自然なまごち

ないかつこうと見たものが、ここでは実にすてきに見える。カツエが三十年配の女性に高島田を施行している情景はみごとなもの。手際よく手早く、客に心地よく、髻、髻が、さわやかに水際立ってさささとできて行く。黒髪が実に美しいものに見える。比類なく美しいものとして日本髪を満喫させる。丸髻の仕上げも実にしっとりとして美しい。そこいらの結婚式場の髻作りや髪結いの比ではない。それは一夜にくずれるゆえに、桜花に似て一層の名残りを誘う。

カツエは他のことで時々姪にからかわれたりする、指図もされたりする。が、決してさからわず、姪を心から頼りにしている。それは心の練られた真正の素直な人に見える。美しいコンビの店である。

けれども日本髪の存続が花柳界の盛衰にかかっているとは思えない。主流社会に政策や方針があるかどうかにかかっているのだ。その主流とは、——カツエがポツツリ漏らした言葉であるが——「男の人は……大したことない」というような主流にである。

彼女の生涯は、だれもがそうであるように完全無欠ではないけれども、優に男性を凌駕する力量と心根の込められたものである。男女同権平等という現代語を超える生きた実証である。

「高群逸枝を読む会」

第一回の集まりが、四月十三日、六時より「あごら読書室」において行なわれました。出席者は八名（印刷業一、雑誌記者一、建築業一、主婦一、学生一、雑誌編集二）。この会は、単に女性の歴史を研究するというだけではなく、できるだけ職業・立場のちがう人びとが、この勉強の機会をもちあうことが、この勉強の目的である。連絡先・三宅正子 TEL 03・713・8979

「高群逸枝を読む会」学習予定表

回	目次	ページ
1	日本列島の原始性 家庭を知らなかった社会	14~62
2	無痛分娩の母たち	62~94
3	族母卑弥呼	94~144
4	女性子心の文化 文明の開幕	144~194
5	私有財産がうまれた 氏族がこわれた	194~248
6	国家ができた 女性文化がくずれた 世界史の基本法則からみた日本女性史	248~308
7	市民社会が出現した	308~373
8	「家」が形づくられた	373~422
9	封建権力が天下をとった (封建制とは何か~ 太閤検地にあらわれた家族構成)	422~478
10	(ヨーロッパ封建女性史一瞥~ 子おろしについて)	478~520
11	(封建の町と村の女たち) いわゆる庶民文化	520~556
12	まとめ	

新女大学研究

私は五年前に日本に来ました。そのときに日本語を少し勉強し、慶応大学の国際センターに入りました。そのセンターに清岡英一さんという、七十三才くらいの先生がいらして、その方が福沢諭吉のひ孫にあたる方でした。私が女性問題に興味を持っていることをお話ししたら、じゃあ「女大学」のことをぜひ読んでほしいといわれました。それで、日本の女性の問題を勉強するためにはまず歴史を勉強したほうがよいと思って読んだのですが、そういう意味で貝原益軒の「女大学」、それに対する明治時代の福沢諭吉の考え方もとても参考になったと思います。

慶応大学社会学研究科で、二年前、修士課程に入り、そこでこの問題について論文を書きましたので、きょうは、それについてお話ししたいと思います。

女性の社会的地位あるいは役割を考えると、地位と役割を変化させる要因はさまざまですが、その中で重要な要因の一つが教育であると思います。私の「女大学」研究は、女子の社会的役割教育、またはその思想的環境



エリザベス・マウア

を中心としています。

私の論文の焦点の一つは、社会における女性の役割についての社会全体の価値観であり、もう一つの焦点は、その価値観、社会の教育制度、さらに女性の社会における役割という三つの要素の相互関係です。ただし、主として徳川時代と明治時代に限ってこうした関係を検討しました。

徳川時代

武士階級の価値観が下方伝播

まず、徳川時代に社会の女性の役割に対して持った価値観に、決定的な役割をもった人を考察します。この価値観は、徳川時代の初期には社会階級によって異なっていました。一方においては畑で一緒に働いていた農民の男女のように共同意識の強い人々もいましたが、他方においては武士階級のように男女の差別意識の強かった人もいました。しかしながら、徳川時代でも特に最後の五十年間になると、その差別主義的価値観は武士階級から

他の階級に伝わる傾向があらわれました。この徳川時代の末期における文化、あるいは価値観の下方への広がりは、一般社会における女性の役割に対する期待を、武士階級のそれと均等にした要因でした。

下方伝播の背景としては、武士階級がその他の階級に比べて自分の思想体系を、よりはっきり、よりうまくまとめて説明し宣伝したことがあり、またその時代、社会的変動に伴って農、工、商の各階級が上層の武士をまねるというような現象があり、さらに法律上の単位としての世帯家族の標準化がありました。しかしそれに対してその時代の教育機関が階級によって違っていたことは、武士階級とその他の階級との間の接触を最低限にし、文化伝播の過程を弱めるように作用していたと思われる。それゆえ、文化の下方伝播を考えるにあたって、武士階級ではない平民の人さえも読めるように書かれた、貝原益軒の「女大学」を重視せざるを得ないでしょう。

徳川時代には女性のための公式的教育はあまりありませんでしたので、教育を受けるとしたら非公式的、インフォーマルな教育がほとんどでした。例えば寺子屋があっても武士階級だけが大部分を占めていたと思うのです。またお屋敷奉公制度もあり、農民、あるいは商人、職人でも上層階級の社会の価値観を覚えて、自分の階級へ持ち帰り、価値観の伝播が行なわれました。とにかくそういうお屋敷奉公とか、お習字の稽古とかに「女大学」が使われていたことが、昔の教科書を見るとはつき

りわかります。そのような非公式的な教育機関では、武士の女性の教育とその他の階級の女性の教育とを区別する必要があります。と思います。

明治時代

西洋の啓蒙思想からナショナリズムへ

明治時代の初期になりますと、一方において益軒の代表した儒教主義的思想は残存しましたが、他方西洋からの啓蒙思想家の理想が福沢諭吉のような西洋主義者、来日した宣教師、教師、外交官等の影響によって導入されてきました。この導入された思想の中で、特に社会における女性の役割、地位についての価値観に大きな影響を与えたのは、平等主義、個人主義、ナショナリズムという三つでした。

明治の初期には民主主義的な面、つまり平等主義と個人主義が強調されましたが、明治十年代の後半からは儒教主義の伝統をその基盤としてナショナリズムが次第に強調されてきました。こうした時代の主張を反映して、女性の教育や女性の社会における役割についての価値観も時代と共に変化してきました。その変化は福沢諭吉の考え方にも、女性の教育に関する明治政府の教育政策にも見られると思います。

「新女大学」「女大学評論」にみる 福沢諭吉の考え方

福沢諭吉の関心は非常に広い範囲に及んでいましたが、彼は特に女性の人間としての価値に深い興味を持っていました。女性としてではなく人間としての価値について深い興味を持っていたということは、重要なことだと思っています。私の論文は彼の女性に関する著作の代表として、「女大学評論」と「新女大学」を取上げています。これを益軒の「女大学」と比較すれば、歴史の流れもよくわかると思います。福沢の女性に関する他の書物を見ると、彼の女性観は大体五つの時期に分けられると思います。

第一の時期は明治の初期です。この時期の論文のほとんどは西洋の進歩的思想に強く惹かれる中で、人間としての価値による男女の平等を主張しています。そのころ彼は政府の教育委員の一人として、森有礼などとともに明治政府の教育政策にかなり影響を与えたのではないかと思います。その一つの結果として共学の小学校の義務教育制度の制定に貢献しました。

しかし明治十年代の後半に入ると、ナショナリズムの高鳴りの中で、富国強兵のために個人個人の向上と、女性教育の向上の必要性を主張するようになりました。つまり個人個人の向上といってもよいし、独立心といってもよいと思います。独立心の意味としては、知識的、経済的、心理的独立の三つが必要と考えていました。この時代の女性に対する典型的な考え方は良妻賢母という概念でした。



やがて日本のナショナリズムは日清戦争の勝利によって一応落着き、そこで福沢は人間主義的な考えに戻り「女大学評論」と「新女大学」を書き出しました。しかし政府と軍隊はすぐに日露戦争の準備を開始し、治安維持法などの制定を経て、前よりさらに烈しくナショナリズムが高揚されました。（この治安維持法の一つの成果として、日本に住む外人が初めて日本のどこに住んでもよいということになりました。それまでは皆が一つ所に住んで日本人と接触しなかったのですが、この法律によって交流が自由になりました。福沢は日本人に外人が理解できないことがあるとまづいと考えたのです。）

福沢はこれらの中で、道徳的な意味での一夫一婦制を強調しています。それは福沢が早くこれを書いたほうがよいと判断したからでしょう。こうして明治初期に強かった自由主義的な考え方の影響は次第にうすくなり、儒教主義的な概念が修身科の教育に入りこんできました。国を強くするためにナショナリズムや国粹運動が必要とされたのです。この時期から、西洋的思想から儒教主義へと逆行してきました。

日露戦争に直面した時期になると、女性の社会的役割と女性の教育に関する価値観については、貝原益軒の考え方のほうが福沢諭吉の考え方より教育制度の面からいって、むしろ影響が強くなったといえるでしょう。この時代では次の五つの要因が作用していたと思われます。

a 福沢と益軒の思想

b 社会における女性の役割に対する一般の価値観

c 政府

d 教育制度

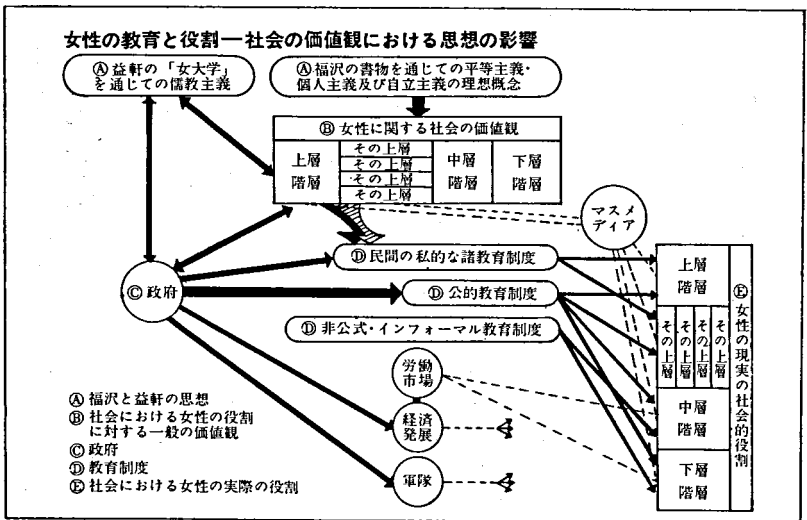
e 社会における女性の実際の役割

これらの要因に関しては、図でその関係を示してあります。他にもいろいろな要因が考えられますが、私の研究ではこの五つだけを取上げました。

明治後期の図をみますと、福沢と益軒の思想がどのように使われ、また女性の役割にどのように影響を与えたかわかります。結果的には良妻賢母になったわけですが、益軒の説いた最初の良妻賢母主義の意味は、女性にも家庭のための教育が必要だということでした。当時は家庭の仕事に関しては女性は何も教育をうけなくても、本能的に才能があるという考え方でした。福沢の考え方は家庭をうまくするためにやはり一般的な教育が必要だということです。

アメリカにも同じような考え方がありましたが、十八世紀の終りごろからですから、日本では百年遅れているわけです。アメリカでは女性が主に子どもの面倒をみますから、女性の教育も必要とされ、そのころから小学校や中学校において女性の方が男性より数が多かったのです。これが一八五〇年ごろのことです。

日本では女子教育に関していろいろな恐れがありました。最初は小学校教育が男女ともになって女性が遊びよりも勉強をすると、日本が危いという偏見が多かったの



です。家族制度が崩れる恐れがあったし、また根本的には女性には学問はできないという考え方がありました。アメリカにも少し前にはそんな考え方があったのです。ハーバード大学の先生の有名な本がありまして、根本的には女性は男性より頭がはるかに悪いので、学校に行くとは病気になるってしまうというような。十八世紀の終わりから十九世紀の初めくらいですけれども。

福沢諭吉が亡くなって十年後に、「女大学研究」について座談会がありました。有名な教育学者が出席しているんな意見が出ましたが、貝原益軒の「女大学」は少し古いけれども、福沢諭吉の「女大学評論」とか「新女大学」はあまりにもラディカルだと強く批判しました。そこでは女性は男性よりも頭がおくれているので激しい勉強をさせない方がいいとか、家庭が崩れるとかの意見が大勢を占めました。そのころには福沢諭吉のような考えはなくなっていたようです。もう少し儒教的な考え方に戻っていたのです。

時代により女性の社会における役割を考えるとどこからの影響が強いかといえますと、福沢諭吉や益軒のような考え方が社会における価値観に影響を与えるのです。

* * *

P きょうは外国人であるマウアさんにいろいろと教えていただいたわけですが、この機会に、「女子大学」「新大学」「の問題を中心に、「女と教育」の問題を話しあっ

てみませんか。

益軒の「女大学」が普及した理由

A 益軒の「女大学」が普及したのはなぜでしょう。

マウア それでは貝原益軒のことを少し話しましょう。「女大学」は二百六十五年前、一七一五年ごろに書かれたのですが、実際に貝原益軒が書いたかどうか、はつきりわからないのです。この思想は中国の「女戒」などとほとんど同じです。ここを読みますと昔からいろんな人が「女大学」のようなものを書いたらいいですね。例えば藤原定家の「ちよともぐさ」とか熊沢蕃山の「女子訓」、成瀬いさこの「唐錦」、中江藤樹の「鑑草」、松平定信の「浪花絵」そして佐久間象山と吉田松陰の「女訓」。皆いろいろ書いたのですが、あまり有名にならなかったのは、やはり漢文の形で書いて、あまりまとめでなかったらしいんです。益軒は世の中には漢語の読めない人が多かったので、中国の思想をうまくわかりやすいように普通の日本語で書いたらいいのです。もちろんこの時代にはあまり読める人はいなかったのですが、読んでもらえば誰でもわかる、そういう意味で有名になったんでしょう。

F 他の人の書いたものも益軒と同じようなものでしたか。

マウア 漢時代の「女戒」をみると益軒ほどにはいろいろ

ろ書いていないんですが、ほとんど同じようなもの。例えば男の子が生まれたらベッドに寝かせ宝石を与え遊ばせる。女の子なら床の上で糸巻きを与え遊ばせるようなこと。

C 赤ん坊を床にですか？

マウア ということは女はそういうものだとということを経験から教えるということです。中国の「女戒」の話です。男は陽で女は陰だとか。一度離婚したら再婚はできないとか。十四世紀までは日本にはそういう考え方はなかったのですが、徳川時代に入って家康が、林羅山の儒教主義を必要としたのです。そのころから長男相続権とか家族制度が変わって儒教主義に合わせるようになって女大学のような考え方が多くなりました。

G 貝原益軒の「女大学」が一番受けがよかったというのはそういう時代の体制に一番合っていたからではないですか。

マウア それもあったのですが、他のものはむしろなかったのとは内容がバラバラでまとまっていませんでしたから。益軒は他の論文もたくさん書いてそれで有名になっていますし、ずっと明治時代までの説では、結婚するときは必ずお母さんから「女大学」の本をもらっているといわれています。

慶応義塾に女を入れなかった福沢



マウア 福沢諭吉の一九〇〇年代の社会では、女性の平均寿命は四十八才ぐらい。その上、千人産まれても二十才まで生きるのは半分の五百人位でした。そういう意味ではあまり女性にはヒマがなかったといえます。今は平均寿命が七十五、六才。五百二十六人中五百人が二十才まで成長しますから全然違ってきています。そこで当然福沢諭吉は、家庭だけの「女大学」を書いたと思います。もちろん農民もありますが、主に上流階級や外国人とつきあう人を対象にしていたと思われます。彼自身がそうだと思ひし、例えば鹿鳴館の社会とかその時代の女性に強く訴えたかったんでしょう。

A 鹿鳴館時代には上流階級に限られていたのでしょうか、かなり自由なものがあつたようですが、鹿鳴館がなくなつてからまた逆行したということがあつたらしいですね。福沢諭吉ではそのあたりの変化はどうなんですか。

マウア 彼自身が年をとって保守的になったのではなくて、最初は彼は、向こうの価値観にすぐ傾倒してしましました。その思想が実際にどうかはわからなかったと思いますが、本を読んだり外国の上流階級の人たちと話して自由主義や平等主義を支持したのです。しかしだんだん日本の政情をみてナショナリズムの必要を強く感じはじめたのです。平等主義の重要さは当然ですが、今度はその焦点が少し変わって、国を守るために女性を教育しなければならぬという考え方が強くなりました。そして

日清・日露戦争で日本が勝ったので、少し安心して、また昔の人間主義、ヒューマニズムに戻ったらしいのです。彼の一番最後の作品が「女大学評論」と「新女大学」です。ずっと考え続けてはいたらいいんですけれど。

でも彼自身の生活学には少し矛盾があるとよく聞きます。例えばこの中に「もし未亡人になっても再婚してあたり前」とあるんですが、実際には自分の娘の一人は未亡人になったが再婚しなかったのです。また、自分の子どもの教育も、娘さんが四、五人でしたが、一人だけはYWCAの創立者として社会で活動したのですが、他の方は普通の家庭の主婦になりました。また、私いつも思うのですが、慶応義塾ではどうして女性を入れなかったのでしょうか。不思議です。幼稚園には近所の子どもたちや先生の子どももいたらしいのですが、福沢が書いた「男女論」とか「女子教育」のことがこんなに文献があるのに、どうしてかしら。

E きっと頭の中でしか考えていなかったんでしょね。

福沢の人間平等もあくまで 家庭内だけにとどまった

A やはり徳川になってからの日本の家制度を守るためには政治的に便利な本ですね。家制度を守るのには女が犠牲にならなければ守りえないものだから。そういう政



治的なものに対する福沢の批判は、「女も人間として平等」という意味での批判にとどまっているのではないのか。例えば「教養をつけなければいけない」というのも、夫を助けるためといわゆる良妻賢母のためとか。益軒は、「女は手紙を書いてはいけない」と書いたのに対して福沢は、「夫が病氣になった時には医者に報告できるだけの知識や文字を書ける力を持たなければいけない」というような書き方ですね。その当時としては大変進歩的な考え方だったし、それをいま批判することは別ですが、例えばその当時の外国の、イギリスのミルなどと比較すると、大分影響も受けたんでしょけれど、「人間平等主義」にとどまったように思われます。

マウア 「彼の人間平等主義」は狭い意味あいだったのです。あくまで家庭の中の平等でした。それだけでも大変大きな進歩だと思えますけれど。

H 女性が社会参加することは考えていなかったのですか。

マウア 当時女性はやはり子どもが多かったし、寿命も短かったんで、そこまで考えられなかったのではないのでしょうか。理想はあっても具体的に実現しないと思うたのでしょうか。

今でも底流にある「女大学」の思想

D 益軒の「女大学」も明治に入って装いをこらして版

を重ね、女の自主独立を巻頭にくつつけて、しかし中味は変わらないもの、こういうものが新しい文明開化だということを出したね。やはり女はこうでなければいけないというふうに出て来たことに、福沢諭吉は反論したのではないでしようか。明治の情勢に合わせた改訂版が何冊も出ています。今は躰けと女の家事、育児中心に変わってきて……。

I もともと益軒の書いたものも朱子学の流れをくむもので、町人のほうがだんだん羽振りをきかせて、芝居見物をしたり、女のほうがいばったりということがあって、そういうことから守るために書かれたとか。

A もともと養生訓ですよ。養生訓の一つとして婦女訓という形で。

D よく売れたのはたしからしきですね。上流階級のために書かれたものを、手本としてみたいということ。

B 今、男女共学とか女権論がある中で、「女の子の躰け方」がよく売れるのと同じようなものがあったのかもしれない。

C 町人文化がさかんになる中で衣装なんかが派手になってくる。それを抑えるという特権階級の意志表示があったんでしうね。

マウア 寺子屋の場合は町人も多かったんですね。商売のためにそのとき寺子屋で「女大学」は習字の手本として、また精神修養の意味でよく使われたらしいです。町人はある程度平等だったんですがだんだんに明治憲法の



中で家族制度が強くなったんですね。

E 家族制度は武家だけのものだったけれど、それが国民全体にひろがってきて……。

C 明治まではかなり自由な町人の世界があって建前だけはどういうものだった。これが明治になってから建前が強くなって女のほうに強要されるようになったのだと思いますね。

マウア 福沢は国の独立のためにも個人主義が必要だったんでしうね。

A 今までは全部武士が抑えていて一般の人たちは文盲だったから、それでは新しい社会を築けないから明治になって個人の自覚ということをいったわけでしょう。それは富国強兵とか殖産興業とかいうようなそのための知識だけをもっと持つようということで、女の場合も最初は女が子どもを育てるのだから女も賢くなければだめだと、良妻より賢母のほうに重点があるわけですよ。それが明治の終りごろ資本主義が確立するにつれて変わってくる、そこが問題です。福沢が書いたのは明治三十四年、日本の資本主義は三十三年を境にしているわけですから、資本主義の高揚まで彼の思想はあるていど保全されたわけですよ。

なぜ福沢の思想は普及しなかったか

B 貝原益軒のほうなんか、いまでもきいたら喜んで

う人多いわよ（一同笑）。お姑さんなんか自分を守るために……。福沢が書いているほうは、例えばアメリカの独立宣言が、二十年ぐらい前にマッカーシー旋風で危険思想だということになったらしいけれど、この福沢の「新女大学」と「女大学評論」を今ふうの言葉に直してパンフレットにしたら、大変なことになると思うわ。

マウア ぜひ、やってみたら。当り前のようなこともあるし、今の時代でも通用する面もありますね。

C どうしてこの福沢のほうがいままで本にならなかったのか、それが不思議ですね。当然文庫本か何かになってもいいですね。

マウア その時代はそれほど有名にはならなかった。福沢諭吉は女性にすごく人気があったんですけど、どういうわけか、いまはないです。これは本屋さんで買ったんですが明治三十二年ですね、自費出版ですね。

B 今でも益軒流の考え方は社会の底流にあって、そういうものに反発して育ってきた人はすごく多いと思いますね。親がそういうことをいわなくても、社会が暗黙のうちに強制している。

C だからある程度成功したわけですね。益軒の「女大学」は、日本人の中にもう浸みこんでいる。「女大学」を読まなくても一つの考え方として定着している。

D こういうことは読まなくとも私たちみんな知っていましたから。

J だけど福沢のほうのは本にさえなっていないし、知



らなかったわねえ（一同同感）。全然普及していないんですね。

マウア 福沢があまりに進歩的だったから。いつの時代にも進歩的なものは社会に受け入れられない。

E 福沢の書いたころはもっと男社会だったから、これを読める女の人がどのくらいいたんでしょう。

B 字は読めても本を読む習慣がないんですね。今でも場末に行ったら女の子は中学生になっても新聞を読まない。男の子はまあ野球くらいは読む。生活の中で父親は新聞読んでも母親は読まないというのがあるんですね。女の人がたとえ週刊誌でもこんなに読むようになったのはやはり戦後じゃないかしら。

マウア この中にも書いてあると思いますが、福沢はそれを批判して、週刊誌みたいなものばかり読むからかって馬鹿になるんですよ、もっと良い本を読むようにと書いてますね。慶応義塾で出版された「物理学入門」は、外国の女の人と子ども三人が物理の本を読んでいる写真があって、女性も物理が必要というふうに……。

E 家庭でも物理が必要だから。

マウア そういう意味では良妻賢母ですね。

C 慶応義塾では福沢の思想が自由ということが戦争中もあれだけうたわれていても、女性に関するこういうものは、義塾の中でだって抹殺されて行ったんですね。

B ただ第二次大戦中日本が軍国主義になったとき、ユニフォームがあまりミリタリー・ルックでないのを守った

のは慶応だけだったとか。

C 男の側にはずいぶんそういう自由なものが生かされてきたと思うの。でも男女共学の中で福沢諭吉のこういう女性観を教えているところはあるのかしら。建学の精神が女性のためには生かされてない……。

B 男の自由と男に都合のよいことは別なんじゃない。ただ、他の大学と比べてどうかしら。慶応の学生はどちらかというと軟派でフェミニストが多く……戦前は慶応の学生が女の人とつき合うとき自然だったとか……。

マウア あくまで家庭の中の自由を書いたのですから。

K 男も女もみんな結婚するものとしていているというのは時代の制約もあるでしょうが……。

家庭内での男女平等をめぐって

E “親よりも舅姑を大切に”というのは根強いですね。女の人で自分の親が死んでも、夫から“お前はこの家に嫁に来たんだから年賀状も喪中にしなくてよい”なんていわれ、そうかと思っている。若い人がですよ。

C この貝原益軒のほうは私の親父さんに話されているみたい(一同笑)。私の父は始終こういうことを言っていましたから、この時代を生きちゃってきたのだ、うちの父だけじゃないと思うのね、それが知らずに私の中に生きている。

B ふだん無意識でやっているときは何でもないが、人



にものを教えるとかというときには、「女大学」のようなものが必要になる。

A どうしていいかわからないとき何か権威みたいなものに頼ろうとするんですね。

E 女の人は結婚して婚家先の家風に合わせなきゃいけないということに感情的には反発しますね。だけど女のさだめというかしょうがない、運が悪いとあきらめて受入れている。

A 私が育ったところは結婚するなら関東の男で、関西から向こうは大変なんだ、九州なんか男尊女卑で大変だということまで育ってきた。関西はこういう意識が強いと。

B 表面上はそうだけど、京都なんかで女の人に絶対の権限があるところもあるんですね。女は体制側から抑えつけられたけれども、表面は男をたてて実権を握るという面もあるんじゃないかしら。

E 何年前「男性操縦法」というのが出ましたね、あれもよく売れましたね。要するに男はだっ子なんだから、女はあくまで馬鹿だと思わせておいて、てのひらの上で……。

マウア そういう考え方はアメリカにもあるんですよ。

E 実力のある女の方はそのくらい心得ていますね。亭主の権威なんて空洞化しちゃって実権は握っちゃっているケースが多いんですよ。だからといってそれがいいとは思わない。若殿様をカイヤイにして家老が実権握ってもやはり家来は家来ですね、それは決して同権ではない

し。その中に女が安住し世間もそれを女の利口な生き方だとしている限り、平等でも女性解放でもないと思いますよ。

B マウアさんがさっき日本の女性は家庭の中で地位が高いとおっしゃったのはそのことでしょう。

マウア そうですね。ただ、今の若い人でもそれほど変わってはいないですね。どういうわけでしょう。

O アメリカでも女子大というのは花嫁修業みたいのが多いんですか？

マウア 結婚のため……というのは少なくなっていますね。ただ大学に入ったほうが、良い人と結婚できるから、というのはありますね。私が十年前大学に入ったころは、ハズバンドみつけるためというのが多かったですね。

F 九州の男性と京都の女性が結婚するとうまくいかないだそうです。というのは京都の女性は男性をうまく立てる利口さをもっていたんですが、九州の女性はただたてまつっていただけなんですね。表面は同じでも京都の女性の家の守り方と九州の守り方が違う。伝統の守り方にしても違うからうまく行かないという現象があるようです。

マウア どちらかというアメリカの南部が九州と似ているんですね。

C こういうことを女だけで話し合っていて、男は気がつきもしないんじゃないかしら。



B レクチャアする必要がありますね。

アメリカの女子教育と日本の女子教育

L アメリカの女子教育はどうなっているのかわからないので少し教えて頂きたいのですが。アメリカでも良妻賢母みたいのがあって、そこから少しずつ女性の地位が変わってきていると思うんですが……。

マウア アメリカの良妻賢母という意味は、内助の功だけでなく主人の仕事に対する興味と関心を持たなければならぬという考え方があったと思います。賢母の賢は子どものためだけでなく女性個人としての知識が必要ということ、日本とちよつと違うと思います。日本の場合家庭の知識というと子どもに関する知識ですから。

今のアメリカの社会と日本の社会を比較しますと、あくまで家庭の中ですが、日本のほうが平等だと思えます。というのはアメリカではもう少し中途半ばで、交換の時期ですが、二人ともが主人になって、社会に出ている女性も多いし、主人の仕事も手伝っているから困難です。というのは役割がはっきり分かれていませんから。階級によって違うし、上流階級は保守的で自由はあるが男性のほうが強い。また下流階級は民族でも違うし、黒人は女性が強いくともある。下流階級の男性は社会の中でうまくたかえないから女性の目からみると地位が低いんですね。中流階級ではちょうど変革の時期で

すね。

C 教科書なんかはどうですか？

マウア 日本の教科書ははつきり役割が分かれていますね。アメリカでは教科書の種類が多いし、各冊ごとに違いますが、PTAの女性とかまた女性のグループが批判して少しずつ変わっています。人間主義というのか、女性だけの役割ということではなく、両方とも家政学が必要とか、医者も男ばかりでなく、看護婦も女ばかりでなく……というようなことですね。different というこの意味は、私は「違う」というのはほとんど肉体的なものだけだから、男女の教育も平等であるべきですね。

B 日本の大学入試はベーパーテストだから男女の差別をしないのですが、アメリカは大学によっては入れないところがあるとか。

マウア 大学院の場合、医学部、法律、弁護士などはやはり差別されています。そういう伝統が強いですね。大学の場合はそれほどでもない。

B 日本では九州大学の薬学部では男と女とハンディキヤップをつけて女を制限したという話がありますが。

マウア やはり黒人と同じですね、黒人は今まで差別があつてハンディをあげないとよくならないから女にも少しハンディをあげないと……。

A いや日本の場合は逆ですね、ベーパーテストでは女の方がよくなつてちやうから。

M マウアさんも家庭科をお習いになったんですか。



マウア 今の人は自由に選べます。男の人で選ぶ人も多いですね。家庭と技術—大工なども女の人にとりまですね。内容は変わりません、男も女も一緒です。

B 日本で女子が家庭科必修になったのは三年くらい前です。それまでは選択でしたから。ただ日教組の年表にはいつから家庭科が女子だけになったというののっていないんですよ。

マウア アメリカでは女性もフットボールをやっていますし、スポーツも男だけがやって女が応援するのはおかしいとか。日本ではこういう女性解放グループ内ではいわれていても実際にはやられていませんね(笑)。

B 日本ではまだまだ貝原益軒が支配的なね。

P いろいろお話はつきないと思いますが……。

アメリカ人であるマウアさんに日本の「女大学」の講義をしていただいたわけですが、日本人である私たちはもっと勉強して歴史の中から女の社会的役割を見直し、あるいは私たちの暮らしの中に伝統として根づいている価値観等についても一度見直していきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

(「あごら東京」例会から)

「新女大学」「女大学研究」復刻版をお領ちします。

貝原益軒の「女大学」を全文引用しつつ、そのあやまちを鋭く追究した必見の書です。日本の「女」をつくってきた意識構造解明のためにぜひ一読を。一部五百円(送料二百円)。申込先「あごら」

「アリスたち」はなぜ失敗したか

——一九七五年のアメリカ合衆国婦人運動——

河野 貴代美

●現地での情況

十月二十九日、NOW（全米婦人機構）のスポンサーで、全米の女性に「アリスは……しない」ストライキデーが呼びかけられた。

その日はフィラデルフィアでNOW全国大会が開催され、参加した一同疲れてボストンに帰ってきた翌々日だった。私は午後からフィラデルフィアの大会に同行した友人のホテルに忘れものをしてそれを持ち帰ってくれたGさんの職場に受け取りに

行った。道中で、そしてまたGさんの職場で、私はこのストライキが、少なくともボストンでは失敗であったことにすぐ気がついた。ストライキ参加者、同情者は黄色い腕章をまきつけていることになっていた。黄色は五十五年前の婦人選挙権獲得勝利の際、髪に黄色いリボンをつけたところからきている。ところが私は腕章をつけた人をたった一人見ただけでGさん（NOWボストン支部理事）さえ腕章をつけていなかった。それどころか彼女は職場にでていた。私自身はたまたま仕事休みだ

だったので腕章はつけたけれども、その日ボストンの中心街で行なわれた特別集会には参加しなかった。もし普通の日ならストをしたであろう。しかし私の職場は利益を目的とした生産にかかわりがないので就業規約もゆるく、私が一日ぐらいストをしてもクビになる心配などない保証があつてのことだった。

昼休み中、Gさんと立話をしていたら、私の黄色い腕章に目をとめた二、三人が近づいて来、私の説明をきいて、そんなことが行なわれているの、というような顔をした。同じ

ようなことがもう一度立寄ったある場所でもあった。

夜、もどってきた夫がストライキはどうだったかたずねたので、私は失敗に終わった、と言った。こんなに失業率の高い時期にストライキを打つのはどう考えてもタイミングが悪い、と彼は言った。そしてスト中の私のために夜はレストランに連れていってくれた。NOWの会員である私のストライキデーはまあこんなふうにして終わった。

翌日の新聞（ボストングローブ紙）は、手をつないだ女たちがマサチューセッツ州庁の鉄門に、「女ストライキ中」の大ブラカードをひっかけてデモをしている写真をのせ、何人かは参加したが、ほとんどは参加しなかったことを報じた。

このブラカードについてはひとつもめあった。州庁詰めの警官はこの大ブラカードをおろすことを命令したが、女たちはもしこのブラカードをおろさなければならぬなら、ボストン市庁にある「私たちはレッドソ

ックス（去年のワールドシリーズに大接戦の末やぶれたボストンの野球チーム）が大好きだ」という大たれ幕もおろせ、と詰めより渡りあつたという。

テレビも同じくストライキが低調に終わったことを報じた。ボストン百人、ワシントンでは八百人がホワイトハウスにデモし、フィラデルフィアでは二百人が集会とデモをした（HERALD紙）。お膝下のカリフォルニアでは二千五百人の盛んなデモが行なわれた（友人Mさん）ということだが、全国的にみると（共に、同通信による）ほとんどの有職婦人はストのことを知らないか、関心がないか、あるいは余裕がないかのいずれかの理由で、普通のように仕事にでた、という。NOWボストン支部長のSさんは主婦で、彼女の夫はスト中の彼女を支持するため仕事を休んで一日主婦をしたということだが、Sさんのような型で家庭の主婦が参加した例はもちろんそう多くはないと予想される。

●アリスたちの目標

ところで、「アリスは……しない」ストライキデーについて少し説明しよう。

「アリス」は、「アリスはもうここに住んではない（Alice doesn't live here any more）」という映画の主人公の名前である。アリスは四十才近くになって突然夫の死に会う。小学生の一人息子をかかえて女であるためのハンディキャップとたたかいながら、恋人にもベタッとよりかかってしまうことなく明るく生きていく。スト呼びかけのパンフレットは、「あなたは体制を——アリスと彼女の可能性を無視し、抑圧し、閉じこめ、剝奪し、制限するこの体制のあり方を知っていますか」と始まる。そしてさらに「私たちはこんな体制を支持しないのだ、ということをストライキによって示していこうではないか」と呼びかけている。例えばアリスはどんなことをし

ないのかという(要約)。

。家庭の内外で働かない。アリスは仕事に行かない。

。ストライキデーにはどんなお金も使わない。体制を支持しないため、どんなものも購買しない。

。どんなヴォランティア(奉仕)活動もしない。ヴォランティアをしている人は仕事への認識とペイを要求する。

。アリスはフェミニストでない政党の立候補者を支持しない。

。アリスは育児をしない。アリスは育児における父親の義務を母親のそれと同じと信じている。アリスはストライキデーに父親が子どもと時間を過ごすことを要求する。

もし必要なら子どもを父親の職場に連れていくことも。

。マス・メディアによって作りだされる女のイメージを支持しない。

。フェミニストでない「伝統的」施設、ビジネス、政府、教会、組合等を支持しない。

。アリスは男のエゴを社会的、経済

的、政治的に支持しない。

そしてアリスたちは、「彼女を楽しくさせること、彼女の要求を満足させること、自由で幸福である彼女の権利を満たすことだけをする」――

具体的には集会をしたり公園にピクニックに行ったり近隣同士で勉強会を開いたりする。芸術家やもの書き、写真家、演出家はもれなくストライキデーの様子を収録し、音楽家はコンサートを開く。軍隊にいる女は制服でパレードをやれ、というぐあいである。

●なぜ失敗したのか

ところがこのストは、冒頭にふれたように失敗した。地域的にはロスアンジェルスのように何千人もがデモをしてアリスの意図を示したところもあったが、全体に盛りあがらなかったことは否めない。もちろん失敗に終わったからといってそれをあげつらって大声をだす必要などない。

い。大事なことは失敗から私たちが何を学べるかということだ。

そこで幾つかの原因を考えてみると、

まず第一に宣伝の不足があげられる。私などもフィラデルフィアの大会でこのことを知った。もし大会に出席しなかったら当日まで知らなかったであらう。多分宣伝の不足は資金の不足にもよっていただろうと想像される。

第二にストライキはNOWの主催だが、他の女のグループとの連帯に失敗した。全米ウーマンズアジェンダ(後述)の支持が得られなかった。

第三にタイミングの問題。いうまでもなくアメリカは不況の嵐が吹きあれていて、簡単にクビになる事情を考えれば、おいそれとストに参加できない。例えば失業率が全国平均より高い(十四%)ボストンでは職場ストより職場内で黄色の腕章をつけるよう奨励した。

第四にストの焦点の問題。テーマ

を「現体制の非支持^シ」とし、個々の立場からの体制非支持の具体的な行動を提示した。けれども多岐にわたる訴えは、ストの目的をかえってばやけさせてしまった。これは非常に盛上った五年前の婦選獲得五十週年記念という単一焦点のストと比較すれば一層はつきりする。

第五にNOW内部の対立と分裂の危機。これについては「あごら」十三号にNOW全国大会見聞記として報告してあるので参照して頂きたい。NOW育ての親であるベティ・フリダーンが去年の大会でみられた主流派の政治的革新的動きに反対して去年暮に「Tomorrow」というグループを作った（ウィレッジ・ヴォイス紙）。いまこれを書いている時点（二月末日）で、ベティが「Tomorrow」をNOWからきりはなして独立したグループとしたか、あるいはNOW内での反勢力として主流派攻撃のために使うのかどうかわかっていない。

● 転換期に立つ

● 合衆国の女性解放運動

ここで去年一年間の米女性解放運動をふりかえってみるとこういうことが言える。それは、今まで米国女性解放運動が着実にその成果をみせ、その思想がよく女たちの中に根づいてきた奔流が、ここに至って一つのつまづきをみせ、足ぶみしながら新しい方向を模索している、ということである。NOWの内部対立はこの運動のゆきづまりをある意味では反映した。「アリス」の失敗はその具体的証拠である。

過去の十年間、運動の主体となってきた中産階級教育ある女たちは、ある程度自分たちの要求をかちとったとして最近多くの者が家庭にあるいは個人生活にもどってしまった。彼らにとって代って若いラディカルな連中がイニシアティブをとりはじめた。そこには世代や世相のギャップがある。例えば十年前、女た

ちが妊娠^{アバ}中絶法を訴えていた時、その背景には、薄暗いスラムの、出口のわからないような迷路の壊れかけた家に見はりをたてて、医者^{ドクター}の免状もないようなものが手術を行ない多くの生命が失われたり、体が損なわれたりしたという事実があった。今では多くの州で中絶手術が合法化されている。若い世代はそんな現実離れのしたような話を身辺に見聞きしていない。そこに意識におけるギャップがある。さらには先にも書いたように運動の目標として、最初にかげられたいくつかの項目は達せられたか、あるいはかなりの程度は正されてきている。その総括にたつて新しいテーマを打ちだしていくという総合的な努力がなされないで、各自、各立場で言いたいことを言うという現象は、運動の焦点をまとまりもなく多様化させている。もちろん、わずかのニュアンスだけで違うようなたくさんのグループが存在する。それを全国的に把握することは非常にむずかしい。一日だけで消え

るグループもあるのだから。このような運動の広がりとは多様さの中で、ウーマンズリブが女たちをまとめていくための中心となるテーマを把握しえないでいるその焦燥が、ぶつかりあいやいがみあいとして去年は顕在化した。

その否定的なエネルギーは、著名なリーダーたちに対する個人攻撃にむけられた。例えば「MS」誌のグロリア・スタイナーは急進派グループからCIAとの関連を攻撃された。彼女は自分の反論をフェミニストのメディアに訴え、また他のリーダーたちも彼女を支持する一文を次々に寄せた。この経過の詳細は省くが、ウーマンズリブの屋台骨を支えるもの、姉妹愛や同志愛、信頼などは、急進派グループにとっては何であるのか、私などには理解出来ない感覚の違いがあるように思われる。

ベティ・フリダーンも米国グラスルート派の人々によって、彼女の指導性を、特にメキシコ会議で非難さ

れた。ベティは自分を売るためにウーマンズリブを利用している等々。私の尊敬するボストンのテレビ局婦人部長のEさんはベティ非難派で、私は彼女と渡りあった。ベティが良からうと悪からうと、彼女を非難するというエネルギーは絶対否定的なものだ、そしてそれは浪費だ、ということを。ヴィヴィアン・ゴニックは「ヴィレッジ・ヴォイス」というニューヨークの週刊紙に、とにかく内輪もめをやめよう、さもないければウーマンズリブ運動はバラバラになつてしまふ、ということを切々と訴えている。

リブ運動が足ぶみをしている間に運動に反対する保守勢力（女は家庭に式の）も、よく組織された力で攻撃にでている。その勢力の中心になつてゐるのは男ではなくて女である。男女平等を憲法にうたう（ERA）ためのニューヨークとニュージャージーでの住民投票では、反対派のキャンベーンは女たちにERAに対する誤解をめぐりに植えつけ、この

二州でのERAは失敗に終わった。こんな混沌の中で、どうしたらいいのか、いまの私には明快な提案などはない。

●新しい明日を期して

もつとも、だからといって何も悲嘆にくれている必要はない。いうまでもなく去年は国際婦人年であった。（ご承知のように国連は去年からの十年間を国際婦人十年とした）。婦人年にふさわしく、政治・経済・文化方面に多数の女性の進出がみられた。イギリス大使、コネチカット州知事、住宅大臣、女の銀行、有名病院の外科部長、メトロポリタンオペラでの指揮、映画製作等々、あげてゆけばきりがなし。女たちに機会が与えられるようになったという点でみるならば、たいした評価がなされてしかるべきだろう。何も男の価値に支配された体制内のラットレースに加わる必要などないといつて憤然と提供されたボジシヨ

ンをけることだってできる。それもそれでよいだろう。ステイタスやポジションがあってもなくても、個人は各人の立場からウーマンズリブの理念に基づいた社会改革の試みに参加してゆかれるはずだ。すべての人の意識のレベルを全く同じにするなど不可能なのだから。

もう一つのポジティブな面は、ギャロップ世論調査によれば、全米のアメリカ女性の約六〇%がウーマンズリブの目標を支持する、という結果を報告したことである。この比率は特に二十才から四十才までの年齢層では七〇%近くなっている。

メキシコ会議で中南米の人たちから米フェミニストは米帝国主義のさしまわし者として攻撃された。日本のフェミニストは、中南米の人々に対する米フェミニストの無反応ぶり

に失望落胆されてしまったようだが、もし米フェミニストが開き直って「ええ、そうですよ、私たちは第三世界はおろか、どこの国のことだって関心を示してこなかった。私たちはただアメリカの女のことのみにかずりあつてきた。そしてそれだけの成果をあげてきている。けどあなたたちはどうなんですか？　あなたたちはあなたたちの国で、あなたたち女のためにどうなんですか、何をしているんですか？」と問うたなら、何と答えられるだろう。攻撃も非難も、それから後のことだ。

去年は六月に婦人国會議員を含む女のグループリーダーが集まって全米ウーマンズアジェンダ（婦人要求事項）をだした。これは全米婦人団体九十、所属婦人数百万人を網羅する。団体は宗教的（YWCA、婦人

教会連合）、ウーマンズリブ（NOW、全国ゲイ分科会）、人種的（黒人婦人連盟、ユダヤ教婦人連合）、経済（婦人商工業者協会）、労働組合と大なる領域を含む。事項は、ERA、政治への参加、平等な教育と訓練の機会、意義ある仕事と十分な補償、十分な住宅、人間としての尊敬等の十一項目をかかげた。

アジェンダをだして半年、この連合体は、今まで特に目立った活動をしていない（もちろん活動体ではない）し、NOWの主唱したストライキデーにも協調できなかった。しかし、これだけ多くの婦人団体が一緒になって人間としての要求をだしたことは画期的なことである。事項を達成していくために、具体的に何をしていくか、見守ってゆきたい。



窓

あなたに見えますか。瞳を開いてしっかり見据えてください。

育児休業法は婦人労働者の特効薬か

産休明けから子どもが満一才に達するまで、育児のために職場を休むことを許可する法律、いわゆる「育児休業法」(条文は巻末に掲載)は昨年七月の七五国会で成立。女教師・看護婦・保母を対象に、この四月から施行される。それに伴い、現在各都道府県では条例化が急がれている。

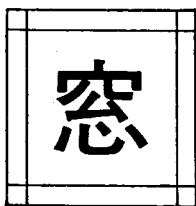
「育児休業法」により育児期の勤労婦人の苦境を救い、退職者を減らすことができる、と評価する向きもあるが、婦人問題全体としてとらえるとき、はたして前進と受取ってよいものだろうか。育児休業法成立までの経過を追いながら、その問題点を明らかにしてみたい。

育児休業法のさきがけとなったのは、電電公社で四十年に採用された「育児休職制度」である。最初全電通組合は選択制、現職復帰、有給、の三原則を要求したが、公社側の反対で、無給という条件のもとに成立した。日教組婦人部は四十年以来「育児休暇」の立法化運動に取り組んできた。四十二年、社会党は「三原則」を骨子に「育児休暇法案」を国会に提出した。四十六年、自民党は党内に専門委員会を設置し、無給、対象を教員・看護婦・保母へと拡大した案をまとめた。そして国際婦人年の五十年七月、衆院で自民党原案の「育児休業法」は超党派で提案可決された。この十年間の経過

の間に、最初は有給の「育児休暇法」が、四十七年「勤労婦人福祉法」が出たころから、政府の労働政策に有利な無給の「育児休業法」へと変質していった。

では成立した育児法にはどのような問題点があるだろうか。①育児は女の役割という考えを固定化する②対象が教員、保母、看護婦に限られ、労働者の分断を招く③婦人の労働権が奪われ、婦人の労働力は能率が悪いと敬遠されるようになる④産休延長獲得運動や、零歳児保育所増設運動が鈍化されるなど、一歩間違えば婦人労働者の命取りにもなりかねない。

十年間かけて闘い続けた育休だが、実際の運用面にも困難がつきまとう。まず無給であること、すぐに補充員がみつかる保証がないこと、この制度があることで保育所入所の優先順位が下がることなどが考えられる。さらに、第二子出産の



婦人問題企画推進会議を見守ろう

際に育休をとると、今まで保育所に入っていた子どもまで家に帰されてしまうおそれもある。育休期間が終わったときに保育所がないのでは、実質的な退職に追い込まれる危険がある。また教員の場合、育休をとらない教員に対して生徒の親の風当りが強くなることも考えられる。産休→産休補助教員→産休明け、と担任がたびたび変わるより一年間続けて休んでもらいたいと考えるからだ。

育休法がこのように不本意な形で制度化されてしまったので、今後の課題は多い。これに対し、定員を増やして育休代替を定員内で賄うとか、休業中の生活保障、育休を男性にも広げる、など、改善のための運動を始めようとする動きもすである。しかしソビエトなど社会主義国では育休そのものが、労働権の放棄と受けとられて無給が原則となっている例もある。婦人の労働権を尊重しつつ、母性を「保護」としてでなく「保障」として認めさせる方向に向けて私たちはどう闘うべきか。資料をもとに読者とともに考えていきたい。

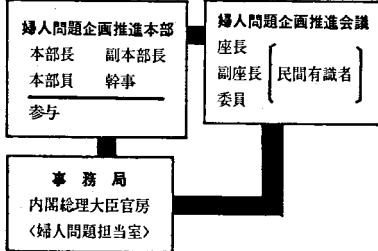
国際婦人年世界会議で採択された世界行動計画の実施について、各国はその国情に沿った行動計画を策定し実行する道義的義務を負っている。その基本案について、政府は総理府に婦人問題企画推進本部を設け、推進会議を開いて検討を進めている。これは今後十年間の日本の婦人政策の基幹となるものであり、国民が

納得できるものでなければならない。はたして、実際にはどのようなことが行なわれようとしているのであろうか。巻末に資料として議事録を掲載したので熟読してほしい。

企画推進本部

総理府に設置された「婦人問題企画推進本部」は、国際婦人年世界会議における決定事項の国内施策への取入れ、その他婦人に関する施策について関係行政機関相互間の事務の緊密な連絡を図り、総合的かつ効果的な対策を推進することを目的としている。

婦人問題企画推進本部機構図



窓

あなたに見えますか。瞳を開いてしっかり見据えてください。

本部長 内閣総理大臣

副本部長 総理府総務長官

本部長 関係省庁事務次官

幹事 関係省庁官房長

参与 本部長が委嘱する有識者四名。

非常勤 任期一年。

石原一子（高島屋東京支店）

影山裕子（電電公社経営調査室調査役）

湯沢雅彦（お茶の水女子大教授）

渡辺道子（弁護士）

企画推進会議

総理府が選んだ有識者三十三名で構成され、総会と三つの部会をもって運営している。

第一部会（教育・労働）

江上フジ（東郷学園学園長）

大森文子（北里大学病院看護部長）

上坂冬子（評論家）

久保田きぬ子（成蹊大学教授）

小菅丹治（朝伊勢丹社長）

佐藤忠良（中央青少年団体連絡協議会委員長）

塩ハマ子（朝日本女子社会教育会常務理事）

多田とよ子（センセン同盟常任執行委員）

滝沢正（医療金融公庫理事）

西清子（評論家）

都留重人（二橋大学名誉教授）

波多野勤子（朝ファミリースクール理事長 心理学者）

丸田芳郎（花王石鹼副社長）

山本まき子（日本労働組合総評議会幹事）

市川武雄（電機労連中央執行委員）

大友よふ（全国地婦連副会長）

小林ツ子（全国農協婦人組織協議会会長）

千宗室（茶道家）

田中澄江（劇作家）

田村誠（朝ベターホーム協会理事長）

中鉢正美（慶応義塾大学教授）

縫田嘩子（ジャーナリスト）

前東京都民生局長

福武直（東京大学教授）

第三部会（社会・国際）

扇谷正造（評論家）

久米愛（弁護士）

アリス・ケリー（医師）

相馬雪香（評論家 日本退職女教師連合会）

高田ユリ（主婦連合会副会長）

中込富美子（国際検査副社長）

中根千枝（東京大学教授 文化人類学者）

藤田たき（前津田塾大学学長）

山本松代（総合生活研究家）



ヴィーナスの鏡 神川秀彦

♀ っていう記号習ったでしょう。
メスのマーク。

あれはヴィーナスの鏡を型どったものなんです。

オスのほう、♂ っていうマークは、なんだかわからない。

マークからして由緒正しくない。

これでは不公平だって、男の子は考えるんだけど、

いくら考えてもどうにも仕方ないというか、無駄な抵抗というか、

マークに限らず、どうも自然界ではメスが優遇されている気配がある。

例えばですね、アンコウなんていう魚の堂々たる姿は、

あれはみんなメスなんです。

オスはエダマメぐらいの大きさで

メスの尻にぶら下がって目に入らない。

神様はオスなんていうのは花粉に手足が生えたもんで十分だ

とおっしゃってる。やじゃあないですか、ボクは反対です——

と男の子は思うんだけどダメで、

立派な男である立派な生物学者が敢かにのたまわっているわ。

生物は本質的にメスであり、オスは運び屋であって、

メスのまわりをウロウロして保守整備に努める役柄はどこまでいっても変わらない。

ヒトもまた、同じである、と。

左様。女性とはかくも、海のようにも空のようにも大きな存在であります。

そして、ここがいちばん大切なところだけど、

男たちは、それぞれのヴィーナスを通じてのみ、

自己を満たすことができる。

すぐれた自然科学者でもあったゲーテは言っています。

「かつて満たされざりしもの、いまここに満たさる。

名状すべからざるもの、われらを引きて昇らしむ」。

永遠にして女性的なるもの、われらを引きて昇らしむ」。

おわかりですね。女性は存在するだけで価値がある、という意味が。



合成洗剤を洗う……仮説実験教室

東京のはずれ、西多摩の福生を中心に地域に根ざした活動を続けているグループ「私たちのくらしを考える会」が、福生市の福祉会館会議室を借りて、三月初旬の日曜日、仮説実験教室を開いた。

私たちは合成洗剤の恐ろしさについて新聞や雑誌からの知識や、自分の手あれの原因が合成洗剤を使っているからかもしれないと、うすうす気がついてはいても、果たしてほんとうにそれほど危険なものか、その恐ろしさがもうひとつ実感できないところがある。今回の実験教室は周到に準備されたテキストに従って、実験を進めながら、合成洗剤の恐ろしさをこの目で確かめようという試み。

著名な研究者や専門家を招いてというより、すべてを自前でやりたいとの考えから、実験の講師は地元中学校の化学の

先生、実験助手は小学校の先生。当日、子連れの母親のために別室で開く保育室の保母、保父も、もちろん主催者側の主婦や青年が交替で当たる。

五十円のテキスト代を払い会場——といってもやっと三十人分ほどのいすと机が並んだ狭いところだが——に入ると、机の上にはピーカーや試験管、フェルトの布切れなどが並んでいる。テキストに沿って講師の話が進む。

問 洗濯にどんな洗剤を使っていますか。

問 食器洗いにはどんなものを使っていますか。

問 髪を洗う時に何を使いますか。

質問に答えていくうちに、洗濯用、食器洗い用洗剤だけでなく、市販のシャンプー、はみがき、クレンジー、毛糸洗い

などはすべて合成洗剤を原料としていることがわかり、まずビックリ。

次に金魚の実験で、市販の台所用合成（中性）洗剤を水でうすめたものと、粉石けんを水で溶いたものを用意し、水槽から出した金魚をそれぞれの液につけるといふもの。前者には個体差を考慮し二匹の金魚をつけて、すぐに、水を入れてあるピーカーAに放す。後者には一匹だけをつけて、ピーカーBに放す。するとAの金魚は二匹ともピーカーの中でクルクル回り出した。

この実験教室の目的は、自分の目で確



ドメス出版 婦人思想形成史 ノート(上)

丸岡秀子 ●1300円
明治の変革期から敗戦までに展開した婦人の意識と行動 その思想としての結晶の軌跡を追った婦人思想形成史

高知県婦人解放運動史

外崎光広 ●2500円
先駆地 高知県に視点を据えその資料の豊富さ その内容を凝視する眼からは 何が真実で何が虚偽かを深く学ぶことがで
きる——丸岡秀子

ふるさとの女たち

大分近代女性史序説
古庄ゆき子 ●1300円
従来の女性史がひらき得なかった新しい地平をひらいた労作
女たちの解放の質と方向を見さ
だめるため ぜひ読んでほしい
——もうさわようこ

戦後婦人問題史

一番ヶ瀬康子編著 ●1500円
婦人問題と運動の領域を戦後史に総括 70年代における運動の大衆化 構造化の可能性を展望

女が働くということ

技術革新への婦人労働問題入門
西 清子 ●700円
家庭か仕事かの悩み 共稼ぎ
中年再雇用の問題などをとりま
く状況と変化の中で 考え生き
る姿勢を示唆する

東京都豊島区駒込1-35-2/〒170
振替東京48766/電03-944-5651

かめることと、もうひとつ、石けんと合成洗剤の違いをその基礎的なところから押えていくというところにあるとか。石けんの石けんたるゆえんである親水基と親油基の説明を、講師は黒板に分子式を書きながら非常にわかりやすく解説する。もう十数年も前に習った中学の教科書を思い出し、私たちは石けんについてその基礎を一度は学んでいたことに気づき、ハッとした。化学など縁がないと思っていた私も、思わず熱心にメモをとっていた。

ふと目をピーカーに向けると、Aの方の金魚は二匹とも腹を上にして、浮いてしまっていた。この間わずかに十五分。

Bの方ははじめの水槽にいた時と変わらず、元気に泳いでいる。金魚は体積が小さいから結果が現われやすい、との講師の説明を聞くまでもない。実験に使った食器洗い用の中性洗剤を、現に今、家で使っているというお母さんもいて、その人にはこの金魚の死に方はずいぶんとショックだったらしい。

こうして分子式の解説、キュウリやフエルトを使った浸透力の実験、界面活性剤の話など、三時間はどはすぐにたつてしまった。私にとって何より驚いたのは、いまだに中学の家庭科の教科書に、キャベツを刻んでから中性洗剤の水溶液で洗いなさい、と記述してあるという

話。あらためて合成洗剤の恐ろしさを知るとともに、世間の関心の低さにくぐ然とした。それは私たち消費者の間でも同様で、今回の催しも事前に駅や保育園でビラを配ったり、ポスターを配ったりしたにもかかわらず、三十人足らずの主婦や青年しか集まらなかったという、主催者の話が心にしみた。

この実験教室は一回限りのものではなく、今後も合成洗剤をテーマに月一回程度の割合で開いていくとか。地域に根ざした力強い活動へと発展することを祈りつつ失礼した。

連絡先 “私たちのくらしを考える会”
0425・52・2967 (高橋)

グループ・サバト

多くの女たちは、それこそへ素手^ヘで生きてきたし今も生きている、と思う。では、これからの女は、支配する側の男たちが手にしてきた権力^{II}地位・名声・金等々で武装しようとするのだらうか。おそらく、そんなことはないだらうし、そうであるなら、今まで素手で生き抜いてきた女たちの歴史の意味が失われてしまっているにない。その歴史が示しているように、素手の「やさしさ」は、あの原始共同体が私有財産の発生をもって終焉したところから踏みじられ続けてきたのだった。エンゲルスや高群逸枝によれば、原始の母系時代、女が尊ばれていたころでさえ、女のそれは、決して「権力支配」のそれではなく、人々は平等であつたらしいこと。むしろ、権力に至るには経済的に未成熟であつたからだらうが、わたしたちは、女には権力支配の時代はなかったのだというイメージを大切にしたいと思うのだ。その

像を起点にしなければ、疲弊した現代の支配社会を超えていく道すじを探し出すことはできないような気がしている。

わたしたちグループ・サバトのメンバーの大半は、決してエリートではないが、だからといって最低限の生活を強いられているわけではない。その中途半端な生活のありようが、だからいっそう、わたしたちを居心地の悪いいら立ちへと追いやっていともいえる。しかし、そこで重要なことは、資本主義社会に生きる女たちは、たとえ現在の生活にはことかかなくても、社会的状況の大きな変化（不況^{etc.}）、否、少々の変化でも資本主義が打倒されない限り、あつてなく地面に叩きつけられてしまふということなのである。

一見、穏やかなサラリーマン家庭の主婦としても、夫の死後、手に職がなければそれまでという状態。エリートだらうがブチブルだらうが、「女である」ということだけで、その生活は一挙に、転落する可能性を不断にはらんでいて、現在、最低限の生活にあえいでいる女たちと本質においては何ら異なるところはないのだ。だから、わたしたちは、今の生活がどうであれ、その加害と被害の両方をもろとも背負い込んだままで、最も抑圧されている女たち、人々と連帯できうるのだし、またそうすることで、自分たちの本質を確かな手ごたえとして受けとめられると思う。ただその場合、最も抑圧されている女たちと本質的には同じでも、現に今はそうではない自分の、その異なる部分を安易に切捨て、なし崩しの連帯を求めたところで、何のリアリティも持ちえない。あえていえば、わたしたち「中途半端族」には、それなりの闘い方があるだらう。

そのための第一歩は、今の生活を「より良くするために何かをかくとる」などという感覚ではなくて、まず、素手で生きてきたはず



のわたしたちにも近代文明の恩恵と共に与えられてしまった虚飾を、一枚一枚はぎ落としてみることはできないだろうか。解放・自由を求めるあまり、ついつい、わたしたちの意識は、何ものかを獲得する方ばかりふり向けられやすい。もちろん、現体制あるかぎり、当然の権利の要求を怠れというのではない。ただ、これだけはゆずれないはずの自分の本当の存在の形すら、近代主義の虚飾によって着ぶくれてしまったわたしたちは、ひょっとすると忘れてしま

っているのではないかという危機を感じてしまうのである。

だから、社会的な闘いの中で、同時に余分な意識を脱ぎ捨てて、原寸大の自分を、自身の目にさらしていく勇氣を持ちたいと思う。それは、多くの努力を必要とするが、ごく日常的な作業であるはずだ。例えば、相手の体に響いていく声で話すこと、虚勢のない開かれた姿勢で対すること、ごたいそのうな自意識は捨ててみることに、本来に必要なものは何であるのか、先走りする私有意識をポーンと川の向こうへでも、何気なく放り投げてみるような気持ち、等々……

この社会を非難しつつも、わたしたちは、けっこうその見せかけの安逸に身をゆだねて、結局そのことで一層の居心地の悪さを生み出している。まつわりついている頼魅魍魎を、ヒョイと逆立ちでもして振り落としてしまうような姿勢を持ちたい。そうして、もはやギリギリ捨てられないで浮かび出

てくるものの形を見極めよう。実際に、被害・被抑圧の側であつても被害者意識だけでは、もうやっていけない。社会的矛盾とコミにして、自分自身の大改造も、思いきってやってしまおう。多分、一回きりしか生きられないのだから。

グループ・サバトは、そんなふうな集まりです。高群逸枝を読みながら（今後は他のものも）、集会・デモにちょいちょい参加したり、それこそ、自分自身であるはずなのに自分のものとも思えない意識・肉体のこわばりから脱するために、あるいは、子供を自然に生める力を取り戻すために、ヨーガや中国の体操、八段錦など試みながら、みんなでワイワイと、ヘタはヘタなりにがんばっていて、〈運動体〉にはつきものの停滞期もあるにはあるけれども、すぐにまた居心地悪くなって住み家を這い出し、モゾモゾと再生していくわたしたちなのです。

青空テントー76

誰でも“本物”の良さを知ったら、価値がわかったら、もう二度と“ニセ物”には手が出せなくなる。

今、世に多くの“ニセ物”が氾濫している。その中で“ニセ物コンクール”最優秀賞は、さしずめ“合成洗剤”であろう。一見まっ白な洗い上がり、洗浄力、匂い。粉石けんにそっくりである。その見事な化けっぶりと値段の安さという魅力（ニセ物とて、何か一つぐらいいは魅力があるもの）で、こわずか二十年足らずという、またたく間に普及。片や二千年以上もの歴史を持つ石けんにすっかり取って替わってしまった。“石けん”が“席巻”された、なんてしやれにもならぬおかしい現象が、確実に起こってしまったのだ。

その結果、主婦の手荒れ、皮膚湿疹、赤ちゃんの肌荒れ、おむつかぶれ……。患者急増に、一時は医者も治療方法がわからず、首をひねった。そのうち犯人は家庭の

台所で使っている中性洗剤、合成洗剤らしいとわかり、単にそれらの使用をやめさえすれば症状はたちまち快方に向かった。

川や海の汚染。例えば多摩川の東横線のガード下のあたり、あるいは東京湾の沖合に、“公害観光”を試るが良い。風に舞う白い泡の花。船が通過した後、二時間たっても消えぬ白い泡の航跡……。石けんではこうはいかぬ。泡の寿命は、せいぜい三、四十秒。二時間などとても……。これも洗剤の仕業だ。

合成洗剤、中性洗剤は、形を変えて食べ物の中にまで入り込んでいる。アイスクリーム、マヨネーズ、チョコレート等。乳化剤、糊料、などという色々な名称で知らぬ間に私達は試食させられている。

恐ろしき合成洗剤

〈発足〉

青空テントは、この合成洗剤追放を目的に発足した消費者運動体

の一つである。グループ結成のきっかけは、二年前の参議院議員選挙。全国区に市川房枝さんを担ぎ出し、理想選挙で戦ううちに、テントを張った選挙事務所を通じて合成洗剤の恐ろしさを訴えた。候補者のネームバリューに支えられてか、予想以上に多くの人が立ち止まり、真剣な面差しで耳を傾けた。確かな手応えであった。

選挙が終わってから早速、グループ作りが始まった。何回かの討議の末、次のようなことが決まった。

- 1 空地にテントを張って、粉石けんやバネル、パンフレットを置き、合成洗剤の追放を訴える。
- 2 テントの開催は原則として月一回とする。
- 3 他の消費者運動グループとの交流をはかり、横の連絡を密にする、など。

発足メンバー十五人。二十六、七才のサラリーマンから大学生まで、ほとんどが戦後生まれ。

連絡先 東京都太田区中央1-8-8
石川 気 付

TEL 03-775・8769



テントの色がブルーであることからグループの名称を「青空テント74」として、第一回のテントを九月七日、阿佐谷のある銀行の支店前を借りて行なった。しかしこの場所は人通りが少なく、立ち止まる人の数より運動している側の方が多いため。近くに喫茶店や食物店もなく、朝から晩まで全員、一滴の水も飲まず喉が乾く。道行く人に「合成洗剤は危険です」と呼びかけるのでもカラカラ。残暑の照りつける中で、疲労と赤字だけが残る散々な出足であった。

有機農業運動を柱に合成洗剤の追放から食品添加物による食品公害、そして昨年から有吉佐和子さんの「複合汚染」などの触発を受けて、食べ物と健康の関連から、土づくり、つまり有機農業

の大切さを理解。早くから有機農業に取り組んできた少数の農家とも交流を始めた。

種まきや雑草取り、稲刈り。休日や祭日を利用しての援農である。都会と農村に別れて住む者同士がはじめて知り合って気がついた。これまで両者はあまりに分断されすぎてきた。何者かによって。その見極めがついた。

もともとボランティア活動は理想選挙で鍛え済み。それに若い集団だから身体を動かすことはおっくうがらない。青空テントは便利である、というわけで、あちこちからお声がかかるようになった。お陰で大忙し。今年度のスケジュールは、もういっぱい。

本来の活動目的、テント市の開催もある。このところ粉石けんに加えて、有機農産物の直売も行なっている。場所は当分武蔵野市にある桜堤団地付近の空地。近所の主婦たちとも知合いができつつあり、ゆくゆくは武蔵野の消費者と

有機農家とが直接に結びつき、相互に信頼し合って生きられるような「有機的な人間関係」の生まれる素地を作りたいと考えている。

悩み

この二年間、理想に向かって無我夢中で突っ走ってきたが、将来の結末については甚だ不安を持っている。武蔵野市、都内、横浜市などメンバーの住む地域がバラバラだということ。サラリーマンの場合、地方転勤となり抜けていく可能性もあるだろうし、女性の場合は嫁に行くと途端に活動がしにくくなる、という女の問題もある。しかしそうになったらそうだったで、その土地で、その人間のできる範囲内で、ほんもの追求に関わって、したたかに生きて行きたい。青空テントの活動を通じて、人間本来の生き方、本物の良さを、私たちは一人一人が教えられてしまった。もう決してニセ物には戻れない。

(石川友子記)

愛知女性史の会

自分たちの手で愛知の婦人の戦後史を探りたいと、取り組んでいる愛知女性史研究会は、『母の時代―愛知の女性史』（風媒社）を出した、名古屋女性史研究会のメンバーの一部が読書会や婦人学級を開講するなかで、新しいメンバーを加え、一九七二年十月発足。

趣意書

日本国憲法の下で、女性が太陽になる道をふみだしてもう二十五年、投票率や進学率こそ男女に差はなくなつたものの、働く現場、生活の現実では、女性の暮らしにくさは、まだまだ続いております。

なぜこうなのか、婦人はどう壁を破ろうとしてきたのか、そこを明らかにすることで、社会への確かな眼と、明日への展望を持ちたいと、私たちは学ぶため集まりました。

一人一人の力は弱くても、なかまの励ましで強められ、足どりも思考も確かなものにするこ

とができるでしょう。

世界の婦人と心を通わせ、平和と幸せを求めるために、婦人の現実と歴史を究め、考え、生きぬきましよう。

発足したばかりの会ではあったが、朝日新聞（名古屋版）に、「愛知の戦後の女性史を探るグループ」として紹介され、現在、会員は二十七人。学生・主婦・会社員・公務員・教師など二十代から五十代までの、婦人問題に強い関心を持つ人たちの集まりで、時間不足に悩みつづ、学習だけは続けたいと願ひ、愛知の戦後女性史研究へ一歩ふみだした会。

*

一九七二年九月、働く婦人をとりにまく現実を、戦後の地域の女性の生活と変化のなから確かめたい、と話し合っていたとき、戦後一貫して民主的な婦人運動を実践してこられた、愛知県母親連絡会事務局長山本信枝さんを知り、その好意で、貴重な資料をみせてい

ただけることになり、その資料を活用し、愛知の女性の意識と行動を知る手がかりとなる年表づくりを取組むことになった。山本資料に加え、地元新聞も調べあけて、一九七三年五月、カードによる年表を完成した。また、その間、全体の流れをとらえるために、山本さん、磯部しづ子さんなどから、戦前、戦後の愛知の婦人の動きについて話を聞き、現在もこの聞き取りを月一回続けている。

完成した年表を読みあう学習を続けながら、そのなかで、各自の研究テーマをはっきりさせていった。そのなかで、昭和二十七・八年頃から婦人、婦人団体の動きに共同行動がなくなっていることを知り、その学習会がきっかけとなり、各界・各層の婦人の力を集め、平塚らいてうの歴史に学んで、これからの婦人の生き方を考えあうために、ぜひ、「らいてう展」を名古屋でも」と、会員それぞれが意欲的で、一九七四年一

連絡先 名古屋市天白町大字島田字西寄露 918-2 島田住宅 2-311

伊藤康子

名古屋市北区志賀町 4-60 志賀公園 2-105

中山恵子 052・912・1082



学習する会員たち

月、「らいてう展」の呼びかけ団体として事務局となり、会の成功のために仕事を分担しあって取り組み、「らいてう展報告書」には「らいてうと名古屋」をまとめた。

*

七月、今までの学習をさらに発展させていくために、伊藤さんから「愛知の女性史を調べる仕事の手びき」を作成してもらい、各自のテーマにとりかかった。また、

自分たちの歴史の見方をさらに鍛え、会員の共通理解を深めるために『戦後日本女性史』（伊藤康子）をテキストに読書会を実施。

一九七五年五月まで、年表づくりや読書会のなかで考えてきたそれぞれのテーマについて報告会を持ち、「労働婦人の権利確立の過程」「高度成長と婦人」「保育問題」「女性と政治」「行政面からとらえた女子教育の歴史」などについて話し合ってきた。

この学習会の終わりが、会の共有財産である新聞スクラップによる年表が散逸するのを防ぎ、これを婦人問題を学習する人たちに基礎資料として役立つ年表にまとめて、年内には出版することを決め、さっそく共同で作業に取り組んだ。さらに多くの資料に当たり、カード化されていない部分は分担しあって作成し、伊藤さんの指導で十一月、『戦後愛知女性史年表——明日を生きるために』を出版。

このように愛知女性史研究会は、やれることをみんなで助け合ってやりながら、愛知の女性の歩みを探るために活動してきたが、今後は今までに学習してきた成果を生かし、さらに研究方法を身につけ、会全体の研究活動として、それぞれが興味を持ち、準備している分野をさらに掘り下げ、自分たちの手で戦後の愛知の女性史を書いていきたいと願っている。

なお、現在、私たちは次のように集まり、連絡をとり、会報を出し合っている。いっしょによりよい生活を生き抜こうとする方を待ち望みつ——。（北島由起子）

定例会 第2・3・4水曜日

午後七時—九時

美草屋ビル石博ふじえ宅

会費・一〇〇〇円

（写真は朝日新聞社提供）

深沢歴史グループ

私たちの小さなグループの発生は、区教委主催の婦人学級である。当時、PTAママであった私たちは、何の抵抗もなく、出されたちらしをよく検討することもなく、ただ、会場が子どもの通っている小学校である、ということだけで参加していった。今から考えると、頭でっかちの私たちは、たとえそのような行政企画の婦人学級であっても、そこで考えるべきことはもっと身近かなものであってよいはずであるのに、社会問題グループをつくり、当時のニュースであった学生運動などを論じていた。

それから八年、メンバーも多少は異動したものの、地域でのグループとして知らぬ間に根づいていた。月一回の例会も、はじめは開設当時の延長から、学生紛争の原因は私たち母親にはないのだからかなど考え、私たちの育った世代の歴史をもう一度、見つめなおそうと、日本の歴史の戦後編を資料

としてみんなで話し合った。何ひとつ結論も出ないグループ学習であるが、それなりに小さな満足をしていた。が、月日がたてばそれにも不満は出る。そのころは子どもたちも成長して、私たちの手もすぎ、時間もできてきた。求め合うまま今度は文学を読もうと単行本を毎月一冊ずつ読んで、その読後感から自分たちの考えをぶつけ合うようになった。その間にグループメンバーのコミュニケーションは十分育ち、互いに裏側をみせての話し合いができるようになったのは、大きな収穫であったと思う。

二年ほど前に、次の本の選定を考えたとき、ひとりのメンバーが、日本の女性史の提案をした。考えると、私たちは歴史を知らない。女であるのに女の歴史をふり返ったことがない。歴史の流れで女性がどんな働きをしてきたかなど今まで考えたこともなかった。とびつく思いですぐ取組んでいっ

た。しかし、第一巻から読みはじめて驚いてしまった。まず、私たちの習った歴史との差である。かつて覚えた歴史は何だったのだろうか？ 万世一系の天皇をいただきから始められた歴史教育……それは、と、皆でもう一度自分たちの歩いてきた道をふり返り、改めて考えさせられる思いをどうすることもできなかった。とにかく本当のことを知りたい。ふり出しから勉強したい、との慾望はひとりひとりの心の中で日ごとに大きくなっていった。

女性史を読むつもりของกลุ่ม学習であったが、正しい歴史を知らずに、その中で女の歴史などくみ取る術もないことを、ひしひしと感じ、それがいつかグループの中から、やってみようという盛り上がりとなっていた。

しかし、五人や六人のグループでは既成の講座へ入るよりほかに学習する方法がない。皆で頭を寄せて考えているうちに、次第に夢

連絡先 東京都世田谷区新町 1-5-20

伊 藤 亮 子

がふくらみ、それなら自分たちの手で、それをやってみよう、ということになった。でも、私たちの小さな呼びかけに、仲間が集まるだろうか。不安だらけである。それでもやらなければ、私たちは私たちが求める学習ができない。一人が五人づつ仲間を探せば二十五人になる。と机上のプランはできるが、実行となるとそう簡単なものではない。全く見通しはないが、みんなで立ちあがった。講師の方をお願いすることからはじめ、次に会場を探す。前かけをはずして普段着のまま気軽に参加できるような地元での会場を、と思ったが、私たちの地域には公共施設がない。

幸いにして、講師をお引受けくださった先生のご理解と、会場提供を心よく引受けてくださった銀行の厚意に、後はメンバーだけというところまでこぎつけることができた。先生の、十人でも十五人でも勉強したい人たちでやりましよう、というお話に励まされ、それでも三十人ほどの仲間から出発した。

今、一年を過ぎる。歴史とは、から始められた講義は、やつと天皇家のおこりまで進んでいる。仲間が仲間を呼び、メンバーも六十名をこえる盛況となってきた。立ち止まって考えると、私たちのもの小さなグループは、まごまごしている」と講座に押しきられそうである。がんばらなくちゃ、と毎月一回、蟻の歩みのごとく、一頁ずつ女性史をひもときながら、自主学習のむずかしさをいやというほど味わっている。言葉でいうほど、自主学習はなまやさしくない。やらなければ一頁の本すら読めないのが主婦ではないだろうか。まじめに読みましょね、と互いに励ましつづつ、がんばっている。これから講座との関連をどう展開していくかということが、私たちの問題で、まだまだへこたれてはられない。

ミス 女性ジャーナル

女の視点から女の動きを正しく報道する女性紙

毎月 1 回 10 日発行 1 部 70 円 年間 1,100 円 振替 東京 03-130058
〒150 東京都渋谷区神宮前 3-26-14 女性ジャーナル社



インド映画大都會

サタジット・レイ監督

インド映画

「大都會」を観て

サタジット・レイ監督の一九六三年の作、「大都會」を観た。レイ監督の作品を観たのは、「大地の歌」三部作に続き二回目である。

第一次大戦後間もない一九五三年、インドのカルカッタで起こった出来事という想定。妻として、母親として家庭にいた一女性（アラチ）が、経済的貧困から脱出するために外で働くことを決意。家族からの猛反対にもひるまず、一步一步自分の道をつき進んでいく姿を描いたもの。少し掘り下げが足りなかった点もないではないが、女と男、妻と夫の置かれている社会的地位の問題を浮きぼりにしており、感動させる場面も多かった。是非男たちにも見せて考えさせたい映画だと思った。

さて、アラチが外で仕事をし出した以後、アラチ自身の

内面で、「女が外で仕事をやる」ということについて、意識変革がなされていく過程はおもしろいと思った。私の職場の身近な例でも、これと似通ったケースが二、三見られる。夫の死亡や罹病で経済的必要にせまられ、やむなく就職した女性が、仕事を続けていくうちに、「女の生き方」や「女と仕事」の問題を真剣に考えるようになり、経済的自立がいかに大切かを理解するようになる過程である。これらのケース等から考えてみても、人間は、のほほんと一見平凡・平和な生活を送っているよりは、時には危機に立たされ、「いかに生くべきか」を考えざるを得ない状況に追い込まれた方がよいのではないか。そうなった時はじめて、人としての真の生き方を体得する第一歩を踏み出すのではないかと考えたりした。

またこのストーリーでも、男（夫）がいかに女に対して

身勝手な存在であるかを痛感している。男はその時々にな置かれていた。自分の立場によって、次々と豹変するのである。自らの信念の下に行動していくということがないのであらうかと、腹立たしく思った。

とにかく、女が、（とりわけ妻や母親が）、社会的仕事を思うようにやり続けていくということとは、大変むずかしいことであり、このインド映画の例は、日本の現状にもあてはまるのではなからうか。

最後に、ある差別と不正（同僚が社長に侮辱されクビになった）に抗するためにとったアラチの行動、勇気というものを、今一度新鮮に受けとめたい。真の勇気とは何か？——大局的立場に立ちながら、自らの信ずる道を突き進んでいくことではなからうか。私もそうありたいと思う。（東京 宇佐川富子）

俳優座講演 女の平和

「女の平和」を観る

一月十七、八日の「あごら

東京・東海」合宿の最後は、

「女の平和」観劇だったか……。

A 一言でいうと、失望という以上に腹が立って……。あれではアリストパネスに対しても、女に対しても、性に対しても冒とくじやないかしら。

B 前に見た本場のギリシア悲劇はすつと迫力があつたでしょう。原作を読んだけれど、これは俳優座ではん訳した別の劇。ギリシア劇で一番だじな時代背景がないんですね。セックスも当時はもつと大らかだったと思うけど。

C 原作を読んでないので、男女平等がテーマになつてると思つてたけれど、セックスとか、人間の別の一面が強調されてたようですね。平和もないし、観念的で。

D 平和の手段としてのセックスでなく、セックスそのものが強調されすぎて、話の展開のふくらみが感じられないのでガッカリ……。セックス・マンガとして見ればおもしろかったけど。

E それも何だか不愉快で気味の悪いセックスでしたわね。

F パンフレットに「正月公演ではあるし楽しいものにしたい」とあるけど、観客におもねて、歌あり、ショウあ

り、全くの商業劇の感じ。俳優座も考えてはしい……。

G 期待して来たけど、おもしろくなつたですね。俳優座がこんなのをやるべきじゃない。二千五百円まるまる損したって感じ。

H 新劇を見る人が減つてるけど、いいお芝居がないからなんです。「これ見よう」と自分で判断して行かないと、今のは八〇%はつまらない。

私が本当に「おもしろかった」と思うのは、見ていて苦しいんです。心の中に入ってくるから。苦しいのは残るし、「よかった」って、自分に返ってきます。今日のは見終わって胸の中に何も残ってないから、腹さえ立たない。意見も言いたくない。今日のようなお芝居、私は初めてです。迫つてこなければ意味はないですね。お金を出して見るのはそこなんです。おもしろいだけなら落語なんかのほうがいいです。

I 飯沢匡さんが、「日本では喜劇が育たない」って言っておられましたか、むかし民芸でやった「もう一人の人」なんてのは、諷刺が利いていて笑いながらも背筋が寒くなつた。今日のはそういう意味で喜劇でもない。

J 二十九年の公演の時はよかった、と知人が言つてましたが。

K 高度経済成長以前の新劇との質的な差がしら。

L 芝居がつまらなくなつてるといふことの意味を、演劇界の人はもつと真剣に考えてほしい。むかしは、芝居をやるということとは生きるといふことそのもののような迫力がやつてる側にあり、受け手の側にもありましたもの。心の通わない公演をして、お金だけ頂きますではサゲですよ。M 「あごら」の事前調査がたりなかつたことを深くおわびします。この次は厳選して行きましよう。

あごら読書室

女性解放の思想と行動

戦前編 戦後編

田中寿美子

明治以後の女性に関する思想、社会環境、その中で女性の行動が時代を追って書かれており、太平洋戦争を境にして、戦前・戦後にわけられ二冊の本にまとめられている。執筆者は田中寿美子氏の他、菅谷直子、原田清子、島田とみ子、駒野陽子、井上輝子の諸氏で、それぞれ専門的研究をし、鋭い洞察力をもつて書いている。

明治の近代的女性像の模索、「家」思想の確立、ファシズムの中の女性、戦後の女性解放、高度産業社会の中の女性、女性の市民運動、というように、時代の流れとともに、広い範囲にわたる女性の歴史がかかれている。主なテーマは、男

女差別を強いる「家」思想、女性解放の思想と行動、そして売春などの性の問題である。この三点は今なお、私たち女性に重くのしかかっている問題で、私たちはなんとかして改善してゆかなければならないことである。

特にこの本の戦前編は、その研究にうん蓄を傾けた跡がみられ、読む人の心をひきつける。明治から現在までの女性の思想を、これほど詳しく、系統的に鋭い目を持って書いた本は他にないであろう。男性によつて書かれたこの種の本と違って、男性の革命思想の先駆者たちに対する批判も厳しい。新女大学評論を書いた福沢諭吉が性病予防、一般子女の防破堤として、存娼論を唱えていたこと、自由民権論者、植木枝盛の廢娼運動をしながら娼家に通っていたことなど、男性の体質的女性差別を追及している。「家」思想は明治以後の国家主義とあいまっ

て、明治民法の中にも盛り込まれ、さらに、軍国主義下の婦人政策の根底となった。戦後、「家」制度否認の民法に改正された後も、岸信介らの家族制度復活への働きかけがあったという。

売春に関する中で、明治以来の海外売春婦の事実は恐ろしい。明治の日本資本主義の東南アジア進出の手段として、政府黙認のもとにポロもうけのできる売春業で資本を蓄積し、他の事業に移っていったという。さらに太平洋戦争中の従軍慰安婦、敗戦後の売春、現代の売春はでさるだけ多くの人々が読み、売春問題から目をそらしては真の婦人解放運動はありえないことを自覚してほしい。

欧米諸国では、十九世紀は女性の世紀といわれたほど、フェミニズムが盛んになっていったが、日本の十九世紀、二十世紀は、依然として男の世紀。日本固有の婦人問題が実に多いことを改めて感じる

本である。

(ウ)

女が生き残るためのカタログ

男社会のなかで女が生き残っていくためにはどういう生き方をしていたらいいかを模索するために、アメリカの女性グループによって出版された本。女の問題、女の活動に関するグループ、書籍、雑誌、ミニコミ誌がくまなく紹介されている。一九七三年に出版され全米でベストセラーになった。

九章から成っていて、一、報道機関（印刷、ラジオ、出版、等）二、芸術（絵画、写真、映画、等）三、健康管理（医療機関、身体、治療、等）四、児童（児童養護、教育と文学における女性差別、等）五、教育（各種の学校、歴史における女性、等）六、護身七、労働と賃金（仕事、女性による企業、等）八、正当な位置を得るには（差別、女性の権利、離婚、等）九、運動の建設（婦人運動、婦人団体、等）である。

たとえば、「女のための女による女の活動」として出版社を営んでいるグル

ープを、いくつか数葉の写真入りで紹介している。この場合にはグループの所在地、出版した書物の一覧表、価格が必ず明記されていて、読者はすぐに連絡をとることが可能なように配慮されている。

また、各項目に関連するアメリカで出版された本、雑誌、ミニコミの類がくまなく紹介されている。五、六行から一ページ程の内容紹介と、表紙写真、おもしろそうなイラスト、重要と思われる数表もぬき出してあり、このカタログ一冊を読むことでもかなりの知識が得られる。さらにありがたいことには、どの本についても、出版所名、所在地、価格が入っており、必要とあればすぐに注文も可能である。巻末のアメリカ、カナダの婦人団体一覧表も役に立ちそうである。

タブロイド版（新聞の半分の大きさ）、二二三ページで、わずかに五ドルと驚くべき安さである。輸入図書を扱う書店に注文すれば、二千元ほどで入手可能。ただし船便だと三か月は待たねばならぬ。日本でも婦人運動の発展のためにこの種のカatalogが出版されることが望まれる。

(A)

(Grinstead, K., et al., ed.: The New Woman's Survival Catalog, Coward, McCann & Geoghegan, Berkeley Publishing Corporation New York, 1973, p.223)

戦後愛知女性史年表

—明日を生きるために—

愛知女性史研究会

名古屋女性史研究会は四十四年に「母の時代—愛知の女性史」を出した後も地道に学習を続けていたが、他のグループと合流してこの年表をまとめた。

戦後の新聞を通して見た愛知婦人の三十年の生活を主軸にして、婦人運動だけでなく、婦人の生活、意識、行動の推移をたんねんに追跡している。愛知に視点を置いてはいるが、年表全体にわたって全国的な動きと対応させて見やすく並べ

てあり、付表の男女賃金格差の問題は欧米諸国の統計も組込まれている。(N)

(A5版・二六〇頁・八〇〇円 送料180円)

連絡先・名古屋市北区中切町四ノ五七

三菱社宅三ノ二〇 木下弓子

誰のために子どもを産むか

青木やよひ編

風壽社

子どもを産んでしまったことに、いまだに整理のつかない、漠とした後ろめたさを感じているので、この本のタイトルを見たときに、もしかしたらこの気持ちを整理する何か手がかりが得られるかもしれないと飛びついた。

第一部は「私たちにとって人口問題とは何か」というテーマで、編集をはじめ経済学、動物学、環境、公害、文化人類学の専門家たちとのシンポジウム。今までの人口問題は多分に国家的な意図があり、産む主体である人間の視点がみごとに欠落していたという反省から、「人間とは何か」という問いを座標軸に、それぞれの専門家がその専門領域にとらわれず、しかも自分自身にとつての人口問題を論じている。

第二部以下は編者とそれぞれの研究者との対談で、「人間の生命と科学」「女と子どもをめぐる問題点」「文化としての

性革命」がテーマ。自然科学から生きがい、育児といったきわめて日常的な問題まで、広い視野のもとに、かつそれらが矛盾なく論議され、副題である「人口論と女の性革命」にふさわしいものになっている。ひとつひとつの対談が、いや語られるひとことひとことが、眠っていた問題意識を呼び起こし、子どもについて、女について、さらには宇宙船地球号の乗客である人類について、読む人すべてに考える契機を与えるはずである。

必要以上に豪華で高い本が多い昨今、装丁は質素でも実をとるといった姿勢がうかがわれ、それにも好感がもてた。(わ) (B6判、二七〇ページ、九五〇円)

女のつくる世界——

女がとらえる生の視点

76年2月「思想の科学」臨時増刊
思想の科学社

「しゅふ」の方にこそ、せいぜい読んでいただきたい特集です。なぜなら、おそらく二十代から六十代までと思われる女性たちによって書かれたこれら十九の独

白は、ひとつも「しゅふの問題」について語っていないからです。「仁義ある戦い」のなかで中山千夏さんは、「主婦だって遊んでいるわけじゃない。ちゃんと家事をする職業なのよ。夫と対等に口だつてきけるし、私は、自分でこの職業を選んだのよ」という論理はひょっとして、もしかしたら、とてもオカシイのではないでしようかと、例のシャラッとした顔でまず問いかけます。

天野みちみさんは、「エロス・それは高くつくもの」のなかで、家政婦兼育児係兼いつでもとり出せる慰安婦という長い名前で、しゅふという職業を定義づけています。こんな職業が世の中にあつていいものでしょうか？

けつしていいはずはありません。でももし、「結婚したらオシゴトをやめて、主婦業に専念します」と夢を語る人がいたり、オトナになったら自分の身は自分で養うという生物としての基本を忘れて、夫という自分以外のヒトののつてきた獲物のほしっこを噛ってありがたうもいわない人が、もしいたとしたら……やっぱり残念ながらこれは現実といわなけ

ればなりません。

でも、もしかしたら——このしゅふという職業は、誰かが意識的につくり出したものではないか、とは考えられないでしょうか？

もしかしたら——私たちはダマサレているのかもしれない、と。女の人たちが、こんなカナシイ境遇を捨て、明るく楽しく生きることを始めたら、なにか困る人たちがいるかもしれません。それを解くカギは、これら十九編の、生きることの重みと、生きることへのいとおしみにみちた、すばらしいひとりごとのおしみにひとつづつ宝石のようにかくされています。そして同時に、女の人にとって特殊な問題というのはひとつもなく、みんな「人間」の問題なのだということがよくわかります。

いま、女たちが男たちを愛し、男たち

が女たちを愛し、みんな子どもたちを愛し、自然と楽しみ、仕事を喜びとし……人間らしく生きることがとてもむずかしい時代です。

でも、それは、ほんとうに絶対不可能なことなのでしょう？

やっぱり、どなたにも、ぜひおすすめしたい一冊です。(H)

(A5判、一六〇ページ、五〇〇円)

新刊書案内

女性解放とは何か

松井やより著
——女たちの団結は力強く、

国境を越える——

(未來社・一、二〇〇円)

福祉に生きる

宮下順子
——体あたりケースワーカーの記録

(ミネルヴァ書房・九八〇円)

子どもは変わる

岸 武雄著
(風媒社・九八〇円)

ミュンヘンの小学生

子安美知子著
(中央公論社・三八〇円)

山内みな自伝

山内みな著
——十二歳の紡績女工からの生涯

(新宿書房・一、二〇〇円)

土方梅子自伝

土方梅子著
(早川書房・一、三〇〇円)

日本婦人問題資料集成(全十巻)

第一回配本 第五巻

「家族制度」湯沢雅彦編集・解説

(ドメス出版・九、〇〇〇円)

あごら 読書室

新聞 切抜帖

一九七五年

一月一日

一九七五年

三月二十一日

法・裁判

中絶六か月児までに

従来七か月まで適法とされていた中絶が一か月短縮され二十一日、厚生省が全国に正式通知した。「七か月中絶は殺人」との菊田医師らの主張が認められたもの。

(1・22各紙)

生命尊重の哲学、福祉体制、医学・看護技術の向上からGNPまでがその背景。

(1・31朝日)

赤ちゃん殺しに執行猶予

同せい中にできた子の中絶費用がなく、出産直後殺した若い二人(21、22)に、中絶と殺人の中間と新判断、被告の更生を目指して四年間執行猶予に。千葉地裁で。

離婚後の復氏、任意へ

(信毎2・6)

法務省は「民法等改正案」の要綱を固め、今国会に上程する。通過成立すれば、離婚後の任意復氏や、母親による出生届出を認めるなど、婦人の法的地位の向上につながるものとして注目される。

(2・9朝日)

わが子を返して

子を夫に奪われたと、離婚した夫を相手どつての人身保護請求事件の第一回審問が札幌地裁で。親権者は母A子さん(高校教諭)だが、その後父Bさん(会社役員)が子を連れ去ったもの。(2・19朝日)

子は母に渡せ

札幌地裁が二日判決。Aさんの勝訴となった。

(3・3朝日)

性への態度を改めよ

「性は生殖のためばかりでなく快楽のためにも存在する。男性支配思想と性は罪深いものとする考えが健康な性関係の成立を妨害し、避妊法の普及をむずかしくしている」と、WHO(世界保健機構)が報告。(3・15朝日)

行政

母性保障法を提言

民社党は男女平等等の促進、女性の地位向上のための具体策を発表。母性尊重、母性保護、妻の座確立をめざした、「母性保障基本法」の制定、乳幼児を持つ共働き家庭に育児控除などの税制改革、「男女同一原則」の実現化のための労働基準法の改正などを目

指す。(1・5 信毎)

ライフサイクル政策化

政府の「生涯設計計画検討連絡会議」は、一億円の調査費をかけ、四月から生涯設計計画の具体的な政策化に取組む。計画の対象は、中間層のみでなく、農民、身障者、婦人等幅広い。が内容は、行政面からの視点が薄く、高年者福祉政策、育児後の婦人の再就職等々、どれも難問ばかりで、実現に不安の声も多い。

(1・11 朝日)

地域道民会議への意向

北海道では昨年十月末から十一月まで十四支庁所在地で道民会議を開催、「婦人の生活福祉を高めるため道政に何を望むか」のテーマ一本にしばり約二千人の婦人から意見を聴取したが、どの会場でも

要望されたのは保育所と高校の新増設、医師確保など医療対策。ほかに北海道価格の解消、地場産業の振興、交通安全対策など、婦人問題を離れた日常生活の悩みが相次いだ。(1・14 朝日)

女性に公務員の門戸開放

政府婦人問題企画推進本部は、行動計画に対して、初めていくらかの具体策を提示、公務員・審議会等閉ざされた政府機関に女性を登用して、こうと申し合わせた。

(2・8 朝日)

政府事務次官会議は行政への女性参加促進のため、審議会と、航空管制官、刑務官、皇宮護衛官などの公務員に、女性を登用・採用することを申し合わせた。(2・6 毎日)

人事院では国家公務員初級試験の「行政職B」の受験資格の男女差別を廃止、平等に

することにしたが、深夜勤務を伴うだけに応募者はどれくらいか。(3・4 信毎)

腰痛など職業病に認定

(旭川)

身障施設に準看護婦として働く奈良千代子さん(28)、頸肩腕症候群の職業病認定申請をしていたが、旭川労働基準で認められた。道内初のケース。(3・11 朝日)

母乳水銀調査の結果

厚生省が四十九年度に国として初の調査、五十年六月に結果が出たがなぜか未公表。総論としては「それほど心配はないが安心とはいえない。水銀はPCBとは逆に母乳にはあまり出ないが胎児に移行する。PCB同様、健康診査や保健指導が必要」と、調査をまとめた林国立公衆衛生院母子小児衛生学部長は語って

いるが。(3・15 朝日)

集会・会議

福祉を考えるつどい

ミニコミ誌「ろばのみみ」が主宰、宮城まり子さんを囲んで、東京で討論。

(1・18 朝日)

皆で家事を分担しよう

松本市島内地区では昨年暮れ、消費者団体、PTA、農協婦人部などの代表六十人が家庭、生活、労働、健康の四分科会にわかれて話し合った結果、まず子どもから家事分担をと結論。家事をする子は意欲も集中力もあり、勉強ができる子になることもわかった。

(1・18 信毎)

全国農協婦人大会

第二十一回大会が一月二十八、二十九日に東京で。農政への不信、相続税の苛酷さ等かけ声と現実の差に不満が集中。

(1・31朝日)

保護と平等の接点を求めて

日本有職婦人クラブ全国連合会の研究会が八日名古屋で。深夜業種や時間外ワクをふやすなど労基法改定の運動の必要について賛否両論。

(2・11読売 2・12朝日)

無所属議員全国研究集会

婦人参政三十周年記念に全国から七十一人が参会、市民と手を結ぶためには無所属が必要等、体験を交換。

(2・22朝日)

女だけの国際法廷

主婦の無報酬労働から婦女暴行まで女性に対する犯罪を告発する法廷が三月からブリ

ュッセルで開かれる。二十七か国、八百人が五日間参加の予定。

(3・1信毎)

同法廷の主催はアメリカの社会学者ダイアナ・ラッセルさんの呼びかけでできたI・T・C・A・W。抽象的論議よりも女たちの証言を重視する。

(3・4毎日)

妻の財産めぐり討論会

七六年は国連「婦人の十年」第一年、日本の女性の法的地位を考え直そうと、法務省が初の婦人問題討論会「妻の法的地位——現行民法の夫婦財産制をどう考えるか」を開催。島津一郎氏の司会で「選択制」を主張する俵萌子さん、「別産制」の東浦めい氏、「据置共有制」の都留重人氏がパネル討論、渡辺道子氏が共有制の問題点を指摘。

(3・15朝日 3・16毎日)

ロッキードで市民青空集会

日本婦人有権者同盟、主婦連、地婦連などをつくる選挙法改正運動協議会の「ロッキード事件に怒る市民青空集会」が二十日、東京・渋谷ハチ公広場で開かれ、ビラやマイクで「政治家にはがきや電話で抗議しよう」と呼びかけた。

(3・21朝日)

調査・統計

今の子は何になりたいか

男子はスポーツ選手、科学者、技師、商人、社長、パイロット、医師、女子は保母、芸術家、技師、スチュワーデス、スポーツ選手の順、女子の政治家はゼロ。都内小学校高学年五百人対象の第一勧銀調査で。

(1・6毎日)

高校生にみる社会福祉観

沖繩・北九州市・東京の三地区四千余人対象の全国社会福祉協議会調査で、約七割が老人と同居すべきだと回答。だが「その面倒をみるのは子の義務」と沖繩の七四％が回答したのに対し、東京では四〇・一％が「国や自治体が責任を持つべき」と、地域差が目立った。

(1・12朝日)

おとなまる映し中学生

友だちが一人もない高校生が男子で一二・七％。中学で三・七％。だから大学ではもっと増える見込み。政治への満足度は男一〇％、女三％。孤独、フラストレーションはおとなそっくり。都内の中2生六百人と高2生千二百人対象の東京都青少年対策部の調査で。

(1・22毎日)

消えぬ男子差別Ⅱ高校生

東京都高校教組婦人部が昨夏行なった都内高3生千六百六十人の調査で、「男女差別あり」は女五七%、男三四%。女子の賃金が男の五〇%であることを女子五九%、男の三二%が、「おかしい」としているが、男の二一%は「女子は男子より能力が低いから当然」と回答。(1・24毎日)

家庭科必修について

静岡県引佐郡三ヶ日中学校の調査によると一、二年生は「別学がよい」が男七〇%、女八八%。三年では別学派は男六〇%、女五〇%。父母は「現状とおりでよい」が父親一〇〇%、母親六八%。

(2・4毎日)

女性グループ実態調査

札幌市は女性だけのグループ

プの実態をつかもうと各種婦人団体や組合に調査用紙を配ったが回答はさっぱり。「婦人の社会教育の振興」の意見込みに市民は乗ってこない。

(2・12朝日)

離婚率は北海道が日本一

道が昨年一年間の人口動態をまとめた結果では、出生率は史上第二位の低率、結婚も前年より七%程度減少したが離婚は実数・率とも史上最高、千人当たり一・六六組で前年同様日本一。多い理由は内縁関係が少なく離婚も律義に手続きすることのほか、出稼が多いこと、相次ぐ閉山による一家離散など。北海道の女性の独立心の強さを指摘する向きもある。

(2・28朝日)

内職、一時間十五円

秋田県など東北各県の農村

では、一時間百円以下の内職で働く主婦が多く、中には時給十五円の造花も。秋田県内の内職者は約五千人。県内職センターでは最低時給百三十円にと業界に交渉中だが効果なし。最低工資の制定が望まれる。

(3・15朝日)

中学三年の男女差別観

逗子市久木中学の新倉昌子先生が中学三年の男女三百人をアンケート調査。結婚したら妻が職をやめるのが当然と考えたのは男女とも約半数、家事の平等な分担も半数、女教師がふえることや男子も家庭科を学ぶことに不賛成な者は約三分の二。今度生まれ変わったら男に、が四分の三。

(3・18毎日)

活動

NHKの男女差別を告発

「行動を起こす会」は大みそか「紅白歌合戦」の行なわれるNHKホール前で、NHKの男女差別告発のビラを配布、番組内容、ニュースアナウンサーの配置問題を批判、歌合戦中の差別的歌謡曲に対しても宣戦布告。(1・1朝日)

自衛隊に女性部隊誕生

北海道恵庭市に誕生。幹部候補生の一曹橋本隊長以下四十四人。これまで男手でやっていた会計や通信業務の一部が女性部隊に明け渡される。

(1・9朝日)

女性多数朝日体育賞受賞

五十年度假日体育賞は、婦人年にふさわしく女性が多数受賞した。世界初の女性エベレスト登頂成功の久野英子隊長ら日本女子隊十五人、サン

フランススコル沖繩太平洋横断ヨットレースで活躍した小林則子さん。世界女子バスケット選手権で最優秀選手となった生井けい子さんら。

(1・30朝日)

マンガの中の女の描き方

大人のマンガから、最近の子供のマンガにまで、女が男の「性の興味の対象」としてのみ描かれ、性差別が氾濫している。「行動を起こす会」は、一日は少年マンガ、二月は青年向けコミックをとり上げて批判「女の性を商品化する点で、日本社会に根をはる売春文化につながる」と告発。(1・21朝日 2・26毎日)

主婦たちが自主的学習会

国際婦人年をきっかけに「婦人の意識の変革はまず学習から」と長野市的主婦たちが寄り集まり、自主的な勉強

会「女性セミナー」をつくった。市の中央公民館で月一回、会員はふえて十七人。習慣化、マンネリ化した生活を見直そうという点から話し合い、「何も言わないことが美德」を打ち破ろうと熱っぽいうしゃべりを続けている。

(1・22信毎)

手作り「主婦の文集」

十二年間続いていた主婦の交流の場をめざした手作り月刊紙「わいふ」が赤字のため廃刊を宣言。それを惜しむ主婦たちが新スタッフを組み、続刊一三八号を印刷、編集長も関西の高木さんから東京の田中さんに交代。内容は天皇、次回は「日本の夫」。

(2・7毎日)

トルコ風呂廃止運動

今年は売春防止法施行二十周年。今までも各種団体がと

り上げたが実現しなかった、現代の公娼制度といわれる、トルコ風呂廃止へ向かつて、「売春問題ととり組む会」が活動開始。月例会での実態聴取によるとサービスマン一万一千円のうち七千円は店にとられるなど、経営は極めて悪らつ。同会ではまず、トルコ風呂禁止の法改正を広く訴える予定。これを受け、婦人議員も「公衆浴場法の一部改正案」を国会提出をめざして検討中。日弁連も実態調査報告書をまとめる。

(2・13読売 2・14毎日)

アイスホッケー女性チーム

十九人のチームが苦小牧で誕生。往年のスピードスケート選手権者などもいて男性も舌を巻くほど。平均年齢は二十七、八才。(2・18朝日)

女だけの放送局

三月三日、文化放送が二十四時間の特集を。ニュースもDJもオール女性で突っ走る。臨時編集局長は佐々木久子さん。(2・27朝日)

市川さん、ロッキードで渡米

参議院議員市川房枝さんはロッキード事件を追って、三月五日渡米する。米国婦人国会議員、婦人団体、市民運動家らを通じ事件解明に役立てようとの目的。婦人活動家として日本国民のロッキード問題に対する熱意を、アメリカの対日世論に訴えたいとのこと。(2・29朝日)

二週間にわたる調査を終え二十日帰国、記者会見で「ロ事件を契機に日本の政治風土を変えていくべきだ」と語った。(3・21朝日)

廃物でオモチャ展

松本市の育児休暇中の保母

さん八人、半年がかりで知恵と創意工夫をこらした手作りオモチャ展を開く。材料は徹底的廃物利用。王冠が車輪の自動車など安全で、発育に応じて機能発達を促す愉快なおモチャに子供たちが大喜び。

(3・3 信毎)

「夫」などをテーマに学習

渋谷区内の婦人学級などの卒業生が自主的につくっている自主グループ連絡協議会が学習発表会を。テーマは公害等さまざまなが「夫」研究グループは「空気のように当然と思って暮らしていた夫婦の関係を解析、柔軟な包容性をもっと必要と結論。

(3・5 朝日)

女性にも労働権保障を

「行動を起こす会」では「女性の労働権を、夫や家族から独立した、すべての人間に必

要な権利として保障せよ」を筆頭に、そのために必要ないくつかの項目を盛り込んだ要望書を、総理府婦人問題企画推進本部と労働省に提出。立法措置等の具体化を要求。

(3・6 朝日・毎日)

歌謡曲の女性像を告発

「男性作詞家は、耐えて、泣いて、すがって、捨てられる女が好きなのさ」と「行動を起こす女たちの会」が約五十人で討論。(3・19 毎日)

満州事変を研究

日本史を学ぶ札幌市内の主婦グループ約二十人が満州事変当時の新聞を丹念に調べあげ、B4判十五ページのレポートを完成。(3・19 朝日)

禅の国際道場

武蔵野の面影残る秋川市の臨済宗慈眼寺、一年前から有髪女性工藤智光さんが庵主。英国航空東京本店に勤務中身につけた英語を生かし禅を国外にも広めるべく、国際道場を開いている。米国人中心とする外国人のほか日本人、しかも多くの女性が、求道にきており、駆け込み寺的役割も。

(1・10 朝日)

第一回今和次郎賞受賞

一番ヶ瀬康子さん(49)。

「養育院百年史」の編さん執筆で受賞。約一年間、同院の寮母室と門前の小屋で寝起き。地をはうような調査の発想は今氏に学んだものだけにうれしい。が、日本の社会福祉は基礎工事のない対症療法。老人ホームに来た人が「ここへ来たら最後だ」と言

ってるのはなぜかと、きびしい。(1・12 朝日)

車イスで成人式

渡辺美喜子さん(20)。一才で小児マヒ発病、いらい下半身マヒで車イス生活。小学校から両親の下を離れ、施設卒業後も適職を求めて悪戦苦闘、今念願の編み物料のある国立伊東重度障害者センターで訓練中、編み物教師で自活し、家族と暮らすのが夢だ。

(1・15 朝日)

東京消防学校の女性教官

橋由美子さん(26)。東京消防庁の婦人消防官一期生。昨年四月、女性として開校以来初の消防学校助教に。男子も教える。(1・25 毎日)

部落開放文学賞受賞

池田イトさん(57)。受賞作「わたしの子どもたち」

人

は識字学校の夏休みの宿題。鉛筆を棒のようににぎって書いた。

小学校は二日行っただけ。

「お前みたいなもん来るな」と先生にいわれ、赤いあめを投げつける。差別を運命とあきらめて来たが、「わたしとおなじようなこどもをこれからつくってはしくない」と。

(2・1朝日)

岸田戯曲賞受賞

石沢房子さん(44)。受賞作は「琵琶伝」。戦争をかくぐって来た名もない女性を中心テーマ。戯曲を書き始めてまだ六年。(2・4朝日)

初の最高裁判事婦人候補

最高裁坂本判事の定年退官後任に、「チャタレー事件」弁護の環昌一弁護士と並んで、日本の婦人弁護士第一号、久米愛弁護士が推薦され

た。任命権は内閣にあるが、三木内閣が女性起用に積極的姿勢をみせていることなどから期待されている。

(2・6朝日)

主婦国外へ技術指導に

井戸英代さん、平均的家庭の主婦、五年前からタイル張り内職に精を出す。勤勉さが会社側に認められ、慰労を兼ねてスリランカへ六日間の技術指導に。「いつもの通りやるだけ」と。(2・8中日)

読書体験文で知事賞

工藤恕子さん(34)。自閉症児への愛を傾けて本を読み聞かせ続けた。(2・9朝日)

月刊誌「ランナーズ」創刊

下条由紀子さん(26)。走る人、マラソンする人の月刊誌を十人の仲間と編集。

(2・10朝日)

熱傷医療に役立てて

三年前、天ぷら油のやけどで長女(3)をなくした主婦松下ハル子さん、二年前、大やけどし命拾った主婦赤塚照子さんは、家計費を節約したためた浄財それぞれ五千万、一万円を熱傷医療に役立ててと、やけどの予防、医療研究をしている中部熱傷協会に送金した。(2・18中日)

国連公使に緒方貞子さん

昨秋の、市川議員らの「女性の地位向上のために女性大使を」の要求に対し、国際基督教大助教緒方さんが初の女性公使に本決まり。国連社会人権委での実績をもつ冷静な人。

(2・17各紙 2・21毎日)

全盲女性大学院バス

岡山市の柴田昭子さん

(29)。全盲というハンディを背負いながら、英語に情熱を燃やし続け、岡山大学大学院英米文学研究科に合格。全盲女性の大学院入学は日本で初めて。(2・21信毎)

日本舞踊の基本指導に渡米

花柳千代さん(51)。日本舞踊はいきなりバリエーションから入る……と、この数年、基本練習の指導に打込んで来たのが海外でも評価されて。(2・23朝日)

国連多国籍企業委日本代表

有賀美智子さん(68)。四年前公取委員を辞任するまで四半世紀を独禁政策研究にささげ、世界の研究者間で有名。「独禁法は平和を愛する法律」が持論。政府を代表して国際協定の取りまとめに動く。「国際婦人年に触発されて女性代表を……ではない。最

適の人がたまたま女性だった」とは外務省の弁。

(3・1朝日)

高橋展子さん

ILO会議に出席

日本人女性初の、国際機関の最高級ポストについたILOの高橋事務局長補、理事会本会議にデビュー。

(3・3朝日)

第十六回田村俊子賞受賞

津島佑子(28)。「むぐらの母」で。

離婚して一年、「どこへも逃げ込めずに生きていくことが生きていくこと」と知って、「女の強さ」を書いていく。「父・太宰」は「いまでは全然気にならない」。

(3・11毎日)

通信制高校を夫婦で卒業

札幌市成田富士男さん

(40)とハツエさん(37)。通信制独立校、北海道有明高校を卒業。二十年以上のプランクに、教科書についてゆくのも大変、子供の相手もできず、四年間は苦心の結果だった。

(3・14朝日)

もうすぐ女性整備士

苦小牧の本多律子さんと日高の菊池明美さん、共に十六才、苦小牧専修職業訓練校から、同校初めて女性自動車整備士として卒業、引く手あまたの求人に苦労したが、市内の自動車メーカーに就職内定、技術は男性に劣らないと評価されている。

(3・17朝日)

「地上の女機長」誕生

航空史上初の女性ディスバッチャー(運航管理者)が三月十七日千歳空港で誕生。日航札幌空港支店航務課員、田

中裕子さん(25)。フライトプランの作成、パイロットの出發承認などの重責を負う資格を得た。北大理学部四十八年卒。(3・18朝日・毎日)

吉川英治文化賞

鈴木セイさん(63)。群馬県の「はんな、さわらび学園」の創始者で常務理事。四十年にわたる社会事業への尽力が受賞理由。(3・20朝日)

〔死去〕

福田昌子さん

肺がんのため、六十三才。元社会党代議士、学校法人福田学園理事長。優生保護法の草案をつくり、議員立法として成立させた。(1・1朝日)

池田蘭子さん

老衰のため八十二才。作家、立川文庫執筆。代表作「女紋」(1・5朝日)

田島ひでさん

心不全のため七十四才で。元衆議院議員。らいてう、市川さんらの新婦人協会、山川均らの水曜会に参加、二十一年以来日本共産党員。

(1・12毎日)

評論家坂西志保さん

心臓発作のため。七十九才で。日本ユネスコ国内委員会委員等、国内外の各種の審議会、委員会で活躍、NHK放送文化賞受賞。驚くほどの読書家だったと河盛好藏氏。

(1・15朝日)

歯に衣させぬ批評で名が通っていたが心の温かい人だった。昭和四十二年、無給の警察育英会理事長に就任、以来殉職警官の遺児に三千万円位い寄付をしたことは亡くなるまでだれも知らなかった。

同じくアメリカン・デモク

ラシーの信奉者で、女性解放をめざしていた石垣綾子さんは二人の主婦論争を懐古、「男は外で、女は家庭で」を石垣さんは疑問視、坂西さんはこの疑問を時代遅れと批判したという。(1・19毎日)

荒井愛子

心筋こうそくのため、六十才。大東文化大教授。

(2・10朝日)

初井しづ枝

胃がんのため、七十五才。三十年に歌集「藍の紋」で日本歌人クラブ賞、四十六年同「冬至梅」で読売文学賞、受賞。現代歌人協会会員。

(2・17朝日)

教育

主任制度四月実施見送り

都教育庁は、都教組との団交で、「深刻な財政難から、来年度予算案には主任制の財源は組み込まれていない」として、四月実施見送りを示唆。時間的制約からの三月実施見送りをさらに延長したものの、が、革新都政の文部省への対立姿勢がその背景にある。教組側は、都教育庁の意向を評価し、予定していたストを延期した。

(2・13 2・16朝日)

地域ぐるみ幼児教育

多摩狹江市は、幼時教育を地域社会の問題としてとらえ、その地域総合計画答申をまとめ発表した。育児に関する正しい知識提供のためのセンターを基幹とした講座、家庭教育学級開設等を提案。

(3・16朝日)

幼年期教育について

教研集会、「幼年期教育と保育問題」分科会で。公害、塾、テレビと、子どもの環境は悪化、知識は偏り、健全な発達は損われている。が、零歳児保育、学童保育等、親、保母、先生らの熱心な運動で好ましく、育ちつつあることも事実。いまこそ、親と教師の話し合い、協力が必要だと、結論。

(1・28朝日)

保育

密室保育所完成

目黒区中根に完成した老人いこいの家と学童保育所を兼ねた建物は、付近住民が「子供の遊び声はうるさい」と建

設計画そのものに反対だったために、屋上を使用せず窓も開けずという条件で落成式を迎えた。学童の父母や指導員は今後ともこの条件撤回運動を続行。(1・13朝日)

障害児保育の打消すな

先天性心臓疾患の孫娘のために松本市の会社社長が設けた保育室は障害児と普通児の混合保育を続けてきたが、娘も卒業、この三月で運営を閉じる。新年度から障害児保育開始の方針を打ち出していた市も財政難で絶望的となり、園の存続を希望する保母と保護者は自主運営をめざし目下用地を探している。

(1・16信毎)

保育運動に新時代

母親の労働権の保障という発想に立っていた共同保育は、最近母親だけでなく男も

子供も含めた人間性の解放という視点から求められている。「子育てを私的な領域に押しこめない」保育、つまり

家庭のわく組みをこえる方向をもつこの新しい保育運動は育児に対する私的な感情克服をもたらず。

(毛利子来 1・18毎日)

だぶつく保母さん

保母確保のため都下の各市の人事担当者が地方を行脚して歩いたのは昨年までの話。

今年は不況で就職の門戸をせばめられた短大卒有資格者が本来の職場の保母所へもどったために各市とも募集を大幅に上回る応募があり、逆に学校側の依頼を断わるのが担当者の苦勞。(1・21朝日)

要保育児は百人のうち九人

札幌市保育部の実態調査で判明。千人近くが自宅待機。

市は全員収容めざし四か所新設する。(1・22朝日)

保母所浪人百三十人

下諏訪町では新年度の保育所入所申込者は定員を一割強上回る予定。選考もれになる保育所浪人を救うには保育園の新設が必要だが、五十三年長野国体の会場の二つになる町町はその準備に追われあつまわし。(2・10信毎)

団地保育所に明け渡し命令

堺市新金岡団地の賃貸住宅を使って、同所に住む共働き母親が共同運営している無認可保育所の明け渡しを求めて、八年越しに争われていた請求訴訟に対し、大阪地裁は原告の請求どおり明け渡しを命ずる判決を下した。住民側は控訴する予定。(3・13朝日)

私立園児への補助金

格差是正へ努力

定例都議会予算特別委員会の席上、佐藤総務局長は、私立幼稚園の四才児と五才児に対する補助金の格差を解消するよう努力すると答弁。(3・16朝日)

幼稚園助成ふやす

文部省は学校法人認可の基準を大幅に緩和する方針で、現在、学校法人立が四〇％にすぎない私立幼稚園の学校法人化を図り、公費助成の道を聞く考え。幼稚園問題は、自民党が団地票に食込む格好の材料という思惑もからみ、緩和幅については同省と一部自民党の間で対立している。(3・17朝日)

健康

エストロゲン使用制限

米食品医薬品局は、経口避妊と更年期障害治療に使われているエストロゲンを、子宮ガン原因の疑いが強いとし、厳しい使用制限を発表。同薬含有のピル服用女性は全米一千万人に及ぶため、大きな反響を呼ぶのではないかと。(1・22信毎)

五つ子誕生と排卵誘発剤

東京都の山下紀子さん、極小未熟児の五つ子を出産、母子とも経過は良好。(2・2各紙)

このわが国初の記録をもたらしたのは、「排卵誘発剤」。卵胞刺激ホルモン主剤で、効能はよいが、排卵をもたらす量はまちまちで、多胎児発生が多い。この薬は昨秋から健保扱いとなり、今までの月二

—三万円という負担は軽減されたが、卵巣腫脹、腹水など副作用は多い。(2・3朝日)

着色料あれこれ

発ガン性の疑いで米食品医薬品局は赤色2号使用禁止の発表。日本の厚生省は、シロ・クロ未判定。二年前の赤104号と同様メーカー自主生産中止を待つ気か。現在食品に許可されているタール系合成着色料は赤2、3、102、104、105、106号、黄4、2号、緑3号、青1、2号。天然色素にもサポテンにつくエンジ虫から取るものもあり安心といえぬ。(2・19中日)

英でも五つ子

二十三日ロンドンで男三人、女二人の五つ子が誕生。体重約八八〇—一三六〇グラムで帝王切開による出産。母

子ともに経過良好。

(2・24信毎)

五つ子よいが大赤字

米テキサス州ルイスビルに住む若夫婦、昨年七月生まれた女四人、男一人の五つ子を、広告など子どもを“だし”にすることを拒否して育ててきた。しかし、出産後妻が退職したため生活は苦しく、自分たちの世間知らずを悟ったとか。(3・9朝日)

ピルの発がん性

酢酸メゲステロールを含む一部のピルに疑いがあり、英国では昨年末、メーカーが製品を回収。日本でも山之内製薬「ノバル」、明治製薬「サピロン」が回収された。しかし酢酸メゲステロールの発がん性には疑問の余地がある。かといって発がん性がなるともいえない。医師が副作

用の出やすい女性をチェックし、副作用を念頭において使う限り問題はないという意見もある。(3・20朝日)

老後

五十代婦人の老後

女性の老後問題は、すなわち婦人問題。日本では、子どもの独立後、外に出て第三の人生に挑戦する人は少ない。また、日本には五十代の戦争による独身婦人が四十万人もいる。この人たちの老後問題は、既婚婦人より深刻で、より一層の福祉優先が望まれる。(2・12朝日)

年金では半独立の妻の権利

妻は夫の死後、約八年間、一人暮らしをする。国民年金は個人加入なので、年金権は独

立。しかし、厚生年金や共済年金は、夫の死後、妻には半額の遺族年金のみ。離婚した妻には年金はない。夫婦健在でも、妻独自の年金権はない。多少の改善はされたが、妻の権利は、まだ半独立のまま。(2・29朝日)

未亡人の年金格差

遺族年金は、女性に最も関係が深い。厚生年金、共済年金の遺族年金は五割。七割引上げの議論があるが、共働きの場合、現行八つの年金制度下では、組合せ方によっては一・七人分もらえる人も出てきて、行きすぎ。だが、五割の遺族年金では、不十分。制度間の併給調整を望む。(3・2朝日)

事件

〔心中〕

病弱の母 (40) が長女 (11) を道連れに。埼玉で夫の年始回りの留守中。

(1・4朝日)

千葉で長女 (2) を背負い入水。三十才の母。

(1・4朝日)

大阪で母子三人ガス心中。夫の交通事故死後、保母として働いていた (34) が生活に疲れて。

(1・13毎日)

二児 (8・5) を連れ病弱の母 (33) が江の島で入水。

(1・22朝日)

四日市の母子三人 (29・32) がフェリーから飛込み。

(1・22信毎)

労災事故の父の後追い、母子四人 (37・17・14・12) が煉炭火鉢で。

(1・27信毎)

夫の病気を苦にガス心中。

三児 (10・8・2) は死亡、母 (37) は重体。

(2・1信毎)

長野市で母子 (40・1) が。

(2・19信毎)

兄嫁一家 (31・11・8) と離婚に同情した義弟。

(2・20信毎)

福岡で母子三人

(28・3・2) (2・20信毎)

会社員の妻 (37) が子

(6・4) を連れて常磐線に

飛込み。娘のピアノの上達が

遅いのを苦に。(3・17朝日)

群馬県利根河原で、母

(27) は死亡、子 (1) は重体。

(3・18朝日)

〔子捨て・子殺し〕

福井の母 (21)、夫と折合

いが悪く二才の子を。

(2・23朝日)

妻に家出された父 (25) が

三児 (4・2・1) を置き去

りに。静岡で。(3・16朝日)

〔しわよせ〕

精神病の女 (31) が庭先の

小屋に軟禁され凍死。栃木

で。(1・21信毎)

病死の夫 (75) と一週間、

添い寝の老妻 (65) 衰弱死。

都営住宅で。(1・23信毎)

除雪作業で生き埋めの娘

(7) をかばって母 (37) 圧

死。十日町で。(1・24信毎)

離婚後二児 (3・1) を引

取りホステスに出ていた母

(27) の留守中、ストーブで

焼死。旭川で。(2・2朝日)

横須賀の母子寮で中絶、養

子を強制されていたと内部告

発が。(2・4朝日)

ミイラ化した実兄 (78) と

一年七か月暮らしていた老女

(72) が孤独な死。旧制大学

出と称し、十冊のノートには

英語などでビッシリ書込み。

浜松で。(2・24朝日)

北海道で母子家庭 (35・

10・7・6・3) の四児が母

がホステスに出た留守中焼

死。(2・24信毎)

〔犯罪〕

甘言で主婦しぼる

簡単な手仕事で高額の収入

をうたつて会員をつのり、高

い講習料をとりながら作品は

買上げない会社が北海道議会

で問題になり社会党議員らが

被害者の救済策などを道に迫

った。この会社は名古屋市内

本社をもつN社。ガラス板に

絵を描くハク飾画の会員を募

集している。(1・13朝日)

頼みもしないのに家の前の

ドブ掃除までする働き者の隣

の奥さん (40) の手が憎いと

隣人殺人。東京で四七才の主

婦。(1・31朝日)

在宅時間の多い主婦は連帯

感のない都市化の中でストレ

スが蓄積しがち。日本社会で

は「主婦は家にいるべきも

の」という固定観念があるが

遠慮せず外に出ることをす

すめたい。(1・30毎日社説)

殴るけるの乱暴を働く組長

の夫(46)を二百万円でホストに依頼して殺した妻(25)大津で。(2・3中日)

バイト主婦(53)、郵便物配達が面倒だと千三百通を隠す。(2・8中日)

名古屋の私立女子高の女副校長が出入り業者をリンチ。批判を恨んで。(2・13信毎)

札幌で妻(37)に殴られ夫(42)が死亡。(2・15道新)

祖先の亡霊を追払おうと娘(22)に熱湯をかけ死なせた母(53)。愛知で。

事業不振の父を救おうと女子経理員(34)が千三百万円横領。東京で。(3・4信毎)

風潮

波紋ひろがる純潔のすすめ

共産党は青少年の退廃現象として①暴力、恐かつ、せっ

盗②性の退廃③麻薬、シンナー④ギャングルを指摘。特に

ボルノはらんや性の商品化は女性の人間的尊厳を傷つける。性の望ましい姿は愛情に

よる相手の自由な選択と恒久的結合で、姦通、同性愛、変

態性欲は容認しがたいとした。これに対し、——文化論

の立場から具体策を示せと村松博雄氏。あくまで当人同士の問題と、井上ひさし氏。

(1・11朝日)

ふえる国民年金加入
公的年金制度中の「妻の座」は低い。サラリーマンの

妻は、夫が死んでも遺族年金の半額しか受けられず、老後

は保障されていない。そこで、夫の加入期間も含めて、

保険料を二十五年かければ子と老後受給できる国民年金に

向かう。最近物価スライドのための年金額のアップも手伝

ってか任意加入の対象であるサラリーマンの妻がふえている。

(1・12朝日)

ミスさっぽろ応募史上最低

応募期間を前回より二十日も延長したのに応募は二十七人で前回の三分の一に。

(1・24朝日)

農業委員会苦心の花嫁銀行

農業以外これといった産業のない大分県の安岐町。ご多

分にもれぬ花嫁不足解消のため、町内の十八歳以上三十歳

未満の未婚の男女のうち、結婚を希望する人たちを登録する「花嫁銀行台帳」を作成。

身長・体重・趣味・希望する相手の条件などが記入されて

おり、委員会は一日も早いカップルの誕生を待っている。

(2・2朝日)

世につれ「変針」女性週刊誌

このところ売れ行き伸び悩みの女性週刊四誌。読むより

見るが主体の大型グラビア誌の好調につづくとばかり、芸

能人の結婚・離婚などの「のぞき見主義」から、「美しさ

と豊かさの追求」に方向転換。経済成長期で世の中が活

発に動いているときにはザワザワした記事がうけたが、不

況のいまは、立ちどまって静かに考える時期だから……と

(2・6朝日)

「反ウーマンリブの書」

五十歳、八人の子の母という平凡な米国の主婦が書いた

「魅力ある女性」が本国で五十万部のベストセラー。米

国版ヤマトナデシコ読本ともいえるこの本を教材に、日本

でも講座が開かれる人気。「とても抵抗がありました。でも

一步譲つてみて、男の立場を理解し、自分を変えることから雪解けが始まりました」とは、受講の一主婦のことば。

(2・16信毎)

反響さまざまに

「となりの芝生」終わる

最終回の視聴率二十二・三%という記録を出したこのNHKテレビの銀河ドラマ。結末に寄せられた手紙や電話のなかからその反響を。

あれでは百年も後戻り。しゅうとめは言いたい放題な雑言を吐き、亭主は乳離れもしないバカオヤジ。嫁が泣き寝入りをするだけとは。

(一老婆)

和解して平和な家庭に、思わず「万歳！」と叫びました。嫁として、主婦として、家族にとって太陽のように生きたいと思いました。

(一主婦)(2・20朝日)

「スタイリスト」に人気

ポスター・雑誌などの写真のモデル選びから大・小道具の選定などをする「スタイリスト」が女性の新職業としてブーム。

(3・2朝日)

税金相談、女性が増える

札幌国税庁が昨年道内五市の税務相談室に寄せられた声をまとめたところ、女性の相談が四分の一。財産分与、内職収入、不動産が関心のま

(3・4朝日)

奥さん、ハイ晚のおかず

夕食の材料を献立表と説明書をつけて家庭まで届ける新職業が大当たり。六年前東京で始めて大成功、札幌にも進出した。共働きや、病人のいる家庭をねらったが、お得意さんの大部分は専業主婦。

(3・13朝日)

なぜ売れる? 「婦人雑誌」

マンネリ、似たりよったり、などと悪口をいわれながら、年間七千万部以上も発行されている婦人雑誌。一世帯当たり二・三冊の見当。だが、パターン化してあきらめている傾向が。(3・13—20 毎日)

意見

「自然に帰れ」今年の暮らし

近くで短時間、なにか仕事ないかしら、パートはいやだ、とある奥さん。自分の状況は変えずに——とまたも重い気分になった。家事は忙しいといはいうものの主婦は気持ちの上では退屈。しかし外へ出ようとすれば、夫が、社会が、ゆるさない。なにができるか自分の目で周囲の現実をまず見直すべきだ。

(高見沢たか子 1・4信毎)

日本の主婦の地位

こまかい買物も夫が決める米国より日本の主婦の日常の決定権は強いが地位の高さとなると疑問だ。権利というより雑事決定の義務ではないか。比較的下の地位に押しつけられる宴会幹事の立場だ。場所、予算など会の終るまでリラックスできない。エライ人びとは幹事の決定に従うが文句もいわず勝手にたのしむ。日本の夫婦は日本の大学の教授と事務職員だ。お金の決定権は事務、こまかいことにかかわらず「先生」とよばれいばるのが教授だ。決定権で上下の結論は誤り。行動の自由の度合を判断に入れない。

(祖父江孝男 1・5読売)

女性雑誌の純い反応

新年号の婦人雑誌に国婦年

などの反応を期待したが、付録とキンキラ表紙が目玉商品で変りばえせず「ワタシ家庭のヒト」ムード濃厚。リブの話題も出て当然。社会記事にしてもこうとキメつけたり面白半分に扱わず「女性束縛」の規制に目を向けなければ解決の糸口はない。流れから目をそらさず現象の奥底をついてほしい。

(1・7 読売「婦人と生活」)

助言不要と「現代のノラ」

知人が三十年の結婚生活を女の側から解消した。人間は変わるもの、夫婦関係も一定不変でないと考えるわたしは、いつも一刀両断の解消には反対だが、彼女は財力ある夫と離婚を決意。「自分に残された手持ち時間を納得ゆくように生きたい」と仕事を踏み切り板として出てゆく。

(1・18 信毎「女の机」)

取り除け、性別分業のワク

三木首相が学識有識者を集めて刊行したライフサイクル論は性別分業打破の世界的傾向にひどい逆行。日本人のではなく企業のためのライフサイクル論だ。ライフサイクルは国が決めるものでなく個々の人間が能力、適性に応じて自らつくり出すもの。未来の子どもはこの基本的条件は身につけてほしい。

(吉武輝子 1・21 信毎)

ハードな生き方のすすめ

ものごとを言うんだったらあいまいな言い方はよくない。モデルを選ぶにしても自分の好む女性を選ぶ。人形のような美人はよそう。作品で一貫して女の人への願いを表現する。もの心ついたときか

ら女性の置かれている状況について考えてきた。毎年毎年が国際婦人年だった。だから去年のことには関心がない。「女性よテレビを消しなさい」の型破り書籍広告の制作者石岡瑛子さんの弁。

(1・27 朝日)

男女差別の根の深さ

友人が会社をおこし社長に就任。まず「女性差別」経験。若く美しい彼女は五十過ぎに見えないので、年令を問題にされたのだ。年令のハンディつきでないと女は男の風上に立てないのか。最近女の社長、会長は珍しくないが同じ思いだろうか。女の管理者が少ないのは全体的に社会的弱者であることの反映なのだ。(1・27 信毎「女の机」)

話し上手になった女性

スピーチのうまい女性がふ

えた。テーパー・スピーチの名人だった吉屋信子さん級のを耳にするのも珍しくない。女の生活の場が広がり、意思の伝達上黙っていられないのだ。自分の発言に責任をもてば社会の中の自分を意識する。自分の発言にみがきかけよう。

(2・2 信毎「女の机」)

ゴミ処理の有料化に反論

ただでさえ出し忘れか、面倒でか生ゴミが駅のゴミ箱に捨てられ、いつも通る川にはゴミ袋。有料化したらそこらに不法投棄がふえるだろう。チケットがはってなくても放っておけず、見張りも不可能。集積所をあつて掃除して出たゴミも有料か。焼却も大気汚染や近所迷惑から禁止し、こうした事業こそ税金でまかなうのが原則。

(2・8 朝日「論壇」)

かわいい妻

若夫婦の意識調査の結果、妻の理想像が「かわいい」が夫側から三九%弱、妻は四〇%弱で自身がより多く望んでいる。しかしかわいさの内容は、昔とは違っているのではないか。「頼りがいのある妻」が第二位で二五・四%だ。(2・10朝日「今日の問題」)

女性学者

国立民族博物館では二十六人のスタッフ中女性教授一名、助教授二名、助手一人である。文化人類学に女性進出が著しいのは、フィールド・ワークで女性の果たす役割が大きい、新しい学問であること、中根千枝さんが突破口を開いたなどによるが、関西の大学出身の女性進出は非常に少ない。原因は関西の文化・

社会にあるように思われる。

津田・お茶大など東京の代表的女子大と関西の女子大はパターンが違う。女子大批判論はこうした点に考慮してないようだが。

(祖父江孝男 2・18朝日)

男性と料理

数年前、家政学と文化人類学・建築学・経済学などが接近して生活学という新分野が生まれた。衣食など従来家政学だけが扱ってきた領域の研究をぬきにして文化や社会の問題に接近することはできない。

日本では男子が炊事できないのを誇りとする傾向があったが、最近では「趣味は料理」という男性もふえている。個人差・世代差はあるが。

(祖父江孝男 2・20朝日)

家庭教育、親の姿から学ぶ

各界で活躍の方二十四人

にインタビューして共通項があるように思った。①若い日の逆境が人間を育て、強く生きる局面を自分できりひらいた②例外をのぞき小・中学時代数学が得意で操行点がわるい③個性的な生き方が許された。親からの教え「人に迷惑をかけるな」が最高④親の生きざまが最大の教訓。人間は変わる、変化を前向きにとらえなおすべきときの決断の強さが大切なのは。

(影山啓子 2・25信毎)

投書

女が社会で働くには

勤めから帰った女にとって待っている仕事はきびしい。専業主婦にさえ余りある仕事、その代行者がいる場合

も、代わりに低姿勢を余儀なくされる。それで辞めていく女性も多い。男も家事育児を分担することですと豊かな人間になれると思われるのだが。(教員38才 1・8朝日)

公害に無力

身の回りから合成洗剤を追放しても、テレビのコマーシャルに容易にのっかり、政府を信頼しているしゅうとめによって、また使われはじめた。自然や環境汚染の加害者たることに気づかないのだ。がそれを説得できない無力な私だ。

(主婦29才 1・26朝日)

女性テレビ番組の花?

昨年は、女性問題について多くの討論がなされたが、テレビに出演した多くの女性たちが、番組で提起した問題に一言も発言せず、座っている

だけで終始することがよくあった。女性自らが添え物としての存在で満足しているということがあるのではないか。

(男性42才 2・6毎日)

告発された働く母

生活のため勤め続けてきた母、小学校から帰っても母のいない生活。が明かるく育った子。中学生になって「子どもが帰ったとき家にいてはじめて母親の資格があるのだ」と。今までの子どもの深い寂しさを告発された思い。母の心は痛む。が明かるく進んで欲しいと願う。(2・8朝日)

夫婦の姓に中国方式を

離婚時の姓についての法改正は喜ばしい。結婚時の改姓も考慮を望む。民法の規定に関わらず、九九%が夫の姓に改めているという事実に含まれる不合理性と性差別に反対

し、別姓の支持者が増加している。互いの姓をかぶせ合う中国の冠姓方式(例、ジョン・オノ・レノン)はどうか。(学生23才 2・19朝日)

クラスは女性主導型

中学一年の息子のクラスでは女子の方が強く、男子をリードしている。しかし、女が強いと世の中和のたとえ通り、息子の学校生活は楽しそうで、クラスのふん囲気もなごやかで明かるい。

(東京・主婦 2・24朝日)

離婚女性に冷たい風

酒癖の悪さと暴力に勝てず、離婚、さあこれから生きようとしたとたん、就職差別の厚い壁、別れた原因を根掘り葉掘り聞かれ、まるで離婚した女は不幸せでないと言白くないかのような。だが私の人生はこれから始まる。

(会社員29才 2・25朝日)

子供らの「しつけ」差別

無意識のうちに、母親が子どもたちに男女の差別をしていたのか、妹の方は手がかけられないが、兄は勉強だけはするが、ひももほどけず、ツメも切れないありさま、さあこれから戦闘開始、この子に自分のことは自分でする習慣をつけるまで。

(主婦36才 2・26朝日)

障害児の親の心

体の不自由さだけでなく、就学、就職、恋愛等すべて閉ざされた子の苦悩の重さを、わが身も不具になりたい思いで、担い続けた母親には心中など考える余裕もなかった。逆にこの子から、多くのものを教えられ、人生が豊かになり人から「明るい親娘」と称されているが、これは生きる

ための精いっぱいの仮面だ。

(主婦53才 3・1朝日)

都立高・募集人員の男女差

東京都立普通高、既設校で、しかも優秀校といわれる群で、募集人員に平均二百人以上の男女差がある。公立校の、普通科で、しかも有名校ほど顕著に、女性徒を締め出しているというのは何を物語っているのか。関係者の善処を望む。

(主婦42才 3・5毎日)

主婦の収入と税金

主婦の収入で、バートの場合は、七十六万円まで配偶者控除が認められるが、稿料等の「雑」所得は十万円までだ。年間十万円の所得で女ひとり独立し得るはずはなく、配偶者控除がなされて当然と考えられる。不公平な税制度である。

(主婦 44才 3・10朝日)

海外

〔韓国〕

暗い“外貨の支え”の女

キーセン観光の日本人年間約六十万。おとすカネ年間約二億ドル。ベトナムに兵士を送って得た年額はピークで一億五千ドル。その欠損を支える女たちの収入は一流会社の給料の十倍だが、料亭でピンはねされ、家族にぶら下がり荒廃の表情。(1・2朝日)

ソウル教育委員会の通達

女性教員はマニキュア、つけまつげ、すその広いパンタロン等はダメとのお達し。男性教師も高級タバコ、長髪禁止。(2・15朝日・毎日)

〔ベトナム〕

変身めざし特訓中

サイゴン市は元売春婦を再教育するための学校を設立。文化、政治の聴講と裁縫などの作業。夜は芸術活動。生徒三百六十人。陥落当時三十五万人以上いた売春婦の残りはその後不明。(1・30朝日)

〔タイ〕

村に家族計画浸透

村落を基盤にした全国キャンペーンが高い増加率を着実に下げている。この半年でピル使用者は四万二千人から六万人に。この運動を衛生知識普及やマラリアなどの予防治療に拡大するという。(2・19朝日)

〔インド〕

人口過剰に強制措置

インド政府は子どもを二人

に制限しない政府職員と首都

住民に罰則案を公表。不妊手

術夫婦には無料診療や政府職

員採用の便宜を与え三人以上

の子持ちに水道、教育や住宅

融資停止。(2・27信濃毎日)

〔トルコ〕

少なく産み健康に

トルコ人の平均寿命は男五十六才、女五十八才で三十年前より二才ずつ延長。乳児死亡率が減り、産制の関心が高まり出生率も下がった。希望の子どもの数は五年前は平均三・二四だったのが今回の調査で二・六一に。(2・5朝日)

〔タンザニア〕

女性よ、助け合え

タンガニカ連合婦人会長は婦人週間大会で、長年続いた女同士の闘争をすぐ捨てなければ地位向上と国家の発展は望めないと弁じた。

(1・17朝日)

初の女性大臣が二人

タンザニア大統領は、法務

大臣、都市開発大臣に女性を

任命。また女性州知事も初め

て誕生。この国ではミズどこ

ろかンドクグ(兄弟とか同志

の意の語)を使用。

(2・2朝日)

女性擁護の法案を

女性の七割が農業従事のこの国ではILO基準は結構だが、恩恵に浴するのは少数。別の法案が必要と政府や婦人会が努力。現在女性は農業組合の登録権、農産物の収入の所有権、土地所有権もない。参政権、産休はあるが、未婚の母には有給の産休なし。

(2・9朝日)

〔ケニア〕

女性の敵シュガー・ダディ

ケニアでは洋服やお金を与え結婚の口約束でだます男性が増え、女高生の妊娠退学などが増加。「親や教師は生徒が物質的誘惑に負けず、在学中セックスをせぬよう注意せよ」との警告が発せられた。

(2・2朝日)

〔マラウィ〕

妊婦用粉ミルクまで夫が、

中央アフリカマラウィ共和国の寒村の女性には十四、五才で結婚、ほとんどが極度の貧血状態で出産、死亡も多い。

食事は男が先で、栄養源を独占するので貧血が少ないが、出産用の献血も「女の役目に協力は不要」と拒否。一夫多妻で労働は女性。男はそばでブラブラするか、かけごとに熱中。

(1・14読売)

〔イギリス〕

リブが作った新しい幼稚園

ロンドンのチルドレンズ・コミュニティ・センターでは「育児は女」の概念を保父が実践で打破。全体が一つの家で、食事やおやつ作りに子どもも参加、料理のとりわけ、後片付けも各自。両親も当番で炊事洗たく、運営にも参加。区役所の補助金で開園来三年、異端なものに余裕のあるロンドンだが今後の問題点も多い。(作間由美子)

(1・12—13毎日)

クリステイー女史死去

推理作家、劇作家アガサ・クリステイー女史十二日死去。八十五才。デームの称号を贈られていた。

(1・13信毎)

紙のビルはいかが

紙に薬を浸したビルが近く英国で発売、一部輸出される。「紙ビル」はもとは中国

で開発され、徒來のビルより安価。切手大で、口に含めばよい。主に発展途上国に輸出の予定。

(1・19信毎)

ウィマン・リブのせい?

過去三年間に女性アル中患者が倍近く増え、十五万人に達した。リブの影響で、主婦がバブ(居酒屋)に入りやすく、スーパードで酒ビンを買やすくなった、家庭内の緊張、などが原因、と権護団体が分析。

(1・20朝日)

性差別禁止法発効一か月

美術取引所に二百三十年の歴史始まって以来初の女性競売人が誕生する一方、「求む女助手」的な男あるいは女に限定した広告は違法でパッタリ。職員四百名の機会均等委員会にはすでに一万件を超す訴え。

(1・31毎日)

「国内婦人年」!?の英国

性差別禁止法によると既婚未婚の区別から、教科書の父母の役割分担も遺法。雇用差別の罰金は最高三百二十万。同一賃金は賃金差別はもとより、昇進差別も厳禁。「機会的等に関する使用者へのガイド」も大量配布された。

(1・31毎日)

CMの性差別、やり玉に

機会均等評議会は「許されないCM」として女性が家事にいそしむ姿をあげた。洗剤広告四回のうち、女性の台所姿を二度出したら男性も同じ姿で二度出すこと。男性がバトンのままなでして女性を見る場面もだめ。(2・16朝日)

〔スウェーデン〕

母親は働いたほうがよい
長時間保育所に預けられる

子が多く、愛情不足病にかかっているが、母親不在が原因ではない。働く親は仕事のない時は一緒にいる努力をし、博物館、展覧会等にもよく連れていき視野も広く積極的。

現代社会構造では家にいる親のマンネリ型より複数のしつけがのぞましい——と新聞の子ども特集。(1・10朝日)

十三才の少女にピル

一校医が、生活と性教育の討論会で、法的に性交禁止年令でも、妊娠の危険があれば、法に反してもピルを与えたと発言、論議を巻き起こし注目されている。(2・9朝日)

十四才でも認めます

政府はセックスの年令制限を十五才から十四才に下げると勧告をまとめた。同勧告には近親相かんの罰則、同性愛の

差別待遇などの廃止も盛り込まれている。思春期が早まったこと、最近セックス観がますます自由で寛容になったことを背景とする提案。(2・18朝日)

「ベルギー」

男を裁く「国際婦人法廷」

三十か国の代表がブリュッセルに集まり、あらゆる「女性に対する罪」を告発、五日間討議した。日本代表は売春を暴露。デンマーク代表はポルノ産業に支援を与える政府を告発すると語って拍手を浴びた。(3・10朝日)

「フランス」

夫婦永續きの条件

二千組の若夫婦を対象にした結婚生活が永續きする条件の調査で第一位はセックス面の一致。男女それぞれ七十二%、七十一%で、二位の子ど

も、三位の精神面を大きく引き離れた。結婚は現在では二人の男女の個人の愛情を公に認めさせるためのものとなっていて婚前交渉は当然のこと。結婚前同棲の経験者は一五%（パリでは三〇%）。

「西ドイツ」

根強い亭主閥白？

西ドイツの家庭では夫がテレビ番組を独占、妻は台所というケースが多いが、このところ変わりつつあり「教養高い」夫は家事をする度合も高く、妻の就職を認める男性は六十四年二五%、今回の調査では五八%に。

「2・20毎日」

ピルとリブで人口減

昨年五十万人の人口減。原因は①勤労女性増加②就学期間増大③将来への政治、経済

的配慮④女性解放⑤ピルの一般化など。一家庭平均子供一・五人。(2・21毎日)

働く女性に「苦情箱」制度

ドイツ連邦議会議長レンガー女史は「賃金差別を受けたら私あてに手紙を」と呼びかけた。実態を具体的にとなえ、討議の生の資料に使うが名は公表しない。(3・11朝日)

「イタリア」

中絶合法化で男女が対立

中絶問題が政府をゆるがす大問題になっているが、中絶合法化の世論調査によると、国民の五四%が賛成。三六%が反対。男女別では、女性五四%が合法化反対、男性六〇%が賛成と大きな違い。最終的には国民投票で決定するが、キリスト教民主党政権の死活にまで発展しそう。

(3・6朝日)

「チェコスロバキア」
奥さまは料理好き

チエコ地方では手のこんだ伝統料理を毎夕作る家庭六〇%。料理に積極的と答える女性がほとんど。かん詰、冷凍食品等の利用者は一〇%だが、都市や就業の女性、若い女性には比較的肯定的で、料理を「必要悪」とする女性には人気がある。(2・5朝日)

「東欧諸国」
目立つ離婚率の増加

相次いで建国三十年を迎えた東欧の社会主義諸国で離婚率が増加。人口千人当たりの離婚者はポーランドで七〇年一・〇五人、七三年一・一九人、東独一・六人↓二・三人、ハンガリー二・二人↓二・四人。このような情勢下、各国では社会主義国の家

族関係のあり方をめぐり大論争がおこりつつあるよう。

(3・13朝日)

「アメリカ」
女性解放運動とは――

生き方の選択の自由を要求することだ。何をしたいかを見つめ、一人一人が楽な気持ちで自信をもって声を発したら、女性も男同様各自異なる個性を持つ人類と皆わかるだろう。

米国の女同士は意思疎通が下手。社会は男性の愛情獲得競争を教えた。初期は同性無視も目立った。運動が手をつなぐようになってわかったものは大きく、歴史はいま第二章の幕開け。侮辱的批判は数々だが運動家の多様性も理解されてきた。(マリ・スクエアチャーター)

(1・3―2・23読売)

フォード大統領の女性登用

共和党全国委員長からホワイトハウス婦人問題顧問を務めたアームストロング女史が駐英大使に選任された。米国の女性大使は戦後十四人、現在六人だが格式高い駐英大使は初めて。(1・8毎日)

私の見た一世の老人たち

教育寄付をしたり、皆に慕われる高齢のM氏、仕事に奉仕に活躍のM夫人はじめ、ひとり暮らしのだれもが明るく、おさびしいでしよう――の固定観念は砕かれた。人間はひとり生きるもの、とM夫人。異民族社会での苦勞が独立と助合いの心を培ったからだ。(山崎朋子 1・17朝日)

米の主婦は既成概念を克服

子持ちの主婦が大学に通い卒業後も弁護士学校等に行く

人が多い。「年だから」とは決して言わない。日本のOLは腰かけの。主婦は働く女性に理解がなすすぎるのでは。(江守 節 1・25信毎)

米上院議員の夫人が護歩

夫(ジャビック共和党上院議員)は議会でイスラエル援助を主張、妻はイランの国益のため働くのは好ましくない――との世論を「夫は夫、私は私」とはねていたが「公職にある者の妻の権利拡張には世論があいまいで残念」と夫人が辞職。リブの国で夫の利益先行的一幕。(1・29朝日)

FBIに初の女性捜査官

大学新卒の黒人シルビア・マシスさんを採用。(2・9朝日)

女性の地位向上へ法案

ロッキード事件を明るみに

出したバーシー議員が「参政権五十六年というのに米国女性は今も二流市民」と地位向上案を発表した。

提案による「連邦女性センター」は女性に関するすべての連邦計画、事業、法律、政令などを総点検し、真の男女平等を実現しようとするもの。

(2・10朝日)

下半身マヒに十四億円払え

ロサンゼルス最高裁は、作業中鉄塊の下敷きで下半身マヒになった夫と妻に約十四億円払うよう工場の機械設備担当会社に命じた。公傷補償金として史上最高。夫婦生活の逸失補償金が妻に払われるのも初めて。

(2・12読売)

女性に負けた米海兵隊

海兵隊に志願した女性が二年後妊娠を理由に除隊通告さ

れたが、連邦高裁は違憲と判決した。「妊娠にまつわるタブーは時代遅れ」と裁判長。

(2・26朝日)

男性をしのぐ伸び率

凶悪犯罪の女性逮捕者は六〇—七三年間で二七八%増加。男性は八八%。総件数ではまだ男のテキでないが、万引、売春等の伝統を破る新傾向が。

(2・26信毎)

女性司祭登場に非難と擁護
オハイオ州で女性司祭が聖さん式を行ない非難が出た。七三年の聖公会総会で女性司祭は否決されたが、翌年十一名任命された結果。「イエスには女性の使徒はいない」との声に対し改革派は「神学的に反対の理由はない」と反論。

(3・11朝日)

企画・編集

印刷・出版は

BOCへ

女の力、女の心を集めた創造力の銀行BOCは、一九六四年創立以来、誠実な仕事で信用をいただいています。単行本・機関誌・同窓会誌・名簿・パンフ・リーフ類の企画から印刷まで、いつでもご用命ください。

●企画の概要をお教え頂ければ、すぐお見積りいたします。自費出版物もどうぞ。

●印刷物のほか、スライド・映画・ビデオ等の視聴覚材の製作、ほん訳・調査等も、ご用命を。

東京都新宿区新宿1-9-7 あこら内

BOC

(03) 東京 354-3941

あじらのあじら

読者のひろばです。反論、感想、情報、なんでもどしどしお寄せください。

意見

日本語は音声教育から

私の結婚した相手は熱心なローマ字論者でした。その関係で私も言語問題には深い関心を長く寄せております。

最近のマスコミの動向をみても、みな漢字かな書き礼賛です。日本には漢字があり、いろいろなイメージをもたせることができますが、そのイメージはほとんど視覚に限られています。「閉ざされた言

語・日本語の世界」の著者、鈴木孝夫氏に言わせれば、「日本語は水という字を、スイともミズとも読めて具合がいい」ということですが、逆に、ミズかスイかわからず困る場合もあるのです。

また、日本語問題に関心を持つ人の多くは、漢字かなまじり書きを礼賛し、制限漢字をもっと増やそうという運動さえ起こっています。

私は日本語を音声という面から考えています。ことばというものは「音」なのです。ことばは耳から聞いて覚える

ものです。それは幼い子どもを見ればよくわかります。

昔は、耳で聞く教育が欠けていましたが、最近ではテレビ、ラジオが発達して耳で聞く教育が普及してきました。

しかし、アクセントについては感覚がにぶいようです。姫路にいたころに経験したので

すが、電話をかけるときにはその土地のアクセントで番号を言わないと交換手がつないでくれないのです。統一された国家でアクセントが違いために意思の疎通ができないということは文化的にも不完全なことです。ですから音声の統一を図らなければならないのですが、漢字を使っている

と、その習得の方に力が費やされて、ことばの音の統一ができなくなってしまうのです。

音声の統一のためには、ま

ずおかあさんたちに音声教育をする必要があると思います。どこの国でも、子どもは母親を通してことばを習得します。音声教育を通してアクセント、文法を教え、どこへ行っても日本人の話す日本語はわかりあえる、というようにしなければいけないのです。

カキのフライカカキのフライかの区別のために、わざわざフライド・オイスターなどという外国語を使わないですむように、統一ある日本語をつくるのが大切です。残念なことにこういう音声教育について、女性で意見を述べる人が一人もいません。そこで、私はあじらのみなさんに音声教育の重要さを認識していただくこと、意見を述べさせていただきます。次第です。

(多田サイ)

行動

正月廃止を宣言して

好天氣に恵まれた山陰の空も今日は例年通りの雪模様で、暗い重い空が帰ってきたと、かえってほっとするおかしな心境です。暗い空の中で暮しているとき青空の快さを忘れてしまふようです。女たちも暗れた空の解放感を先ず知らなくてとはと、しみじみ思います。

今年は正月を私の肩から下ろしました。必要を感じた者が拾えばいいと思って。こうこつ気味の姑も、二十五年選手の手のつれあいも無気味に沈黙を守っています。きっと私の

宣言の意味がよく分らなかったのでしょう。暮や正月が、かえって忙しい洋裁という仕事の上に、暮や正月一切を一人で背負ってきたあほらしさからやと脱する方法をみつめました。それは、「しなければいい」という簡単なこと、動かない相手を引っぱるより、相手ベースにまで下りてゆこう、それで困るなら困った者が動けばいい。今年はこれでやります。

知ることが考えることの先だと思っても、本当のことを知るのは難しい。だから情報を期待しています。「それをより多くの人に」は私たちのやらなければならないことでしょね。（島村美紗子）

自立を実践して

この一年は、私たち母子にとって激動の一年間でした。「人形の家」のノラよろしく

三子を連れて家を出、ようやく、夫（家族制度）の抑圧からのがれて、自立することができるようになりました。私と同じような立場の女たちに思いを寄せながら、今後男男女差別、女性の地位向上などについて幅広く考え、行動していきたいと思っています。

（須藤昌子）

たより

学童保育を始めます

四月から学童保育の仕事をすることになりました。小学校一年生から三年生の子どもを看るのですが、子どもたちの指導をどうしたらよいか考えています。参考になる資料がほしいと思っています。

（鈴木トミエ）

アメリカで「あごら」を知って

昨年、女性の社会的地位の確立が進む中国に滞在し、また本年米國へ参りましてから、書店に女性問題関係の本だけのコーナーがあったり、小さいながらも街に女の問題関係の本だけを扱った本屋さんがあったりするのを見るにつけて、「日本はまだ立ち遅れている」の感を深くしておりました。そのようなときに「あごら」の存在を知ったことは大きな喜びでございました。

現在、米岡さんを中心として、日本の女の問題を研究する会というようなものを結成いたしました。当地はハーヴァード、MITをはじめ大学が多く、日本人の数が少なくありませんので、私も自分のまわりの日本女性に「女の間

題を語り、研究し合いませんか」と呼びかけをやっております。私自身が勉強させていただくのはもちろん、「あごら」をそうした会合の教材として利用させていただこうと考えております。

(北村三和子)

「女子にあるまじき言動」

私の心の痛みと、よろこびを皆様にぜひ聞いてほしいと思う。

先日のこと、札幌の実家から至急帰省せよとの連絡がきました。「何ごとか」と聞くと、私の勤務先から「一般女子にあるまじき言動なので、厳重に注意されたし」という連絡があったのだという。

何が会社のいう一般女子にあるまじき言動なのかというと、

①年末一時金の回答があった労働集会に、「株主に対する

配当金が利益の一五％とは、多すぎるのではないか、一にぎりの株主のために私たち労働者の取り分がけずられてよいか」と質問した。その結果、私は二、三日後に技術部長に呼ばれ、小一時間余りも資本家の立場をくどくど説明されてしまった。

②先日、休日出勤を強いられました。私は前々からの予定をキャンセルして出勤したにもかかわらず、公休出勤の手当は出さないし平日より一時間早出、四時間残業にもかかわらず会社側は残業手当も認めないという。平社員が三人出勤したのに、私に個人的には交渉してきた。今までも、曖昧模糊としていた問題（従来も残業届を出す人に個人交渉して取り下げさせていた）なので、私は引きさがれませんでした。今後はこの問題を明確にするなら、今回の残業請求は取り

下げるといったところ私にだけは残業を認めた。

③私の職場には技術系を含めて四人の女性がいます。昼食どきに来客があるときその都度事務の人が主になって昼食、お茶の用意をする。私も時々手伝うのだがそういう時にはゆっくり昼休みもとれない。私の場合には、勝手に昼休みをくり上げたり、くり下げたりして休めるからまだいいのだが、事務の人はそうはいかない。それで、接待のために正式に狩り出されたときには、別途休憩時間を保証してほしいと申し出た。「他の人は何もいわないのに、なぜあなただけがそういうのか」と言われてしまった。

私はこの話を聞いて、会社のきたなさが、女はいくつになっても親から独立してないといみなされることに對する腹立たしさで胸がいっぱい

なった。でも、幸いに先輩に電話をするとすぐに四人も飛んできてくれた。孤立無援と思っていた私に仲間がいたことはいれなかった。

家の方へは、「とにかく私の生活を見に来て、会社での状況も私一人の意見だけでなく先輩の第三者的な話も聞いてほしいと手紙を書いた。

(結永緋亜)

もっとマスコミに

アピールを

先日、北海道文化放送（テレビ）の奥様番組で、女性問題を初めて取上げてみるから話し合いに出演してほしいと依頼されました。発言はまったく自由、生放送だから後で工作される心配もない、「あごら」の宣伝をしてもよいとのことなので、OKしました。当日の番組案内（道新）には、あごら北海道の例会の写

真がのせられ、話し合いのメンバーは、道新の深尾勝子さん、道婦連の佐藤柳子さん、ミニコミ市場「ひらひら」の馬場郁子さんと「あごら」の私。与えられたテーマは「男・家庭・仕事・リブ」、時間は正味二十分。

ところがこれでは一つのテーマにつき一人約一分しかないわけで、いくら発見が自由でも突込んだ事など何も言えません。

「男女平等になったと言われるが、男の子の誕生が望まれることから男人生の優位性が認められているとわかる。男は仕事、女は家事の役割分担家庭が調和が取れていると思われているが、夫の身に何か起こればバランスはすぐくずれるわけで、主婦というのは大変不安定な身分。現実には女が働かなければ生活できない家庭が多いが、女は家事と

いう前提があるために職場では差別され、不況にはすぐ首を切られる。世界行動計画に基づいて性別役割固定化を廃し、真の男女平等社会にしたい」というようなことを話すだけで時間いっぱいでした。

当組終了後、担当者に時間不足の不満を述べて、今後もしドンドン女性問題を取上げてほしいと話したのですが、そのような企画のOKを取るには視聴者からの支持反応が必要とのこと。そう話している間に早速一主婦からはいった電話、拒絶反応でした！

帰宅後あごらの方々から「あんな当たりさわりのないことしか話さないで、発言規制されたのですか」等と質問されましたが、そんな発言さえ「拒絶」される現状を思うとき、私たちがマスコミ等にもモットモット積極的にアピ

ールしていく必要があるのではないかと思いました。

(北海道 山口里子)

三食昼寝つきだが

私のような三食昼寝つきの主婦にとって、この雑誌は正直いって肩がこる。しかし、《あごら》に送金することが同性のために、それがたとえ砂浜の一粒の砂でもいい、手助けできるのなら、うれしく思います。どうぞがんばってください。(秋田 八代絃子)

男性から

本の奥付考

「あごら13号」P35古川雅子さんの文中に「当然要らぬのが本場で、自分のほうから求めて何でも許可が要ることにして行くのは、自分の首を締

めて行く……」とあるのを読んで、これは面白い指摘だと思いました。関連は多少とびますが、とっさに浮んだのは、出版物の奥付のことです。僕の記憶では、これは、昭和二十四年五月廃止になった出版法、新聞紙法に、形式など義務づけられていたと思うのですが、すでに今は原則的には必要なく、好意的に見ても読者との関係から見ても必要以上の事が書かれている奥付をよく見かけます。今、表面的にはない出版警察に服従していることになるでしょう。おかしいことです。ところが、僕らが同人誌を出したとき、「出版物としての重味がないからつけよう」という同人がいました。彼が金主でしたのでつけることにしましたが、ナントモヘヤ。

(田中功男)

あごら北海道

産む性としての女を 考える

雪の季節、出席者は少数でしたが既刊「あごら」八号の読書会が続けられました。話合われたことの幾つかを紹介します。

不況下で女の新規・正規採用は激減し、職場では共働き女性が働きづらいムードが作られつつある。しかし景気の変動で女がすぐ労働権を奪われ、パートや内職等の低賃金労働に追われて行くことは、結局労働条件全体の劣悪化を招き、男の首をも絞めて行くことになる。労働者が目先きの利益にとらわれて、男と女、常勤と臨職等の格差を受け入れ連帯をくずすことが、資本家に利用されている。生産

性追求第一、弱者切り捨ての資本家の論理に巻込まれず、働く者の論理、子供を産み育てて生活していく人間の論理を打立てて行く努力が必要だ。

二十代は一生懸命働いて三十代は育児・教育に専念し、四十代以後は趣味や社会復帰に生きるというライフサイクルに従っていたら、若年定年、中高年パート雇用という形で女の低賃金産業予備軍化を強め、女はどこまでも資本家の都合次第で一生安く置いたたかれることになる。そしてこれは働いて生計を担わなければならぬ女の状況を困難にし、多くの女に男への隷属を余儀なくさせる。これはまた、保育所不足、障害児者対策、老人対策不足といった福祉行政貧困のしわ寄せを、家庭の女が個人的に負わされる状況を許してしまう。福祉

貧困社会で女が家族のために仕事や生活を犠牲にする「思いやり」は個人レベルでは美しい面もあるが、社会的に解決すべき問題をウヤムヤにして、さまざまな弱者・少数者の生活や権利を犠牲にしたリ圧迫したりする形になることがある。そういう広い視野で自分の生活も考えていかなければならない(例えば、主婦であることの被害者性は認識されても、加害者性は認識されていない場合が多いのではないか)。

主婦が意識を持って生活するようにになれば夫も子供も変わるだろう。しかし本当に夫を変えるには離婚も覚悟の上でなければ、本当に闘うことは出来ない。そのために女性の経済的自立の基盤は必要。経済力がないために夫の浮気も耐えるほかない女は依然として多いし、「かかあ天

下」でいられるのも夫の寛容次第というのが主婦の実態なのだから。また、どんなに意識した母親でも現実に職を持たずに家にいれば、子供は小さいときから、女は家事育児をする者という意識を植えつけられてしまう。たとえパート代より保育料が高くついても、何しろ子持ちの女が働くという事実を作っていくことの必要性があるのではないか。

乳幼児の集団保育の意義や現在の問題点等についてもっと情報がほしい。そして子供を保育園に入れて働くことへの漠然とした不安や後ろめたさを解消したいし、夫などの説得のためにも理論武装したい。

「四人目も女の子」事件では夫の責任はどう問われたのか。女はまず男の子を産む義務感を持たされている。「女

の子は、他の男の世話に明け暮れる奥さんとして取られてしまふか、才能を活かそうとして仕事と家庭の両立に苦しむイバラの道が待っているかどうかだ」という考えから男の子の誕生を望む夫は多いし、夫の親からの、継承者としての孫への大きな期待も女の重荷になっていることが多い。伝統的な男の人生・女の人生の固定観念をくずして、男も女も同じ期待と喜びが持たれる社会にならなければ、同性である「女の子」を産むことで悩まされる女はいつまでも絶えないだろう。

子殺しの事態に行く前に中絶の道が、それより前に完全避妊の道が全ての女性に開かれていれば多くの不幸が防げる。危険だから禁止と言うのではなく、より安全なピル、安全な中絶の研究を進めるべき。男の側の避妊も同様。妊娠・出産は女の責任という意識を変え、正しい性教育、男のつわり・出産・育児休暇、産室への夫の入室等「産む」ことへの男性の参加をもっと進めていく必要がある。

母性尊重の美名の下に、育児が女だけに個人的専門的に負わされているために、母性が活かされていると言うよりその人間のほかの人間性・可能性が全く奪われてしまうというのが現実。「子育てが最初は義務感だったけれどもその内に本当にかわいくなつた」という主婦の言葉は、その女性にとって初めはまだ自分自身の世界があり育児が自己犠牲の負担に感じられたのに、育児だけの生活を続ける内に自分には子供との世界しかなくなってしまい、子供のかわいさに没頭して行くという面を表わしているのではないか。そしてそのような母性以外何もなくなった女が愛情面や経済面で家庭の崩壊に直面したとき衝動的な子殺し、母子心中に走る危険は大きい。子殺しや母子心中の土壌となる子供の私物化、母子一体化、そして家庭が破綻したら子供を抱えて生きるすべを持たないという母親の無力状態は、育児が母親一人に完全に負わされるところに原因がある。育児は母と父と社会全体の仕事とされるべきだ。

☆口で言うのは簡単だが自分の生活の場での実践は小さい事でも本当にむずかしい。でもまずそこからだと思う……。

と言うわけですが、あごろとかかわりが実際に参加者それぞれの変革をもたらしつつあるのも事実です。自立して生きる決心から恋人との関係にビリオドを打った人、恋人や夫と持久戦を開始した人、職業婦人として生

きられるよう資格取得の勉強を始めた人、女の管理職に対する偏見の中で勇敢に前進せんとする人、職場で初めて産休の要求を出した人、子供を保育所に預けて働く決心と具体的な場をやっと得た人、子供の教育に悪いと周りから言われても胸をはって働き続けようと頑張っている人等々、あごろ北海道の交わりは細々ながら、集まる者の活力の源になっています。(山口里子)

あごろ東海

二月例会に出席して

「転勤妻の悩み」——この言葉から受ける妻のイメージは、実に男の従属物という感じである。夫が転勤だといっては、今までの生活を全部捨てて、また転勤地でゼロからの出発。男が策きあげてきた

社会というのは、家族ぐるみの企業への奉仕。女が仕事を持っているなど全然考えていない。転勤しなければ男は出世しないという現実。夫の出世が妻の生きがいだと信じて、喜んでついでにける女はいいかも知れないが、なぜ、男の側の論理だけが正当化され、それに女も引きずり込まなければならないのだろうか。女の生きがい（働くこと）を転勤のたび奪われていたら、女の側の論理はどうなるのだろうか。女の夢はいつも男によって変えられる。

やはりここまで考え出すと、結婚そのものが問われる。離婚するか、別居生活するか、これも一つの解決法だと思うが、全く個人的な解決法でしかないと思う。妻も仕事を持っているんだという認識をもっと社会へアピールして、共働きをしている家族

は、原則として転勤させないというような、社会的な方向にこの問題を持っていかなくてはいけないと思う。

「転勤妻の悩み」の問題をテーマにした「あごら東海」の二月例会では、夫に従属した妻の座からの意見が多く出され、例えば、親友を失うとか、子供の転校がかわいそうだから、地域社会とどうかかわるかとか、実家へ帰るのに交通費がかかるとか等に終始し、自立した一個の人間としての女の立場からの意見があまり出なかったことは、非常に残念だった。（松浦セツ子）

あごら東京

初の試み

東京・東海合同会宿

年に一回ぐらいは、ひと晩じっくり語り合いたい、それには、東京、東海別々に例会

を持つよりは一緒の方がいいのでは……、という声が出たのが昨年の暮。

そういうわけで、一月一七、一八日の両日に念願の、東京、東海合同会宿研修会を開催することとなった。今回は、第一回ということで参加者が少なかつたのが残念。

第一日目は、一七日午後三時半より、東京都勤労福祉会館会議室で、「私と婦人運動」というテーマで討論。参加者は東京七名、東海五名、会員外参加二名の計一四名。自己紹介も含めて、自分の婦人運動へのかかわり方を話し合った。特に、東京と東海との地域性の違いが、クローズ・アップされた点が、今後運動をすすめていくうえで参考となるだろう。日ごろ電話や手紙でしか交流できない遠方の仲間とひざつき合わせて語れた喜びは大きい。

夕食後は今後の《あごら》の方針、テーマなどについて話し合った。転勤、家事、結婚、老後、ライフ・サイクルなどを今後とら上げていったらいいのではないか、という意見が出た。

東海参加者全員と、東京事務局長四名は、福祉会館に宿泊し、日常活動の問題点、むずかしさなどについて深夜まで語り合った。

第二日目の一八日は会場を《あごら読書室》に移し、十一時より簡単なKJ法を用いて、——私が家から出る障害となっているものは何か——の現状分析を行なった。参加一四名。時間切れで細かい分析はできなかったが、現状を客観視できたと好評。その後、午後一時三〇分より、「女の平和」（123ページ、立見席参照）を観劇し散会した。

資料集

資料1 第七十五国会参議院における婦人問題の討議

一九七五年十一月十八日

質問者 佐々木静子（日本社会党）

民法等の改正問題

離婚復氏の強制、離婚裁判の管轄、夫婦財産制、遺産相続分、再婚禁止期間、夫婦別氏

国籍法

父系主義、出入国問題

婦人の人権擁護

佐々木静子 民法改正について法務当局の意見を聞きたい。選挙区の大阪では約四十の婦人団体による国際婦人年大阪連絡会が、妻の地位を高める方向の民法改正を強く要望。法務省はいかに取り組んでいるか。

稲葉法相 家族法上の婦人の地位は理念上は男女平等だが、実態上により実質的な平等のために法制上さらに検討すべき

点もある。民法上の具体的な問題は法制審議会民法部会が非常に前向きに検討中で、方針は今年決定。改正法案の提出は通常国会になるだろうと考える。

離婚と氏

佐々木 法務省が婦人の立場に立って前向きに取り組んでいるのを心強く思う。

形式的には男女平等だが実質的には平等の顕著な規定として氏の問題がある。婚姻によって氏を変えた者は、離婚した場合には復氏しなければならない。婚姻中に称する氏は夫、妻のどちらの氏でもよく、形の上では男女同権だが、実質的には九六%以上の夫婦が夫の氏。離婚でもとの氏に戻るのには妻がほとんどで社会的にも非常に不利益。男女平等をはなは

だしく阻害する。未成年の子を母が親権者として育てる場合、母と子の氏が異なると、日本の社会では必要以上に肩身の狭い思いをする。離婚による復氏強制の廃止を婦人団体が強く要望。法務省の取組みの現状と今後の展望は。

稲葉法相 離婚による復氏強制は婚姻中の氏で長年社会的活動をしている人や子と氏の異なる親権者に不利益。

復氏するかどうか選択可能の方向で法制審議会民法部会で検討中。国際婦人年でもあり早急に結論を出し、次の通常国会に改正案を提出できるよう最善の努力を傾倒している。

香川保一（法務省民事局長） 法制審議会は男女平等も含め身分法全般を審議中。国際婦人年でもあり、結論が容易に出る問題は早急に立法した方がよいとの大臣指示もあり、離婚の復氏の問題は法制審議会民法部会で早急に結論を出して頂き、通常国会のできるだけ早い時期に提案するため、現在作業を進めている。

佐々木 できれば今年中と思ったが、困難なら、国際婦人年である昭和五十年度

の会計年度内の提案を強く要望するが、具体的な計画は。

香川 できるだけ早く、できる部分から国会に提案するため、離婚の際の復氏の問題と、人事訴訟法の離婚の場合の裁判管轄権の問題とを法制審議会民法部会で一月中旬ごろまでに結論を出して頂き、二月早々に法案を出したいと努力中。

佐々木 二月早々にも提案できると思っていますよいか。

稲葉法相 よい。
佐々木 大臣と局長の大変力強い答弁ありがとうございます。

先日メキシコシティの国際婦人年世界大会での各国代表の話では、欧米諸国の多くは復氏も婚姻中の氏の使用も自由選択。母子家庭や働く婦人のため、法務当局の全力を挙げての取りくみを望む。

離婚の裁判管轄権

佐々木 人事訴訟手続法第一条の問題だが、裁判管轄が専属管轄で、夫の氏を称する夫婦は夫の住所地に、妻の氏を称する夫婦は妻の住所地に限られている。大

部分の夫婦が夫の氏を称している現状では、経済的にも困難な立場の妻が夫の住所まで出向いて裁判せねばならぬのは、妻に非常な不利益を強いる規定。ぜひ夫または妻の住所地と改めてほしいとの要望が強い。その点の検討は。

香川 離婚の裁判管轄権は厳密には身分法の問題ではないが、離婚の関連問題なので法制審議会民法部会であわせて検討し、復氏の問題と同じスケジュールで国会に提案したい。内容は恐らく夫または妻のいずれかの住所地となると思う。

佐々木 さしあたり復氏と裁判管轄権の二つを二月初旬に提案、立法化を進めてほしいが、大臣はどうか。

稲葉 この二点は実行可能で問題がなくよいことと心から思う。二月上旬提案の約束は実行する。

佐々木 国際婦人年の、婦人のための立法改正第一号を法務省がやることは心強い限り。実行をぜひお願いする。

民法改正論議の中間報告

佐々木 法務省民事局は八月一日、法制

審議会の民法部会身分法小委員会の中間報告を出した。その概略は。

香川 第一は相続人・相続分の問題。非嫡出子の相続分は嫡出子の半分だが、これでよいかどうか。配偶者、主として妻の代襲相続権を拡大すべきかどうか。養子や兄弟姉妹の相続権を再検討の要はないか。配偶者、主として妻の相続分三分の一を二分の一にすべきかどうか。

第二は夫婦財産制。別産制の維持が共有制かの検討。婚姻中の財産処分配偶者の同意を要すべきかどうか。離婚の際の財産分与制度を再検討の要。

第三は夫婦財産制に問題があるため、夫婦間の財産取得の関係での寄与分の問題を立法化の必要があるかどうか。寄与分は相続の際に限り、遺産分割の特別措置として検討すべきとの問題も出た。

佐々木 この中間報告は法律家以外に、婦人団体や婦人社会の関心が大きい、国際婦人年大阪連絡会の妻の相続分に関する意見は次の通り。第一、妻と子の共同相続の場合は二分の一ずつ。第二、子がなく妻と親の共同相続の場合、現行の二分の一ずつを妻三分の二、親三分の一

に。第三、子がなく妻と兄弟姉妹の共同相続は妻三分の二、兄弟姉妹三分の一だが、妻だけの相続に。これらはどのような方向に向かって検討しているのか。

稲葉法相 法制審議会で論議中で、法相の意見をこの席で公表しにくい。抽象的答弁だが、実態を踏まえてより実質的な男女平等を、夫と妻の地位が不平等な点は徹底的に改めたいと思っている。

佐々木 先日予算委では妻の味方との答弁だったが、その姿勢は不変か。稲葉法相 予算委では妻の味方的方向でと言ったが、余り行き過ぎて女尊男卑にならぬよう警戒しつつ改正に取組む。

女だけの再婚禁止期間

佐々木 日本の現状では女尊男卑にはならないので安心してやってほしい。

そのほかにも、たとえば民法七三三条「女は前婚の解消又は取消の日から六箇月を経過した後でなければ再婚をすることができない」は男女同権を阻害している。男は妻死亡の翌日でも法的には婚姻届が可能。法制審議会の中間報告はふれ

ていないが、法務当局の考えは。

香川 七三三条の再婚禁止規定も身分法小委で議論。現行法は若干オーバーが大方の意見だが、民法七二条の父性推定の規定とあわせて検討の予定。

佐々木 前婚と後婚にまたがる妊娠は非常に少ないと思う。あった時は父を定める訴など特別の手段を講ずればよい。特殊な例を原則とするのは、婦人の人権の侵害と思う。ぜひ平等実現の立場で取り組んでほしい。

夫婦別氏

佐々木 本人が希望すれば氏を変更せず婚姻届が可能な方法についてはどうか。すでに認めている国もあり、中国や朝鮮など東洋はもとと夫婦別姓。夫婦それぞれ的人格を尊重すれば、別氏も自由の方向に行かねばと思う。法制審議会の議論はどうか。

香川 身分法小委では、現在の国民感情や国民意識として、すべて夫婦別氏ということがそのまま受けられるかどうかという実態の把握を前提に議論しようとい

うことのような。外国で別氏を認めている例はあるが、その国の文化的伝統に左右されることなので、直ちに別氏の採用は時期尚早が大方の感觸のようだ。

男性優位の国籍法

佐々木 日本の国籍法は非常に男性優位の規定で問題だ。西ドイツではかなり大幅に改正したが、日本の現状は。

香川 日本の国籍法は父系主義で父が日本人ならその子は日本人、父が知れない場合に母が日本人なら子は日本人。大方の国は現在、父系主義だが、父系主義一本でなく母の国籍も持つよう改正の例もある。日本が父系主義をとる大きな理由は、二重国籍を生じさせぬための配慮。父または母となると二重国籍の問題が生じる。各国とも二重国籍はできるだけ防止の方向に進んでいる。立法政策の問題としては父系主義か母系主義かの検討も必要だが、国際的には母系主義の国は多くない。やはり国際水準というか、平均的立法が望ましく、特に父系主義を改正の必要はないと考える。しかし御指摘の

問題もあり、今後とも検討する。

佐々木 日本男性と結婚した外国女性は、大抵すぐに日本国籍取得が可能だが、日本女性と結婚した外国男性は条件が厳しい。極端な場合は日本女性と外国男性が外国で結婚して日本に戻っても、妻は入国できるが、夫は入国できないことも起こりうる。二重国籍問題も一方だが、男女の実質的平等は日本国憲法の大前提。これを阻害してまでも国籍の問題を優先させるのは、はなはだ疑問。メキシコシティの世界婦人大会でも国籍法のこととが非公式だが話題になった。他国に追随するだけでなく、これだけの男女平等の憲法を持つ日本としては、思い切った前向きに取組んでほしい。

松永光（法務政務事官） 大変むずかしい問題なので、制度その他、大いに勉強したい。しかし運用面では妻は入国できたが夫はできないという状態をできるだけ避けるよう十分考えるべきだ。

佐々木 法務省所管の出入国問題や帰化の問題で現実には多くの日本婦人が泣いている。この際大いにがんばって、婦人の人権のために取組んでほしい。

香川 確かに夫日本人、妻外国人の場合より妻日本人、夫外国人の場合の帰化は

手続きと要件が加重されている。これは父系主義との関連があり、しかも不合理な正が、ぜび必要という立法論的なジレンマがあるが、立法・改正を含め検討したい。帰化事務取扱担当局としては、運用面で不平等をできるだけ少なくするよう努力しつつ、立法の問題もあわせて検討してゆきたい。

佐々木 一度にどれもこれもは大変と思うが、男女平等実現のために法務省、特に民事局が民法改正を初めとする問題に取組むよう望む。

婦人の人権をどう守るか

佐々木 次に人権擁護局に質問。国際婦人年世界行動計画への取組みは。

村岡二郎（法務省人権擁護局長） 人権擁護機関は自由人権思想の普及と高揚が主たる職責。憲法に定める男女平等の理念の普及と高揚と、具体的に男女平等を阻害していると思われる事象についての情報収集や調査活動により男女差別への個別

的啓発活動を強化したい。その他、婦人に関する人権相談の活発化、法律扶助協会を通ずる訴訟の援助の婦人に対するものを強化したい。

佐々木 婦人に関する人権相談の活発化の具体的方法は。

村岡 人権相談は法務局、地方法務局、その支局、人権擁護委員の自宅で行なっているが、その他デパートや公民館などの特設相談所を設置。昭和四十九年中の人権相談件数は全国で約二十八万件、うち家事問題は約八万件で、ほとんどが婦人に関するもの。今後は婦人の人権擁護委員を中心に、婦人に身近な相談活動の活発化を図り、実効ある解決のため努力する。

佐々木 現在、将来の活発な活動の意欲はわかったが、それは人権擁護委員に適當な人を得なければだめ。男尊女卑的な考えの地域ボスのような人が人権擁護委員になり、悩める婦人の相談にのつても逆効果。選任の基準は何か。婦人の委員を増員する考えはあるか。

村岡 昭和五十年九月末で全国の人権擁護委員の総数は約一万四百名、婦人は千

百十八名で約一一％にすぎない。婦人の増員の必要は認めるが、人権擁護委員法は、市町村長が議会の意見を聞いて適格者を推せん、法相が委嘱するよう規定。したがって市町村長などの理事者に対し婦人問題に取組むにふさわしい委員、とくに婦人の委員を積極的に推せんするよう、常に機会をとらえて理解を求める努力をしてゆきたい。

佐々木 いわゆる官選の人権擁護委員では当初の目的は達しがたいと思うが。

松永政務次官 人権擁護委員中、婦人が約一一％はやや少ない。しかし法務省サイドでの委嘱では適材を得にくく、現在の手続自体は適當。運用面で市町村長などに婦人の適格者を多数推せんしてもらう努力をしたい。

村岡 現在の婦人委員の中には、数カ市町村単位の団体やその上部団体の会長や副会長、理事の地位にもかなりいる。全国人権擁護委員連合会レベルでも活躍のため、婦人委員による婦人問題研究会の発足を計画中。

佐々木 東京都では「離婚の母の家」に取組んでいる。こういう現実的な問題こ

そ考える必要があるが展望は。

村岡 離婚したい妻が家庭で虐待されて、基本的人権を侵害されている場合には、人権擁護機関には調査・処理の職責がある。直接申告があれば、委員か地方法務局職員が調査、処理。権力に基づく強制でなく任意に関係者個人を啓発、説得により事態の改善を図って、かなりの効果を上げている。

佐々木 そうした努力は結構だが、官製の押しつけ運動が変な事態を生むことを危惧する。労働省など政府機関主催の国際婦人年記念日本会議（東京プリンスホテル）のときトラブルがあった。名古屋の一流会社の管理職の女性が、招待状はないが、婦人議員に会って婦人問題の将来を聞き、自分たちの要望も伝えるため、年次休暇をとって会場へ行った。地下鉄の駅で会場のホテルへの道順を通行人に尋ねると、警官が道案内のような形で誘導し、二時間以上も軟禁、手洗いや禁止。単なる通行人もやられた。婦人の権利を守るための日本政府の祭典の日に、婦人の人権じゅうりんが行なわれたことに大きな怒りを持つ。

若田末人（警察庁警備局警備課長） 当

日の警備の状況を答える。この会議は婦人の地位向上のための会議だが、反対のグループもあった。当日は極左グループも含め、反対なり会議粉砕を叫ぶ七グループのデモ申請があった。朝九時ごろ神谷町駅で、会議反対のゼッケンをつけた婦人三十六名が集合、デモの形で会場の方へ進もうとした。これは無届け、不許可のデモなので公安条例の所要措置により、会場のプリンスホテル横の芝十七号地公園に入って頂いた。個人個人で出られる人は出すが、デモは不許可なので一応監視、十二時ぐらゐまでそのまま過ぎたとの状況の報告を受けている。

佐々木 私の場合は個人。デモではない。

婦人議員全員招待の会に支持者の訪問はよくあること。そういう人が十把一から

げで機動隊にかままり軟禁された。立入禁止や一般の通行禁止の措置もないホテルで、婦人と見れば軟禁は大変な人権侵害。政府が美辞麗句を並べても、そんな国際婦人年がどこにあるか、反省せよ。

若田 天皇訪米以来、極左が皇室関係に関心を抱き、当日も極左を中心にデモがいくつもあった。火炎びん投入、会場に潜入し進行の妨害などの情報があり、その立場で警備した。先述の三十六人のほか、九時半すぎに七人ほどが別途来たので、十七号地公園に一緒に誘導した。会議の反対、粉砕を叫んでいたし、たまたま前にも過激な行動をしたときに知って

いる警察官がいたためだ。

佐々木 警備がいろいろ大変なのはわかるが、関係のない人を一緒に巻きこんで何か言っても、それは通らない。巻きこまぬような警備を考えねばならない。警察は十分考え、反省しなければ困る。大臣も人権擁護局も含めて法務省に、この件について今後人権侵害のないよう配慮を要望したので所信を聞きたい。

稲葉法相 警備の必要は認めて頂いているが、警備と無関係な善良な民衆まで巻きこむのは断じていけないと思うので、今後よく気をつける。

多田省吾（委員長） 他に質疑がなければ本日の調査はこの程度にとどめる。

アメリカ女性解放運動の主張

リベレーションナウ！

三宅義子・訳／定価一四〇〇円

本書は、現在のアメリカ社会の性差別の構造をさまざまな階級、階層の女たちがどのように受けて、それを止揚する方向に歩み出しているかという、いわばアメリカのウーマンリブ運動の全容の記録としての価値をもつものであり、今まで紹介された理論書を支えるアメリカの土壌を明らかにする。

柘植書房

東京都港区東麻布
1-23-5
電話(03) 586-9031

資料2 婦人問題企画推進会議議事録抄 (文責編集部)

第一回総会

昭和五十年十一月十日 (月)

内閣総理大臣官邸ホールで

出席委員 市川、江上、大友、大森、
上坂、久保田、ケリー、小菅、小林、
佐藤、塩、千、相馬、多田、田村、
高田、高橋、滝沢、都留、中込、
中根、西、縫田、波多野、福武、
藤田、山本(まき子)、山本(松代)

三木総理 このたび婦人問題企画推進会議開催に当たり、広く各界有識者に委員をお願いしたところ、お忙しい方々ばかりにかかわらずご承諾を得たことを厚くお礼申しあげる。

国際婦人年世界会議で採択された世界行動計画は今後十年にわたる婦人の地位向上について各国の指針となるものであり、わが国も内閣に「婦人問題企画推進本部」を設け、総理自身が本部長となつて鋭意努力する決意と体制を固めた。こ

れは単に今年が国際婦人年だからというだけでなく、男女の平等は憲法に明記された普遍的な原理であり、婦人の地位向上はすなわち国民全体の福祉につながると思えるからである。活発なご討議を通じて実りある成果が出るようお願いする。

植木総理府総務長官 本年は国際婦人年であるのみならず婦人参政三十周年に当たる。三十年間の発展はあまりに急速で

社会通念や慣行の改革は十分に行なわれていない。また婦人問題は多岐にわたっており、解決の方向も方法も多様な提言がなされており、この会議でも単一絶対の回答は得られないと思うが、広い視野から率直なご意見を頂きたい。では座長および座長代理の選出に入りたい。波多野先生に仮座長をお願いする。

波多野 選出方法についてご意見を。

西 最長老でメキシコ会議にも出席された藤田たき先生を推したい。(拍手)

藤田座長 不慣れなのでよろしくお願い

したい。代理の先生をお選び頂きたい。

江上 この際男性を推したい。福武先生を推せんする。(拍手)

藤田 重大な時なので民間の声を十分政府の施策にあらわしていただきたいと思う。各委員一言ずつ取上げるべきことを発言してほしい。その前に、これを公開にするか非公開にするか、重大な問題なのでご意見を聞きたい。

高橋 その討議の前に、この会議の性格、任務、権限を明確にしてほしい。

久保参事官 総理が途中退席されるので、説明はあとにした。

藤田 では各委員まず二分ずつご発言を。小菅 高橋委員の提案は基本的なことなので、総理・長官の前で説明してほしい。

会議の性格・任務・権限

久保田参事官 婦人問題企画推進本部(以下本部と略称)は五十年九月二十三日の閣議決定で設置された、総理を本部

長、総務次官を副本部長とする事務次官レベルの会議であり、世界行動計画等の国内施策への取入れその他婦人に関する施策について関係行政機関相互間の事務の密接な連絡をとりながら、総合的かつ

効果的な対策を推進することを目的とする。また「婦人問題企画推進会議」(以下会議と略称)は、五十年九月二十三日閣議口頭諒解で設置されたもので、目的は前者と同じであり、総理が約三十人の有識者を委員として依頼し、その意見をうかがう、いわば総理の私的諮問機関である。推進本部は、婦人に関する総合的な施策を企画し、策定し、推進することが当面の課題なので、本部およびその下の局長レベルの幹事会を事務を取進める機関として進めて行く。

企画推進会議はこのような目的のため、民間の意見を十分取入れながら、婦人に関する施策を進行・調整していくことを考えている。また四人の参与は、本部に對しいろいろな企画に参画し、本部の運営の中に民間の意向を反映させる建前をお願いした。なお本部ならびに会議の事務を担当するため、内閣総理大臣官

房に通称婦人問題担当室を設置、七人の職員(女六、男一)で構成されている。藤田では、各委員、ぜひともと思ひのことを手短かにご発言下さい。

民法七六二条の改訂を

都留 非常に具体的なことだが、まず民法七六二条を早く改正することが必要だ。別産制だと家事労働が評価されない。七才で事故死した女児の賠償金が、二十五才までしか稼げないと認定されたことがある。最高裁で覆えされたが、下のほうでの判決の根拠は七六二条にあった。家事の社会化を主張するのは打算社会の論理である。母性と職業を自由に選択し、その両者を成立させたい婦人の場合、その経済的自立性を確立するためには家事労働のもつ福祉的価値をはっきり認めることから始めなければならぬ。これは民法改正の具体的なステップなので関係官庁でどの程度用意があるか伺いたい。

中根 先ほど総合的かつ効果的対策を……という説明があったが、総合的だとあまり効果的にならないのではないか。むしろ

重点的対策を望む。例えば今の都留発言のように重要でしかも各官庁に關係しているものを選んではしい。

江上 急を要する具体的問題と、基本的な考え方に二分して考えたほうがよい。

本部員に女性を加えよ

三木 首脳会議に出かけるので中座することを許してはしい。

山本(ま) 総理が帰る前に一言する。本部員が全員男性なのはおかしい。本部の規約のただし書きに本部長は必要なくは構成員を追加できるとある。ぜひ婦人一名追加を。

三木 そのために本部に参与を置いてある。

山本(ま) 各省次官を中心とするということだと思ふが、次官を中心にしたがらも有能な婦人を起用してはしい。

植木 本部には青少年対策本部、交通対策本部等いろいろあるが、いずれも行政機関であり推進本部も同じである。したがって行政官が構成員である。民間から本部に入る場合は役人になつてもらうか、法改正をして特別職を設けなければ

ならない。それを補うものとして参与を設けた。非常勤だが参与会議を開いたり、婦人担当室に来室、指導を仰いだりしている。構成員の追加とは、この省庁以外のはかの官庁の次官の参加がどうしても必要な場合追加するという意味である。(三木総理退席)

植木 都留発言に回答。七六二条は法務省の法制審議会の民法部会で具体的に取上げており、民法改正の作業が進んでいる。ご趣旨を生かすよう努力したい。

社会参加を進めよう

高田 私は婦人の社会参加を積極的に進めたい。国民生活センターが三千人の主婦を対象にした調査では、約二割の主婦が経済的被害を受け、その対策を講じたのは約半数にすぎなかった。センターに持込んだのは三・八%、消費者団体へは〇・六%、残りは販売店、メーカーに持込んでいるが、大量消費時代には、一人被害が出たということは非常に多くの人被害を受けることを意味する。行政や消費者団体に持込むべきで、家庭婦人の社会参加、連帯意識づくりの背景をより

よくすることが必要。いま政府に審議会が二百近くあるが消費者問題に関係があるのは五十前後、そのうち消費者の立場で入っているのは二十前後にすぎない。公取委も婦人は過去に一人だけだ。

千 世界会議で決定されたのは国際レベルの諸問題であり、ややもすれば理論倒れになる。日本は日本という一つの環境であり、それに資するかどうかをまず検討すべきだ。

相馬 国際婦人年を特に男性がとらえる場合、婦人の地位向上が目的とされがちだが、男性だけでなく婦人が社会に貢献しなければもうだめになっている現実をもう少し認識してもらいたい。婦人の側も自分たちの地位向上そのものが目的ではなく、社会全体に奉仕する気持をつちかうほうが大事である。またタイムリミットはいつか。

波多野 全体として男女平等ということをもう少し根本的に考えるべきだ。男と比べてでなく人間として平等か考えることが必要。例えば看護婦は女ときまつているが、肢体不自由児などをみるのは女では大変。看護学校や公私立女子大も男

に門戸を開いてほしい。

多田 平等問題を考えるとき一番具体的現実に対応しているのは労働婦人だ。その一つに母性保護があり、日本は最も遅れている。保護というより保障を望む。勤労婦人には労基法、勤労婦人福祉法があり、婦人全体には母子保健法、健康保険法があるがバラバラだ。現行母性保護制度の見直しを行ない、バラバラなものをどう調整するかが重要。

大友 私どもには六百万人会員がいるが、六十五才になると送別会をして老人会に送る県があり、おば捨て山の感がある。老婦人の自殺は世界一。老後の問題をぜひ取上げてほしい。

女の被害者意識は困る

田村 自分は一番若僧だと思うが、もの心ついてから男とか女とか意識したことがない。自分の母親の時代には女はしいたげられていたが、今の若い人は違う。例えば婦人服はこの不況下でも三〇%、四〇%と伸びている。何でも女が被害者だということでは成立しない。ウーマンリブのようなことを言ったり、不況にな

って会社が女を雇わないのはけしからんなどという考え方が出てくるのを恐れる。二十代の奥さんとたくさん接触して

いるが、もう一度生まれるなら女というものが圧倒的に多く、男はかわいそうだという。私つくる人：というような形式的なことと騒ぐことはないと思う。

大森 看護学校を男にも開放せよとの発言があったが、実は男も入れるのだが入らない。現在看護婦は月に十日以上も夜勤があり勤続年数が短かく看護婦数が不足のため病院のベッドがあいていて。夜勤は男にもっとやってもらわないと日本の医療は崩壊する。保育所の不足も問題だ。またへき地の場合、医師は高額の手当てがつくが保健婦、看護婦にはつかないなど、待遇問題も大きい。

千 私は伝統文化を代表して委員になった。茶道は維新までは男のものだったが、明治以後女性に開放され、女性の地位向上、教養に役立っている。女子大に行くよりお茶をやるほうが総合的な文化内容が身につく。老いても先生先生といわれ、決しておぼ捨て山に行くことはない。茶道などには偏見があるが、こうい

う点をぜひ婦人向上の問題点にして頂きたい。

まず家庭から差別撤廃を

山本（松） 最大の問題は差別待遇で、その根本は家庭生活にあると思う。男は四年制大学、女は短大というように差別される。毎日の生活でも自分が持てばいいカバンやハンカチを奥さんに手渡してもらったり、着替えさせてもらったり、サービスの差別待遇があり、それを幼時から仕込まれる。この是正がないとどうにもならない。

山本（ま） 具体的にたくさん差別があるのは職場だ。行動計画中の婦人労働者に対する機会均等と待遇の平等、同一賃金等の問題と母性保護の問題を取上げてほしい。

塩 人生の幹になる家庭生活を重視したい。人間を大切にするという基本を各省はどのように実行しようとしているか。伝統と人間の意識の上では教育が重要な場。その普及や施設の拡大、婦人の参加の姿勢を重視して考えたい。

ケーリ 発展途上国の援助についてはそ

の国のほんとうに要るものをよく調べ、その際、女の希望を決して忘れないようにしてほしい。

小林 農業に従事する三百万会員を代表して発言する。農村婦人はしられるというより進んで労働しているが、労働の分担などの内面的な問題になると、また皆様の力を借りなければならぬ問題がたくさんある。

藤田 では参与の方、幹事の方のご意見を。

影山 今後十年という展望をもって国内行動計画に何を取入れるか、どういう形で民間の声を聞き、各省が協力しあうかにまず重点をしぼって進めて頂きたい。いろいろなことを論じていると進まないの、何を取入れるかをまず重点的に。藤田 幹事さんのご発言は？（発言者なし）。では運営について叩き台を用意したのでご検討頂きたい。久保田氏が説明する。

運動方針・検討課題

久保田参事官（目的） 国際婦人年世界会議における決定事項の国内施策への取

入れその他婦人に関する施策の企画及び推進に資するため、有識者により広く婦人問題について討議を行なうことを目的とする。

〔日程〕第一段階（昭和五十一年四月まで）において、わが国の婦人問題の重要課題について課題別に検討し、第二段階（同年五月―九月）においては、世界会議における決定事項の国内施策への具体的取入れ等について分野別に検討する。

第一・第二段階に分けたのは、本部および会議において、今年度いっぱいくらい、各省庁はその所管事項の範囲で問題を検討し、今後婦人に関する施策の総合的計画をつくる場合の材料について考えるのに合わせ、会議においては、第一段階で、各種の計画をつくる基礎になる考え方で現在いろいろな論争点を持つ問題を取上げ、問題点整理を行ない、第二段階（本部側では各省庁が新政策に取組む時期）に取上げる素案を得た上で方法論を展開させようと考えたためである。

〔検討課題〕

(1) 社会・生活の変容とそれに伴う男女の役割の変化

(2) 婦人の生涯設計と教育（学校・家庭・社会）

(3) 労働における保護と平等

(4) あらゆる分野の政策決定への婦人の参画

(5) 家庭生活への婦人の寄与と評価

(6) 社会福祉における婦人の立場

(7) 日本の婦人問題に特有の課題

以上のような課題別に四月くらいまでご検討頂き、運営は委員が多数のため、二つくらいずつ課題を選んで頂いて十名以内くらいでグループ討論し、その結果を総会でさらに検討したい。

藤田 以上についてご意見を。

久保田 運営方法は諒承。論点の整理については一回フリートリーキングしたい。例えば男女平等という本質的な問題について、哲学的な問題、基本的な問題もあるのではないか。都留提案等もフリートリーキングで具体的になるのでは。

田村 中高年独身婦人の問題を取上げてもらいたいが(7)に入るのか(3)に入るのか。

久保田 参事官 教育訓練、就業、政策決定への参加。家庭生活、福祉等、全部関

連しているもので、それぞれの課題のところで討議してほしい。

市川 (3)に関して、労働における保護と平等というのは何か引換えのような感じがするので婦人労働は婦人労働というふうにきちっとやってもらいたい。また基本的な問題、人間的な問題はそれだけを大きな問題として、いろいろな考え方を総体的に考えていきたい。

高田 (5)の内容は？

久保田 参事官 都留発言のような法制上の問題等も含めて家庭生活に果している婦人の寄与を社会の評価に位置づけ、経済的评价にも議論を及ぼしてほしい。

公開か非公開か

江上 フリートリーキングはもっとひざをまじえてやったほうがよい。私は非公開を望む。私自身は自由な立場だが、団体に属している人は不自由ではないか。

相馬 江上説に賛成。非公開を望む。

高田 公開を原則にすべきだ。中央公害対策審議会では原則として非公開だが、結論に至る経緯がわからないと民主的な理解ができない。せっかく新しく婦人の

ためということのできたこの会が民主的に運用されるためにも非公開の必要は全くない。私は団体に属しているが、中と外で話すことに違いはない。

西 公開問題とは別に、(1)―(7)は結構だが、これが出る一つ前の調査の段階で、婦人のライフサイクルが立てられると思う。生まれてから老後に至るまでの。婦人の生涯教育がテーマに出ているが、婦人の生涯というのは今どんな形で、どんな問題があるのか全貌がわかると参考になる。こういう柱を選ぶ以前に。

藤田 叩き台なので、フリートリーキングにかけたほうがよいか？

久保田参事官 ライフサイクルは(1)―(2)あたりで扱うことになると思う。

小林 公開については高田説に同感。公開の原則が必要。悪いことはあとでどんな突上げられると思うし。

藤田 公開論の前に、つけ加えるテーマはあるか案を発言してほしい。

山本(ま) 婦人労働の問題は保護と平等だけではない。機会均等、均等待遇を重視すべき。これらを含めた婦人労働という形で市川発言のような点を取上げて

ほしい。

藤田 では公開問題を。

滝沢 次回もう一度フリートリーキングするのは結構だが、なるべく早く具体的なグループディスカッションに入りたい。それは非公開とし、グループの報告は場合によつては公開を原則としたい。

山本(ま) 原則は公開にしないといろいろな問題が出る。

中込 専門別討論は非公開のほうがいい。全体会は公開希望者が多ければ公開にするのがよいと思う。

藤田 山本・高田氏はグループディスカッションも公開にするというのか。

高田 その通り。

藤田 公開の方法は？

高田 傍聴希望者にはどうぞと。

小林 グループ討論まで公開すると審議が深められない。

藤田 要約する。目的、日程については異議なし。検討課題は補う必要がある。

例えば「婦人労働」にして「保護と平等」だけを強調しない。これは私も同感。公開についてはグループ討論まで公開する必要はない。また公開の意味は、

議員や新聞記者に来て頂くので、こちらから公開、公開という必要はない——というように考えてよいのか。議事録の公開はどうするか。

高田 当然公開すべきだ。

江上 総会は結論のようなものだから公開してもよいと思うがグループ討論まで公開する必要はない。赤裸々に本音を語らないと実施に移せない。

佐藤 江上説に全面的に賛成。

植木 グループ別のときはもつと小会場になる。空間の制約もあるし警備の関係もある。

上坂 公開の原則は結構だが、テーマをよほど上手にしなければ、「もたつく婦人問題推進会議」なんてやられると困る。

藤田 ぜひ自分がやりたいと思うことをご発言下さい。

影山 この案だと国内行動計画が来年九月でできない。そんなのんびりしたことではないのか。四月に中間意見を発表して足りないところをみんなに出してもらうのか、三月くらいまでに発表がないと何をするのかということになる。

高田 目標としては早く出すのが当然だが、内容を充実させるためには中間報告を出して一般の意見を聞くことが大事。

上坂 全部でなく目玉一つだけでもパツと食いつきそうなのを出して、推進会議ができたPRも兼ねて何かできないか。影山説に大賛成。

江上 四月までに部会が活発に行なわれ、部長がレクチュアなさると思う。PRすれば必ず世間の反響を呼ぶ。なるべく本部で双方に力を入れてもらいたい。影山氏の発言どおり、一から十までパーフェクトなものは四月には無理なので、四月案は三年計画あるいは五年計画ということで結構と思う。次回までの宿題にしたい。

藤田 そのとおりだと思う。

相馬 会議が検討してる間、本部は何をするのか。

植木 一つ一つの具体的な問題についての企画と推進に当たる。この会議の世話をしながらか、ここで出た意見をどういう行政の中に生かすか併行的にやる。

藤田 ではフリートリーキングは開くことにする。

久保田 公開・非公開は？

藤田 大きいのは公開……。

久保田 予備討論的なものまで公開する必要があるのか。

小林 公開と言ったのは、公聴会式に記者を呼ぶとかいうことではない。非公開だと友人にも会議の内容を伝えられないが、公開なら組織の中でも討議できる。久保田説のように、軌道にのらないうちから公開してはんと内容が出なくなったら使命は果せない。

中込 フリートリーキングはあくまで非公開にすべき。

大友 高田説もわかるが、原則的には江上説に同調。

山本(ま)、高田 公開。

多田 私はどちらでもよい。マスコミが正しい報道をせず、多少の意見のズレをおもしろおかしく書くようなら非公開にしたほうがよい。団体の規制はない。

藤田 では次の会議を公開にするか、決をとりたい。(非公開希望者多数)。非公開に決定したのでよろしく。

植木 もう具体案を出された方もあり、実りある会議だったことを感謝する。

モテック通信

模索舎・自主出版物・自主流通機構・表現の自由・「わいせつ」裁判の情報誌

月刊／定期購読料1年分1,500円(送料含む)

SM戦線 1975年版

頒価300円 円120円

全国運動体リスト／自主出版物・ミニコミリスト／模索舎5年史

四畳半襖の下張・わいせつ・模索舎

—— 裁判資料集 —— 1・2幕合併版 頒価1,000円 円160円

申込＝東京都新宿区新宿2-4-9 模索舎気付モテック通信編集部
☎ 03-352-3557 振替東京8-178164

第二回総会

昭和五十年十一月二十五日（火）
全共連ビル四十五会議室

出席委員 市川、江上、大友、大森、
上坂、佐藤、田中、田村、高田、
滝沢、中鉢、西、縫田、波多野、
福武、藤田、山本（まき子）、山本
（松代）

藤田 総務長官未着だが、定刻なので予定どおりフリートリーキングに入る。

久保田 参事官 その前に配布資料の説明を。①前回の議事録 ②婦人に関する諸問題総合調査報告書——広範なデータを提供しているので、討議の参考資料とされたい。③国際婦人年に際して募集した草の根の意見（百点収録）④今後の運営についての叩き台。四月ごろ骨子を発表、九月ごろ追加案を作成発表の予定である。

植木長官 逐次出てきた所見を五十一年度予算編成にも反映したいのでよろしく。

グルーピングについて

藤田 希望グループについて過半数から回答があったが、今日は課題そのものから再検討する。課題が決まるとグルーピングが変わることもあり得る。自由に発言してほしい。

縫田 基本的な任務は世界行動計画をどう具体化するかにある。そのために行動計画の基本精神が出発点だというコンセンサスが必要ではないか。計画には、従来の婦人像ではなく新しい婦人像が具体的に示されている。その共通認識がないとグループにわかれてもまとまらない。またグループ討論に入る前に本質的にどういう方向にいくのかわかっていないとむり。計画の中には文書をなくせとか、日本に関係のないものもある。何を削るか、優先順位は何か決めることが先決。

藤田 方向づけはたしかに大事。世界行動計画は二百十九項もあり、日本に関係ないもの、関係がなくても国際的にやっていかなければならないものもある。まづ三十分ほど討論したい。

山本（ま） 事務局提案の八項目について、一つずつ世界計画の中身を考えながら意見を出し合うとより具体的に思う。またグループに分れる前に、それに入らない人も考えを出しあっていくとよいと思う。

藤田 グループ討論のときは、それに属さない委員も傍聴したり発表したりしてよいのか。

福武 (8) 国際協力と婦人は新たに加わったこと、(3) 婦人労働は「労働における保護と平等が変わったわけだが、こういうグルーピングがいいかどうかを討論するのが主目的の一つと思う。ただ私見としては(1)と(7)は共通の認識ということで、

検討課題

- (1) 社会・生活の変容とそれに伴う男女の役割の変化
- (2) 婦人の生涯設計と教育（学校・家庭・社会）
- (3) 婦人労働
- (4) あらゆる分野への政策決定への婦人の参画
- (5) 家庭生活への婦人の参与と評価
- (6) 社会福祉における婦人の立場
- (7) 日本の婦人問題に特有の課題は何か
- (8) 国際協力と婦人について

すべてのテーマの前提となると思う。グループができてから世界計画のどの項が参照されるか結びつきを考えたらどうか。

西 意思統一をどういう形でしりたいいか、とてもむずかしいことになったと思う。委員だけでなく一般の婦人大衆のことも考えなければいけない。先走って、婦人の役割はない、家事でも何でも一緒にやれといっても、みんなが賛成してくれるかどうかということもある。

藤田 ニュアンスの違いは、家庭なら家庭グループで討論し、みんな傍聴したりフリートーキングして全体会議にもっていけばいい。

植木 世界計画では五年目に実績を報告することになっているが……。

藤田 五年というのは先すぎる。二年間でどれだけ女子の公務員や政策決定者がふえたとか報告したほうがよい。

西 例えば男女の役割のところで、高校の家庭科共修問題などがある。男女の役割は新しい世の中のあり方に沿って平等でなければならないなら共修を当然うたわなければならない。それに皆の意見が

一致すればいいが、一致しない場合もあるかもしれない。たまたま一致したとしても政府はそのまま取上げるか。

中鉢 途中で中座するので先に意見を言う。幾つかの時点と区切り、どの時点にどの辺までのことを考えていくか、時間的な展望と目標の優先順位を組合わせた基本的な考え方をつくることができれば今後に有益だと思う。

今後十年間ぐらいに日本は準老齡化時代に入り、その次の十年間は劇的な変化が起こらざるを得ない。婦人の問題は生産の問題というより福祉の問題である。人間が人間として生きていく基本的な条件により直接的にかかわってくる問題だと思う。この十年ぐらいのところに大きな目標を置き、逆算して五年、三年、一年というように三つぐらいの段階で考えることが必要だろう。

婦人と男性の間の平等ということは、生産と福祉の間の価値の転換にかかわっていることが多いのではないか。家事労働の中の非常に大きなものが育児や老人の世話など福祉にかかわる労働である。これが社会化されれば男女ともにやって

いかなければならない。男女の問題は人間のあり方全体にかかわる。そういう意味で総括的立場から具体的な個々の問題を位置づけることが必要ではないか。

影山参与 会議のメンバーではないので恐縮だが、八項目に分けたのは逆立ちしている。二百十九項目を、一項ずつ、これは理念だとか、日本は具体的にどう実現しているとか各省も委員も考え、項目別に問題を出し、行動計画にもし矛盾点があれば出し合うという形でやっていくべきだ。一から二百十九まで逐条審議すべきで、グループの分け方も、一から十五まで第一グループというぐあいに分けるとよい。

縫田 私の意見は八項目を全部ご破算に、ということではない。二百十九を割り振ればそれぞれ入るのではないか。また優先順位をどうするかをやらないと、時間がかかると思う。

藤田 四月までに八回しかできないのに八項目もある。これをもう少し少なくするか、福祉案のように(1)と(7)を同じグループに……ということで、結局影山案のような結果になるのではないか。

江上 (1)と(7)を全部のグループの頭に割り振るとよいと思う。

福武 グループ別に一応リストするが通知は全員に出す。しかしどんなに討論しても細かいところでニュアンスの差があつてどうにもならないだろう。したがつて(1)と(7)はひっくりかえりて考えていいのじゃないかと私は言つたわけです。

渡辺参与 江上案に賛成。

波多野 遅れて来たので違うかもしれないが、どういふふうにするのがいいかという前に、それぞれの方がキャップで実行しておられるのだから、自分のところではこういうことに努力し、ここに成功した、ネックがあつた、といったもう少し現実のことを考えたほうがよいと思う。

福武 優先順位を決めるのは重要。縫田説のように全体で討議すべきか、各グループごとに討議すべきかという問題はあ

るが。

山本(松) 大別すると中心思想である(1)(6)(7)と、具体論であるその他の二グループに分かれると思う。まず(1)(6)(7)を小グループで討論したのち総会にかけ、(1)(6)(7)の基本線を出してから小グループに

分けるほうが能率的では。

江上 自説を再度主張。

西 イロハの質問になるが、世界行動計画に賛成したいような議論があつた場合、世界行動計画は日本の政府が採択したのだから、と錦の旗を振れるものかどうか。そうすれば江上さんの心配はなくなるが。

藤田 方向の上で反対すべきものはないと思う。旗振らなくても黙つていけばいい。

山本(ま) 江上説は、(1)と(7)については認識の相違があるので各項で先議すべきだという意味か。

江上 男女の役割等については意見が分れると思う。それだけ議論すると抽象的になるので、(2)(3)(4)等各論をふまえて討論するとよいという意味である。

山本(ま) (1)と(7)を総論としてまず討議するのならわかるが、各論の頭につけるべきだという意味がよくわからない。

縫田 基本的な認識、コンセンサスがまず重要だと思うが、この場で何回やっても進まないだろう。江上説のように各項目グループに分かれたあと、各チーフが

共同のものさしとして常に頭に入れておけばコンセンサスが得られるかもしれない。

福武 (2)―(7)は(1)を基本とする。また(7)は何を優先すべきかという問題が常に出る。したがつて(1)(7)は他と次元が違う。討論は月2回程度、四月まで計八回ということだがテーマにより軽重をつけるとよいのでは。

藤田 例えば(8)は簡単にすむ。(3)のように二回ではすまないものもある。それを整理するとよい。

植木長官 とりまとめのきつかけになるかと思つて発言する。世界行動計画にはすでに済んでいるもの、いま計画しつつあるもの、実践中のもの、検討中のものといろいろある。また、まず基本的理念があり、政府の責任、立法すべきもの、婦人関係の機構がある。さらに、労働、教育、社会保障、家庭、住居地域、マス・メディア、国際関係にまで及んでいる。事務局案はそれを(1)―(8)に整理したわけだが、具体的には大きな問題として生涯設計と教育、家庭生活の評価と寄与、労働等がある。そこで生涯設計と教

育に関心のある方はすぐグループを編成するとうように、具体的にグループに入って頂きたい。

藤田 世界行動計画の重要性と、それに基づいてこの会議をすることはご諒承頂いたと思う。第二に、全体会議だけでやるのは無駄が多いので、討議はグループ別に行ない、決定は全体で行なう。グループ討議には、そこに属さない人も傍聴は随意としたい。今日はグループ別のうち、(1)(7)について全体討論したい。

中鉢 藤田提案に賛成。自分の属する部会以外にも顔を出して全体の動きをみながら討論したい。(1)(7)は抜本的なものであり、当面討論していかねばならないが、あとは(3)と(5)が基本的な問題であり、これが少しでも変わらない限りほかは動きがとれない。一、二年の目標をつくって具体化していき、それをふまえてはじめて生涯設計と教育の問題や、社会福祉における婦人の立場が具体的問題として出ると思う。政策決定への婦人の参画とか国際協力の問題は、(3)や(5)を促進していくのに直ちに必要だが、それ自身としては最も長期の大きな問題ではない

か。そのへんで優先順位が決まるかと思う。

推進会議もがんばってというPRを

西 ところで十一月二十二日の国際婦人年日本大会に四十一団体から出されたパンフレットがあるが、今やってもらいたいという要求項目が非常にたくさん出ている。民間側の重要な資料としてお揃え頂きたい。

藤田 あれは非常にいい参考資料。ぜひ各委員に配布を。

上坂 遅れて来てすみません。中鉢説に賛成ですが、前回にも言った通り、何か目玉商品みたいなものを、一番最初に滑り出しよく……。最初なので変な記事を書かれたりすると困るので、本部ができたPRの意味でも、影山さんの「駆け込み寺」みたいな、やっておるぞというものをひとつ……。

藤田 議長としてではなく、メンバーとしての発言だが、思いつきでするわけにはいかないが、四月までに何か具体案が出ることはよいと思う。

上坂 看護婦さんにへき地手当てを、と

かいうことでもいい、一つか二つ……。日本大会では委員会みたいなものを作ったとのこと。へたをすると、政府は何をやっているのかってことに……。あちらのほうがいいアイデアをどんどん出すと、ますます世評が悪くなる。

藤田 会議のほうでなく本部のほうでどんどんして頂きたい。本部と会議は一心同体なので。

田村 上坂説にちょっと続くが、委員になってこの間からこの問題を考えているが、男であるがゆえにご婦人の考え方はわからない。法律をつくったり勧告をしなくても基本は意識だ。女の人はどんなことをされても被害者だという。この間TVで天皇訪米を見たが、皇后は一步下がって、絶対天皇にはなれない。三笠宮の子息が自分は何番目の何とかと言うが、それなら皇后にせよ美智子さんにせよおられる。そういう重しをバツとはずせば、ほんとうに自由に女の人は伸びられると思う。男だってだらしのないやつは多いし、女だって甘ったれたものも多い。ほんとうに能力のある人がみんな自由に人間らしく生きられる社会に、と

は、口には出さねどもみんな心の底に思っているのではないか。先ほどの目玉になるんだったら、皇太子、皇孫もおられるんだから、次の段階でそういうことができる道を開いたら女の人もよくなるんじゃないか(笑)。インテリの言うことじゃないから程度の悪いことかもしれないが、そういうことがなくなれば気分が違ってくると思う。「私は被害者だ」という気分の問題にメスを入れなかったらだめだ。

藤田 その意識の問題は世界行動計画の初めから終わりまであるうえ、社会生活の変容と男女の役割の変化などという項は全くそのことなので、残っている時間に討論したい。ここで確認したいが、(2)―(6)と(8)を加えてセットしてグループをつくり、(1)(7)は必ず頭に置くことにし、グループリングは事務局一任でよいか。

田村 先生、私の今申し上げたことは荒唐無稽いか。
藤田 いいえ。だからこれをきめてからさせてほしい。

討議時間は十分か

福武 この前のお申し出では(1)と(7)が何人かおられます。(3)と(5)は二回ぐらいやらなければいけない。あとは一回、というものでいかがか。

波多野 (5)は財産権とかそういうことになるが、寄与と評価については具体的にどういう評価になるのか、(2)は一回だが、ライフサイクルが一回ですむのか。

福武 四月まで二―三時間の討議が計八回なので一応そう割り振ったが、(2)のほうが必要ということならそれでもよい。

滝沢 時間的に全然不十分だ。

藤田 必要なら一度ふやすとか、そんな見当でお願いしたい。では残り時間で、田村発言の関連その他フリートリーキングしたい。

山本(ま) (2)(5)は、二回でもとてもらえない。事務局からみると四月までに八回ということだが、問題別にすればわずか一、二回にすぎない。意見がまとまらなかった場合はどうするのか。

久保田参事官 まとまらないものについては、それなりの意見を出して頂いて、その後討議を続けて頂くことも可能。

江上 機械的に月二回では、うしろのは

うの一回に当たった人はまとまらないうちに期限切れになる。一テーマにつき少なくとも月二回必要。

藤田 一回でも、三時間でなく五時間することもできる。

影山参事官 婦人問題担当室として物理的に無理だとはちょっと考えられない。七人も職員がいて月二回しか会をしないというのはどう考えても少なすぎる。五グループがそれぞれ月五―六回持つべき。予算がないのか。「政府は本気でやる気がないから三木さんを本部長にして……」と言われても反論の余地がない。

久保田参事官 八回というのは、八回のグループ会議のほかに総会が二回、三、四月段階で総会がさらに二回ぐらい予定される。そのほかに本部で月平均二回の会議、さらに本部会議がこちらの会議と並行してある。それに必要な資料等も作成するので、グループ討論を八回程度と提案した。不足なら、どの程度が最も能率的で内容あるものとなるか、検討してほしい。

滝沢 回数の多いほうが望ましいが、説明を聞いてなっとくした。しかし二、三

時間ではなく、朝から一日通したぐらいでないとい不満足が残る。

縫田 グループに分かれるということ
は、グループ別に問題を掘下げること
と思ったので時間不足だと思ったが、優先
順位を決めるのなら一、二回でいい。ま
た四月まで待つのでは遅すぎる。

江上 十二月までに優先順位を決め、一
月からパツと分かれてやる。十二月は休
みにしても一月は二回じゃなく三回やる
ようにすれば効率的。

藤田 四月以降に延びることになるかも
しれないが、その間に大事なことだけは
本部で採択して頂いて、何もしてないん
だという思いだけは持ちたくないと思
う。グループینگと運営方法は事務局一
任にさせてほしい。

大森 本部のほうでしていることもある
のでは。例えば昨日、行政管理庁が保育
所問題の検討を出されたが。

植木長官 前述したように、現在進行中
のものがあ、五十一年度予算案で各省
が要求しているもの、財政困難でもこれ
だけは採択してもらわなければ困ると力
を入れているものもある。それらは、こ

こに出る意見を反映させ、本部でも協議
しながら各省が協力して予算的措置をと
ることになる。この会議の意見を聞くと
ともに行政は行政として独自に進める
が、互いに協力したい。八回以上という
ことは事務局の限界もあるので、三グル
ープにして三回ずつ九回、あるいは四回
やる、一回ですむものもあるというふう
に、もう少し弾力性を持たせたらどう
か。

石原参与 (3)(4)は一緒になるが。

藤田 (4)はみんなに関連する。これが目
玉商品。

江上 私もこれが目玉だと思う。目玉つ
くろうと思えばなるべく早くこの会議の
総意によって出す。

田中 すみません、遅れて来て。この会
議は非常に具体的に実行に移るような形
で推進して頂きたいと思う。さっき田村
氏から女の被害者意識の問題が出たが、
私は非常に被害者だと思っている。六十
何年生きてきて。それで男の委員、参与
の先生方の、婦人問題に関する意見とい
うよりは実際の生活を聞きたい(笑)。
口先の意見と実生活とどう違うか……。

この間から日本の方々で、男が家事をす
る割合を聞いているが、中央線沿線、神
奈川、北陸三県から関西にかけてほとん
ど同じだ。東京の真ン中で男が台所に立
ってはいけないという教育を受けている
人が四分の三いる。たまたま私は男が家
事をする家に育って、家庭をつくってき
て、まだこんなことが問題になるのに驚
く。日本に儒教が入ってきてから男女の
扱いが違ってきたと思う。具体的な生活
の中で女が闘うべきと思う。

山本(ま) 長官の三グループ説に賛成、
(3)と(2)、(5)と(6)、(4)と(8)の三グループに
したら……。

植木長官 賛成。そうすれば(2)と(3)、(5)
と(6)に時間をかけられる。

(一 同異議なく可決)

臨時の問題も取入れて

藤田 では少し時間があるので、その他
の意見を。

上坂 日本大会で、今後家庭科男女共修
を推進するよう提案すると言っていたが
このグループではどう考えるか、また、
「つくる人、食べる人」のCM問題をど

う考えるとか、臨機応変にその時点の婦人問題に対応できるような、——グループにしてみたいし、機会をちゃんと考えてほしい。

藤田 機会があるようにお願いする。

上坂 わりとあっさりとかOKが出たが、いいのかそれは。

藤田 グループはつくりたくない、一つふえるから。機会をつくるとよい。グループ会議でも総会ででも問題提起すればよい。

上坂 会議としては整っているのか。対外的に意見を発表しないのか。

藤田 総意がまとまれば発表する。一部の人の意見が会議の意見ということになるのは危険。

植木長官 対外的に発表すべき問題かどうか、参与と相談して発表する。会議にはからなければならぬものは会議にかける。

上坂 本部に見解発表してもらいたいときはどうするのか。

植木長官 担当室のほうへ出して頂いたら、本部で判断する。

大友 農村婦人のしあわせがなければ日

本のしあわせはないが、農村問題はどこに入るのか。

藤田 労働に入る。

大友 消費者権利意識が大変低いが、そういうものを高めるための政策はどこに入るのか。

江上 そう言い始めたら部会を百つくってもだめだと思う。あなたが好きなところに入って自分で判断して……。

植木長官 消費問題については経企庁に審議会があり、そこでやる。婦人問題を考えるのに消費者問題を考えなきゃいかぬということになれば随時討議するということ、一応これで始めたい。

藤田 では、三グループで発足させた。なお公開問題だが、婦人議員などで非常に関心があり、こちらでもそう認められる方で傍聴希望者がいたら、非公式にどうぞ……と言ってもよい。

上坂 他意のある方は困る。

藤田 婦人議員は非常に少数だが。

佐藤 少ない多いの問題じゃない。

藤田 ここに婦人議員が入ってくるとする。その人にどうしてもだめだと言って出て頂く。

上坂 あなたは他意がありそうだしということはないものね。

山本（ま） 国会議員はみんなが選んだわれわれの代表。いらっしゃいいらっしゃいという必要はないが、善意の立場で来られる方は意識的に認めていかないとおかしい。他意があるとかないとか、最初から人を疑うのはおかしい。

佐藤 疑う疑わないでなく、婦人問題だから婦人議員だけという考え方はおかしい。

上坂 疑ったわけではない。ただ迷惑を受けた場合のことを予想したわけで。

高田 賛否両論とも明らかにすることが必要。知らされないうちにおくれをとっている問題が必ず討議されると思うが、それが閉鎖的になつていったのでは天にツバするものなのだ。男女を問わず議員に公開すべきだ。

福武 論議は大切だということ、このように速記をとって、秘密にはしない。審議会の中には、まとまるまで黙っていてくれというものもあるが、この会議はそうではなく、こういう問題が出たということをしつこく話しても一向に

さしつかえない。ただ一般公開ということになると線の引き方に困るので、議員さんあたりで線を引き、精神としては全くの公開としたい。ただ、グループ討論の場合は、議事録に名前を入れるか、A、B表記にするか、決めたい。

江上 公開ということが原則なら、あらゆる手段を講じてでも公開にしなければいけないんじゃないか。名前は、私は入れてもいい。

(一同諒承)

波多野 性教育は教育に入るのか、家庭に入るのか。

久保田参事官 世界行動計画では家庭のところに入っている。

波多野 婦人の生活設計と教育の中の家庭と、家庭生活への寄与と評価の家庭とちよつとズレがあるが、(2)(3)のほうに含めてよいのか。

久保田参事官 関連の教育はここに含まれる。

藤田 閉会を宣言。

第一部会第一回会合

昭和五十一年一月二十一日
総理府特別会議室で

出席委員 江上、大森、上坂、佐藤、
塩、多田、滝沢、都留、西、波多野、
山本(まき子)
傍聴委員 高田

久保田参事官 まず座長一名、副座長二名を選出したい。選出方法について意見を。

塩 婦人に関する諸問題調査会議当時から参加の事情通の方に願いたい。

波多野 では具体的に江上、西氏を推す。

大森 波多野氏も。

久保田参事官 以上いずれも調査会議の先生方だがよいか。

波多野 勝手にしゃべりたいので座長にはなりたくない。

江上 私も…。

波多野 都留先生にお願いしたい。

都留 発言を封じられるし、毎回出られ

ない。

久保田参事官 では発言できる座長という事で、前記三人の先生で司会を回りもちにしたい。

上坂 そうすると都留先生は何もなさらないということで心細い。

都留 大いに発言するから…。

上坂 外にいろいろ文書が出るとき、都留先生が大きく名前が出ると格好がいい。男の方が少ないし、都留先生がやっていたらっしゃるというとパンチがきく…。

(西委員、座長席につく)

久保田参事官 (配布資料説明)〔業務予定表〕三月までに三回会を持ち、四月上旬総会で重点事項をまとめる。その間に、このように各省庁が出席しており、ご意見を持帰って作業の中に反映させる。〔検討課題〕は、①現在の婦人の問題についての基本的な考え方 ②政府の行なう施策の基本的な方向 ③民間行動への期待だが、政府側だけで構想を打出すことはよくないので、十分意見を頂きたい。〔資料3〕は行動計画中、日本に関連深いもののピックアップ、〔資料4〕

は、婦人に関する諸問題の総合調査報告書の要約と提言。膨大なのでポイントを一覧表にした。

文部省の婦人教育方針

志熊婦人教育課長（文部省） 教育について①②③の資料をお届けした。第一点は、教育の機会均等、義務教育の無償、男女平等にかかわる教育に関する研究、第二点は、家庭教育、特に母親教育および婦人の生涯教育の重要性である。資料③に生涯教育を一表にまとめた。乳幼児・少年少女期、青年期、成人期、高齢者：と、生涯の各時期における教育の施策を示した。乳幼児の女子人口五百七十七万、これに対し幼稚園百十一万、就園率六三・九％、小中生は七百三十万、就学率九九・九％、高校二百十五万、九三％で、高校は男子を若干上回っている。さらに短大二一％、四年制大学一二％、大学院二・一％である。以上を前提にして二十才以降の婦人に焦点をあてると、有権者人口三千九百万中、就労婦人千九百万、うち雇用者約一千万、農林業三百万、自営五百万、家事専業千五百

万。十八才未満の子を持つ母は千六百万、六十五才以上の高齢者約五百万である。文部省はこれに対し、四項目に分けて直轄事業と補助事業の形で施策を立てている。(1)成人婦人に対する学習の機会の提供 (2)学習情報提供と学習の相談 (3)社会教育の整備 (4)団体行動の促進である。

(1)としては直轄事業として大学公開講座、いま立案中の放送大学、また補助事業としては、婦人教育、家庭教育等の学習指導者の研修、婦人の国内研修事業に補助をする。いま百八十九万の婦人が婦人学級に参加しているが、これに県費補助を。さらに五十年度に新しく創設された乳幼児学級（乳幼児を持つ母親の学級）と青年期を中心とした家庭教育学級に約九十二万人が参加している。新たに五十一年度政府原案として、母と子の公民館活動ということで、地区の公民館を中心にした母と子の交流事業、特に読書活動を中心とした活動を予算化している。さらに婦人の社会参加の観点からボランティア活動促進事業が五十一年度政府原案として六千万。十万以上の市に対

し、一事業百四十万の二分の一補助ということで新たに補助事業が計上されている。その他社会通信教育十八万、それぞれのコースに応じて技能審査がかかっている。また各種学校には成人婦人三十五万人が参加しているが、この四月から、各種学校中、一定の規模を整備したものは専修学校という規定でさらに充実させる。市町村の補助事業としては高齢者教室。約七万人の婦人が参加している。

(2)の直轄事業としては乳幼児期の家庭教育に関する各種資料の配布、TV番組「親の目子の目」の放送、婦人教育資料の作成、配布、さらに各地の婦人会館を拠点とした婦人の学習の相談事業、直轄事業としての方策の研究委嘱が実施されている。都道府県の補助事業としては、幼児期の子を持つ親にハガキ通信とTV放送、巡回相談を行なっている。

(3)としては国立婦人教育会館（仮称）の建設がある。昭和四十六年以来、調査会等の意見を積上げつつ、第二期工事の五十一年度政府原案が計上されている。同時に婦人教育の施設研究協議を直轄事業として実施中。県市町村では、日常的

な学習の場としての図書館・博物館・公民館・視聴覚ライブラリーの整備拡充が婦人の生涯教育施設の重要な柱になっている。

(4)としては全国の婦人団体研究集会と全国組織の婦人団体を対象として、婦人団体懇談会を開催するほか、全国組織の婦人団体、家庭教育団体に對し、実態調査、指導者研修、教育婦人指導者の海外派遣、家庭教育事業等について団体補助を行なうよう施策を進めている。

以上につき、資料①で婦人教育振興、②で家庭教育振興と、二つの柱で、社会教育行政の役割、当面の重点目標、振興施策、特に五十一年度政府原案についての直轄事業、都道府県に対する補助事業、団体に対する助成ということ、それぞれに数字をあげている。前者が二十二億九千四百二十八万円、後者が十三億一千五百三十九万円である。

労働省の婦人労働対策

高橋婦人労働課長（労働省） 資料として勤労婦人福祉法、勤労婦人福祉対策基

本方針、婦人労働行政の重点項目を配布した。婦人労働行政は四つの柱がある。第一は職場における男女平等対策の推進で、これを最重点にしている。昨年、婦人少年問題審議会で審議、九月に労働大臣あて建議が出され、これに基づいて行政が行なわれているので、内容を簡単に説明する。(1)わが国社会に残る女子に対する偏見、不合理な社会通念慣行を是正し、特に職場における男女平等につき労使および社会一般に啓発活動を行なう。

(2)関係労働団体に不合理な慣行は改善するよう指導を行ない資料を提供する。(3)賃金・退職規定・昇進・昇格・教育訓練等に差別的扱いがある場合は事業主に對し適切な行政指導を行なう。また平等のために女子の能力向上も重要なので、適切な職業指導・職業講習を充実、勤労婦人の職業意識向上のセミナーも開催している。なおこれらの継続的調査研究が必要なので労働省内に「就業における男女平等専門家会議」を設け検討している。

昨年は「働く婦人の福祉運動」を進め、集中的に行政を展開、その一環とし

て国家公務員の男女平等の門戸開放を人事院に申し入れた。

男女平等問題を進めるに当たり保護法の再検討が行動計画にもILO行動計画にもある。これは前述の「職場における平等専門家会議」と、労基法を検討する「基準法研究会」で検討を進めている。

第二は、職業生活と家庭生活の調和対策の推進である。大きいのは育児休業の普及促進で、勤労婦人福祉法第十一条に事業主の協力が義務づけられている。育児導入事業主には奨励金を交付している。昨年の国会で育休法が成立、国家公務員の教員、保母・看護婦に四月から実施される。民間に対する助成措置も具体的に検討する。

第三には勤労婦人の母性の健康管理対策推進がある。最近婦人労働者の五〇％は有配偶女子であり、妊娠・出産がふえている。この母性に對し事業主が配慮するというところで、勤婦福祉法九、十条および労基法にある規定の完全実施のため行政指導を進めている。

第四は勤労婦人福祉施設の整備、充実である。勤福法の中に「働く婦人の家」

という形で規定がある。学童保育等の事業もこの中で行なっている。

西座長 以上のご説明に対する質問を。まず文部省関係から。

波多野 婦人のライフサイクルを考えると、例えば学校教育で家庭科の問題などが入ってくるが、どう考えているのか、一般の教育のことも一緒にしているのか。

志熊課長 婦人というと、文部省では成人婦人というところである。その生涯教育の前提となるのが乳幼児期・青年期ということになる。

波多野 乳幼児期の項はどうなるのか。生涯教育となると、婦人である親が教育する子どもがどういうふうになって親になっていくとか、不満足な教育を受けた婦人にならないためにどうするかはどこでやるのか。

志熊課長 成人になるまでの教育の機会の問題と、新婚期から育児期、子孫、学校教育というライフサイクル時点での家庭教育として子どもをどう考えるかと二つある。

波多野 では家庭科の教育問題をどう取

上げるべきか。

志熊課長 行動計画の中では男女の教育の機会均等という指摘があるが、日本は世界一である。ご指摘のような学習内容の均等は教育課程審議会で検討中だ。

江上 ここで婦人と女子と、二つことばが使い分けられているが、生まれ落ちるときから女の子は女の子で、それが婦人になるわけだ。ここで取扱う場合はそれを含めるのか。教育も義務教育の時代でとらえていかなければ婦人の問題は解決しないと思うが。

滝沢 各種学校の助成の説明があつたが、文部省の全体教育、私学助成等の中でどう位置づけられるか。

志熊課長 単に婦人教育課の社会教育事業だけでなく、広く文部省の施策として取上げられているものを出した。私学助成は小・中・高・大学でなされている。西では一人五分ずつ程度問題提起を。山本（ま）その前に運営に関して。昨年の日本大会であらゆる分野の婦人が話し合った決議が出された。それと関連させながら話し合いを進めたらどうか。

看護婦対策・幼保一元化などを

西 資料の一つとして結構だと思う。では問題提起を。

大森 看護職を代表して発言する。看護婦不足の最大の原因は夜勤だ。特別な労働条件を持つ者の保育所問題も考えて頂きたい。その場合は夜勤する保母の問題も出てくるが。

上坂 ボランティア活動の促進と、母子の公民館活動の二つが関連したことを提案しようと思つて来たが、文部省資料にすでにあり、さすがわが国の文部省だと感心した。その他としては、日本大会の結論として家庭科の男女共修を進めるという一項があるが、一本、柱として考えてみたい。

今、全国いろいろなところで、一声五百人くらい奥様が集まる。それが地婦連や婦人学級に収容されていけばいいが、そうでない自由なグループ活動も多い。全国の婦人会活動、婦人活動の一覧表ができ資料交換などしたところで婦人教育会館ができ上がってくるとちょうどよいと思う。

また全国の保母さんの集まりなどに行くと、幼稚園教諭と保母が別わくになっていることにずいぶん不満がある。幼児教育の一本化を考えてほしい。

この前松江に行ったら、公債を発行して自分たちで婦人会館をつくっていた。ああいう婦人会館のつくり方の手引きや助成ができるとうい。

働く婦人で一番底上げが必要なのは、保母さん・看護婦さんだと思う。看護婦さんのへき地手当てなど打出したい。

西 問題提起に際し、婦人問題に関する基本的な考え方を出しながら進めて頂きたい。

塩 戦後の社会の変動の中で教育が果さなければならぬ課題が生まれたし、婦人自身がどういふ生涯を選ぶかという時代になり、そういう人たちに教育がどのようなサービスをすべきかという問題に直面している。志熊課長の説明はこれに対し非常にすばらしいものだった。これに加えるだけでいいのか、抜本的に考え直すのがいいのかという問題は困難なので、いま感じていることを話す。

戦時中十分学校教育を受けられなかった

た婦人が四十代、五十代になり、学習意欲が高まっている。専門教育を受ける機会を開放してほしい。

婦人の半分以上が職業についている今、婦人の職域を無視できないと思う。職域に属する婦人の学習をどのようにもっていくか、託児施設と保護する担当者を準備することが必要では。また週休二日制による余暇のサービスも考える必要がある。今は公民館や教育委員会・婦人団体等で学習の機会をつくれれば集まってくる面が大きい、十人でも十五人でも自ら学ぼうとする人たちが相談に来たら、それを援助する仕組みを全国的に拡げていくことが大事ではないか。世界行動計画の趣旨に沿った視点を持つ指導者を養成することも重要。各府県、市町村における学習施設の整備、公民館、婦人会館その他の学習施設を重視し、みんなが進んで学習できるようにしたい。婦人団体活動が低調といわれるが、長年ボランティア活動に徹してきた人たちがその経験を生かし、地域社会で活発に活動できるように援助助成が必要、気の長い啓蒙活動による意識改造が大切。

平等のための具体的指導を

多田 週休二日が進み、労組で共同講座や婦人セミナーをやっているが、参加する人が限られている。自分の生活する地域の近くで働いていない婦人と交流できるような社会教育の場がほとんどない。そういう場をつくっても果して交流できるか問題だが、一つにはその内容が関係している。国婦年をきっかけに、男女の役割の固定化が世界のコンセンサスになっている。推進会議の中でも一つの大きな項目として取上げるべきではないか。それと婦人への偏見をなくす、婦人自身を含めて態度を変えていくことを、どういふふうに教育内容に取入れていくか。平たくいうと職場などでも二十才くらいになると、そろそろお嫁の口がないかというようなことがいわれるが、そういう些細なことが意外に根強く意識を形づくっていく。家族制度的発想をなくさない限り勤労婦人の問題も根強いものが残る。どのへんを問題にするか考えてほしい。

勤労婦人については、婦人の職業訓練

が重要だ。賃金の格差をなくすとか、男女差別撤廃とかいっても、年功序列賃金と生涯雇用という日本独特の形できちっときまつている。ILOの報告では、スウェーデンなどでは男の仕事と一般にいわれている仕事に女の人を採用する企業に対し、奨励金を出す、その逆の場合も出すという。西独では男女の仕事の質と量の差を研究しているという。例えば紡績の仕事と、男の人がやる化学繊維の仕込みの仕事と質的にどう違うか比較して賃金をはかるものさしを検討しているというが、こういう具体的なことがなければ実際面での平等は進まない。婦人が進出できる職業への行政面での指導強化も必要。

最後に育児休業採用企業に八万円の奨励金が出ているが非常に利用者が少ない。もう少しPRして民間に拡げる行政指導を強化してほしい。

都留 婦人問題のストラテジーは結局二面作戦である。第一は経済的自立なくして人格的自立なしという基本的立場に立って婦人の社会経済への進出を拡大し、その障害を排除することが大事である。そ

れを可能にするよう具体的に条件を整えること、これは数えきれないほどあると思う。第二は、女性が母性と職業を自由に選んで両立させたいと思った場合、それが可能になるような女性擁護の態勢が社会的に確立されなければならないと思う。

経済的自立は真空の中にあるのではなく、日本という資本主義社会、社会経済体制を持った中でやるのだから、その制約をまぬがれることはできない。その制約下ではいろいろな障害がある。どこからか突破口を見つけるほかない。私はまず民法七六二条の根本的改正だと思う。家事労働の評価は市場経済の網にはかからないが不可欠のものであって、これを社会的に評価することなくしては、婦人の経済的自立推進に障害がある。これを突破口にできれば、非常に多くのことが波及する。

これは別にして、一つだけ労働に関しいうと、看護婦・准看護婦の問題がある。日本では人口十萬当たり三百十二人の看護婦および准看がいる。アメリカとスウェーデンは五百人以上だが、西独は

二百八十九人で日本より少ない。日本の総数は五十一万人だが平均就労期間は五年にすぎない。毎年六万二千五百人入学しているのに三十一万人というのは回転率が非常に早い。医師は十萬当たり百二十八人で、総数十三万人だが、毎年四千人不つ出て三十二年間就労している。これには夜勤、保育所、育児休業等の問題もあるが、私はやはり地位の問題だと思う。自衛隊の総婦長は佐官だが、病院では総婦長は佐官待遇を受けていない。自衛隊でさえ佐官であるのにどうして看護婦の地位を高め得ないか、このためにはどうしたらいいか、現在月十二回の夜勤を週二回に軽減するとか、ソ連のように男の看護夫を採用すること、結婚後もご主人と一緒に住めるようにすることその他きめ細かい方針を採用して打開するのが労働問題の一つの突破口ではないかと思う。

女自身の意識変革を

波多野 まず男女平等であるためには、女性の中にひそむ差別意識をなくすことだと思う。この前、自分の孫に「泣かな

いでえらいね、男だから」と思わず言つてハッとしたが、私どもに進学相談に見える方々も、男の子は有名校志向型、それを実現させるために勉強勉強で母さんが過剰サービスする。女性にかしずかれる男を育てている。そのへんから考え直すべきだと思う。

第二には家庭科の問題だが、将来家庭を持ったときに男女とも役立つものとし、同時に男女が知りあえる楽しい時間にできないものかと思う。

またライフサイクルを軸に考えると、子どもを育てあげたあとの婦人の生活は非常に長いので、できれば結婚する前に一度社会に出て経験するといふと思う。自分の職場でもなるべく中年婦人を入れたいと努力しているが、中年になつてはじめて就職した人を慣らすのは大変な努力だ。二年でも三年でもいいから就職して結婚するといふ。主婦というものは、「仕事の中に余計なおしゃべりをしない」といったつまらないこともできない。それを適応させるのは大変だ。しかし結婚までという腰掛ムードの就職も困る。いつやめるのかわからないのでは責任のあ

る仕事は与えられないし、あとに続く婦人も企業は信頼しなくなる。幼稚園でも先生がやめると子どもにショックを与える。「自分の大好きな先生がパッとやめて以来、女なんてあてにならないと思うようになった」と告白した男性もいる。私たちがうっかりしているところで不信を育てている。

婦人は職場内の変更を好まない傾向があるが、自分の能力がどこにあるかわからない場合も多い。もっと大らかに与えられた仕事に精を出すよう、みずからつくりに上げる差をできるだけ少なくしたい。

中高年婦人の生活の安定と生きがい、これからの大きな問題だ。それ以前の生活、子どもの教育、子どもに対する責任などもライフサイクルとして考える必要がある。独身貴族の女は多く、何万円もするブラウスを買ったり、親が三年に一度入れるかわからないようなレストランに出入りしたりする。子どもに収入があつたら、その子にかかる費用を親が取上げるのは当然で、浮いたお金を中高年のために生かす工夫をすべきだ。日本

では子の面倒をみることを親の愛情と思いがちだが、日本人の甘えの心理を清算することが子のためにも社会のためにも重要だ。

保育施設も重要だが、一昨年から生まれた短期里親みたいなものを活用して、近くに気心のわかった方がいたらその日はお願いすると親類ができたようになつて大変うまくいくと思う。

母性保護の重要性を基本的に認識して滝沢 他部会の資料も全員に配布することを最初をお願いしたい。

基本的には経済自立のための教育を提言したい。女性が自信のある資格・技術を身につけることが男女平等を進め、経済自立を進める一つの方法である。例えば斜視の子を訓練する視能訓練士の資格を得るには、高卒後三年または短大卒一年の養成期間を経て国家試験を受けるわけだが、短大以上の卒業者がさらに医療関係の知識・技能を身につけるくらいでないといけないのではないか。都留提言の看護婦問題とも関連するが、プロフェッショナルとしての自覚を持つことが、

長期にわたって職場を離れない基本的条件になる。女性だけに限らないが、大学卒業者にさらに技術・資格を与える専門コースがあると、問題解決の役割を果たすのではないか。

母性保護は女性差別のもとになるという提案が行動計画の中にもあるが、わが国の現状では母性保護は決して平等を損うものではないという基本理念は、この推進会議の基本的な考え方として持っているのではないかと思う。

育児休業が実施されると、上の子を保育所から引取らなければならぬケースが出るというが、重要な問題として考えて頂くと同時に、育児が進むからといって産前産後休暇の延長や保育所が不要ということにはならないと思う。産休延長は会議の具体的問題としたい。

短期里親はベターではあるが、国としてこの制度を推進すべきか、基本的に考えなければならぬ。保育所には一般保育所のほか季節保育所、障害児保育所があり、職場保育所への助成もあるが、児童福祉法を直して職場保育所まで認めろというのは困難な面が思想的にもあると

思う。職場の保育ということを労働問題として法的に認知していく。基本的に児童の福祉という理念は失ってならないが、労働問題として検討願えないかと思う。具体的には職場保育を予算措置化しているが、労働法規か何かの中で認知して、安全性や基準をつくらなければいかんと思う。

看護婦のステータスを高めるためには、大学卒を入学資格とする看護婦の学校あるいは栄養士と看護婦の資格を合わせもつ姿などを検討すべきだ。根本的に男女の職業の適性を肯定して職業問題、労基法の問題をやるか。私は少なくとも適性を否定しないことを基本に置いたほうがよいと思う。

山本（ま） 時間がないので他委員と重複する部分は省略する。都留説どおり、経済的自立なしには真の意味の人格の自立はないと思う。婦人問題が多数ある中で婦人労働者の部分に男女差別が一番たくさんある。基本的問題として大きく取上げてほしい。

母性保護について労基法が非常に立ちおくれているのは周知の事実である。I

LO一〇三号条約と九五号勧告の批准が好ましいという結論がこの会議として出せるのか、ぜひ重視してほしい。

日本はILO一〇〇号を批准したが、現実には初任給から男女差がある。ILO一〇一一号と勧告一一一号の具体的な男女平等実現に向けての一つの方法として論議すべきと思う。

職業訓練の問題も国際的に非常に重視されているので取上げてほしい。

幼小児期の教育に重点を

江上 変容する社会に対応する基礎的な力は、生まれ落ちるときからの教育、地域社会、近隣社会や幼稚園・学校における遊び友だちが基本になる。変容する社会に対応する基礎的なものがまずそこにできていなければ生涯教育のつまりきになると思う。私は男女はライフサイクルにおいて違うと思う。子を生むことは男には絶対にできない。その根本に家庭がある。その先に職業がある。これに対し都留説のように「選ぶ力」があれば生涯設計の中で両立できる職業を選ぶことができる。社会はこれに對してはだけ

援助をするということがあると思う。基礎教育には男女の差をつけてはいけない。ことに家庭科別修はおかしい。生涯にわたる教育のどの部分をとっても、人間が自分が教育を受ける権利を持ち、場所を提供されており、誰でも教育者にもなれるというように死ぬまでの生涯教育の一連の体系づけを考えてみる必要があるのではないか。

四十七年の婦人に関する諸問題調査では、日曜日に家事労働の時間が減らないというのが日本の特質だった。五十年のNHK調査ではアメリカ型になり減っている。社会の変転によってありようがかわってくる。ありようがかわったとき婦人の問題をどうとらえていくかを基礎に置きつつ考えていきたい。

妊娠と出産には国家として十分な手当てを。ただし三人目から育児手当が出るのは人口問題と関連してふしぎに思っている。また専門職であり働き始めたときから仕事のできる人なら三年働いても腰かけではない。三年間教えてやれやれと思つたらいなくなったのでは困る。職業の選び方によってはかきい職業婦人と

して死ぬまで働けると思う。

婦人労働に対する援助をちとるためには大きな努力が必要な過程がある。私自身も人の三倍ぐらい働かないと具合が悪い。男のようにくわえ煙草でいかない面がある。女の人はスクラム組まなければならん。裏返しとして男の人の協力をどうやって求めていくかは重大な問題だと思う。

西 経済的自立をはかるべきとか、役割分担を考え直すとか、基本線は一致したと思う。その実現についてさまざまな提案があった。なお漏れていることがあれば加えて、次の機会にでも具体的な案を練りたい。

大森 看護婦の地位に関連し、日本には二十万を超える准看護婦がいることが一番の問題だと思う。中学を卒業して二年入る准看護婦学校をまず廃止してもらいたい。また千葉大などに男子が入学したが今の法律では保健婦・助産婦になれない。この問題も考えて頂きたい。

江上 医療技術の進歩で、二年も職場を離れていると、再教育しなければ動まらないという。有給で再教育するシステム

や、夫の勤務地でも就職できるシステムなど本腰を入れてやらないといけない。教師には共働きが多いが看護婦には少ない。同業に男がいらないからではないか。

大森 もう一つ、開業医が看護婦を使用人視する習慣なども根が深い。

波多野 看護婦の質の向上ということで東大に衛生看護学科ができたが先細りして希望者がほとんどなくなり廃止された。卒業生は仲間と融和しないなど問題があるようだ。

影山 参与 行動計画一〇二に、婦人のみ対象の保護立法は、必要に応じ改定廃棄すべきとある。滝沢委員は矛盾するといわれたが理解できない。今後この問題について検討してほしい。

江上 NHKの課長時代、アナウンサー、プロデューサーの深夜勤務のわくを拡大してもらった。現在はそれは悪のようになりわれているが、NHKでは今は男も深夜業をしない。世の中がよくなれば女子もよくなる。

山本(ま) 保護と平等の問題についてはILOで一番細かく論議している。三週間にわたる討論で、保護の維持という

一項も確認されていることを念頭に置いて頂きたい。

江上 今後の討論の時間が不十分ではないかと心配。

久保田参事官 四月段階は骨子。考え方と方向を最重点に出して頂く。

影山参与 婦人担当室で作業し、各項目ごとに問題点を出し合っている。希望があれば本部のほうにはメモとして次官会議に出す予定である。

西 本部と会議の両方でやる必要が、必要。一方交通ではいけない。



第一部会第二回会合

昭和五十一年二月九日

全共連ビル一階第三会議室で

出席委員 江上、大森、上坂、久保田、

小菅、塩、多田、滝沢、都留、西、

波多野、山本（まき子）

傍聴委員 高田

（江上委員、座長席に着く）

久保田参事官（配布資料説明） 資料

4、本部会議での確認事項一、「行政機関における婦人の登用について」①現在婦人が含まれていない審議会約七割、

婦人委員は全体の二・四％の状態のため、審議会等への婦人の登用に配慮する。

②国家公務員法第二十七条「平等取扱いの原則」に基づき、女子の公務員の採用、登用を配慮し、かつ能力開発、有効發揮に努力する。

二、婦人関係施策については郵送済。資料①は第一部会一回会合からのピックアップ、②世界行動計画のうちわが国に関係深いもの、③婦人

労働についてのILO行動計画、⑤、⑥

は、女子公務員の受験制限職種についての検討事項、人事院規則からの抜粋である。

家庭科の内容

文部省初中局金原視学官 小中高の家庭科に関する教科の外枠、

（一）教科、科目の組織・授業時数・履修について

小学校は家庭、五、六学年に二年間七十時間、中学校、技術家庭一、二、三年各年間百五時間必修、家庭は三学年に七十時間だが選抜のため、ほぼ皆無の状況。高等学校、家庭一般4単位女子に必修、以下家庭科に関する科目二十四、

（二）その目標

小学校では、生活に関する知識・技能の修得から家庭生活の意義を理解させ、中学校では、同様にして家庭を明るく豊かにする能力と態度を養い、高等学校では、家庭経営の立場から総合的に、自他の家庭生活の充実向上を図る能力と実践的態度を養うことを狙っている。

（三）指導の内容

小学校は、五学年、六学年とも被服、

食物、すまい、家庭という領域に分けて指導、中学校では、男女生徒の現在、将来の生活の相違、生徒の興味、関心の分化から、男子向きと女子向きに分かれているが、内容は大きく重なっている。高等学校では、家庭経営ということから総合的に、関連し合ったものを学習、女子が現実において、家庭生活上独特の役割を荷なうところから、女子に必修となっている。なお、小中高通して、他の教科との関連は十分考えられている。

次に、教育課程審議会の審議の経過と中間報告について。昭和48年11月に文部大臣から「小学校、中学校及び高等学校の教育課程の改善について」諮問が出されたのに対して、50年10月18日に中間まとめとして発表された。教育課程の基準の改善の基本方向としては、家庭、技術・家庭、家庭一般は小、中、高校を通じて、実践的、体験的な学習を行う教科としての性格を一層明確にするにある。中学校の技術・家庭については、男女相互の協力と理解を図るという観点から「男子向き」と「女子向き」の学習系列を検討するとともに、履修方法の関連を

一層密接に図れるようにするため、改善の方向を検討。高校の家庭一般については、学校や地域の実態及び生徒の必要に応じて弾力的な取扱いができるよう検討するとともに内容の精選を図る。
江上座長 家庭科の問題について質問は？

多田 外国の場合、家庭科の教科内容などどうなっているか？

文部省（金原） フランスの中学校では、女子に家政、衣食住、保育、高校では女子に室内装飾、保育。男子には工作とか技術科など。西ドイツの中学では女子にししゅう、保育、家政、経済。男子は産業活動、裁縫も週二回くらい。家政は高学年になると週四、五時間。ソ連では労働教育の一環として、はじめは男女同じことをしたが、その後女子に裁縫、料理、住居、保育などを。イギリスでは、初等教育で女子は裁縫、男子は工作。中等教育で女子は料理、手芸、家庭技術が加わり、男子は技術工作。アメリカでは州によって必修、選択まちまち。

日本の現段階では、学習指導要領では別修、共修にこだわらず、各学校の創意

工夫に待っている。協力者会で具体的に内容検討した結果は審議会に回す。

塩 国際婦人年世界行動計画をみると「伝統的に男と女に割当てられた機能役割を再検討する」とあるが、今後十年間を考える上で家庭科だけでなく、社会の諸制度全体に影響する問題と思う。

上坂 「家庭科の男女共修をすすめる会」は、かなり思想的に問題をとらえている。

江上 それは、文部省とは別にわれわれ仲間でも考えてみたい。

看護婦の問題点

次に看護婦と保母について、いろいろ隘路があることを念頭において、清水さんのご説明を伺いたい。

厚生省医務局看護課清水課長補佐

一、看護職員教育制度

看護婦は高等学校を卒業して、看護婦養成所三年（定時制は四年）大学なら四年を出て国家試験を受ける。さらに保健婦、助産婦になる人は、法律上は六か月だが、さらに一年の保健婦学校、助産婦学校を出て国家試験を受ける。准看護婦

というのは中学卒業後准看護婦養成所二年、高等学校に衛生看護科があるところは三年の教育を受けて都道府県知事の手なり試験を受ける。准看護婦になって三年以上の業務経験があれば、看護婦養成所の二年課程を経て看護婦の国家試験を受けられる。高等学校を卒業している准看護婦はただちに進学できる。

二、設置主体別看護婦養成所数及び定員

五十年四月現在の総数は千五百八十八校。総定員十五万八千名。保健婦、助産婦の学校は五十八校。看護婦養成所は、三年課程三百二十九校、二年課程三百八十九校、定員一万四千六百名。准看護婦養成所は七百五十四校、定員三万三千八十余名。今までは学校増、定員増があったが、五十年四月は看護婦充足度が八七・五%と悪くなった(二年コースは九七・八%)。一般に高校進学率が多くなったのに従い、准看護婦養成所入学者の四六%は高校卒という実態になった。

三、施設別就業者数の年次推移

四十九年末の看護職総計は約四十五万人。看護婦のほとんどは病院と診療所へ

就職。看護婦は二十四時間勤務なので、八時間ずつ三交替とし、夜勤は複数勤務で月四回以下にすると、まだ看護婦の実数は足りない。最近の傾向で、公的なところでは、勤務条件がよく充足もよくできるが、民間には人が集まらないという格差がある。退職原因は、結婚・育児が多い。これに対して保育所設置、育児休業制度(今年四月から実施)、夜間看護手当一回千七百円の支給などで、看護婦の定着を考えている。看護婦免許所有者の実態調査をして、都道府県にナースバンクを置くことも近く実現する。看護婦と准看護婦は実際の業務の中で仕事をはつきりわけられない実態もあるので、准看護婦の中からは、なるべく早く看護婦にしてほしいという要望が多い。

山本(ま) 平均勤続年数はどのくらいか? 退職の比率は? 人事院勧告では二人組み、夜勤八回をニッパチと言うが、現実には十回から十四、五回という所もあると聞く。

厚生省(清水) 四十八年の調査だが平均勤続年数は看護婦八・二年、准看護婦四・二年という結果が出ている。ニッパ

チは国立施設の人員配置で、これを目標に看護婦の増員を要求している。

都留 看護士、男性の方の割合は?

厚生省(清水) 看護夫、准看護夫を含めて約六千人。

滝沢 養成所の最終入学者が八〇%代というのは残念な問題だ。養成所への推薦入学制度を実験的にやっている例もある。この場合、本人の適性も教育関係者がみているし、本人の希望も強いのでよい面がある。

久保田 医師と看護婦の職務は? 若い医師の訓練のため経験ある看護婦の手が割かれることもあると聞くが…。

滝沢 日本の医学教育の欠点だと思ふ。ドイツあたりでは医師の教育コースの中で一定期間病棟実習で看護業務もする。看護業務は患者の療養の世話と、医師の診療の補助をすることと、法律的な表現がある。

上坂 准看から正看への一本化はどういう形で進められるか? 僻地の医者には手当がつくが、看護婦にはつかないという実態について…。

厚生省(清水) 准看から正看への一本

化は、要望が高いということ。僻地問題は保健婦の手当は医師に比べて低い。

大森 無いにひとしい。保健婦は公的に義務づけられ、手当の額もきまつているが、医師には国としての強制力もないし、相場もあつてないようなもの。

保母の問題点

江上 次に保母の問題を。

厚生省（鈴木専門官） 保母の養成には二つのコースがある。一、厚生大臣指定の保母を養成する学校、その他の施設を卒業した者。都道府県で保母を専門に養成する学校は、国庫扶助が出る。社会福祉法人で保母の養成だけしているものもある。その他、学校教育法に基づく大学、短期大学、一部各種学校もある。二、都道府県知事が毎年一回以上行なう保母試験に合格した者。国庫補助の対象校は現在三十七校。二年修業で学生定員六千八百人。就職率九〇％。他の養成校は二七五校。定員四万七千九百九人。卒業して資格を取る者は二万四千弱。これは大部分が幼稚園教員の免許、普通二級免許を併せ取るので、約四〇％が児童福祉施設

に就職する。保母試験受験者は年間六万八千ぐらゐ、そのうち八科目全部に合格するのは一万一千ぐらゐ。就職者数は把握しにくいが東京都では一五％程度。学校卒業による資格取得者と試験合格による者の比は七〇％対三〇％、大学卒がふえる傾向にある。資格取得者が全部就職には結びつかない。この対策としては、保母養成校の増設、現に就業している保母の待遇の改善、幼稚園教員等の給与とのバランス、休憩時間や夜勤の問題、産休、病休の場合の代替、保母養成校の在学生に対する保母修学資金の貸与金額アップなど、施策の充実につとめている。久保田委員 奨学資金の貸付はどのくらいで、返却は？

厚生省（鈴木） 五十年年度予算は一億九千万ぐらゐ、五十一年には二億一千万にふやす予定。貸与人員は四千八百人、貸与月額七千円。五十一年には八千円にアップする。卒業後三年間勤務すると返還が免除される。

江上 厚生省の方で特別問題点は？

厚生省（鈴木） 看護婦と同じように、資格をもっている方がかなりいるわけだ

が、地域的事情などで需要供給のバランスがむづかしい。児童福祉施設の増加が著しく、新陳代謝も非常に激しいので人員不足になる。地方ではかなり過剰ぎみな所もあり、そのバランスと改善が今後の問題。

江上 社会福祉施設の保母と幼稚園の関係ですね。労働、教育の密度の違い、保育時間の違いなどで保母の就職率が少なくなるのだと思う。

厚生省（鈴木） 社会福祉施設、児童福祉施設はいろいろあるが、通園施設と収容施設で保母の業務内容にも差がある。専門職として確立するにはどうするかの問題になる。

大森 男の方の養成は今後どうなるか？

厚生省（鈴木） 保育所以外の施設については児童指導員が配置されているが、現状ではその多くは男性だ。

農村婦人の問題点

江上 農林省では教育上、訓練上男女の格差をつけているかどうか説明を。

農林省（木村） 現在、主として農業に従事している人約六百万人の中婦人は五

六%、農業専従者（農業に一五〇日以上
従事した者）約三百八十五万人のうち、

婦人は五一%という実態。農業生産に従
事している婦人に対する教育としては農

業高校がある。各県と団体で設置してい
る農業者教育施設による研修は、四十九

婦人問題企画推進会議第一部会第一回会合発言メモ

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------------|---|---|---|---|---|---------------------------------|--|--|---|--------------------------------------|--|-------------------------------------|-------------------------------|--|-----------------------|--|-------------------------|--------------------------------------|--|---------------------------------------|---------------------------------|
| (1) 男女の人間の平等の再確
認 | (2) 男女の役割の固定化の撤
廃 | (3) 婦人自身にひそむ男女差
別意識の撤廃 | (4) 幼児教育は生涯設計の基
礎となるので、家庭教育
で男女平等の意識を注入
せよ | (5) 教育内容の男女差の撤廃 | (6) 家庭科は、男女が共修し
てお互いを知り合える楽
しい課目に | (7) 経済的独立なくしては人
格の独立はない | (8) 家事労働に対して社会的
経済的評価を | (9) 職業における男女の適性
分野というものはやはり
存在する | (10) 従来、男子むき、女子む
きと考えられてきた職業
分野の固定化を廃せよ | | | | | | | | | | | | |
| (11) 職場における家族制度的
考え方を廃せよ | (12) 職業訓練を男女平等に
職業訓練により、第二次
産業に婦人がもっと進出
できるように | (13) 中年からの就職のために
も婦人は、結婚前に一度
職業経験をもつとよい | (14) 婦人自身が職業に対して
もっと責任をもつ | (15) これからは婦人が生涯に
わたる自分の生き方を自
ら選択する時代である | (16) 婦人が職業と家庭とを自
由に選択または両立させ
ることのできる力をつけ
る | (17) 婦人が専門的知識・技能
を身につけるよう、婦人 | (18) 自身も努力し、社会もそ
れを可能ならしめるよう
に後援すること | (19) 母性の保護は男女平等を
損うものではない | (20) 母性の保護については、
我が国の立法は非常に立
ち遅れている | (21) 婦人の職業活動を保護法
規でしばっている点があ
る | (22) 男女のライフサイクルに
おいて、出産のみは婦人
に特有のものである | (23) 育児休業について、利用
率が低いのもっとPR
を | (24) 勤労婦人と家庭婦人が共
に学ぶ機会をつくる | (25) 婦人のための学習の施設
の整備、指導者の養成、
個人学習や小グループへ | (26) 援助、託児機能を充実
せよ | (27) 保育所の充実、特に職場
保育所、夜間勤務の者の
ための保育所を、児童福
祉の面からのみならず、
労働問題としてとらえて
推進せよ | (28) 看護婦、保母の地位向上
を図れ | (29) 看護婦、保母、保健婦、
助産婦を男子にも開放せ
よ | (30) 中年婦人の生活の安定
のため、同居している成
人した子どもにもっと生
活の責任をもたせよ | (31) 中年婦人にもっと専門職
業教育を受ける機会を与
えよ | (32) 婦人問題には男子の協力
を得ることが必須である |

年度で五十六か所あり、中学卒一年、高校卒一年の人を対象にしている。研修生総数二千五百人のうち婦人は一八%ぐらい。そのほか農村少年に対する短期研修では婦人参加一〇%程度。普及員が農家の主人、主婦を含めて現地指導もしている。

塩 農業生産基幹労働に従事している婦人のうち、研修生の占める率が少ないのは？

農林省（木村） 門戸は一般に開いているが、応募が少ないというのが実態だ。若い世代は女性も出やすい。

江上 だんながよそに出て、奥さんが農業をやるのはいいことでしょいか？

農林省（木村） 男子が中心になって進めるのがほんとうの姿だと思う。規模拡大で施設が多くなると婦人の力を借りざるを得ない。

江上 ハウスは女性向きと思ったら大間違いで大の男でも消耗度が激しい。研修だけで突っ走ると質の問題で違った方向に走らないか？

大森 生活改善専門技術員、生活改善普及員の中で男女の数は？

農林省（木村） 全部女子で、そのほか兼業農家が非常に多く、婦人が後を引受ける場合が多い。

女子の保護規定は

江上 前回、平等か保護かの問題がありました。高橋婦人労働課長にご説明いただきたい。

労働省婦人少年局高橋婦人労働課長 わが国における女子の保護規定についてご説明申しあげる。女子労働者に関係する保護規定のうち、第一は平等に関する規定で、労働基準法の第四条に男女同一賃金の原則があり、賃金で男女差別をしてはいけないというのがある。第三条は労働条件一般についての、差別的取扱いをしてはならないとあるが、性別がないのは不十分だという指摘がされている。第二は労働基準法第六十五条、母性保護に関する規定。産前六週間の休業は女子労働者の請求に基づき、また産後六週間は請求の有無にかかわらず就職させてはいけないという形になっている。ただし五週間を経過した女子が請求したときは、医

師が支障ないと認めた業務につかせることは差支えない。さらに、妊娠中の女子が請求した場合は、他の軽易な業務に転換させなければならないと決められている。同法第六十六条には、満一才に達しない生児を育てる女子は、三十四条にいう一般労働者に適用される休憩時間のほか一日二回、少なくとも三十分育児時間を請求することができる。産前産後の休業期間中、あるいはその後三十日間の解雇制限であるとか、賃金の非常時払（女子に限らないが、出産等の費用に当てるため、賃金の支払い期日前でも、既往の労働に対する賃金を払わねばならぬという規定もある。第三、第六十一条に労働時間、休日等の規定があり、十八才以上の女子については三六条の協定による場合でも、一日につき二時間、一週に六時間、一年に百五十時間をこえて時間外労働をさせ、休日に労働させてはならない。男子についてはこのような制限規定はなく、協定によつて時間外労働をさせることができる。六十二条は深夜業に關して、午後十時から午前五時まで女子の労働が禁止されている。天災地変の場

合、農林水産、保健衛生の場では別に規定がある。旅館、料理、飲食店、接客、娯楽場、電話の事業は深夜業がはずされている。スチューデス、女子を収容する寄宿舎の管理人の業務、映画製作の演技者、スクリプター及び結髪業、放送事業におけるプロデューサー及びアナウンサーの業務、罐詰事業における第一次加工の業務は適用除外になっている。危険有害業務の就業制限は六十三条、安全、衛生面で危険有害と考えられる業務については女子の就業が制限されている。女子年少者規則第八条には十八才未満の者について細かい就業制限がある。労働安全衛生法では、危険有害な業務に就職する場合免許の習得が必要だが、女子であることが免許取得の欠格理由となることもある。坑内労働も女子は禁止されている。生理休暇は六十七条で規定され生理に有害な業務に従事する女子、または生理日の就業が著しく困難な女子が生理休暇を請求したときは、就業させてはならないとなっている。最後に、女子がその責に帰すべき事由でないときに解雇されて帰郷する場合、使用者は帰郷旅費を負

担しなければならないという規定がある。以上が基準法に規定されている女子の保護規定だが、このほか勤労婦人福祉法で、女子の妊娠中・出産後の健康に関する配慮及び措置、育児に関する便宜の供与等が事業主の努力義務として規定されている。最近の事情から、母性保護についてこれで足りるのか、あるいは女子が男子と平等にその職場で地位を確保していく上に障害となる部分があるのではないか、など指摘があり、労働省でも検討している。

保護と労働をめぐる

小菅 最後に言われた問題、保護規定と男女同権、機会均等の接点についてごく大ざっぱでもお知らせいただければ。

労働省（高橋） 基準法研究会でこれまでに、女子については母性保護の規定と危険、有害業務の就業制限について一応やった。労働時間の点についてはこれから検討する。安全衛生法で免許も受けられない、試験も受けさせないというのは、女子の保護もあるだろうが、平等という面からみると問題ではなからうかと

いうことが論議されている。時間外労働の点では、専門的、技術的な仕事に携っている女子について規制があると、職場で責任のある中核的な仕事を任せられないのではないかと問題がある。これは基準法研究会での検討ではないのでお含みおきたい。

山本 外国では男女とも法的に時間外労働を規制している。日本では、男は一月に七―八十時間の残業をする。女は一日二時間しかできないからやはり一人前ではないといわれる。これは本末転倒ではないか。

多田 一月二十九日に労働基準審議会に對して、労働者側から深夜業も残業制度も、現状では男子は野放しなので、むしろ男子を制限すべきだという意見書を出した。労働省はどう受けとめておられるか。

労働省（高橋） 一般女子の保護、妊娠・出産期の保護はどの程度が適正か。また男女平等という観点から基本法一般の規定の中でどう考えていくべきか、たいへんむずかしい問題だ。多くの方々の意見を聞き、現状を踏まえ、慎重に検討して

いきたい。

滝沢 産前産後の問題だが、母乳推進の立場から理想的には三か月は母乳で育てたい。今後の改正では、国際的にみれば十週間はほしいが、少なくとも八週間くらい確保したい。産前は六週間で据置いても産後を十分保護するようにしたい。母乳による育児を重点に考えていただきたい。

山本 産前は前日まで働いても現行の労基法では違反にならない。だから労関係によって産前はまったく休めないところもある。そこを理解してほしい。

江上 産前産後通算するという職場が多いのではないか。

山本 そういうところは少ない。

江上 私のまわりの女性は、足がむくんだりしても産後に多く休みたいので、産前は無理をしてしまうケースが多い。これはしっかりと規定する必要がある。母性保護はやはりある程度、外から手助けする必要があると思う。ここでは男女平等の問題と保護の問題を論じているが、これは女性の問題だけでなく、相手、男性がいることを考えなければならない。

「女子向き」「男子向き」はあるか

江上 前回の発言メモ（190ページに掲載）が手元にあるが、この順番は重要なものからついているのか。

久保田 参事官 そうではない。前回の発言をまとめただけだ。

江上 (1) (4)は意識の問題だと思うので、これを念頭において(5)以下を考えた方が、いいか。

大森 異議なし。

江上 (5)は家庭科の問題だが、それと男女平等ということについて、ここでまとめて座長会議に提出する必要があるか。

久保田 参事官 男女共学の学生をみていると、合宿などでご飯をたけないなどなにもできないのは女子の方に多い。これは学校教育以前の家庭教育の問題だと思う。

江上 学校で教えるべき家庭科とは何か、非常に疑問だ。高橋課長からこういう時代に「男子向き」「女子向き」と、小、中学校から分けるというのはいかなものかという話があったが、教育の問題と、主婦も職業の一つとみるかという

問題などからみて、もう一度見直してほしい。

多田 私のところは職場自体が男の職場、女の職場と伝統的に分かれているが、組合では基礎的学習を男女一緒に勉強しようという段階にきている。しかし学校ですつと分けられてきてしまったというところが、問題になっている。家庭科が「女子向き」「男子向き」と分けてやっているところに問題がある。

江上 別に分けなくてもいいということだろう。それぞれに「向き」があるといわれると、不思議な気がする。

塩 女性が男性に追いつこうとして、家のことをやっただけに男性と同じに働くという中から、家庭生活のひずみ、男性に対する劣等感が生まれてきた。家庭教育の振興、家庭科教育の重視、道徳教育の重視などはそれへの反省を含んでいる。男も女も家庭生活の知識や運営能力は要求される。その上に男と女の差があるのか、ないのか、見直すべきだ。日本人のものの見方、考え方に関連があるのだから、そういう意識を高め、自分自身の人生を選択する能力を身につけるよ

うな成人教育が必要と思う。

江上 妻が忙しいときは夫が食事の用意をすることが、決しておかしいことではないことを、学校でも家庭でも教えるべきだ。塩先生のおっしゃるのとは逆行しているのではないか。

波多野 知人に聞いてみるのだが、男の子は女の子と一緒にかなり楽しんで家庭科などやるが、親や先生が受験があるからやめろという。

江上 それは家庭教育の問題で、私は家庭科とは家庭の中でその技術を教えることだと考えている。小、中学校時代は共修でもいいのに、中学ですでに「女子向き」「男子向き」と分け、高校では女子のみ必須になっている。大学受験とも関係ある。

西 基礎教育の中で男女平等の意識が徹底するような方法であれば、どうしても共修でなければとは思わない。

江上 問題は高校だが、中学では同じように教えた方がいい。

西 電気についてはどの程度習うのか。
久保田 今まで女はヒューズの修理もできなかった。

江上 それが「男の子向き」になっている。家庭科の問題については、義務教育における家庭科の問題は、男女平等の問題と一緒に考えていくということではないか。次に(7)をどうするか。

家事労働の評価など

上坂 これは都留先生が(8)の前提としていったものだ。

江上 家事労働について、これはここでやるか、それとも家庭部会か。

西 家庭部会ではないか。

江上 一応、家庭部会と相談してみる。家庭部会で相続法と身分法という点から家事労働をどう評価するかという問題であろう。次に(9)だが、これも(1)から(4)の理念と同列に扱えると思う。むしろ(9)の看護婦の問題などを具体的に考えていきたい。

滝沢 看護婦とか坑内労働のように、女、男に代表されるものと、プログラマーのようにどんな女性が進出しているものがあるから、あまりきめつけるような理念はどうかと思う。

江上 (9)はどうか。

多田 私が発言したもののだが、これも理念のうちに入ってしまふ。日本の賃金体系は年功序列、生涯雇用、機能別になっており、女は家計補助と考えられている。職場内でも女は補助的な仕事にまわされ、さらにお茶汲みなどは当然のサビスとしか思われていない。

江上 (9)は当然のことだ。農業の分野では特別に考えるべきだとのことだが。

塩委員 職業訓練の内容だが、当然、そのなかに教育が位置づけられる。(5)と関連させて考えたい。

女子の教育について

江上 (9)はいかがか。

滝沢 職業訓練というだけでなく、教育内容を表現する必要がある。工専に女子が入ることも必要になる。

江上 伝統的な男女観が災いしていると思う。

塩 家庭にいる婦人が再教育を受けて、技能的職業分野へ進出するのは、首切りを防ぐ方法だと思う。再教育の機会を十分提供するという表現がいいと思う。

江上 (9)が関連あるので先にする。

西 高校を卒業した若い人たちに「職業観などの教育を受けたか」というアンケートをとったら、男の子も女の子もそういう学校教育を受けてない。

江上 尚ほもう少しふくらませて、「婦人教育の中に職業観をもっと徹底的に盛り込む」ということに。

久保田参事官 尚ほ教育の問題だ。男女共学の子子学生と女子大の女子学生とでは、共学の子の方が依存的で、女子大の子の方が積極的だ。これも恐ろしい気がする。

多田 労働組合でも同じ。

山本 大学に入學しても女性の方が男性より能力が高いという資料もあるが。

久保田参事官 たしかに女子学生の方は試験の成績はいいが、修士、博士の論文を書く段階に入ると、格差がでてくる。そのへんが問題だ。

西 朝日新聞に載った丸ノ内で働くOLの調査では、共学高校出身の方が女子高出身より定着率、働きぶりがいいそう

だ。
波多野 男の子は自分よりすぐれた意見をいう女の子より、かわいい女の子がい

いという調査結果がある。それを女の子も意識している。このへんを依存度という点だけでとらえることはできないのではないか。

江上 婦人課ができた頃は、女ばかりで何でもやらなければならなかった。世の中が落着いてくると、男女両方が女らしい女を要求してくる。非常にまずいリアクションとして出てきている。女性の職業意識をどのように見るかは、教育と非常に関係がある。学習施設の整備、これはいま文部省で相当やっておられるよう

だ。
文部省志熊婦人教育課長 進行中だ。

雇用の機会均等と待遇の平等を

多田 賃金の問題は機会均等に関連してくるが、発言メモに全然出ていない。繊維産業の実態は、男女の格差がすごく開いている。

江上 とくに苦勞しているのは未亡人だ。男がやってもいいことを、女だからやらせる式の考え方が伝統的に残っている。

西 一九五〇年六月のILO第六十回総

会の行動計画や宣言、決議にあるように、雇用機会の平等を入れないと、徹底しないと思う。

山本 機会均等と待遇の問題は基本だ。

江上 発言メモに32の項目を立ててはどうか。

波多野 基準法と平等の問題は、もう少し議論してみる必要がある。男性でも、現在のようにガラになるほど働くのがい

いか、女性保護がネックになっているとすれば、どう処理すればいいか。

江上 母性保護の基準法と男性の労働条件改善とのバランスをとりながら一緒にやらないと、女ばかりするから目立ってしまう。

波多野 それは私も賛成。いま不景気で旦那が早く家に帰るのを不満とする奥さんがふえている。残業が少なくなつて収入は減る、旦那は帰って夕食をする、今までいなかった人がいると目ざわりだ、というのでは。男の労働超過を制限しても日本の家庭意識を変えなければ。

山本 賃金とか社会的通念の問題がある。

江上 お父さんがいる家庭がノーマル

で、超勤は労働者の保護にならないといふことは小さい時から家庭教育で教えるのですね。このまま週休二日制になったらいへんなことになる。

久保田 アメリカでは十年前に出ている。アイ・ラブ・ユーも言いつくしてベシキ塗りでもやろうかと……

江上 家庭というのは暖炉の前で父親が聖書を読み、母親が本を読むそばで子どもが遊んでいる、というのは昔の話。旦那さんはゴルフ、奥さんは婦人会、娘や息子はボーイフレンド、ガールフレンドとドライブに。教育委員会に行けばまっ先にその話と麻薬の話が出る。新しい家庭づくりをしなげばいかん。

多田 繊維産業は深夜業ができるので困る。機械をとめると糸についている糊がかわいて変な製品になるので、男は二十四時間勤務、女は二交代。子供と親が一緒にいる日をつくるために、月一回だけ無理していっせいに休む。労働側からの低賃金長時間労働と家庭の側からという問題提起する必要がある。

江上 さっきのILOの雇用の機会均等に関する諸問題、賃金の問題、それに今

出た問題は加えるか。

大森 深夜業が許されている中で看護婦については全然制限がないので、反対の現象として、夜勤ばかりさせられてしまう看護婦。専門職にもいろいろ問題がある。

塩 農林の基幹労働に従事する五〇数%の人は働くのに忙しくて研修にも出られないということだが、農村の大部分の力になっている婦人の問題も、生活調査、広報活動を活発にやって、社会の意識としていろいろのことをみんなに宣伝することが重要だと思う。

江上 ではこの辺で……

☆



☆

資料3 育児休業法全文および、提出法案

義務教育諸学校等の女子教育職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律
七十五年七月三日成立

(目 的)

第一条 この法律は、義務教育諸学校等の女子の教育職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の職務の特殊性等にかんがみ、これらの者について育児休業に関する制度を設け、女子の教育職員及び看護婦、保母等の継続的な勤務を促進し、もって義務教育諸学校等における教育及び医療施設、社会福祉施設等における業務の円滑な実施を確保することを目的とする。

(定 義)

第二条 この法律において「義務教育諸学校等」とは、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校、養護学校

及び幼稚園をいう。

2 この法律において「医療施設、社会福祉施設等」とは、病院、診療所、助産所、保健所、保健施設（国民健康保険法（昭和三十三年法律

百九十二号）第八十二条第一項の健康の保持増進のための施設をいう。以下第四項において同じ）、児童福祉法（昭和二十二年法律第六十四号）に規定する児童福祉施設（同法

第十七条に規定する施設を含む）、身体障害者福祉法（昭和二十四年法律第二百八十三号）に規定する身体障害者更生援護施設、精神薄弱者福祉法（昭和三十五年法律第三十七号）に規定する精神薄弱者援護施設（心身障害者福祉協会の設置する福祉施設を含む）、生活保護法（昭和二十五年法律第四十四号）に規定する保護施設、老人福祉法（昭和三十

十八年法律第一百十八号）に規定する老人福祉施設及び売春防止法（昭和三十一年法律第一百十八号）に規定する婦人保護施設をいう。

3 この法律において「教育職員」とは、校長（園長を含む。以下第十五条第一項において同じ）、教頭、教諭、養護教諭、助教諭、養護助教諭、講師、実習助手及び寮母をいう。

4 この法律において「看護婦、保母等」とは、看護婦、准看護婦、助産婦及び保健婦（保健所又は保健施設（病院又は診療所である保健施設を除く。以下この項において同じ）の業務に従事する保健婦にあっては、過疎地域対策緊急措置法（昭和四十五年法律第三十一号）の過疎地域その他政令で定める地域において保健所又は保健施設の業務に従事する者

に限る）であつてその業務に従事する者並びに保母、寮母及び女子の児童指導員並びに医療施設、社会福祉施設等の入所者について保護、指導、訓練又は授産の業務に直接従事するその他の者のうち政令で定める者をいう。

（育児休業の許可）

第三条 国立及び公立の義務教育諸学校の女子の教育職員並びに国及び地方公共団体の運営する医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等（常時勤務を要しない職にある者、臨時的に任用された者及び条件付採用期間中の者を除く。以下「女子教育公務員等」と総称する。）で、その一歳に満たない子を養育するものは、当該子の養育のため、任命権者に対し、育児休業の許可を申請することができる。この場合における育児休業の許可の申請は、休業しようとする期間を明らかにしなければならない。

2 任命権者は、前項の許可の申請があつたときは、第十五条第一項に規定する臨時的任用が著しく困難な事

情がある場合を除き、育児休業の許可をしなければならない。

3 任命権者は、第一項の許可の申請があつた場合において、当該申請に係る子について当該申請をした女子教育公務員等に對して既に育児休業の許可をしたことがあるときは、前項の規定にかかわらず、育児休業の許可をしないものとする。ただし、特別の事情がある場合は、この限りでない。

（育児休業の期間）

第四条 育児休業の期間は、任命権者が定める日に始まり、その始まる日から当該育児休業に係る子が一歳に達する日までの間において任命権者が定める日に終わる。

2 任命権者が育児休業の期間を定めるときは、当該女子教育公務員等の申請を尊重するように努めなければならない。

3 任命権者は、女子教育公務員等から申請があつたときは、育児休業に係る子が一歳に達する日までの期間を限度として、当該育児休業の期間

を延長することができる。この場合における期間の延長は、特別の事情がないときは、一回に限るものとする。

（育児休業の許可の失効等）

第五条 育児休業の許可は、当該許可を受けた女子教育公務員等が産前の休業を始めたとき、若しくは出産したとき、又は当該許可に係る子が死亡したときは、その効力を失う。

2 育児休業は、当該許可に係る子を養育しなくなった場合には終了する。

3 育児休業の許可を受けた女子教育公務員等は、当該許可に係る子が死亡したとき、又は当該許可に係る子を養育しなくなったときは、遅滞なく、その旨を任命権者に届け出なければならない。

4 育児休業の許可は、当該許可を受けた女子教育公務員等が休職又は停職の処分を受けたときは、当該休職又は停職の期間中は、その効力を停止する。

（育児休業の効果）

第六条 育児休業の許可を受けた女子教育公務員等は、育児休業の期間（育児休業の許可の効力が停止されている期間を除く。以下同じ）中は、その身分を保有するが、職務に従事しない。

2 育児休業の許可を受けた女子教育公務員等に対しては、育児休業の期間については、給与を支給しない。

（不利益取扱いの禁止）

第七条 女子教育公務員等は、育児休業を理由として不利益な取扱いを受けることはない。

（国家公務員である女子教育公務員等に係る育児休業の期間についての取扱い等）

第八条 女子教育公務員等のうち国家公務員である者（以下「国家公務員である女子教育公務員等」という）に係る一般職の職員の給与に関する法律（昭和二十五年法律第九十五号）第十九条の第三第二項の規定の適用については、育児休業の期間は、在職期間でないものとする。

第九条 育児休業の許可を受けた国家公

務員である女子教育公務員等が職務に復帰したときは、当該育児休業の期間の二分の一に相当する期間（以下この項において「調整期間」という）を引き続き勤務したものとみなして、その職務に復帰した日又はその日から一年以内の昇給の時期に、昇給の場合に準じてその者の俸給月額を調整し、又は調整期間の範囲内でその職務に復帰するに至った日の翌日以後の最初の昇給に係る昇給期間を短縮することができる。

2 前項の規定により俸給月額を調整された者のうちその調整に際して余剰の期間を生ずる者については、当該余剰の期間に相当する期間の範囲内で、その者の同項の規定による調整後の最初の昇給に係る昇給期間を短縮することができる。

第十条 国家公務員である女子教育公務員等に係る国家公務員等退職手当法（昭和二十八年法律第八十二号）第七条第四項の規定の適用については、育児休業の期間は、同項に規定する現実に職務を執ることを要しな

い期間に該当するものとする。

第十一条 国家公務員である女子教育公務員等に係る国家公務員災害補償法（昭和二十六年法律第九十一号）第四条の規定の適用については、同条第三項中「四職員団体の業務にもつぱら従事するための許可を受けて勤務しなかった日」とあるのは、「四職員団体の業務にもつぱら従事するための許可を受けて勤務しなかった日。五 育児休業の許可を受けて勤務しなかった日」とする。

（地方公務員である女子教育公務員等に係る育児休業期間についての取扱い）

第十二条 女子教育公務員等のうち地方公務員である者（以下「地方公務員である女子教育公務員等」という）で育児休業の許可を受けたものについては、育児休業の許可を受けた国家公務員である女子教育公務員等に係る第八条から第十条までに規定する事項を基準として、期末手当、昇給及び退職手当の取扱いに関する措置を講じなければならない。

第十三条 地方公務員である女子教育公

務員等に係る地方公務員災害補償法（昭和四十二年法律第二百一十一号）

第二条の規定の適用については、同条第六項中「四職員団体の業務にもつばら従事するための許可を受けて勤務しなかつた日」とあるのは、「四 職員団体の業務にもつばら従事するための許可を受けて勤務しなかつた日。五 育児休業の許可を受けて勤務しなかつた日」とする。

第十四条 地方公務員である女子教育公務員等に係る労働基準法（昭和二十二年法律第四十九号）第十二条の規定の適用については、同条第三項中「四 試の使用期間」とあるのは、「四 試の使用期間五 育児休業の期間」とする。

（育児休業の許可に伴う臨時的任用）

第十五条 任命権者は、育児休業の許可をする場合においては、当該義務教育諸学校等における教育又は当該医療施設、社会福祉施設等の業務の円滑な実施に支障がないと認めるときを除き、第四条第一項の規定により定められた当該育児休業の期間を任

用の期間として、校長以外の教育職員又は看護婦、保母等を臨時的に任用するものとする。

2 前項の規定による臨時的任用については、国家公務員法（昭和二十二年法律第二十号）第六十条第一項から第三項までの規定及び地方公務員法（昭和二十五年法律第二百六十一号）第二十二条第二項から第五項までの規定は、適用しない。

（政令への委任）

第十六条 国家公務員に係る第三条から第十一条までの規定の施行に關し必要な事項は、政令（一般職に属する国家公務員に係る第三条から第八条まで及び第十一条の規定並びに一般職の職員の給与に關する法律の適用を受ける国家公務員に係る第九条の規定に關し必要な事項については、人事院規則）で定める。

（私立の義務教育諸学校等において講ずべき措置）

第十七条 私立の義務教育諸学校等の設置者並びに国家及び地方公共団体の運営する医療施設、社会福祉施設等

以外の医療施設、社会福祉施設等を運営する者は、この法律に規定する育児休業の制度に準じて、女子の教育職員又は看護婦、保母等について、その子の養育のための休業に關し、必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

附 則

（施行期日）

1 この法律は、昭和五十一年四月一日から施行する。ただし、附則第三項の規定は、公布の日から施行する。

（処遇に關する当分の間の措置）

2 当分の間、この法律の目的の達成に資するため、育児休業の許可を受けた女子教育公務員等に対し、法律又はこれを基準として定める条例の定めるところにより、必要な給付を行うことができる。

3 人事院は、一般職の職員の給与に關する法律の適用を受ける国家公務員に係る前項の給付について、国会及び内閣に対し、必要な事項を勧告するものとする。

(他の法律の一部改正)

4

裁判所職員臨時措置法(昭和二十六年法律第二百九十九号)の一部を次のように改正する。

本則中「左に」を「次に」に改め、本則に次の一号を加える。

六 義務教育諸学校等の女子教育

職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律(昭和五十年法律第 号)第八条、第十一条、第十五条第二項及び第十六条の規定

5

防衛庁職員給与法(昭和二十七年法律第二百六十六号)の一部を次のように改正する。

第二十七条の見出し中「国家公務員災害補償法」を「国家公務員災害補償法等」に改め、同条第一項中(規定を除く)の下に「並びに義務教育諸学校等の女子教育職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律(昭和五十年法律第 号)第十一条」を加え、「これらの規定」を「国家公

務員災害補償法の規定」に改める。

6

国の経営する企業に勤務する職員の給与等に関する特例法(昭和二十九年法律第四百十一号)の一部を次のように改正する。

第七条第一項中「左に」を「次に」改め、同項に次の一号を加える。

五 義務教育諸学校等の女子教育

職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律(昭和五十年法律第 号)第六条第二項及び第九条の規定並びに、附則第二項の規定

7

地方公営企業法(昭和二十七年法律第二百九十二号)の一部を次のように改正する。

第三十九条第一項中(第九十六条までに係る部分を除く)の下に「義務教育諸学校等の女子教育職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律(昭和五十年法律第 号)第六条第二項、第十二条及び附則第二項」を加える。

8

公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律(昭和三十三年法律第十六号)の一部を次のように改正する。

第十七条に次の一号を加える。

三 義務教育諸学校等の女子教育

職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律(昭和五十年法律第 号)第十五条第一項の規定により臨時的に任用される者

9

公立高等学校の設置、適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律(昭和三十六年法律第八十八号)の一部を次のように改正する。

第二十三条に次の一号を加える。

三 義務教育諸学校等の女子教育

職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律(昭和五十年法律第 号)第十五条第一項の規定により臨時的に任用される者

10

私立学校教職員共済組合法(昭和

二十八年法律第二百四十五号)の一部を次のように改正する。

第十四条に次の一項を加える。

3 学校法人等を使用される者で、義務教育諸学校等の女子の教育職員及び医療施設、社会福祉施設の看護婦、保母等の育児休業に関する法律(昭和五十年法律第 号)第二条に規定する義務教育諸学校等の女子の教育職員又は医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等に該当するもののうち、同法に規定する公務員の場合における育児休業の事由に相当する事由により、同法に規定する公務員の場合における育児休業の許可に相当する取扱いを受け、かつ、その取扱いの期間について学校法人等から給与を受けないものは、第一項の規定の適用については、常時勤務に服し、かつ、学校法人等から給与を受ける者とみなす。

11

農林漁業団体職員共済組合法(昭

和三十三年法律第九十九号)の一部を次のように改正する。第十四条に次の一項を加える。

3 義務教育諸学校等の女子の教育職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律(昭和五十年法律第 号)第二条に規定する義務教育諸学校等の女子の教育職員又は医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等に該当する者で、同法に規定する育児休業の許可に相当する取扱いを受け、かつ、その取扱いの期間について農林漁業団体等から給与を受けないものは、第一項の規定の適用については、常時勤務に服し、かつ、農林漁業団体等から給与を受ける者とみなす。

12 社会福祉施設職員退職手当共済法(昭和三十六年法律第二百五十五号)の一部を次のように改正する。

第十一条中第六項を第七項とし、第五項中「前四項」を「前五項」に改め、同条中同項を第六項とし、第

四項を第五項とし、第三項の次に次の一項を加える。

4 被共済職員が義務教育諸学校等の女子教育職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律(昭和五十年法律第 号)に規定する育児休業に相当する休業により当該社会福祉施設の業務に従事しなかった場合には、前二項の規定にかかわらず、当該業務に従事しなくなった日の属する月から当該業務に従事することとなった日の属する月までの間の月数の二分の一に相当する月数は、被共済職員期間に算入する。ただし、当該業務に従事しなくなった日又は当該業務に従事することとなった日の属する月が前三項の規定により被共済職員期間に導入されるときは、その月については、この限りでない。

理由

義務教育諸学校等の女子の教育職員

及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の職務の特殊性等にかんがみ、これらの者の継続的勤務を促進し、義務教育諸学校等における教育及び医療施設、社会福祉施設等における業務の円滑な実施を確保するため、これらの者について育児休業に関する制度を設ける必要がある。これが、この法律案を提出する理由である。

附帯決議

政府及び人事院は、本法の施行に際し、次の点について留意すべきである。

一、育児休業の許可を受けた女子教育公務員等に係る給付に関する人事院勧告の内容については、本法によってなされ、十分な額であることを期待し、政府は、この勧告に係る財政措置について配慮すること。

二、任命権者は、本法の適用に当たっては、各職種の特任性について十分に配慮すること。

三、育児休業制度適用対象者中、保健婦等の範囲について将来拡大の方向で検討を加えること。

四、政府は、民間における育児休業制

度の設置を一層促進するため、財政措置等について努力すること。

五、育児休業制度の実施に当たっては、地方財政に過大な負担をかけないように努めること。
右決議する。

(過去に出され廃案になったもの)

女子教育職員育児休暇法案(社会党案)

—昭和46年2月22日—

第一条 目的

女子教育職員が育児のために退職することを防止し、もって学校教育に経験のある女子教育職員の確保を図ることを目的とする。

第二条 定義

「学校」とは、小・中・高・盲・聾・養護学校及び幼稚園をいう。

2 「女子教育職員」とは、国立または公立の女子の校長(園長)、教諭、養護教諭、助教諭、養護助教諭、教師(常勤)、実習助手及び寮母を云う。

第三条 育児休暇の承認

任命権者は、一才に満たない子を育てる女子教育職員の請求があったとき

は、当該女子教育職員に対し育児休暇を承認しなければならない。

第四条 育児休暇の期間

任命権者が定める日に始まり、育児休暇に係る子が一才に達する日に終わる。

第五条 育児休暇の終了

第六条 育児休暇の効果

育児休暇の期間中は、その身分を保有するが、職務に従事しない。

第七条 育児休暇の期間中の給与

育児休暇の期間中の女子教育職員(国立学校に勤務する者)には、俸給、扶養、調整、住居、期末手当及び寒冷地手当を除くほか、他のいかなる給与も支給しない。

2 給与の額は、その受けるべき給与の額のそれぞれ百分の八十とする。

3 公立学校に勤務する者に支給する給与の種類及び額は、第一項の教育職員に支給する給与の種類及び額を基準として定める。

第八条 不利益取扱いの禁止

女子教育職員は、育児休業によって勤務しなかったことを理由として、不

一 当に不利益な取扱いを受けることはない。

第九条 教育職員の配置等

育児休暇を承認する場合において、勤務する学校の教育職員を補助させるため、当該学校に教育職員（正式採用された者又は条件附採用の期間中の者に限る）を配慮しなければならない。

2 前項の者を配置することが困難なときは、任命権者は、教育職員を臨時的に任用し、その者を配置できる。

—以下略—

附則、提案理由略

*この法律施行に要する経費

約十一億五千万円の見込みである。

義務教育諸学校等の女子の教育職員の育児休暇に関する法律案（四野党）

—昭和47年6月7日—

第一条 目的

女子の教育職員の継続的勤務を容易にするとともに教育の一貫性を確保し義務教育諸学校等の教育水準の維持向

上に資することを目的とする。

第二条 定義

「義務教育諸学校」とは、小・中・高・盲・ろう・養護学校及び幼稚園をいう。

2 「教育職員」とは校長（園長）、教諭、養護教諭・助教諭・養護助教諭・講師（常勤）実習助手及び寮母をいう。

第三条 育児休暇の承認

国立及び公立の義務教育諸学校の女子教育職員（臨時的任用、条件付採用期間中の者を除く）で一才に満たない子を育てる旨の申請があったときは任命権者は特別の事情がある場合を除き育児休暇の承認をしなければならない。（棒線箇所は選択性を意味する）

第四条 育児休暇の期間

産後の休業の満了する日の翌日に始まり、子どもが一才に達する日の属する学期の末日までの間において任命権者が定める日に終る。

第五条 育児休暇の終了

第六条 育児休暇の効果

育児休暇の間中は、その身分を保

有するが、職務に従事しない。

2 育児休暇の間中は給与を支給しない。

第七条 不利益取扱いの禁止

女子教育職員は育児休暇の承認を受けて勤務しなかったことを理由として、不当に不利益な取扱いを受けることはない。

第八条 育児休暇の期間中の勤務

第六条第一項の規定にかかわらず、育児休暇の期間中毎月三日の範囲内において育児に支障のない限度で、勤務を命ずることができる。

文部通達で行政指導を行う点

（勤務は一日でよい。あと二日は自宅研修）

第九条 国立学校女子職員の給与等

前条の規定により勤務したときは第六条第二項の規定にかかわらず俸給及び教職調整額を支給する。

支給する俸給の額は、その受けるべき俸給月額額の二五分之一にその勤務した日乗じた額とする。

—以下略—

〔会費・誌友費・バックナンバーのお払い込みについて〕

現金書留・銀行振込み・郵便振替の3つの方法がありますが、会員数もだいふふえましたので、できれば郵便振替にさせていただきますと、いちばん間違いがありません。ただ、郵便振替は、お申し込み後、当方に到着するまで、約2週間を要します。お急ぎの場合は、現金書留、銀行振込み、小切手などをご利用ください。

- 郵便振替 50円（ご自分の口座がある場合は15円） 東京〇＝5264〈あごら編集部〉
- 銀行振込み 同一地域の同一銀行の場合は無料、地域が異なる場合は150円、他銀行の場合は、地域を問わず、郵送150円、普通電信200円、至急300円。ただし銀行からの連絡が悪いので、振込み月日、振込み銀行、金額、あなたのご住所、氏名、会費・誌友費の別などを明記したハガキを必ず別送してください。

三井銀行四谷支店普通預金 041-283-599〈あごら〉

- 小切手郵送 250円（簡易書留） 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6〈あごら会員係〉
- 現金書留 350円 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6〈あごら会員係〉

〔編集後記〕 ひとりひとりの人間が、ほんとうにいきいきと生きるためには何が必要なのか、何をすればよいのか……。〈あごら〉では、女の問題を接点に、人間の解放について考えたいと思っています。1人でも多くの方がかわり、共に考えれば考えるほど、私たちの視野はひろくなるでしょう。それぞれの生きた記録や思考の課程をお寄せください。あなたの研究の結果や、みんなが知るべき情報も。知ることが手おくれにならないうちに！（C）

あごら14号の編集と編集協力者（イラスト・新聞切抜等をふくむ）

浅野美和子 飯島恵子 伊藤亮子 宇佐川富子 小川徹子 大橋倫子 岡部栄美香
神田絃子 木田宏子 北村美恵子 黒沢照代 河野貴代美 後藤多見 斎藤 涼
坂井桂子 桜井陽子 真田房枝 鈴木トミエ 高橋ますみ 高橋芳恵 田邊久子
谷口悦子 塚本和子 永島多江 根井はる 萩原洋子 半田弘子 氷上喜久子
平岡ふき子 マウア、エリザベス 松浦セツ子 宮前澄子 村上啓子 萩山幸子
八代絃子 安江とも子 山岸汐子 山口里子 吉野由喜子 若林高子 若山玲子

〈あごら〉 14号 1976年4月20日発行 本文 マリスター A 35kg 表紙 アートポスト菊判153kg

- 発行所 BOC出版部〈あごら〉 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 振替 東京0-5264（あごら編集部）
- 発行人 斎藤千代 ●印刷者 金澤信江

〈あごら〉 1号	●女が働くこと	¥200 千200
〈あごら〉 2号	●女性の進出のために	¥200 千200
〈あごら〉 3号	●主婦の解放をめぐって	¥200 千200
〈あごら〉 4/5号	●何かしたい主婦のために	¥300 千300
〈あごら〉 6/7号	●運動を進めよう	¥350 千200
〈あごら〉 8号	●産む性としての女	¥380 千200
〈あごら〉 9号	●働く女と主婦の接点を求めて	¥430 千200
〈あごら〉 10号	●女と法	¥700 千300
〈あごら〉 11号	●女と教育	¥750 千300
〈あごら〉 12号	●国際婦人年世界会議	¥750 千300
〈あごら〉 13号	●国際婦人年国内集会	¥750 千300

〈あごら〉 14号 ●女の記録 ¥750

「あごら」(AGORA)はひろは。さくのないひろはです。

女の生き方、人間の解放について考えあうひろはです。

学歴も性別も年齢も関係なく、どなたでも歓迎します。

息の長い運動を、りきまず、むりをせず、おだやかに、静かに、

続けていこうと願っています。

名誉会員は婦人問題の大先輩、山川菊栄先生お一人のみ。

みんなが同じ立場で考え合おう、ちがう価値観にも耳を傾けよう、

そして、よりよい社会を目指そうと話し合っています。

女性解放運動にはいろいろな方法がありますが、

私たちは当面、情報の収集と伝達に重点を置く予定です。

会費＝年額三千六百円以上(季刊「あごら」誌代を含む)

誌友費＝年額三千六百円 賛助会費＝金額の多少を問いません